

山形城三の丸跡

第 10 次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 206 集



2013

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター



やまがたじょうさんのまるあと

山形城三の丸跡

第 10 次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 206 集

平成 25 年

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター





SD 1 完掘状況 (北から)



調査区からみた三の丸堀の推定方向

序

本書は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、山形城三の丸跡の調査成果をまとめたものです。

山形城三の丸跡は、山形盆地中央に位置する山形市の市街地に所在し、現在の霞城公園（本丸・二の丸跡）の周辺を取り囲むように形成されています。山形市は、中世から近世初頭までは、最上氏の城下町として栄えました。とくに近世初頭には最上義光によって山形城が本格的に整備され大規模なものになりました。現在は、山形県の県庁所在地として、県の政治・経済の中心的都市として発展しています。

この度、福祉相談センター機能強化推進事業にかかわり、山形城三の丸跡の発掘調査を実施しました。調査では、山形城三の丸に伴う堀跡を発見し、陶磁器や木製品など多くの遺物も出土しました。これらの調査成果は、これからの三の丸跡の史実を究明していく上で、貴重な資料になることでしょう。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成 25 年 3 月



公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 相馬周一郎

凡 例

- 1 本書は、平成 24 年度福祉相談センター機能強化推進事業に係る「山形城三の丸跡」の発掘調査報告書である。
- 2 既刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は山形県の委託により、公益財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 本書の執筆は、天本昌希、齋藤和機が担当し、三浦秋夫、小笠原正道、黒坂雅人、斉藤敏行、伊藤邦弘、須賀井新人が監修した。
- 5 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第 X 系（世界測地系）により、高さは海拔高で表す。方位は座標北を表す。
- 6 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

SD…溝跡 SE…井戸跡
RP…登録陶磁器 RQ…登録石製品 RM…登録金属製品 RW…登録木製品

- 7 遺構・遺物実測図の縮尺は各図に示した。
- 8 遺物実測図の網点の用法は下記のとおりである。また下記と異なる場合の用法のみ各実測図下に説明を付した。
遺物実測図  …黒色漆  …赤色漆
- 9 基本層序および遺構覆土の色調記載については、2008 年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」によった。
- 10 本文・観察表で記した遺物の分類基準と表記方法は下記のとおりである。

（材質分類） 出土した遺物は材質ごとに磁器、陶器、炆器、土器、木製品、金属製品に大分類をおこない、各図・観察表に示した。磁器・陶器の区別については、波佐見等の有色胎土を使用した半磁半陶も磁器として分類し、白化粧土を用いた陶胎染付等は陶器と分類した。

（器種分類） 材質分類した遺物は、器種・器形をもとに小分類し、各器種の形状については東京都新宿区『内藤町遺跡—放射 5 号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—』（1992）第Ⅱ分冊の器種・器形分類表および、東京都新宿区『南山伏町遺跡—警視庁牛込警察署改築に伴う緊急発掘調査報告書—』（1997）附図 2 の器種・器形分類一覧の名称を主に使用した。山形城三の丸跡第 10 次出土遺物の分類、および観察表・本文中にてそれらを示す。

（文様、装飾・釉薬表記） 文様・釉薬表記については、生産地が判断できる資料は生産地で使用されている文様・釉薬表記を使用し、それ以外については出土している他の消費地遺跡で記載されている表記を使用した。また判別・特定が困難なものについては特定の記載をしていない。染付碗・皿・蓋等の見込および高台裏銘款は、観察表において「一重圏線—」、「二重方形枠—」等の記載はせず、実測図のみで表した。磁器碗・皿類の装飾技法における表記では、呉須を用いているものについては、生産地により国内産を「染付」、中国産を「青花」、その他ヨーロッパ産等を「白地藍彩」と表記した。

（生産地表記） 本報告書における遺物の生産地表記は、生産地および他の消費地遺跡出土資料と比較して明確に産地判別できる遺物には、「肥前」「瀬戸美濃」等の地域特定表記をした。それ以外の遺物で、各生産地資料との胎土・釉薬・絵付け等が類似するものについては、「肥前系」「瀬戸美濃系」等の表記をした。また、本調査区出土遺物には平清水焼（山形市）など在地系遺物が混在していると考えられるが、明確な生産地の基準資料が乏

しい現在、文献・伝世資料等で確認できる遺物を除き、肥前・瀬戸美濃・大堀相馬などの広域流通品との特徴を区別したうえで分類し、「在地」「在地系」と表記した。

(年代表記) 遺物の年代観については、それぞれの生産地遺跡の年代観を使用し、備考欄に対応する生産地遺跡の編年を併記した。また消費地遺跡の年代観の参考として、継続的に近世遺跡出土遺物の編年研究を行っている東京大学埋蔵文化財調査室の示す編年を併記した。特に、本調査区から出土した主要な陶磁器の年代観については、肥前産陶磁器は、九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会 10 周年記念』(2000)、瀬戸美濃産磁器は瀬戸市史編纂委員会『瀬戸市史 陶磁史編 六』(1998) に記載されている編年を参考にした。その他の生産地の遺物については、各生産地の調査研究成果を参考にして記載した。

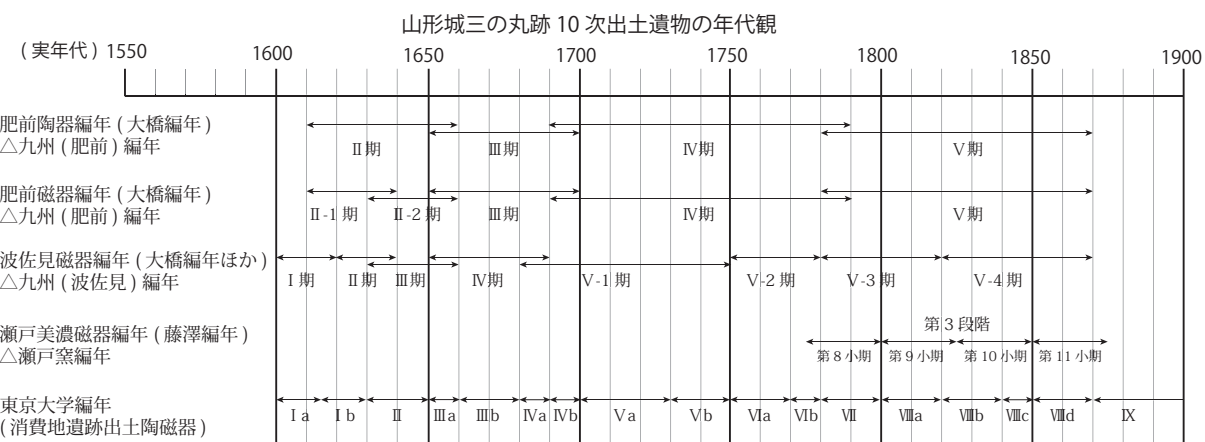
(木製品) 木製品は、各遺物の使用用途を基に出土量を踏まえて分類し、記載した。漆器椀の形状は、江戸遺跡研究会『江戸考古学事典』(2001) の「江戸遺跡出土椀の形態」を参考として分類した。下駄については、東京都埋蔵文化財センター『汐留遺跡Ⅳ - 旧汐留貨物駅跡地内の調査』(2006) の第 4 分冊に記載されている木製品下駄形態分類図を参考に分類した。

(石製品) 石製品は、各遺物の使用用途を基に分類し記載した。

(金属製品) 銭貨・煙管は、江戸遺跡研究会『江戸考古学事典』(2001) を参考に分類し、記載した。鉄製品は腐食劣化が激しく、原形を留めていないものが多いが、図版では腐食劣化した状態を示し、想定される原形を破線で示した。

11 観察表に表記した各遺物の法量計測箇所は、近世遺物計測位置模式図に主要なものを示した。また図示していない遺物の法量については、実測図で示した向きより縦・横を長軸・短軸として計測し、全ての遺物の法量単位は (mm) 及び、重量については (g) で表した。数値前の記号については () が推定値、< > が残存値を表す。

12 同型品の個体数は、口縁部と底部で 5/8 以上残存しているものを 1 個体とし、そのどちらか多い方を個体数として計上した。

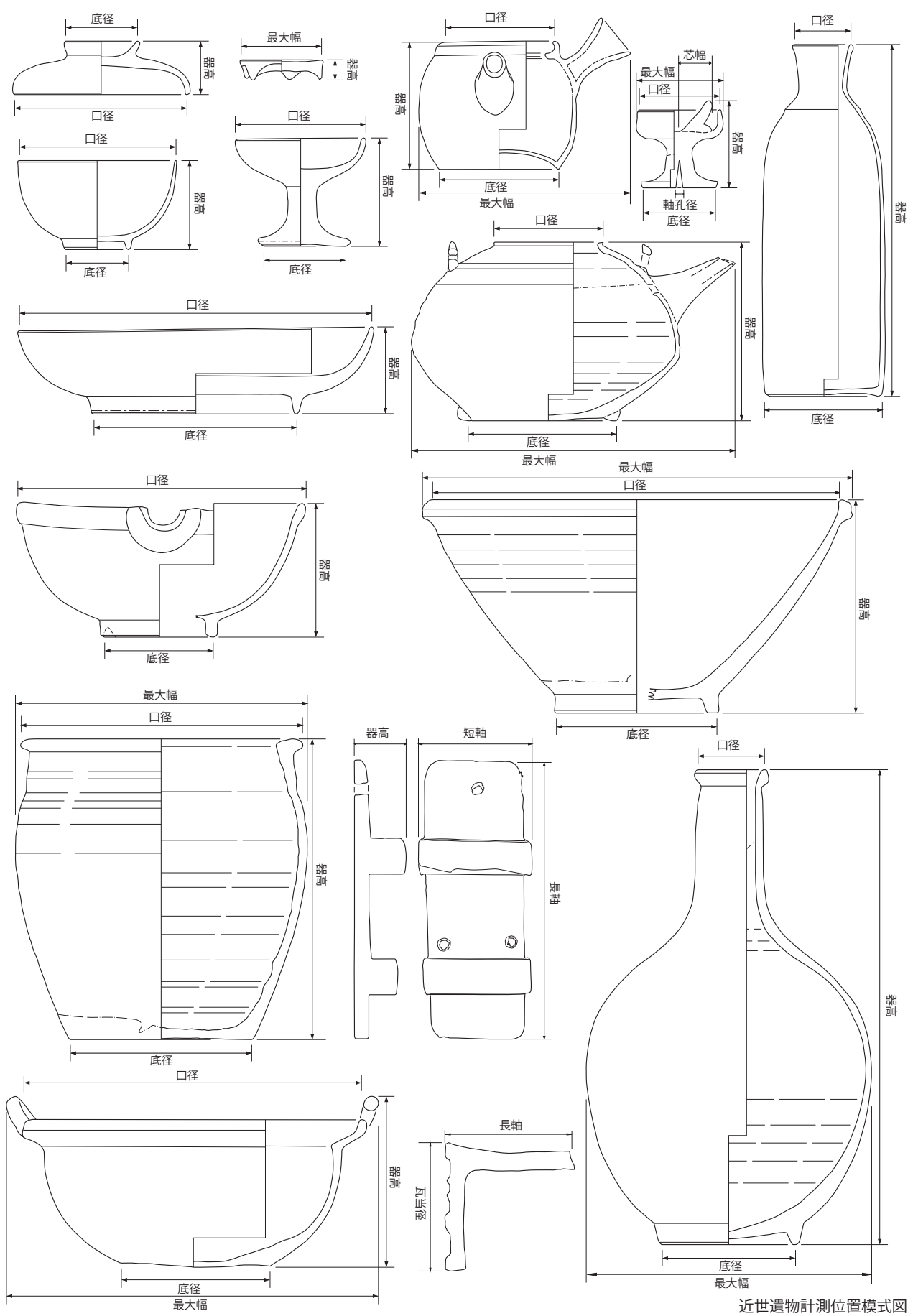


※ △は観察表中の記載名を示す。

※ 九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年 - 九州近世陶磁学会 10 周年記念』(2000)、瀬戸市史編纂委員会『瀬戸市史 陶磁史編 六』(1998)、東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学構内遺跡調査研究年報 1 1996 年度』(1997) および『同年報 7 2007・2008 年度』(2011) を基に、山形城三の丸跡第 10 次出土遺物の対象年代に絞り作成した。

山形城三の丸跡第10次出土遺物の分類

	材質分類	器種分類	観察表表記	
やきもの	磁器	碗類	碗・紅猪口・猪口・段重・薄手酒杯・仏飯器	
		皿類	皿・手塩皿	
		鉢類	鉢・火入・乳鉢・蕎麦猪口	
		瓶類	爛徳利・髪油壺・仏花瓶・小瓶・神酒徳利	
		水注類	急須・水滴	
		蓋類	蓋	
		壺類	壺	
		その他	戸車・散蓮華・合子・餌入・乳棒・梅皿・筆洗	
	陶器	碗類	碗・猪口・坏	
		皿類	皿	
		鉢類	鉢・灰吹・香炉・捏鉢	
		瓶類	爛徳利・仏花瓶・大瓶・インク瓶・小瓶	
		壺・甕類	壺・甕・湯通し	
		鍋類	土鍋・行平鍋	
		蓋類	蓋	
		播鉢類	播鉢	
		灯火具類	秉燭	
		水注類	土瓶・小水注	
		植木鉢類	植木鉢	
		片口類	片口鉢	
		その他	仏飯器・餌猪口	
	炆器	皿類	皿	
		播鉢類	播鉢	
		水注類	急須	
	土器	皿類	土師質カワラケ	
		鉢類	土師質火消壺・瓦質火鉢・土師質風炉	
		鍋類	瓦質焙烙	
		灯火具類	土器秉燭	
		その他	土人形・土錘・ミニチュア土器	
	瓦	軒丸瓦・軒平瓦・軒棧瓦		
	木製品	食用具	食器類	漆器椀・漆器蓋・天目台
			調理具類	大鉢・杓文字・まな板・箸・杓子・篋・杵
		生活雑貨	下駄類	連齒下駄・差齒下駄
容器類			曲物・桶	
蓋類			木蓋	
工具類			刷毛・横槌・鍬	
調度類			御膳・櫛・盆	
その他		部材類	部材・加工木片	
		その他	荷札・板状木製品	
金属製品			古銭（寛永通宝）・硬貨（五十銭）	
		煙管（吸口・雁首）		
		包丁・急須		
		鋏・刀子・和釘・手違鋸		
		刀装具（切羽）・刀装具（石突）		
		櫛・馬具（蹄鉄）・馬具（轡）		
石製品		硯・石板・石筆		
		凹み石・砥石		
		珠子		
		円盤状石製品・石鉢		



近世遺物計測位置模式図

調査要項

遺跡名	やまがたじょうさんのまるあと 山形城三の丸跡				
遺跡番号	山形県中世城館遺跡調査報告書番号 201 - 002				
所在地	山形県山形市十日町一丁目				
調査委託者	山形県				
調査受託者	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター				
受託期間	平成 24 年 4 月 27 日～平成 25 年 3 月 31 日				
現地調査	平成 24 年 5 月 14 日～平成 24 年 7 月 27 日				
調査担当者	平成 24 年度	調査課長	齊藤敏行		
		整理課長	黒坂雅人		
		考古主幹	伊藤邦弘		
		調査研究員	天本昌希（調査・整理主任）		
		調査員	齋藤和機		
調査指導	山形県教育庁文化財保護推進課				
調査協力	山形県県土整備部建築住宅課営繕室				
	山形県村山総合支庁保健福祉環境部（村山保健所）保健企画課				
業務委託	基準点測量業務 株式会社 大洋測量設計社				
発掘作業員	安久津千賀子	阿部健一	石沢隆志	磯邊こずえ	市川光行
	岡崎四郎	奥山研二	河合誠一	長南勝哉	富塚博利
	中野俊夫	長岡忠	長岡伸恭	仁藤勝子	早川洋二
	深瀬進	万年芳雄	山川博	吉田久悦	(五十音順)
整理作業員	安孫子道子	江口好弘	黒坂孝一	嶋田真奈美	高木孝純
	中嶋美恵子	三原朋子	持留陽子		(五十音順)

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法	1
II 遺跡の位置と環境	
1 地理・歴史的環境	3
2 山形城周辺の発掘調査	3
3 調査区周辺の土地利用	4
III 調査の成果	
1 調査の概要	7
2 出土遺物の概要	7
3 S D 1 出土遺物	8
IV 調査のまとめ	
1 出土磁器碗の法量分布	125
2 三の丸堀の発掘調査事例の比較	126
3 S D 1 の埋没過程について	126
参考文献	128
報告書抄録	巻末

表

表1 S D 1 出土磁器製品観察表	100	表12 S D 1 出土木製品 台所用品観察表	120
表2 S D 1 出土陶器製品観察表	109	表13 S D 1 出土木製品 工具観察表	121
表3 S D 1 出土陶器乗燭観察表	115	表14 S D 1 出土木製品 調度品観察表	121
表4 S D 1 出土土器・炆器製品観察表	115	表15 S D 1 出土木製品 下駄観察表	121
表5 S D 1 出土陶器・土器焼台観察表	116	表16 S D 1 出土木製品 墨書木製品観察表	122
表6 S D 1 出土瓦観察表	117	表17 S D 1 出土金属製品 錢貨観察表	123
表7 S D 1 出土土器・炆器製品（その他）観察表	117	表18 S D 1 出土金属製品 煙管観察表	123
表8 S D 1 出土瓦集計表	117	表19 S D 1 出土金属製品 その他観察表	123
表9 S D 1 出土木製品 漆器椀観察表	118	表20 S D 1 出土石製品観察表	124
表10 S D 1 出土木製品 曲物観察表	119	表21 S E 2 出土遺物観察表	124
表11 S D 1 出土木製品 木蓋観察表	119	表22 S D 1 出土実測外遺物観察表	133

図 版

巻頭写真1 S D 1 完掘状況

巻頭写真2 調査区からみた三の丸堀の推定方向

第 1 図	グリッド・遺構配置図	2	第 50~68 図	S D 1 出土遺物実測図 (磁器類)	25
第 2 図	地形分類図	5	第 69~87 図	S D 1 出土遺物実測図 (陶器類)	44
第 3 図	遺跡位置図	5	第 88~92 図	S D 1 出土遺物実測図 (炆器・土器)	63
第 4 図	山形城三の丸跡発掘調査範囲	6	第 93~94 図	S D 1 出土遺物 (炆器・土器)	68
第 5 図	S D 1 平面図	13	第 95~97 図	S D 1 出土遺物実測図 (漆器)	70
第 6 図	S D 1 断面図 (1)	14	第 98~99 図	S D 1 出土遺物 (漆器)	73
第 7 図	S D 1 断面図 (2)	15	第 100 図	S D 1 出土遺物実測図 (曲物類)	75
第 8 図	S D 1 完掘状況	16	第 101~103 図	S D 1 出土遺物実測図 (木蓋)	76
第 9 図	S D 1 断面 d-d'	16	第 104 図	S D 1 出土遺物 (曲物・木蓋)	79
第 10~13 図	S D 1 断面 a-a' ~ c-c'	17	第 105~106 図	S D 1 出土遺物実測図 (台所用具類)	80
第 14 図	S D 1 検出状況	18	第 107 図	S D 1 出土遺物実測図 (工具類)	82
第 15 図	S D 1 a 区 5 層検出状況	18	第 108 図	S D 1 出土遺物実測図 (調度類)	83
第 16 図	S D 1 西壁木杭列検出状況	18	第 109 図	S D 1 出土遺物 (調度・台所・工具)	84
第 17 図	S D 1 底面検出状況	19	第 110 図	S D 1 出土遺物 (調度・台所・工具)	85
第 18 図	S D 1 断面 d-d'・地山検出状況	19	第 111~114 図	S D 1 出土遺物実測図 (下駄)	86
第 19 図	S D 1 完掘状況	19	第 115~116 図	S D 1 出土遺物 (下駄)	90
第 20 図	S D 1 完掘状況	19	第 117~118 図	S D 1 出土遺物実測図 (墨書木製品)	92
第 21 図	S D 1 断面 d-d'・地山検出状況	20	第 119 図	S D 1 出土遺物実測図 (金属製品)	94
第 22 図	S D 1 西壁・底面検出状況	20	第 120 図	S D 1 出土遺物 (金属製品)	95
第 23 図	S D 1 10 層調査状況	20	第 121~123 図	S D 1 出土遺物実測図 (石製品)	96
第 24~31 図	S D 1 遺物出土状況	21	第 124 図	S E 2 遺構・遺物実測図	98
第 32~36 図	S D 1 遺物出土状況	22	第 125 図	S D 1 出土遺物 (石製品)	99
第 37 図	調査前風景	23	第 126 図	磁器碗指数グラフ (生産地別)	129
第 38 図	調査区地山	23	第 127 図	磁器碗指数グラフ (時期別)	129
第 39~44 図	調査風景	23	第 128 図	S D 1 出土遺物 各層出土陶磁器集合	130
第 45 図	S D 1 調査風景	24	第 129 図	S D 1 出土遺物 同型品集成	131
第 46~48 図	S E 2	24	第 130 図	S D 1 出土遺物 高台裏銘款集成	132
第 49 図	調査説明会風景	24	第 131 図	S D 1 出土実測外遺物	133

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

山形城跡は、現在、国指定史跡となっている本丸・二の丸と、その周辺を取り囲む三の丸を含め、東西 1,480 m、南北 1,881 m の範囲が遺跡として登録されている。

今回の調査は、2012 年度の山形県子育て推進部子ども家庭課による福祉相談センター機能強化推進事業として、保健福祉センター東棟（仮称）の建設に伴う発掘調査である。調査に先立ち、2011 年 12 月に、山形県教育委員会（以後、県教委）によって試掘調査が行われ、三の丸の外堀跡と推測される遺構を検出し、大量の陶磁器の出土を得た。これを受け、子ども家庭課、県教委らで協議が進められ、記録保存を目的とした調査を行うこととなり、子ども家庭課を事業主として、県教委の指導の下、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（以後、埋蔵文化財センター）が調査の委託を受けた。埋蔵文化財センターでは、受託した山形城三の丸跡発掘調査の調査次数を、年度ごと、調査原因となった事業別に順次振り分けており、今回の調査で第 10 次を数える。

2 調査の方法

A 発掘調査

調査は村山保健所の敷地内に建設予定の保健福祉センター東棟の建物範囲 816 m²を対象に実施した。埋蔵文化財センターで実施した第 1～9 次までの山形城三の丸の調査は、共通のグリッドを設定して実施されているため、今回の調査もそれにならう（第 1 図）。山形城の全域を囲むように南から北へ A～H、西から東へ A～G と、300 m 四方の大グリッドを設定する。この大グリッドのひとつを南から北へ 00～99、西から東へ 00～99 と、3 m 四方の小グリッドに分割する。このグリッドを「大の南北・大の東西・小の南北・小の東西」の順で示すため、「AA0000」と表記する。本調査区は大グリッド C F、小グリッド南北 55～66、東西 34～42 にあたる。

調査区の現状は、舗装された駐車場と車庫であり、事

業主側で更地にした状況で調査側へ引渡された。まず、重機により表土除去を行い、その後、ジョレンで表土を削り、遺構検出を行う。検出した遺構は、三の丸堀跡である S D 1 と、それに重複する S E 2 のふたつのみ。調査区内は全面に攪乱が激しく、堀跡に並行して南北方向に建てられていた建物の基礎が複数重複していた。遺構覆土は黒褐色のシルト質土を基本とし、地山は砂礫層を基本とする。調査区地山部分にトレンチを 2 つ入れ（T 1、T 2）、基本層序を確認したところ、一般的な地山としての褐色土壌は検出されず、砂礫層のみであった。調査区は周辺に比べ 1 m 以上の段差があり、土地造成時に褐色地山層ごと削平されているのかもしれない。

遺構精査は、S D 1 を横断するベルトを設定し、a～d の 4 区に分け調査を実施した。まず、深掘り範囲を設け、堀の状態や層位を把握することからはじめ、底面、壁面には礫層が広がることを確認し、遺物取り上げの基準として、上層、中層、下層、最下層の 4 層に分けた。底面の幅は当初の想定よりも広く、人力では予定期間内の終了が困難なことが予想されたため、6 月 11 日～22 日まで重機を導入し、期間の短縮を図った。重機により a～d の各地区の上層～最下層の各層位ごとに掘削を行い、掘削した土の中から遺物を回収する方法をとった。そのため各地区各層位ごとに遺物を取り上げているが、相応のずれが生じていることを考慮せねばならない。

土層観察のため、ベルトを、堀の中心部、調査区東端から 5 m 程度のみを残し、堀底と堀壁の礫層にあたる手前までは重機により掘削した。土層断面の記録は、すべて北側からとっている。記録後、人力でベルトを掘削し、堀底、堀壁の検出を行った。人力掘削部の遺物の取り上げは、遺物の状態や出土層位を勘案して出土位置を記録した。遺物分布をみると（第 5 図）、堀の中央部に遺物ドットが集中しているのは、位置記録をとれたのが堀の中央に残したベルト部のみのためである。また、木製品に関しては、埋蔵文化財センターの収容能力を考慮し、原形のわからない破損品や部材品は、取り上げていない。

7 月 21 日に調査説明会を行い、約 80 人の市民の参

I 調査の経緯

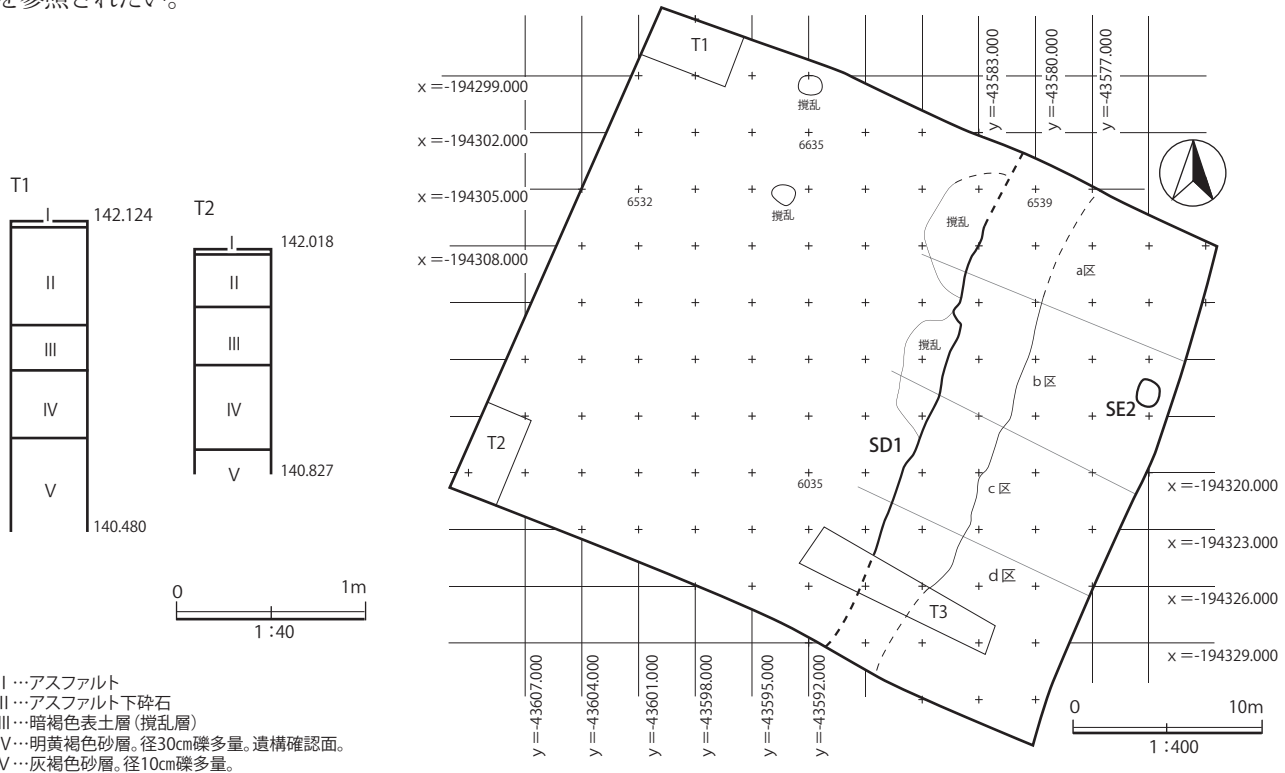
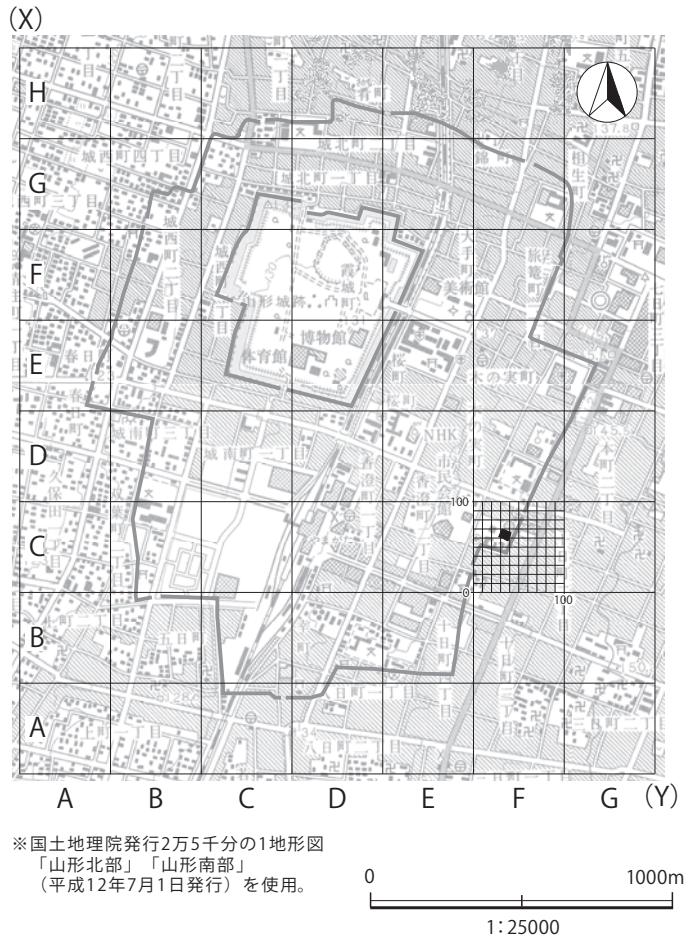
加を得た。調査は当初の予定通り7月27日に終了し、現場器材を撤収後、即日埋戻し工事を始め、8月6日に終了した。同日、子育て推進部子ども家庭課へ引渡し、すべての調査を完了した。

B 整理作業

報告書の作成のための整理作業は、調査終了直後の7月30日から、2012年度内に実施し、すべて終了した。

出土遺物の洗浄後、注記作業を行う。注記方法は、遺跡名を「三ノ丸10」とし、それに続けて遺構名を記入した。SD1のものは、さらにa~dの各地区と、各層位を上~下、最下層は丸囲いに下として、記入した。

本調査の出土遺物の分類は、東京都新宿区の内藤町遺跡と同区南山伏町遺跡の分類を基準とし、状況に合わせて適宜統合追加した。実測遺物の抽出は、全体の出土量と個体の状態を勘案し決定した。陶磁器類の実測は、外形線と断面のみ作製し、外面の文様や釉調は、はめ込み写真により表現する。内面や見込みの文様は、俯瞰写真または鉛筆トレースにより表現した。縮尺などは凡例や各図面に記したものを参照されたい。



第1図 グリッド・遺構配置図

II 遺跡の位置と環境

1 地理・歴史的環境

山形城の立地する現在の山形市中心部は、蔵王山系を源に、山形市北部を西流し最上川へと注ぐ馬見ヶ崎川によって形成された扇状地に立地している。この土地一帯は、出羽国を縦断する羽州街道と、仙台へ向かう笹谷街道が交差する交通の要衝であり、1356年に羽州探題として入部した斯波兼頼によって山形城が築かれたとされる。その後、斯波一族は、最上氏を名乗りこの地を代々統治し、11代義光のころ（1546～1614年）に最盛期を迎える。57万石の領地を有した義光の統治下で、三重の堀を備えた大規模な城郭構造が整備された。その後、1622年に最上氏が跡目をめぐる御家騒動で改易となり、替わって譜代大名の鳥居忠政が入部する。この代には、城郭の部分的な改修や、城北を流れる馬見ヶ崎川の流路を城から離すなど、城内外の改修を行なっている。

鳥居忠政の子、忠恒に後継ぎがなく、改易となると、以降の山形藩は、藩主が短期間で次々と替わる土地となり、代々減石縮小してゆくこととなる。最上氏時代には57万石を誇ったものが、最後の藩主水野忠弘のころには5万石にまで縮小している。そのため、山形城の大規模な改修は、江戸初期からほとんど行われず、往時の城郭構造をそのまま存続させることとなった。最上氏時代は、城郭内は三の丸まで家臣の屋敷地で固められていたものの、石高が大きく縮小した状況では、城内の広大な屋敷地を維持できずに代々荒廃して行く。ついに1764-67年の幕府直轄領期には、二の丸、三の丸の屋敷地が売却され、田畑とされるまでになる。

幕領期後に入部した秋元氏の代（1767-1845）に城内の再建が行われ、荒れ果てた城門や櫓を修復、撤去し、屋敷地を三の丸の東側に集中させている。また、本丸に代わり、城主の居住空間を三の丸大手門前に造営した新御殿に移すなど、城内を石高規模に合わせたものに変えていったことがうかがえる。その後は、幕政で失脚した水野氏が5万石で2代にわたり治め、明治を迎えた。

18世紀末～19世紀前半は、陶磁器の需要の増大と、

各藩の殖産興業政策により、各地で陶磁器窯が開かれた時期である。山形においても例外ではなく、山形城から南東3kmほどの下総国佐倉藩の飛地領、平清水地区には、文化年間に窯場が開かれたと伝えられる。以後、平清水焼として各地の技法を取り入れながら操業し、1844（弘化1）年には磁器製産に成功している。その後、明治に入り隆盛を迎え、数十軒の窯が創業されるに至った。しかし、奥羽線鉄道の開通に伴い、他地域からの陶磁器が大量に流通するようになると、平清水焼は日用品としての座を追われ衰退の道をたどる。大正、昭和年間には、土管や便器などを生産しながら操業を続け、現在は民芸品を中心に数軒の窯が操業を続けている。

明治に入り山形藩から山形県となり、山形城は廃城とされ、城内の土地建物は、すべて売却される。旧城内は地名を「香澄町」とされ、三の丸の東側は、学校、病院などが建設され市街地化が進む。そのため、東側の堀と土塁は、明治期の比較的早い段階でほとんど整地されたものと考えられている。東側以外の三の丸は、大正、昭和に入ってから造成が進み、一部に残っていた堀や土塁跡も徐々に埋め立てられ市街地に組み込まれていった。二の丸と本丸には、1896年に陸軍歩兵三十二連隊が置かれ、本丸の堀はそれに伴い埋め立てられた。

戦後、陸軍施設が撤去された旧二の丸と本丸跡地は、山形市に払い下げられた後、1948年、霞城公園として市民に開放された。敷地内には、運動公園や博物館が建設され、都市公園としての整備が進む一方、三の丸跡は、山形市の中心地として更なる都市化が進む。1984年に山形城は、近世初期の面影を残す全国屈指の平城として国指定史跡となり、翌年、十日町地区に一部残存していた三の丸土塁も追加で指定された。現在は、史跡公園として、二の丸大手門や本丸大手門の石垣などの復元整備事業が行われている。

2 山形城周辺の発掘調査

これまで山形城跡は、市街地の開発に伴うものや、史跡整備のためなどの理由で複数回の発掘調査が実施され

ている。三の丸跡の調査は、三の丸南側で工場地となっていた山形駅西口の土地区画整理関連の事業により合計で 94,000 m²を超える大規模な発掘調査が行われており、それ以外の場所では、市街地内の道路の拡幅や建物の増改築などに伴い小規模な調査を行なっている（第 4 図）。三の丸西側は、県道東原村木沢線の拡幅工事に伴うもの、三の丸北側は、山形市立第七小学校の改築や、国道 112 号線の拡幅工事などに伴う調査が行われている。今回の調査区を含む三の丸東側の調査事例は、第一小学校の改築に伴うものや、二の丸追手門外の新御殿跡地付近の法務局庁舎建築工事に伴うものがある。二の丸と本丸は、史跡整備に伴う調査が主な調査要因であり、山形市教育委員会が年々調査を進めている。

これまでの調査によって、山形城跡周辺には、近世以前の遺跡広がっていることが明らかになった。古い痕跡のものでは、縄文時代中期から後期の深鉢が双葉町遺跡など三の丸南側から一定量のまとまりをもって出土している。遺構は検出されていないものの、後世の遺構に破壊されたか、調査区外側に集落跡が展開していたことが予想できる。縄文から時代を下ると、4 世紀代を中心とする古墳時代前期の集落が展開し、その後は少し間を置き、6 世紀後半から 9 世紀代まで連綿とつづく集落が展開する。県内唯一の出土事例である石製印章や、大型の掘立柱建物跡などの存在は、古代最上郡において中心的な集落の存在が予想される。中世においても 12～14 世紀代の貿易陶磁が多数出土しており、双葉町遺跡からは、方形区画の溝に囲まれた居館跡を検出している。

発掘成果として遺構、遺物が充実するのは、最上義光の山形城の拡大期と重なる 16 世期末から 17 世紀前半代のものである。これまでの発掘調査区は、城の南西側が多く、これらの地区は、山形城の縮小とともに、屋敷地から畑に変えられたまま近代を迎えたため、山形城初期の状態が良好に保存されている地区ともいえよう。今回の調査と同じ三の丸堀の調査事例として、山形一小敷地内、埋蔵文化財センターの三の丸跡第 6 次調査で三の丸東堀の調査を実施している。

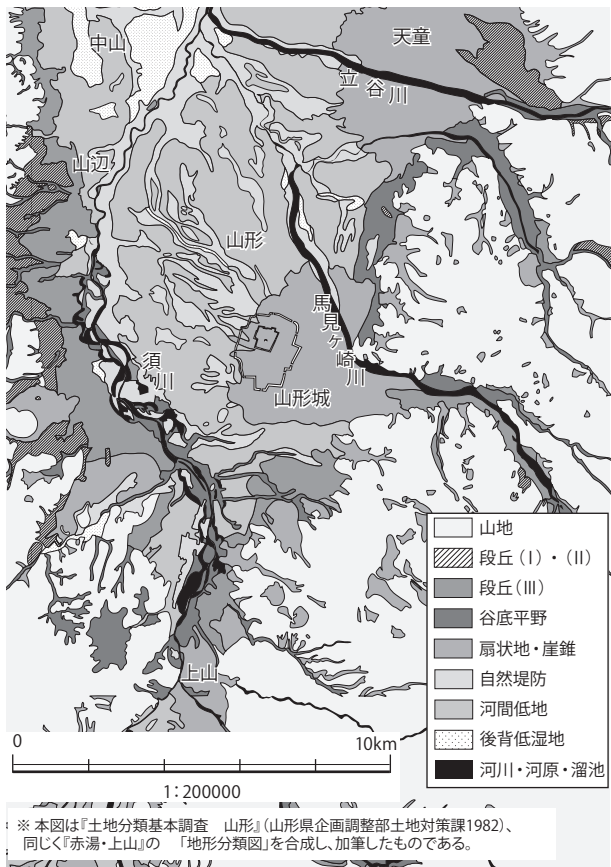
3 調査区周辺の土地利用

近世以後は絵図など多くの文献資料がのこされており、より詳細な情報を得ることができる。最上氏時代の

絵図を見ると、調査区は三の丸東側の「横町口」と「十日町口」の 2 つの虎口に挟まれた地区の堀と土塁部分にあたる。虎口付近には重臣が配されたようで、横町口の北には 17,000 石の重臣鮭延秀綱の名がみえる。その南側には小篠某なる人物の名が記されている。その後の領主の変遷を経ても調査区周辺は、中、下級武士の屋敷地として利用が続くが、18 世紀半ばに山形藩が幕府直轄領期になると、城内屋敷地は田畑にされたと伝えられる。その後、城内の屋敷地は、三の丸東側にまとめられ、19 世紀の水野時代の絵図にみる調査区周辺は、横町口からの通り沿いに侍長屋が並ぶのみで、その周辺は畑と記されているのみである。

明治に入り、1872（明治 2）年、城内の土地建物が売りに出されると、三の丸の堀や土塁は埋め立てられたと考えられる。1877（明治 10）年に描かれた絵図では、まだ堀や土塁は描かれているものの、その後、県令の三島通庸による都市計画の中で造成が進み、城内には公共施設を中心に様々なものが建てられるようになる。

調査区の北側にある山形市立第一小学校は、同じ場所に 1887（明治 20）年、横町尋常小学校として開校したものであり、調査区の東側に隣接している中央郵便局は、1888 年から現在の場所で開業している。また、この郵便局の隣の市村本店は、1887 年に開業した陶器店である。同店は、明治末に斜陽にあった平清水窯で工場を開き、東京の会社へ専用のインク瓶を制作販売している。調査区の西側、現在の市民会館の位置には、1902（明治 35）年に山形県女子師範学校・県立山形高等女学校が建てられている。その後、女学校は東側に校地を拡大して行き、寄宿舍、附属小学校、附属幼稚園が建てられている。調査区は、この附属幼稚園の校舎下にあたり、この幼稚園校舎が建てられる 1927（昭和 2）年まで、調査区内に主だった建物は作られていないようである。女学校敷地内も堀跡推定ライン上は、校舎ではなく、校庭として利用されている。戦後、1969（昭和 44）年、附属小学校・幼稚園が移転し、跡地は村山保健所となると、堀跡上に庁舎が建てられ現在までに至る。



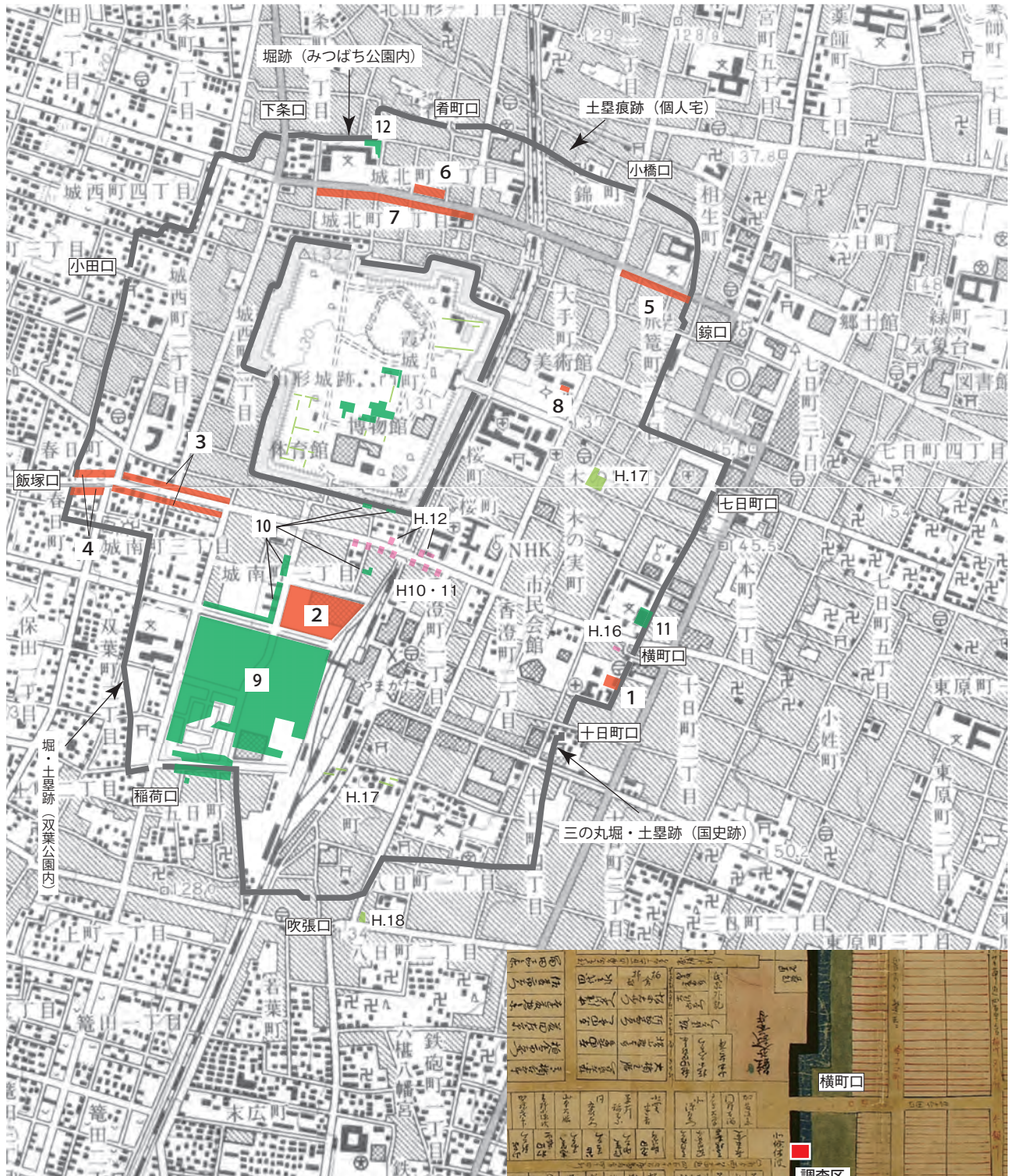
第2図 地形分類図

番号	遺跡名	種別	備考
1	山形城三の丸跡	城館	201-002
2	山形城跡(本丸・二の丸)	城館	201-001
3	城南一丁目遺跡	集落・城館	
4	双葉町遺跡	集落・城館	
5	城北遺跡	集落・城館	
6	山形西高敷地内遺跡	集落	
7	南館跡	館	201-003
8	飯塚橋跡	橋	201-004
9	落合館跡	館	201-008
10	山家城跡	城跡	201-018
11	三浦屋敷跡	館	201-022
12	荒橋跡	橋	201-023
13	西根小但馬屋敷跡	館	201-031
14	金谷館跡	館	201-035
15	内城跡	不明	201-040
16	平清水館跡	館	201-042

備考欄：201が付く番号(例201-002)は、山形県中世城館遺跡番号。



第3図 遺跡位置図



- | | |
|--|---|
| ■ …埋蔵文化財センター調査区 | ■ …山形市教委調査区 |
| 1 三の丸第10次調査 | 9 双葉町遺跡 |
| 2 城南一丁目遺跡 | 10 城南町遺跡 |
| 3 三の丸第1～3次調査 | 11 山形一小敷地内遺跡 |
| 4 三の丸第5、7、8次調査 | 12 城北遺跡 |
| 5 三の丸第4、6次調査 | |
| 6 三の丸第9次調査 | ■ …山形県教委分布調査区 |
| 7 三の丸第11次調査 | ■ …山形市教委分布調査区 |
| 8 三の丸第12次調査 | |



17世紀前半の調査区周辺
『最上家が城諸家中町割圖』／山形県立図書館蔵

第4図 山形城三の丸跡発掘調査範囲

III 調査の成果

1 調査の概要

山形城三の丸跡第 10 次の調査は、山形市十日町一丁目において、2012 年 5 月 14 日より開始し、同年 7 月 27 日まで実施した。調査面積は、816 m²で、S D 1 と S E 2 の 2 つの遺構を検出した。

A S D 1

調査区東側を縦断して検出する山形城三の丸の東堀跡である。検出できた範囲は、長さ 30 m、幅は上端で 12 m、底面まで検出できたものでは 8 m を測り、軸は南北、東 25° の方向に走る。壁面は西側のみを検出し、東側は調査区外へ伸びるため、東壁面は検出していない。深さは最深部で現地表面から 5.3 m、確認面から 4 m を測る。壁面は底面から 35～40 度の斜度で立ち上がり、西側斜面は、そのまま土塁につながっていたものと推測される。護岸のためか、西壁斜面に木杭列が確認できた(第 16 図)。これらはすべて覆土中に打たれており、堀がある程度埋まった段階で施工されたものである。底面は検出できた幅で 3.6 m 程度あり、堀全体の断面形状は、逆台形の箱堀になる。堀底面および壁面には、20～50 cm 大の川原石が不規則ながらも一定の密度をもって面的に存在しており、この上面をもって床面、壁面とした。床面下の調査は、重機を用いてセクションライン d-d' ライン上にトレンチを入れ (T3)、拳大の円礫と砂からなる地山が出るまで掘り下げた。他は大きい石を避け、可能な範囲で掘削を進めた。

覆土は、全体的に黒褐色を基調とし、色調や土質、含有物などから 1 層～10 層に分層した。1 層は、粘土質のシルト層で、堀の埋め立てにより堆積した層と考えられる。攪乱の影響を大きく受け、境界が曖昧なところも多い。一部に円礫が多数出土しているが、攪乱によるものと思われる。4 層は、砂質層で粗粒砂層と細粒砂層が互層状に堆積しており、場所によっては数回の互層堆積が確認できる。水成堆積と考えられ、これだけの大量の砂が堆積する理由として、洪水による土砂の運搬が想定

される。5 層と 6 層は、両者の色調はほとんど変わらないが、炭化材を大量に含む上層を 5 層として分層した。火災による廃材を廃棄した層と考えられ、大量の木製品のほか、焼けた樹木なども出土している。9 層は、粘土質のシルト層に灰白粘土層が何層にも薄く堆積し縞状になっている。水成堆積によるものと考えられ、滞水と乾燥を繰り返しながら少しずつ堆積していったことがうかがえる。調査区全体を見ても、この土層中の縞模様が途中で崩れることがないため、溝浚えなどの掘り直しは行われていないと判断できる。

一括遺物の取り上げは、セクションラインに沿って a～d の 4 区に分けたものを平面上の位置とした。出土層位の基準としては、4 層が特に判断しやすく、調査区全面に確認できる砂層であるため、これを境に出土遺物を上層と下層とに分け、4 層を中心とする砂層は中層とした。下層の更に下、9 層から出土したものは最下層とした。上層出土としたものには、攪乱部分との判断のつかないものも多い。攪乱と判断のつくものは、遺跡一括として扱った。各遺物の解説については、次節にまとめる。

B S E 2

調査区東端の C F 6140～6141 に位置し、埋没した S D 1 に重複する石組みの井戸跡を検出した。上面は攪乱により失われている。検出できた範囲では、長軸 122 cm、短軸 108 cm の方形で、深さは 42 cm。床面からほぼ垂直に立ち上がる。床・壁面には、15 cm 程度の円礫、角礫を積み上げている。出土遺物には大正年間の一銭硬貨があり、それ以降に埋没したのと考えられる。

2 出土遺物の概要

今回の調査では、S D 1 から大量の遺物を得ている。文化財登録数でテンバコ 70 箱の遺物が出土し、内 69 箱が S D 1 とそれに重複する攪乱部分からの出土遺物であり、残り 1 箱が S E 2 と S D 1 以外からの調査区表土中からのものである。S D 1 の出土遺物は、碗や皿などの食膳具から甕や下駄などの日用雑器である。遺物の出

土量は層位によって差があり、火事や三の丸堀の埋め立ての際に不要品を廃棄したと考えられる。出土遺物のうち、古いものでは、17世紀前半段階のものが存在しているが、大半を占めるのは19世紀代の遺物である。また、上層出土とした遺物には、攪乱からの出土遺物も含まれており、明治末～昭和前期のものも含まれている。なお、これまで10次にわたる三の丸の調査において、縄文～古代にかけての遺物が相当数含まれていることが多いが、今回の調査で近世以前の遺物は、一片も含まれていない。

3 SD1 出土遺物

SD1からの出土遺物は、A磁器、B陶器、C炆器・土器（瓦、土製品を含む）、D木製品、E金属製品、F石製品の6種に大別し、器種ごとにまとめている。各種分類は東京都新宿区内藤町遺跡等に準拠し、適宜統合追加している。法量など個別の記述は観察表で行い、ここでは分類基準を中心にまとめておく。

A 磁器（第45～63図）

碗、皿、鉢、瓶、水注、壺などが出土しており、遺物全体の大勢を占める。産地は肥前、瀬戸美濃のほか、平清水を含めた在地系の磁器製品も相当数含まれているものと思われる。碗、皿、爛徳利などを中心に、出土同一形状、同一文様の同型品が多い。

i 碗類

口径を中心に、小碗、中碗、大碗と分類し、それぞれの蓋、加えて薄手酒盃と仏飯器、紅猪口を碗類として分類した。合計167点を実測し、各器種の内訳は、小碗62点、中碗68点、大碗2点、蓋21点、薄手酒盃9点、仏飯器3点、紅猪口2点となっている。

小碗は口径91mm未満、中碗は口径91～119mm、大碗は口径120mm以上のものと分類した。薄手酒盃は小碗と同じサイズだが、清酒用の猪口として、薄手で見込みに上絵を施すものを別器種としてまとめたものである。また、小碗に脚のつくものは仏飯器とした。36は脚がつくものの、器形から仏飯器には含めなかった。紅猪口は菊花形に型打でつくられているものを分類した。

ii 皿類

口径を中心に136mm未満の皿を小皿、136～257mm

のものを中皿、258mm以上を大皿と3器種に分類した。合計59点を実測し、各器種の内訳は、小皿41点、中皿16点、大皿2点となる。

iii 鉢類

碗や皿との区分において、口径／器高比などで厳密な基準を設けず、周辺遺跡での同形品の扱いにならない分類する。鉢、蓋物、猪口、段重、合子、火鉢、餌入を鉢類としてまとめた。小鉢1点、中鉢7点、猪口3点、合子4点、蓋物2点、段重3点、餌入1点、火鉢2点の合計23点を図化している。

口径150mm以下を小鉢、151～141mmを中鉢とし、蓋付きのものは蓋物として分けた。猪口は口径151mm未満で、見込みが深い桶形で「蕎麦猪口」を指標とし、これに類するものを分けた。段重は浅いたらい形の鉢が2段以上重なるもので漆器重箱の模倣品である。合子は小型の蓋物で、身と蓋の大きさがほとんどきれいに合わさるもの。餌入は鳥などの餌入れにしたもの。火鉢は煙草の火種や暖をとるための炭をいれるための鉢である。

iv 瓶類

袋状に口が閉塞するか、見込みの深い筒状の容器を瓶類とする。容量を基準に、小瓶、中瓶、大瓶と分類し、用途から神酒徳利、髪油壺、爛徳利、仏花瓶と分類した。小瓶8点、中瓶1点、神酒徳利1点、髪油壺2点、爛徳利7点、仏花瓶1点を図化した。

1合未満の容量の瓶を小瓶とし、1合以上8合未満を中瓶、8合以上のものを大瓶とする。神酒徳利は神前に供える酒を入れる容器で、体部がくびれ、丸く肩を張る瓶子形のものを出した。髪油壺は胴径に対して器高が低く、頸が非常に短い小瓶をまとめた。爛徳利は薄手で縦に細長い瓶類。出土した瓶類の多くは爛徳利である。口がラッパ状に開く器形のは仏花瓶とした。

v 水注類

液体を注ぐための注口がついたもの。磁器では急須と水滴をまとめた。急須は蓋と合わせて7点、水滴は4点を図化した。

急須は現代のものと同じく茶を煎じるためのもので、注口を正面に、横に取手がつく。蓋は空気を出すための穴が開くもの。水滴は碗の水入れとして用いる文房具。

vi 壺・甕類

貯蔵用の容器で口縁部がすぼまり袋状になるものを

壺、広がるものを甕としてまとめ、器高を中心に大、中、小に分ける。磁器では図化できるものは少なく、器高120 mm～299 mmの中壺1点のみを図化した。

vii 磁器製品

容器以外のもの。戸車、散蓮華に加え、近代以降の磁器製品をまとめた。戸車は2点、散蓮華1点、ミニチュア1点、近代磁器製品として梅皿、筆洗、乳鉢をそれぞれ1点ずつ図化している。

戸車は円盤形で中央に丸い穴の開けられたもの。引き戸の車輪として用いる。散蓮華は手の付いた匙形の器具。用途、器形ともに現代のレンゲと変わらない。近代磁器製品は、明確に明治以降のものと判断できるものをまとめた。梅皿と筆洗は両者とも絵画用品であり、287の裏には「高等一年 本郷きん」の墨書があり、県立山形高等女学校の生徒のものと思われる。

B 陶器 (第64～82図)

碗、皿、鉢、瓶、水注、甕・壺、鍋、秉燭類がある。産地は瀬戸美濃系、肥前系、京・信楽系、大堀相馬系などがあり、磁器製品に比べると判別困難なものが多い。

i 碗類

小碗15点、中碗17点、大碗2点、仏飯器3点の合計37点を図化した。分類基準は磁器のものと同じである。大堀相馬産のものが多く、他の推定産地のものも大堀相馬産での模倣品の可能性がある。セットものとして流通していたと思われる中碗の出土が多いが、磁器碗と違い同型品の出土はほとんどない。300は柑壺に転用したもので、内外面が被熱により発泡する。

ii 皿類

小皿15点、中皿2点、大皿3点の計20点を図化した。分類基準は磁器のものと同じ。小皿には肥前唐津の溝縁皿が多くみられる。330と331のように、赤褐色の胎土のものは特徴的に兜巾高台となる。332は2枚の溝縁皿が融着したものである。全体で肥前唐津産のものが多いが、337～339のような在地産のものも含まれる。

iii 鉢類

中鉢5点、大鉢2点、片口7点、捏鉢1点、合子1点、灰吹3点、餌猪口1点、香炉1点、火鉢2点、植木鉢6点、播鉢9点の計38点をまとめた。

中鉢は口径151 mm～241 mmで、大鉢は口径242 mm以

上のも。片口は口縁の1カ所に注口がついた鉢。出土したものは、すべて口縁を切り込んで口をつけるものである。352～356は、浅黄～淡緑色の灰釉が施され、見込みに5点の長方形の目跡を残すもので在地産と思われる。器形復元には至らないものの同一片が多数存在する。捏鉢は口径200 mm前後の丸形の鉢で、装飾が簡素なもの。359は淡い青紫色の海鼠釉が内外面に施される。灰吹は煙草の灰を捨てるための細身の筒形容器で、図化したものはいずれも口縁部に煙管の敲打痕を残す。餌猪口は鳥類飼育用の餌皿として用いられる、摘みのついた小さな容器。香炉は浅めの筒形で内面無釉に加え三足のつくもの。火鉢は暖をとるための炭を入れる鉢。366、367に図化した。いずれも瓶掛形のもので、366は獅子頭のつかみ部片。獅子の口には針金が入っていた。植木鉢は底部に穿孔された桶形の鉢をまとめた。播鉢は内面に櫛目が削り込まれた鉢である。いずれも内外が鉄釉で施釉されており、玉縁形のものも多く、上層から下層まで出土している。379は口縁部に窪みがある。卸目は375が見込みで1回転させているが、そのほかの卸目は口縁部から直線で見込みまでつなげている。

iv 瓶類

中瓶1点、大瓶6点、爛徳利2点、髪油壺1点、仏花瓶1点の計11点を図化した。中瓶は383に図化した鉄釉のぺこかん徳利があり、8合以上容量をもつ大瓶は、すべて鶴首逆蕪形のものである。387～389は、同じ場所から出土した3個体の笹絵徳利である。爛徳利の391は、鳶口のもので、胴部が底部付近まで接合するが、残存率は胴径の1/16以下しかない。392に図化した髪油壺は、大堀相馬の鮫肌で、19世紀後半のものと考えられる。仏花瓶は393に図化した会津本郷の碎石手のものが出土している。インク瓶は平清水産の万年筆用のインクを入れる容器。明治末～大正初頭に東京の丸善などに出荷された。各種メーカーのマークが刻印されている。赤紫の錆釉が施され、上層、攪乱層より出土する。

v 水注類

土瓶5点、小注水・蓋3点、急須蓋3点の計11点を図化した。土瓶は丸い胴の一方に注口がつき、上方に把手をかけるための耳が肩の両側につくもの。大堀相馬系の青土瓶や色絵土瓶の破片を多く得ているが、一個体に復元できるものは少ない。403は注口が上向きのもので、

型打により方形に整形される。小注水は醤油などを注ぐための小型の水注で、405に図化したのは、灰釉が施される半月口形のもの。404、406は小壺形状の小注水につく蓋か。蓋に空気穴が開くものは急須蓋とした。

vi 壺・甕類

器高を中心に大、中、小に分類し、陶器では、小壺3点、中壺4点、小甕6点、中甕7点に、湯通し1点を含めた計21点をまとめる。湯通しは冷えた食品を温める寒冷地独特の器種であり、内外施釉で見込みにいくつも穿孔されているもの。山形庄内地方の大宝寺焼などでつくられている。小壺は器高120mm未満のもので、412のようにミニチュアとすべきか判断に悩むものも含む。411は堀の床層から出土した唯一の遺物で、壺か甕の胴部片と思われる。414は口唇部の釉が禿げ、内面に橙褐色の付着物が全面に確認できる。中壺は器高120～299mmのもので、300mm以上の大壺は四耳壺を指標とするが、今回の調査で大壺に該当するものは出土していない。小甕は器高が250mm未満のもの、中甕は器高が250～500mmのもの。中甕の427、428は、口縁部がT字形になるもので、見込みに径3mm程度の小礫が付着する。実測外で同様の個体が複数点確認できる。

viii 鍋類

土鍋10点、行平鍋3点、蓋2点の計14点を図化した。土鍋は碗形で口縁二方向に耳のついた鍋で、行平鍋は注口と把手のつく鍋である。鍋類は、同一破片は多いものの、復元率が低く実測個体とならないものが多数ある。

viii 秉燭類

秉燭計12点を図化した。秉燭は灯火具として油を貯める部分と火を灯す部分を有するもの。いずれも中央に芯立てを有するたんころ形で、447～450のようには無脚のものは軸穴がなく、451～458のように有脚のものは底部に軸孔をもつ。

C 炆器・土器 (第83～89図)

無釉焼締めの炆器と素焼きの土器。両者とも点数は多くはないため、まとめて扱う。碗、皿、鉢、水注、甕、鍋、秉燭、土製品、焼台、瓦がある。炆器の産地は、近世においては備前や肥前など西日本のもの、近代以降においては在地産と思われるものが多い。

i 碗・皿類

小碗1点、小皿2点の計3点を実測した。459は刻印で「萬古」の字がみえる端反碗。内面に透明釉がかかるが、ここに分類しておく。小皿は460に図化した炆器の輪花皿と、手捏ねのカワラケ461がある。

ii 鉢類

火鉢2点、風炉1点、五徳1点、播鉢2点の計6点を図化した。火鉢と分類したものには、用途として焜炉や七厘としてのものも含まれる。風炉は茶道具のひとつで釜、土瓶をかけて湯を沸かすための加熱器。646に図化し、円筒形で窓の部分から上部を欠くもの。「乾」の刻印がみられる。五徳は瓦質のもので、円形の透かしが入られる。過去の三の丸調査においてもいくつか出土している。播鉢は炆器のものが2点出土し、466は備前産、467は肥前産のもの。

iii 水注類

炆器の急須と蓋を3点ずつ、計6点図化した。468は取手部を欠き、469は注口部を欠く。蓋はすべて紫褐色のもので、形状の異なる3種を掲載した。

iv 秉燭類・土製品

土製の灯火具1点を図化した。474と同一のものはミニチュア土製品とされることも多いが、中央の芯立て孔に煤が付着することから実用品と判断する。土製品として人形1点、不明土製品2点を図化した。476は手捏ねの容器状のもので、外面に「福田(相田か)～」と墨書される。477～479は釜のミニチュア、481は不明土製品。腰が「く」の字に括れる円筒状のもの。

v 鍋・甕類

焙烙1点、中甕2点、大甕1点を図化したものをまとめる。482は瓦質の焙烙で、豆などを炒るための底の浅い素焼きの土器。同一個体片を含め側面に孔が3カ所確認できる。器高500mm以上の甕を大甕とした。埋甕など固定して使用するものを指標とする。485は、底板部は残存するものの、そこから体部に接合するものはわずかであり、体部口縁部ともに残存率1/8以下である。

vi 焼台

窯道具としての焼台は、五足の桔梗台、円形または方形の台に四つの脚をつけた焼台が出土している。大きさには規格性があり、裏面の刻書は大きさに関するものと思われる。片口等の見込みに類似した5個の目跡があることから、これら中・大型の陶器を重ね焼きする際に

使用されたことが伺える。桔梗台はすべてロクロ、上部回転糸切で成形されており、中央に穿孔しているものもある。脚間は時計回りに1回切ったもの、反時計回りに1回切ったもの、両側から2回切ったものに分けられる。四脚の焼台は、脚部先端に磁器滓が付着し、4つの目跡を持つ染付碗・皿類が出土していることから、これらの重ね焼きに使用したものと思われる。脚部と体部は異なる粘土を使用し、上部は布目圧痕が認められる。近隣地方窯の諸事例から、女型の脚部に一度粘土を押し込み、その上から別の粘土を入れて布を当てて型打成形していると考えられる。

vii 瓦

調査区全体で60kgを超える瓦が出土している。調査区は横町口に近く、櫓門に葺かれた瓦と考えられ、より横町口の近くで行った県教育委員会の試掘調査でも多くの瓦が出土している。瓦は、黒瓦、赤瓦に加え、施釉平瓦、棧瓦も出土している。今回の調査も含めて付近で出土した軒丸瓦は、すべて連珠三巴文で、家紋瓦などは出土していない。頁数の都合上、軒瓦のみ掲載する。

D 木製品 (第90～113図)

すべて中層以下で出土し、下層を中心に大量に出土している。埋蔵文化財センターの保存、収納方法に限界があるため、全体形状が把握できるもののみ回収し、大型の建築部材品や不明品などは取り上げていない。

i 漆器

漆器碗と天目台、蓋をまとめ、漆器碗は23点、天目台2点、蓋19点の44点を図化する。取り上げ時にばらばらになってしまったものも多いが、整理期間上、保存処理を実施できないため、接合は行えない。現在の状態で実測に耐えうるものを選んで図化している。513は最下層の初期伊万里などがまとまって出土した地点からのもの。底部の厚い三重丸碗はより下の層から出土する傾向がある。542蓋は裏面被熱し炭化している。穿孔されているものも多く、514、516、525、550、554などにみられる。516に関しては、高台をつくらぬ分厚い底部に大きな孔が開けられており、他のものとは異なる印象をうける。

ii 曲物類

側板と底板からなるもので、わっぱ、柄杓、桶、提灯

の4器種を曲物類としてまとめた。17個体を取り上げ、全部で9点を図化した。破損しやすいため、図化できるものは少ない。取り上げなかった部材のみのものを含めれば、個体数は更に多かったと考えられる。

わっぱは薄く断ち割った板を丸めたものを樹皮などで綴じ合わせた容器で4点を図化した。555と556は、蓋と身でセットになるもので、556の外面上には「戊寅九月廿八日 山藤屋」と墨書される。これらには、口縁に小型の銅製丸釘が2本セットで4カ所打たれ、側板を貫通した釘は、内側で折り曲げられる。釘の間には、目の細かい銅製織金網が残存しており、補強か装飾かは定かではないが、明治以降のものだと判断できよう。558～560は柄杓で、いずれも柄の部分が破損している。560は内側の土ごとに取り上げたところ、土の中から柄の当て具が出てきた。柄の当て具は、いくつか出土しており、図化したものとは別の形状のものを561として第104図に掲載しておく。562は提灯の枠で木釘が打たれている。563は桶の取手部分で、組み合わさった状態で出土した。取手の部材は多く見られたが、桶として全体を認識できるものはない。

iii 木蓋類

曲物や壺、甕の蓋、あるいは底板として用いたと考えられる円形の板をまとめる。大量に出土しており、44点を取り上げ、うち20点を図化し、18点をここにまとめる。墨書が見られる残り2点は、墨書木製品にまとめた。径120mm未満のものを小型蓋、120～210mmのもの中型、211mm以上のものを大型とする。破損したものは取り上げなかったものが多いので小型の点数が多い。大型の582は複数の板を接ぎ合わせて一枚の蓋にしており、埋釘跡が2ヶ所確認できる。

iv 台所用具類

篋、箸、杓子、木皿、杵、大鉢をまとめる。篋は583に飯篋、584に味噌篋を図化する。箸は状態の良い物のみ取り上げた。585は先端が尖る片口形のもの、586は赤漆の塗箸である。杓子は2点確認でき、1点588に図化した。取手部がホゾ溝を切った差し込み式のものであり、根元のみ残存する。木皿は13点出土しており、3点を589～591に図化した。どれも見込みが浅く、漆の塗布の痕跡は確認できない。底部は高台を削り出そうとした途中の未製品なのか、これで完成なのか判然と

しないものが多い。杵と大鉢は下層出土で、近接した位置で出土している。大鉢の底部には線条痕が見られる。

v 工具類

刷毛、横槌、鋏の3器種を工具類としてまとめた。刷毛は一枚の板に切れ目を入れて、間に毛を挟むように作られている。5点確認でき、3点を図化した。596は切れ目から裂けて片面のみ残存している。横槌は柄のついた丸木で藁打ちなどに用いるもの。一木造りのもので、柄を欠く。鋏は風呂鋏の刃床部。

vi 調度類

様々な日用品を調度類としてまとめる。599は蒔絵の施される小箱の部材。600と601は櫛で、601は同型品がもうひとつ出土している。602は盆で口径370mmを超える大型のもの。603～606は折敷の部材である。多数出土しているが、完形品になるものはない。607は不明木製品である。縁辺に複数の孔が開けられる。用途は不明だが、複数点出土しているため図化しておく。

vii 下駄類

総数で54個体確認でき、下駄の歯のみのものも含めれば、更にその数を増すことが予想される。一木造りの連歯下駄は32点あり、608～619まで12点を実測した。差歯造りのものは、下駄の台にホゾ溝のみで歯を差し込む陰卯下駄が7点あり、620～625の6点を実測した。同じ差歯下駄でも、台にホゾ溝と穴を貫通させて歯を差し込む露卯下駄は15点あり、626～631まで6点を図化した。差歯造りのものの方が壊れやすいため、取り上げた数は少なくなっていることを考慮する必要がある。形状は、長方形と隅丸長方形のものに分けられ、608や628、629のような小型品もみられる。漆はすべて差歯下駄に施されている。612や615は焼印が押されているもの。616は歯に直行方向から穿孔されている。626は前歯が露卯形、後歯が陰卯形となるもの。

viii 墨書木製品

蓋や荷札に墨書のあるものをまとめる。632と633は蓋で、633は「大神宮 御洗米」と記される小蓋。荷札等のいくつかには、山形城下の商人たちの商標と思われる記号が記されているものがいくつかみられる。1939年に発行された『山形商店史』には山形市内の老舗の商標や屋号、由来が記されており、出土品と合致するものもある。634は正方形の札の表裏に ㄨ とする

されており、これは寛文年間に創業したとされる六日町「リュウゴイチ」をはじめ、市村家の一族で用いられるものである。638は ㄨ と西川孫七なる人物の名も見られる荷札で、 ㄨ の商標は、八日町の「六澤屋」をはじめ、多くの店舗で用いられていたようだ。644の ㄨ は十日町の「大阪屋」の商標で、寛永3年に薬種業を創始し、明治27年に紙箱販売に転業したとある。紀年銘資料としては、640の建築部材に「明和九年 壬辰六月」とあり、1772年を指すものである。

E 金属製品 (第114、115図)

出土した金属製品は総じて多くはない。648～653は銭で、寛永通宝と五十銭硬貨を図化した。654～659は煙管の吸口と雁首。660は銅製の櫛、661は急須で、胴部は一枚の金属板を丸めて作っている。662と663は刀装具で切羽と石突。664は和釘で、665は先端方向が90度異なる手違い鋏。666と667は鋏。668は包丁で669は刀子。666と669は最下層から出土したものである。670と671は馬具で、轡と蹄鉄である。

F 石製品 (第116～118図)

硯は19個体確認でき、7点を実測した。672は表裏に刻書があり、「明和五年戊子四月十□□ 十日町 福田□□ 福田□□□」と記される。673の裏には「上々高嶋石」と記されており、滋賀県で採れる高嶋石に由来するものである。679～681は石筆、682は石板でいずれも近代学校教育における手習い用具である。石板片は数多く出土しているが、完形になるものはない。縁辺部は木枠にはめるための加工が施される。683は中央に穿孔された円盤形の不明石製品で裏面を欠く。684と685は砥石。686と687は凹石で、拳大の凝灰岩の円礫の中心に小さく深い凹みをもつ686と、幅広く凹む687がある。具体的な用途は不明だが、いずれも全面に敲打痕がある。同様のものは、三の丸第6次調査をはじめ、近世遺跡で多く見られる。688は卵大の自然石に「八万四千畫猶如印文一一畫有八万四千色一一色」と全周に墨書される。観無量寿経に同じ一節があり、この一節を記したものであろう。689～691は数珠。692は脚つきの方形鉢。全面が煤けており、火鉢と思われる。



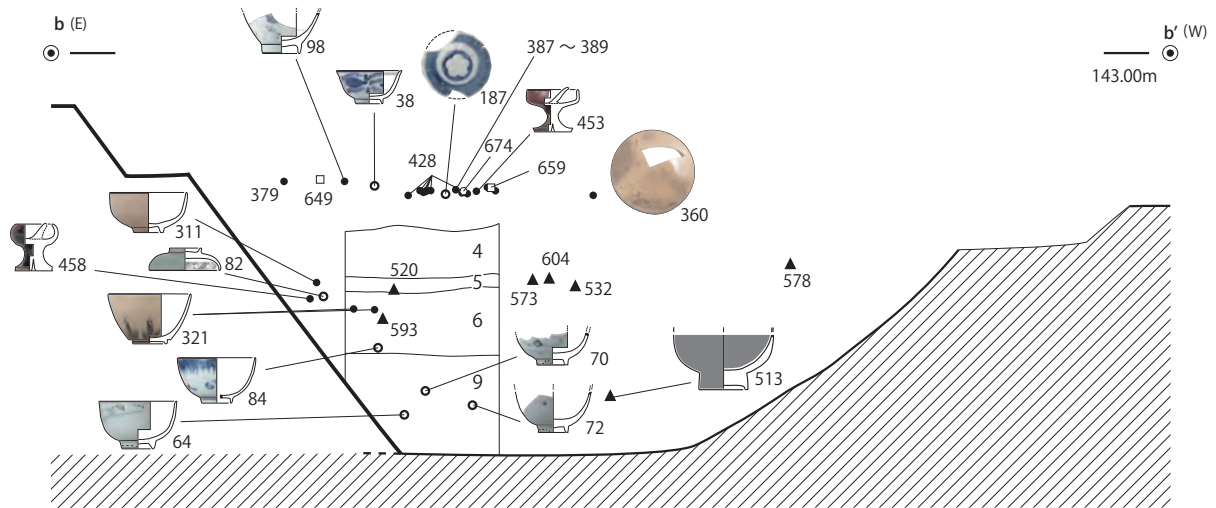
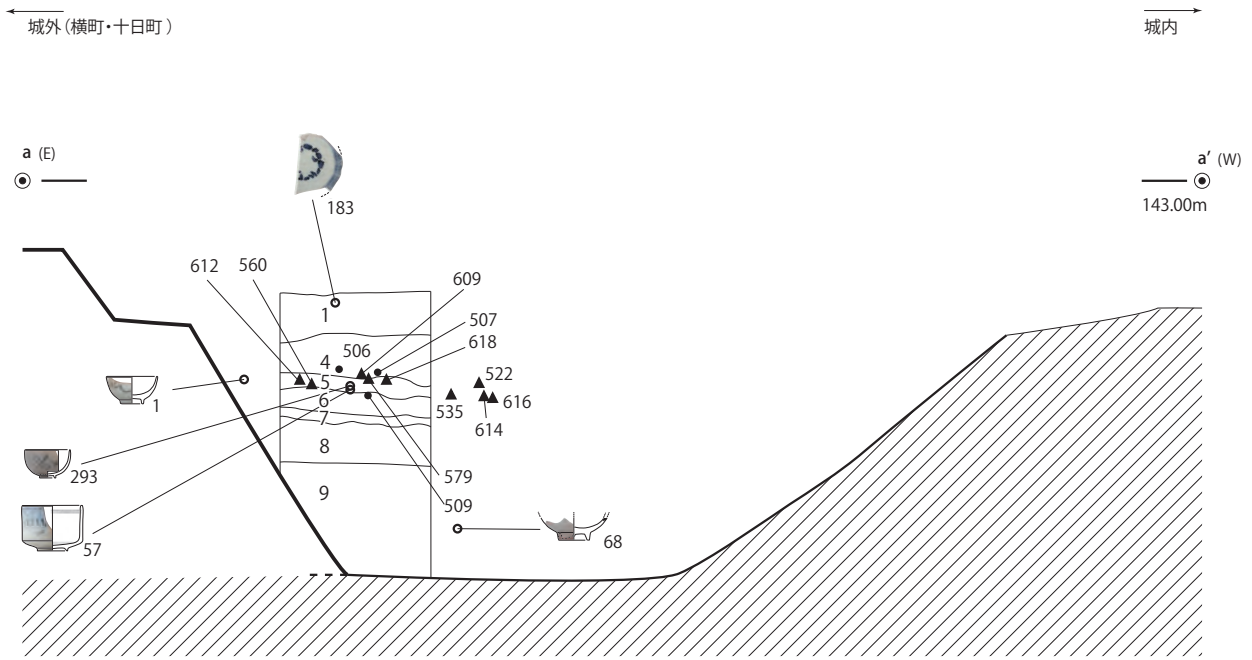
- …磁器製品
- …陶器・炆器・土器製品
- ▲ …木製品
- …金属製品
- ◇ …石製品



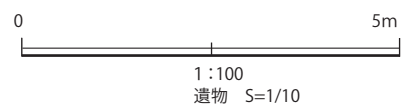
1:150

第5図 SD1平面図

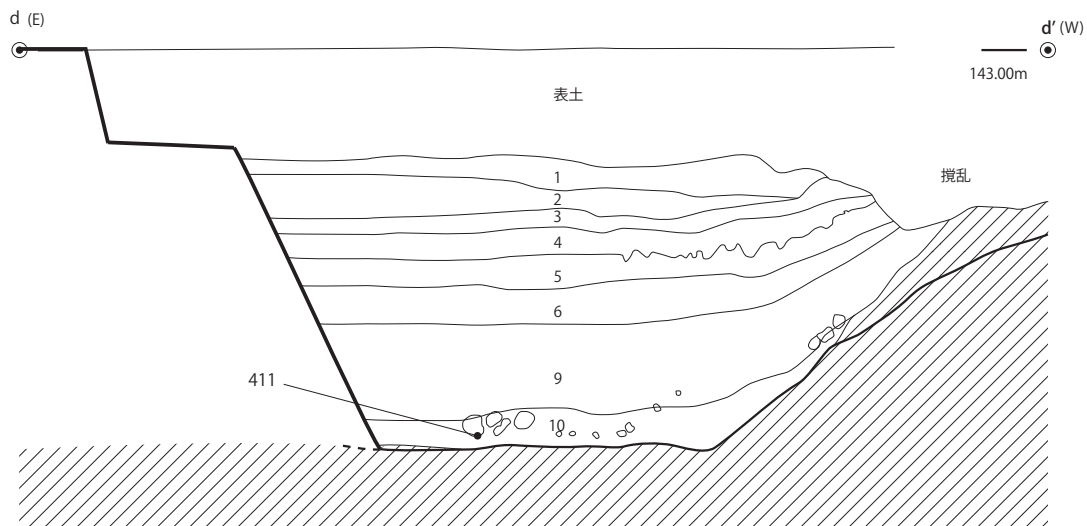
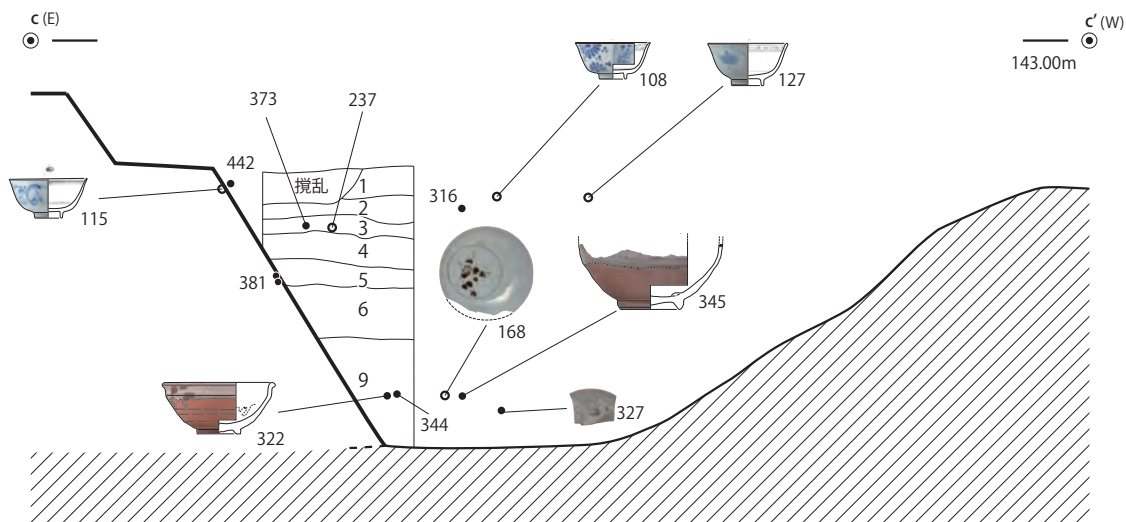
III 調査の成果



- …磁器製品
- …陶器・炆器・土器製品
- ▲…木製品
- …金属製品
- ◇…石製品



第6図 SD1断面図(1)

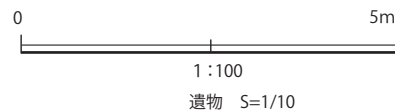


SD1

出土遺物区分

層	土質	色調	特徴	区分
1層	7.5YR2/2 黒褐色 粘土質シルト層	黒褐色	しまりやや強い。炭化物含む。遺物多量。攪乱を大きく受ける。	上層
2層	7.5YR3/3 暗褐色 砂質シルト層	暗褐色	しまり普通。炭化粒含む。	中層
3層	10Y4/1 灰色 粘土層	灰色	しまりやや強い。一部互層状に砂質シルト層が入る。調査区南側のみで確認できる。	
4層	10YR5/1~10YR6/6 褐灰色~明黄褐色 砂層	褐灰色~明黄褐色	しまり弱い。細粒砂層と粗粒砂層が互層状に堆積。細粒砂層は、空気にふれると褐灰色から明黄褐色に変わる。前後の層に比べ、遺物量は少ない。	下層
5層	10YR2/1 黒色 粘土質シルト層	黒色	しまり普通~やや弱い。炭化材多量。焼けた廃材の一括廃棄層。木製品を中心に出土遺物多量。	
6層	10YR3/1 黒色 粘土質シルト層	黒色	しまりやや強い。色調は5層とほとんど変わらない。5層に比べると遺物量は減る。	
7層	10YR3/2 黒褐色 砂質シルト層	黒褐色	しまりやや弱い。色調は上、下層とほとんど変わらない。調査区北側のみで確認できる。	最下層
8層	10YR3/1 黒色 粘土質シルト層	黒色	しまりやや強い。色調、質感は6層と同じ。7層を挟むことで区分され、調査区北側のみで確認できる。	
9層	7.5YR4/1 黒褐色 粘土質シルト層	黒褐色	しまり強い。灰白粘土層が薄く、互層状に堆積し、水平に縞模様をなす。遺物はほとんど出土しない。	最下層
10層	7.5YR4/1 黒褐色 粘土質シルト層	黒褐色	しまり強い。堀の床層で30~50cm大の川原石を含む。遺物はほとんど出土しない。	

- …磁器製品
- …陶器・炆器・土器製品
- ▲ …木製品
- …金属製品
- …石製品



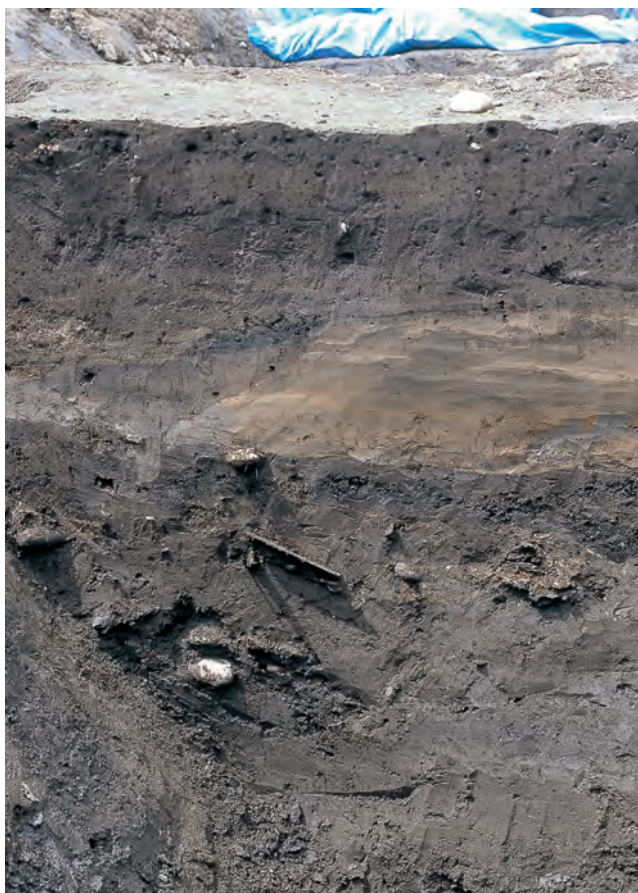
第7図 SD1断面図(2)



第8図 SD1完掘状況（北から）



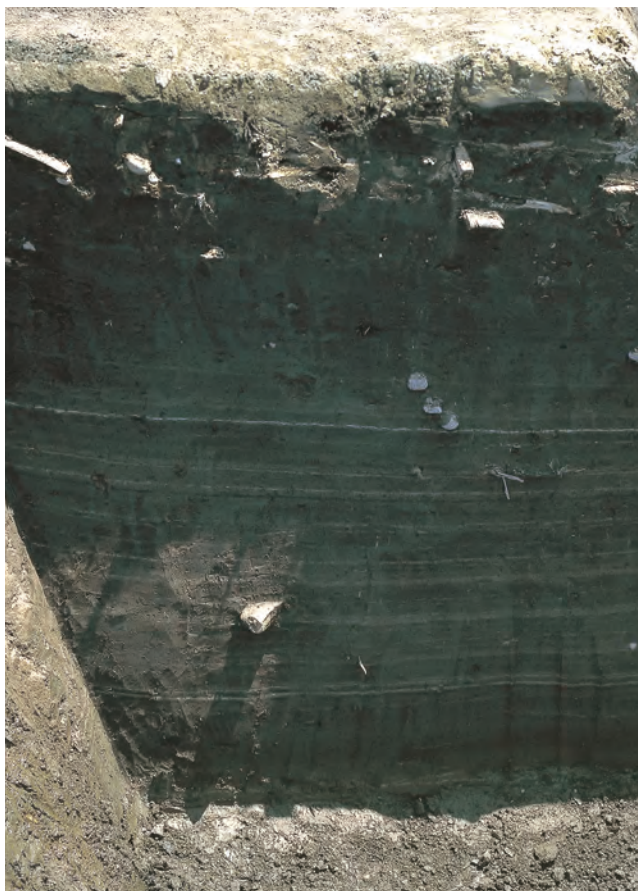
第9図 SD1断面d-d'（北から）



第10図 SD 1 断面図a-a'上～下層 (北から)



第12図 SD 1 断面b-b' (北から)



第11図 SD 1 断面a-a'下～最下層 (北から)



第13図 SD 1 断面c-c' (北から)



第14図 SD 1 検出状況
(北から)



第15図 SD 1 a区5
層検出状況
(西から)



第16図 SD 1 西壁木杭列
検出状況
(北から)



第17図 SD 1底面検出状況（北から）



第18図 SD 1断面d-d'地山検出状況（北から）



第19図 SD 1完掘状況（南東から）左上の樹木は三の丸土塁の残存部と思われる。



第20図 SD 1完掘状況（南西から）



第21図 SD 1 断面d-d'
地山検出状況
(北から)



第22図 SD 1 西壁・
底面検出状況
(北から)



第23図 SD 1 10層
調査状況
(北から)



第24図 SD 1 38出土状況



第25図 SD 1 226出土状況



第26図 SD 1 104出土状況



第27図 SD 1 b区上層遺物出土状況 (453、674)



第28図 SD 1 b区上層遺物出土状況 (428)



第29図 SD 1 593出土状況



第30図 SD 1 560出土状況



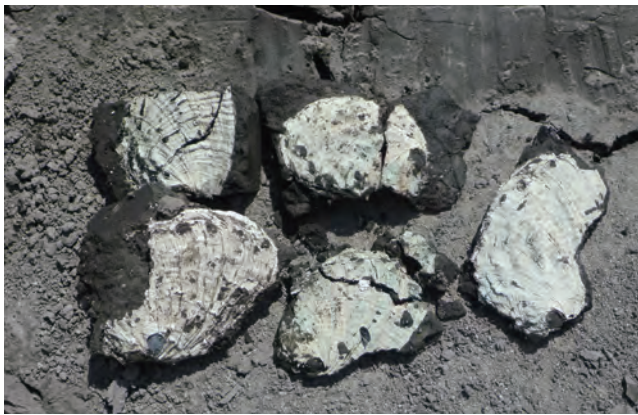
第31図 SD 1 535出土状況



第32図 SD 1 5層出土炭化物



第33図 SD 1出土木材（現場廃棄）



第34図 SD 1 最下層出土（アワビ）



第35図 SD 1下層～最下層出土堅果類（クルミ、クリ）



第36図 SD 1最下層遺物出土状況（345、322、344、168）



第37図 調査前風景 (南西から)



第38図 調査区地山 (T1) (南東から)



第39図 重機による表土掘削状況 (北から)



第40図 深掘状況 (東から)



第41図 重機によるSD 1 覆土掘削状況 (南西から)



第42図 重機による掘削覆土からの遺物回収状況 (西から)



第43図 SD 1 中層調査風景 (東から)



第44図 SD 1 最下層調査風景 (北西から)



第45図 SD 1調査風景（南から）



第46図 SE 2 検出状況（東から）



第47図 SE 2 断面状況（南から）

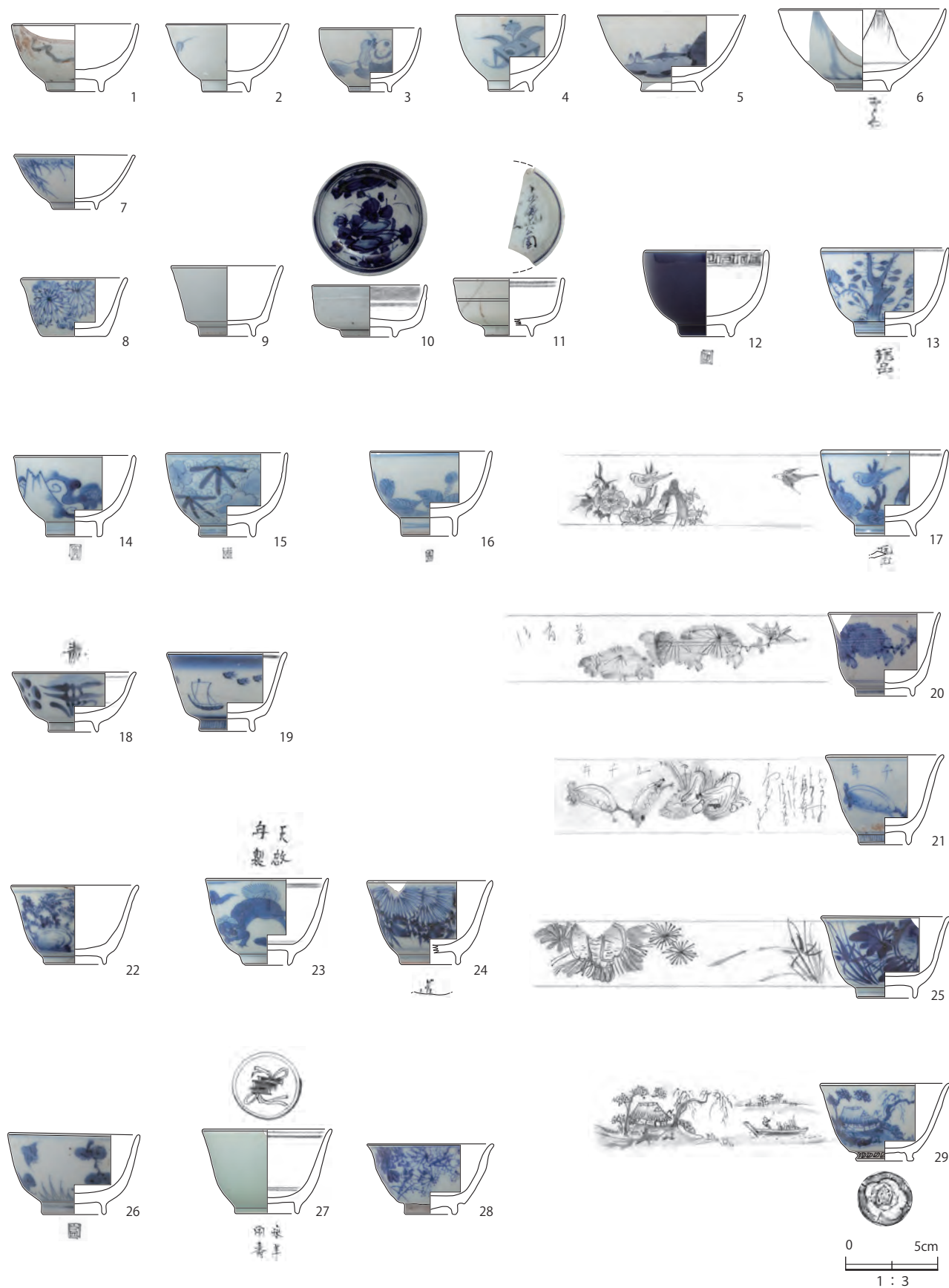


第48図 SE 2 完掘状況（南から）



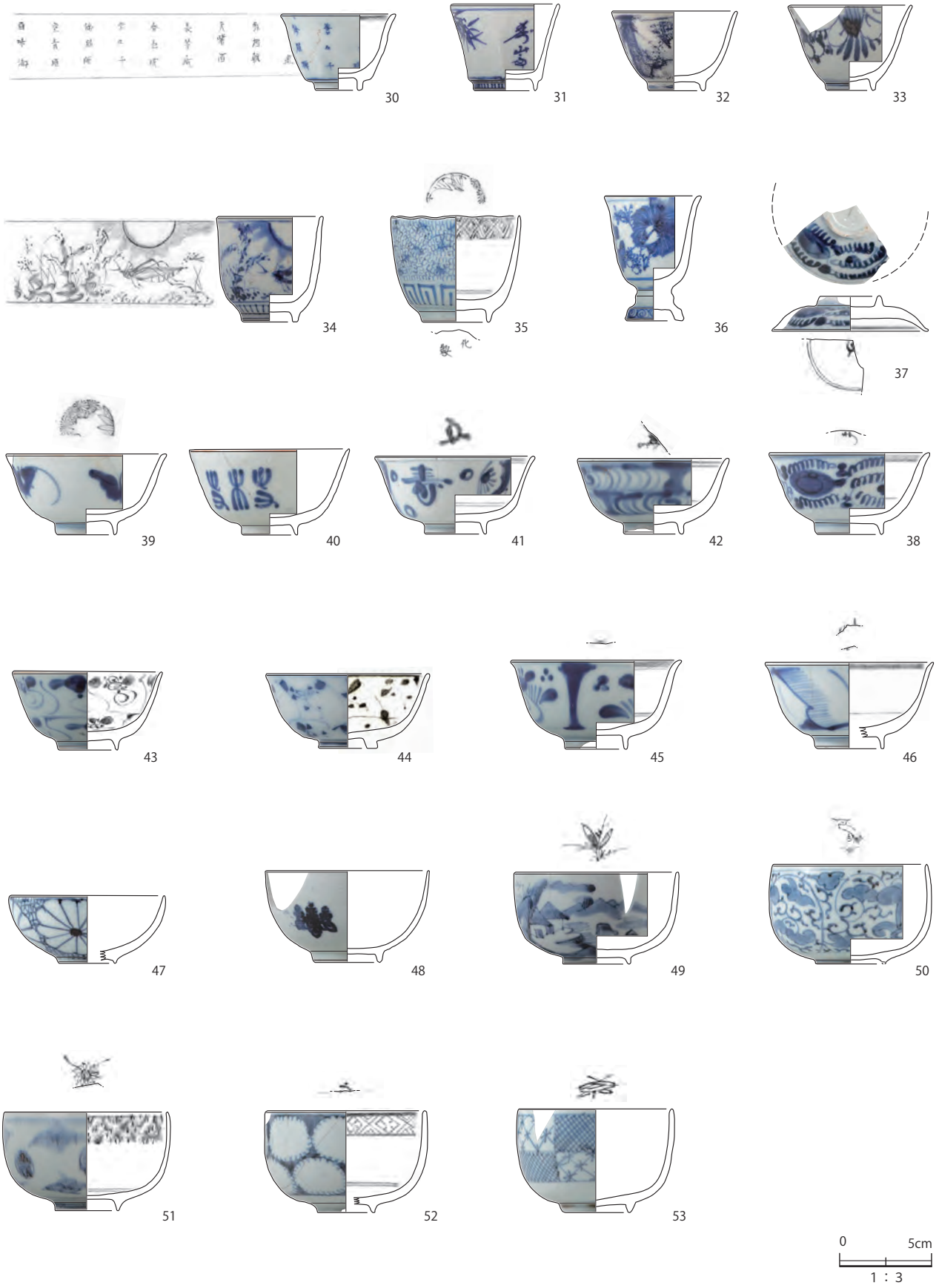
第49図 調査説明会風景（南西から）

小碗



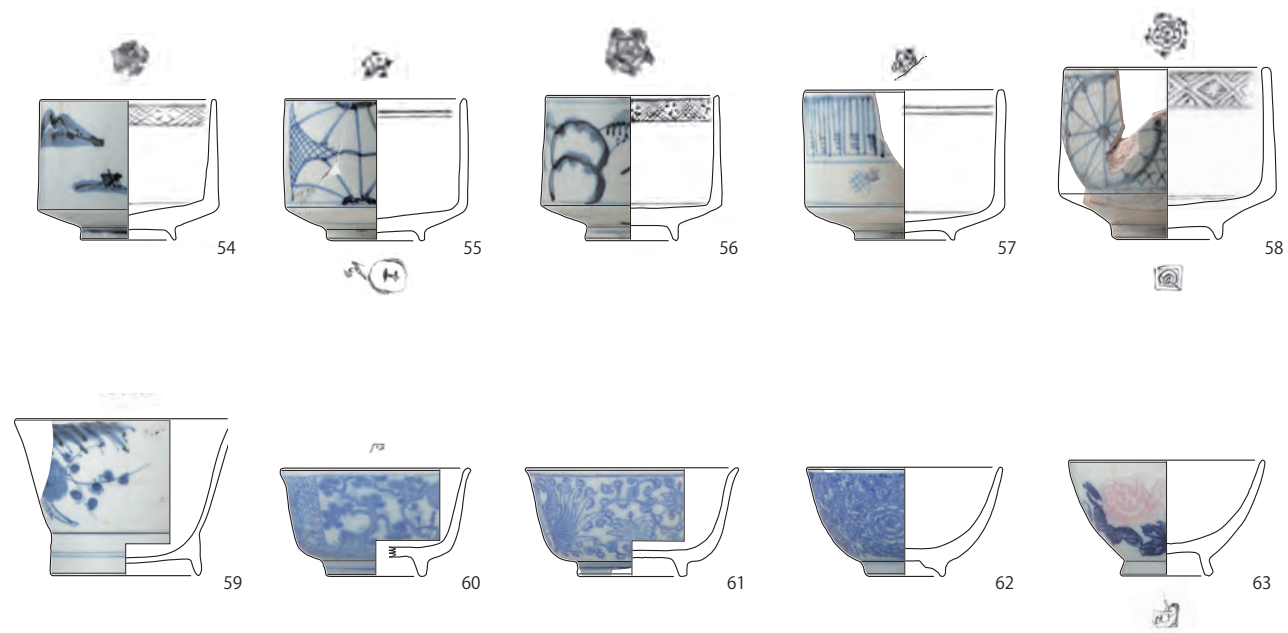
第50図 SD 1 出土遺物実測図 磁器碗類 1

小碗

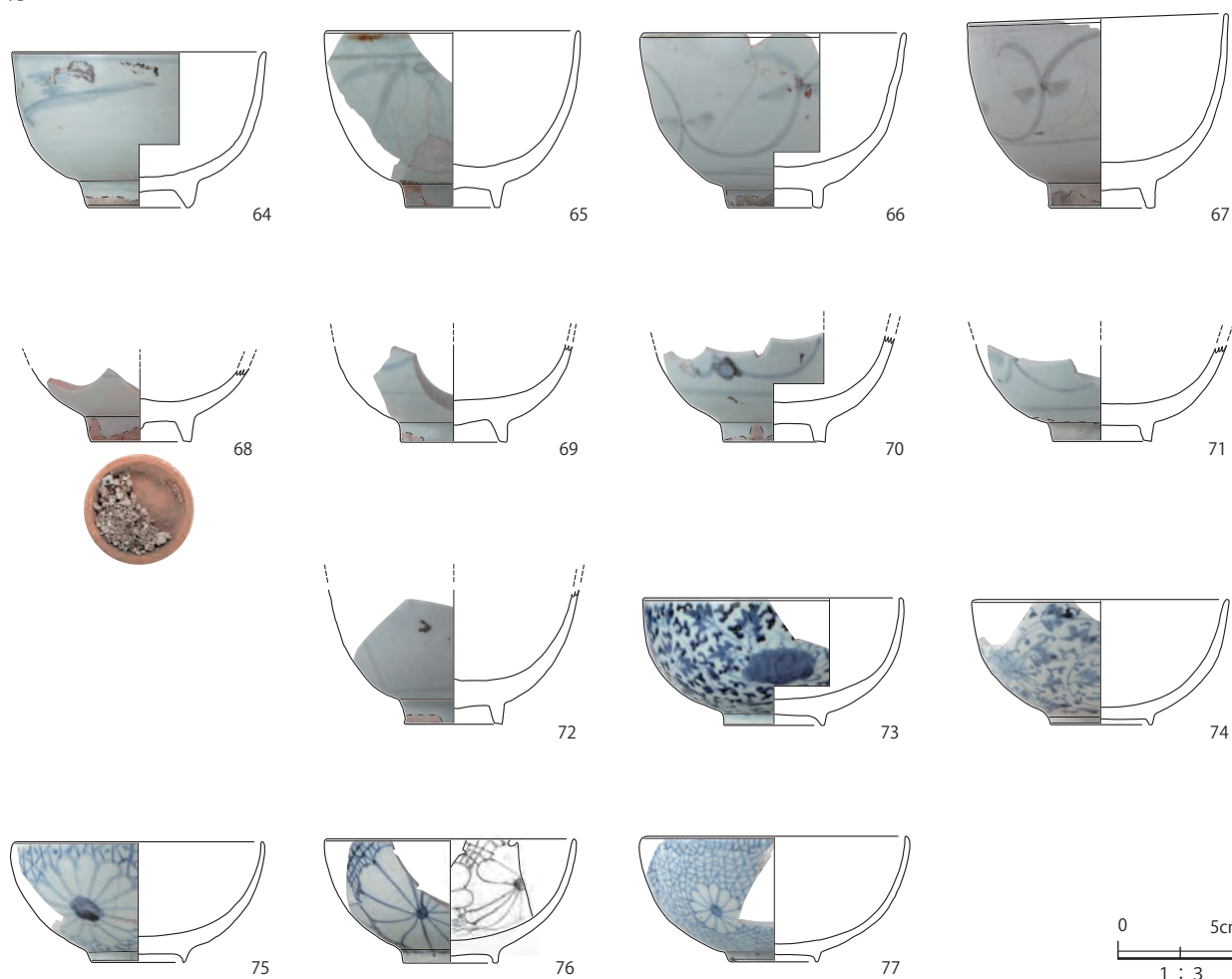


第51図 SD1出土遺物実測図 磁器碗類2

小碗

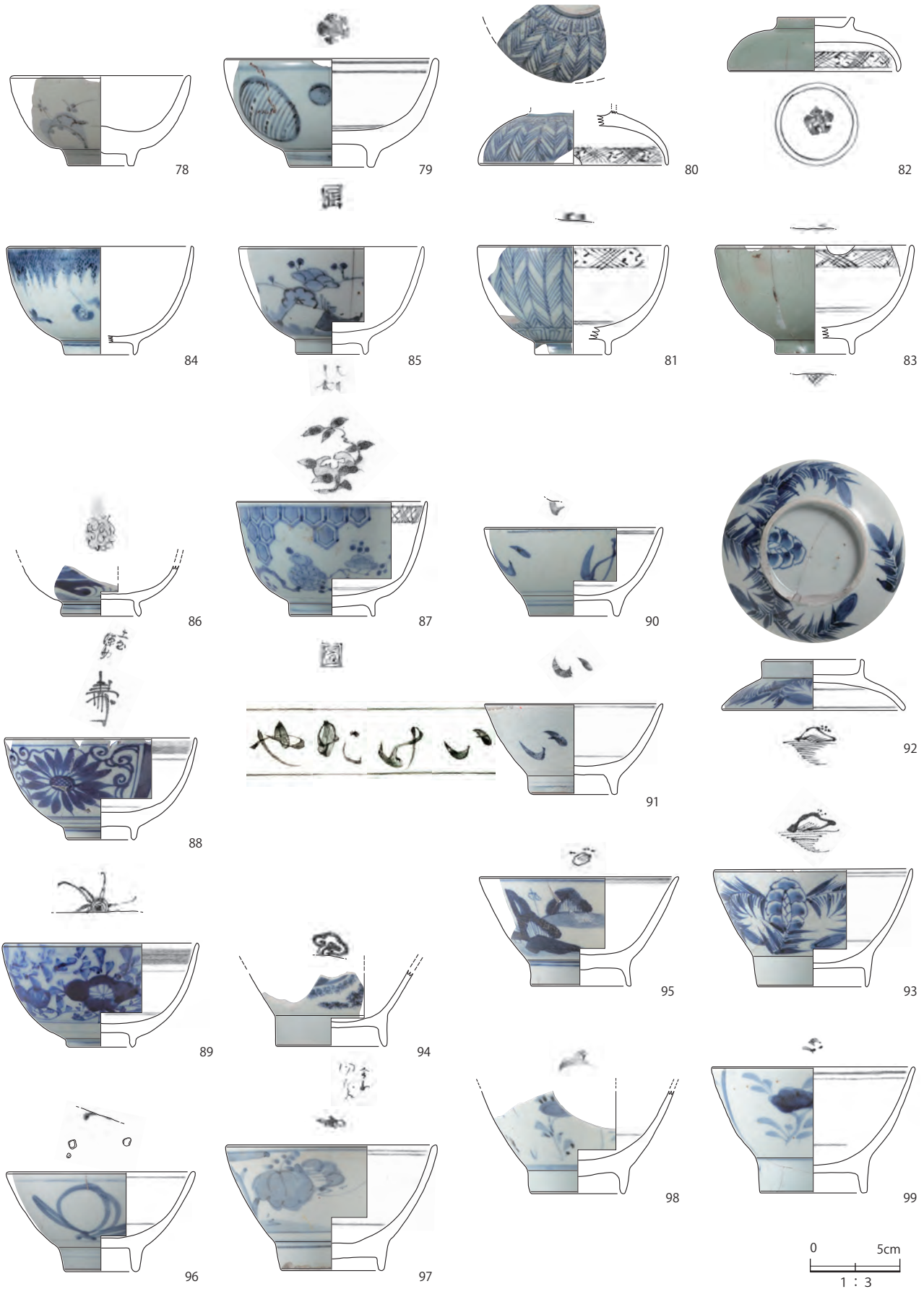


中碗



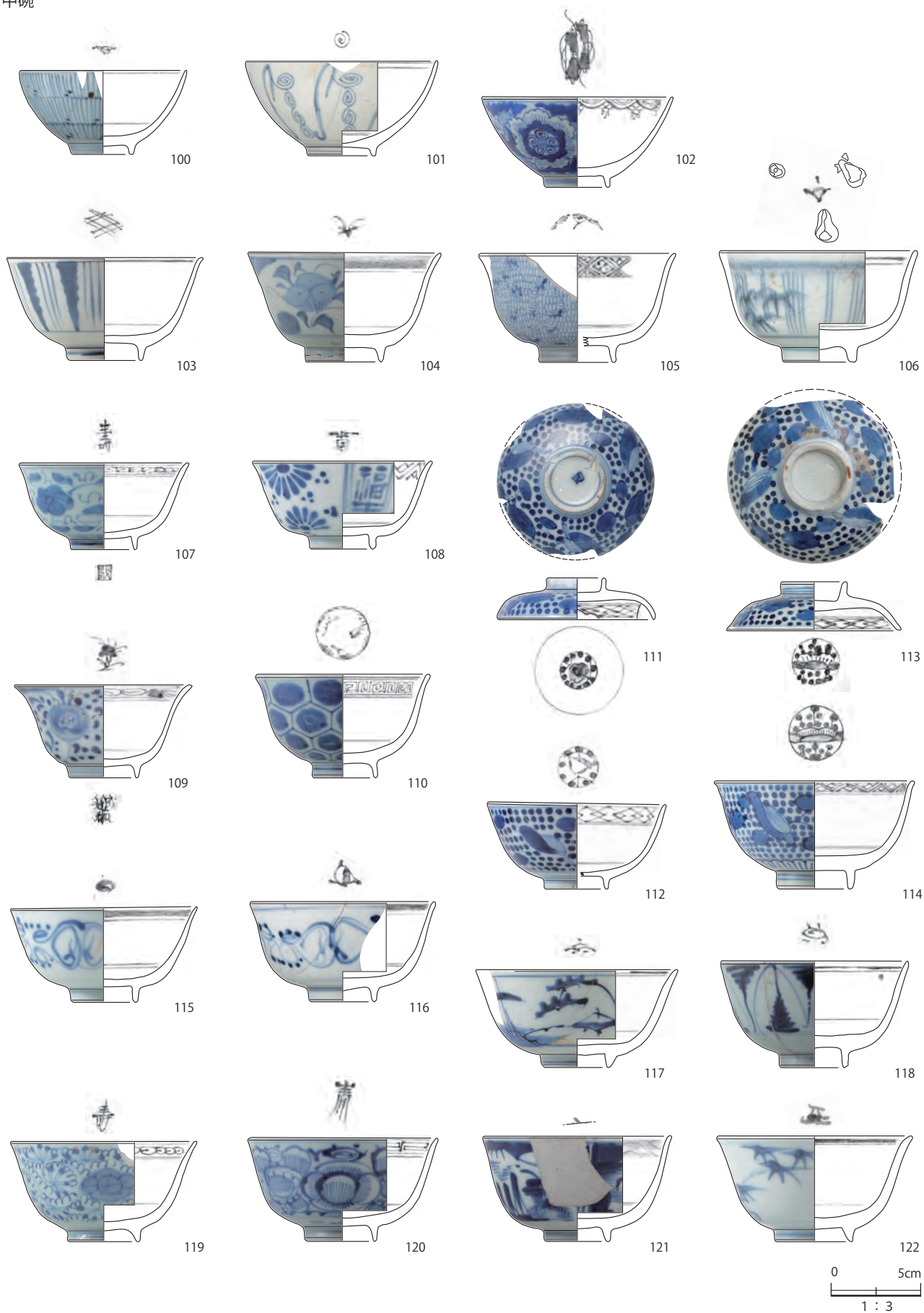
第52図 SD 1 出土遺物実測図 磁器碗類 3

中碗



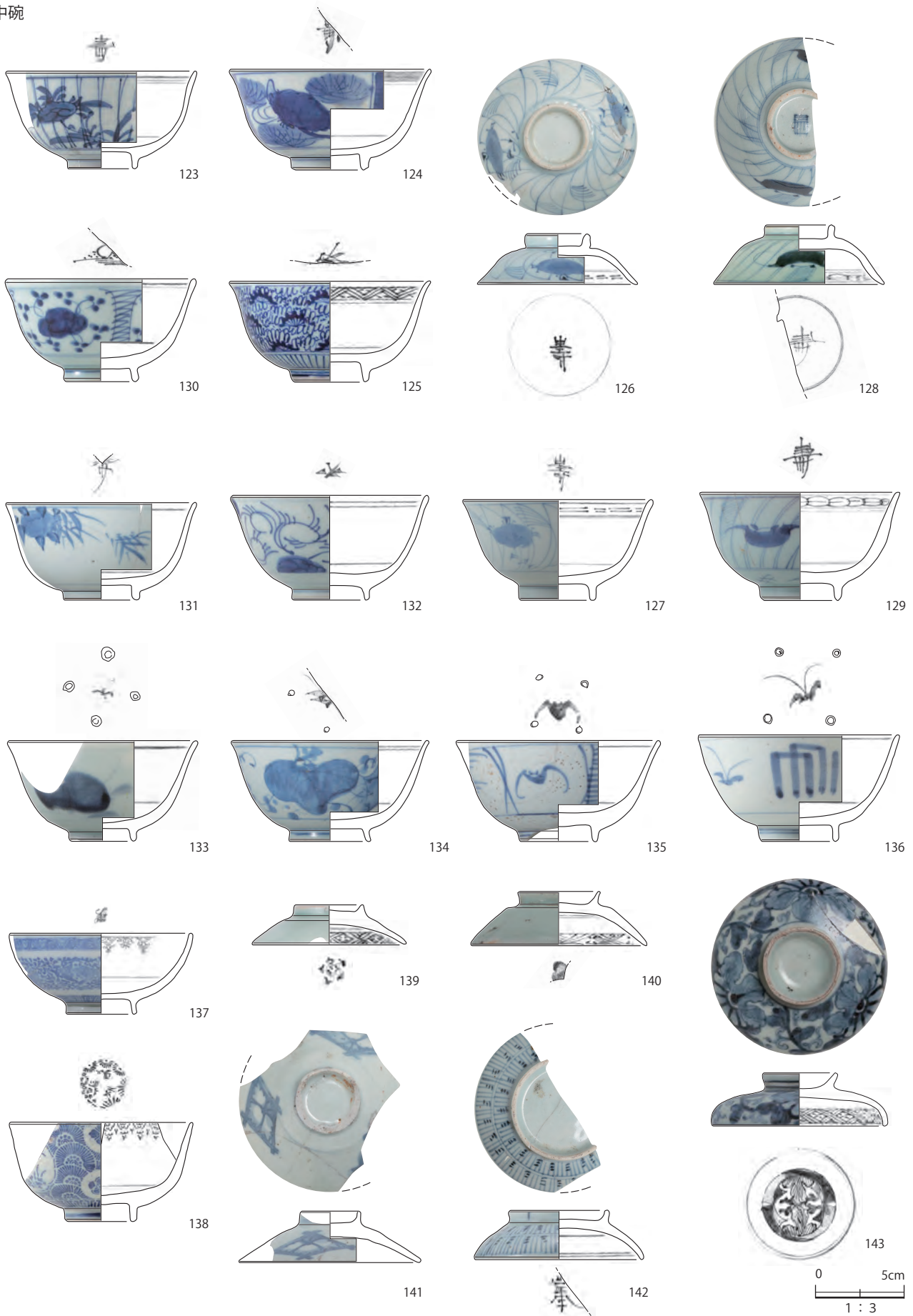
第53図 S D 1 出土遺物実測図 磁器碗類 4

中碗



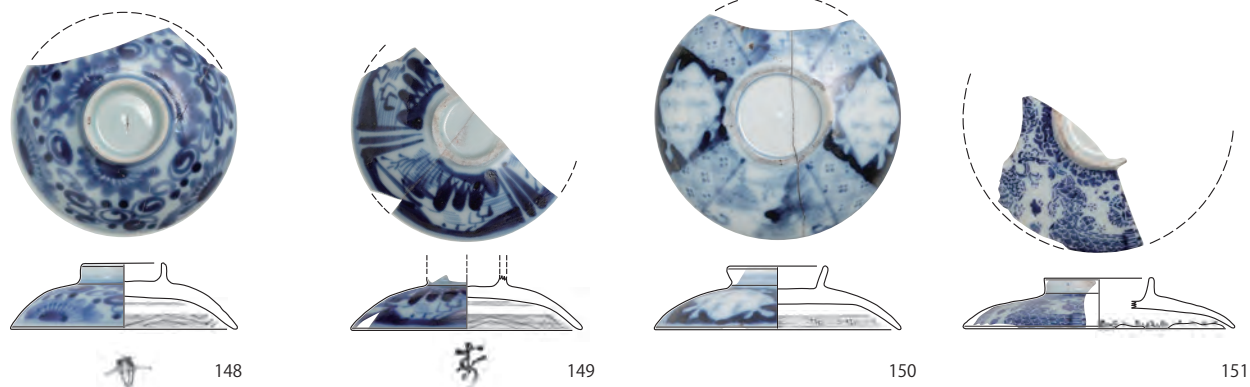
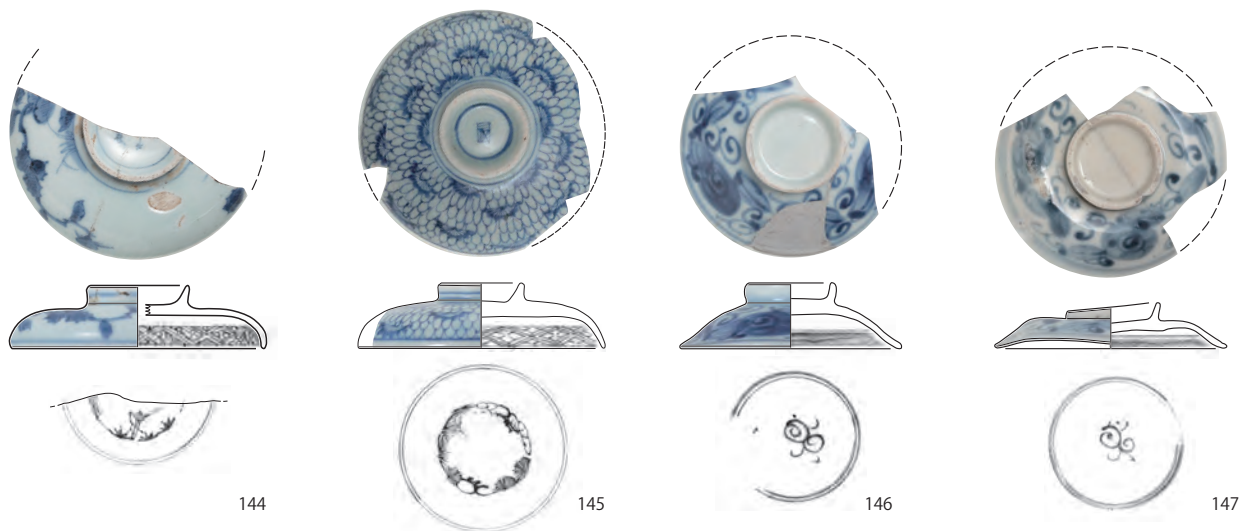
第54図 SD 1 出土遺物実測図 磁器碗類 5

中碗



第55図 S D 1 出土遺物実測図 磁器碗類 6

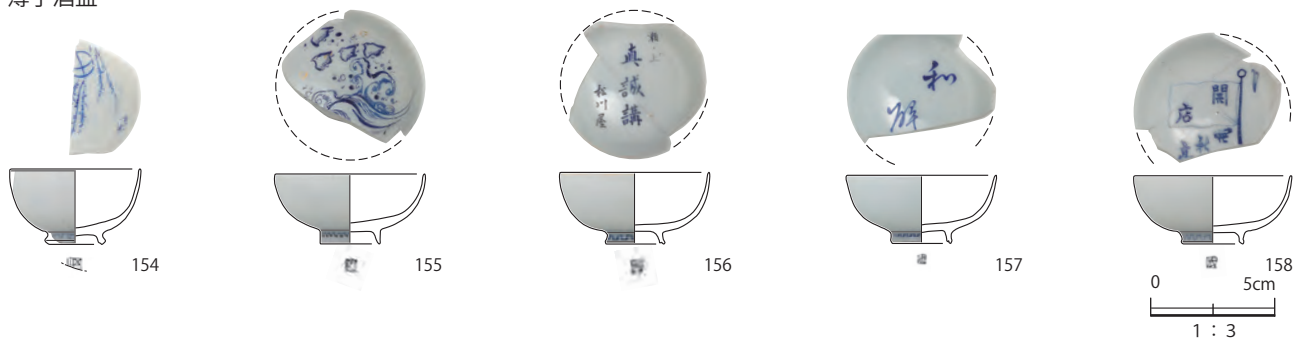
中碗



大碗

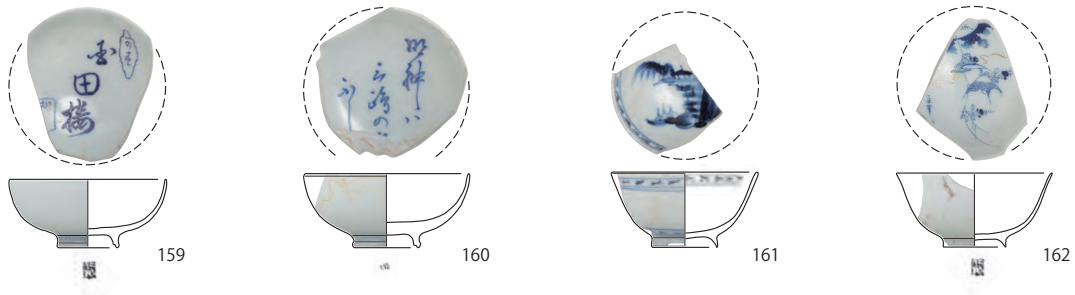


薄手酒盃

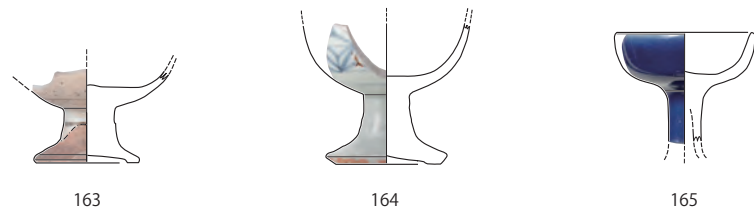


第56図 SD 1 出土遺物実測図 磁器碗類 7

薄手酒盃



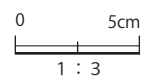
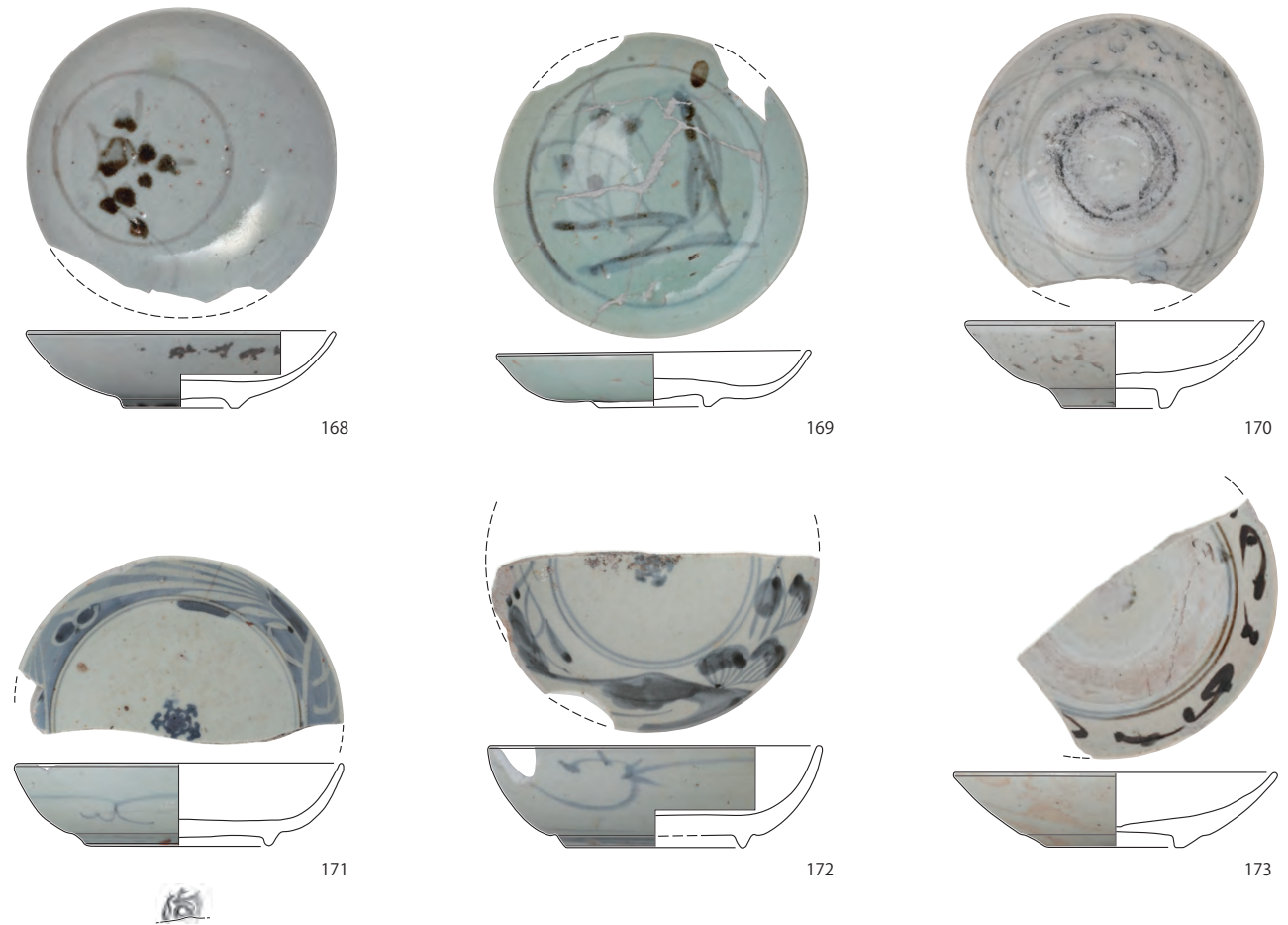
仏飯器



紅猪口



小皿



第57図 SD 1 出土遺物実測図 磁器碗類8、磁器皿類1

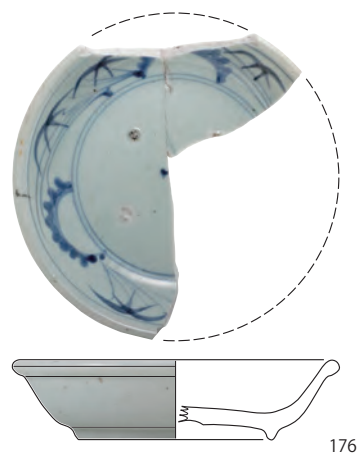
小皿



174



175



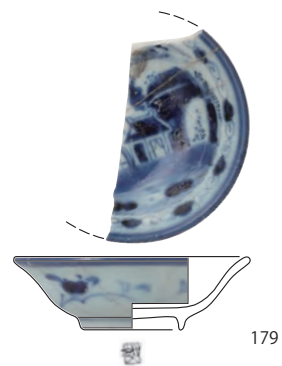
176



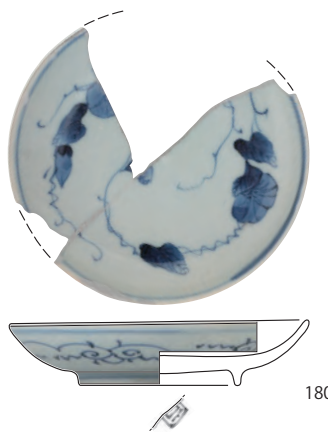
177



178



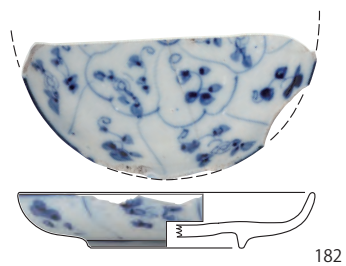
179



180



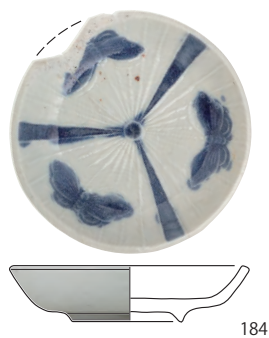
181



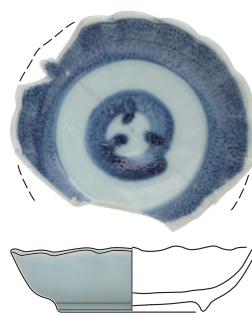
182



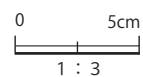
183



184

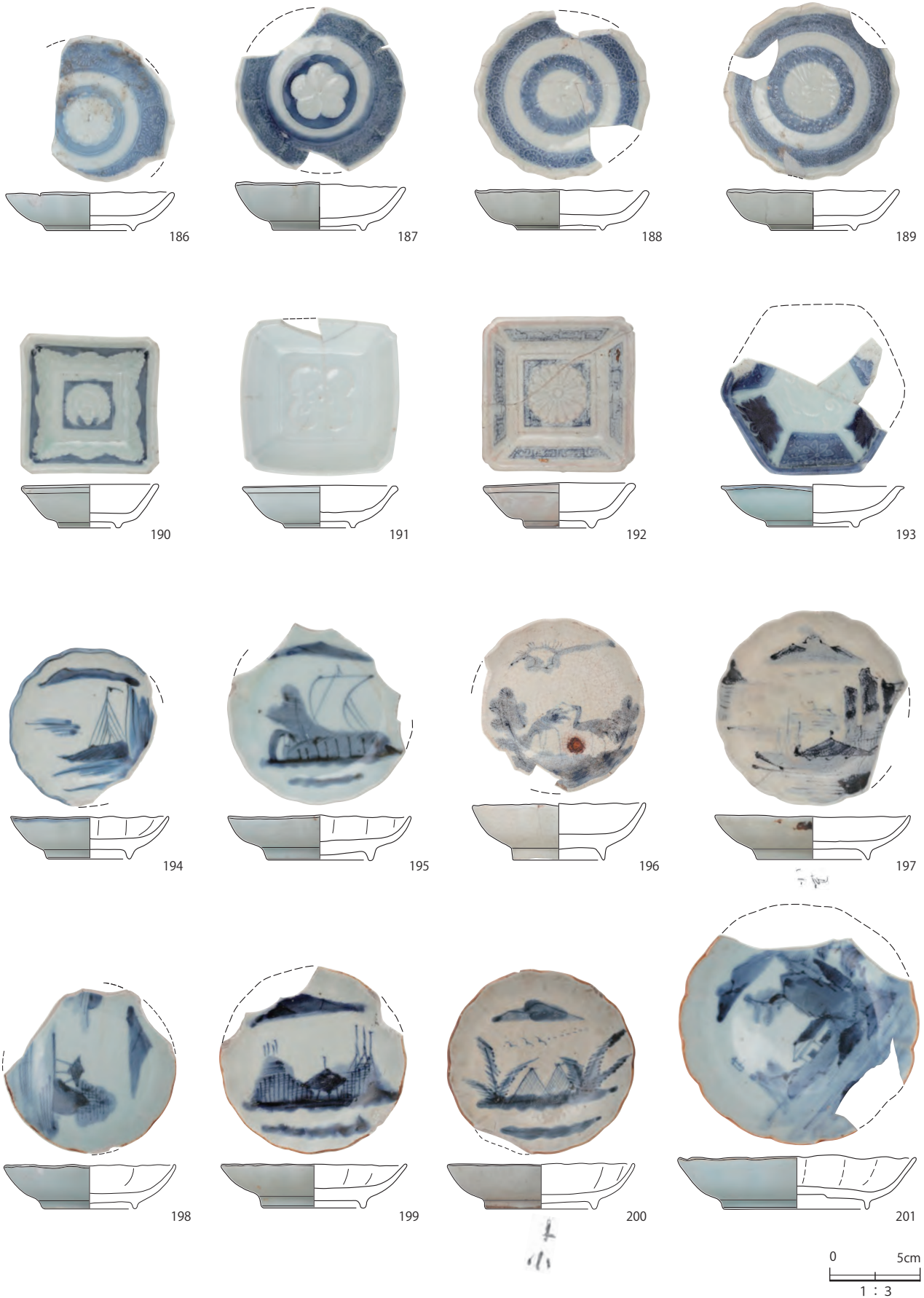


185



第58図 SD 1 出土遺物実測図 磁器皿類 2

小皿

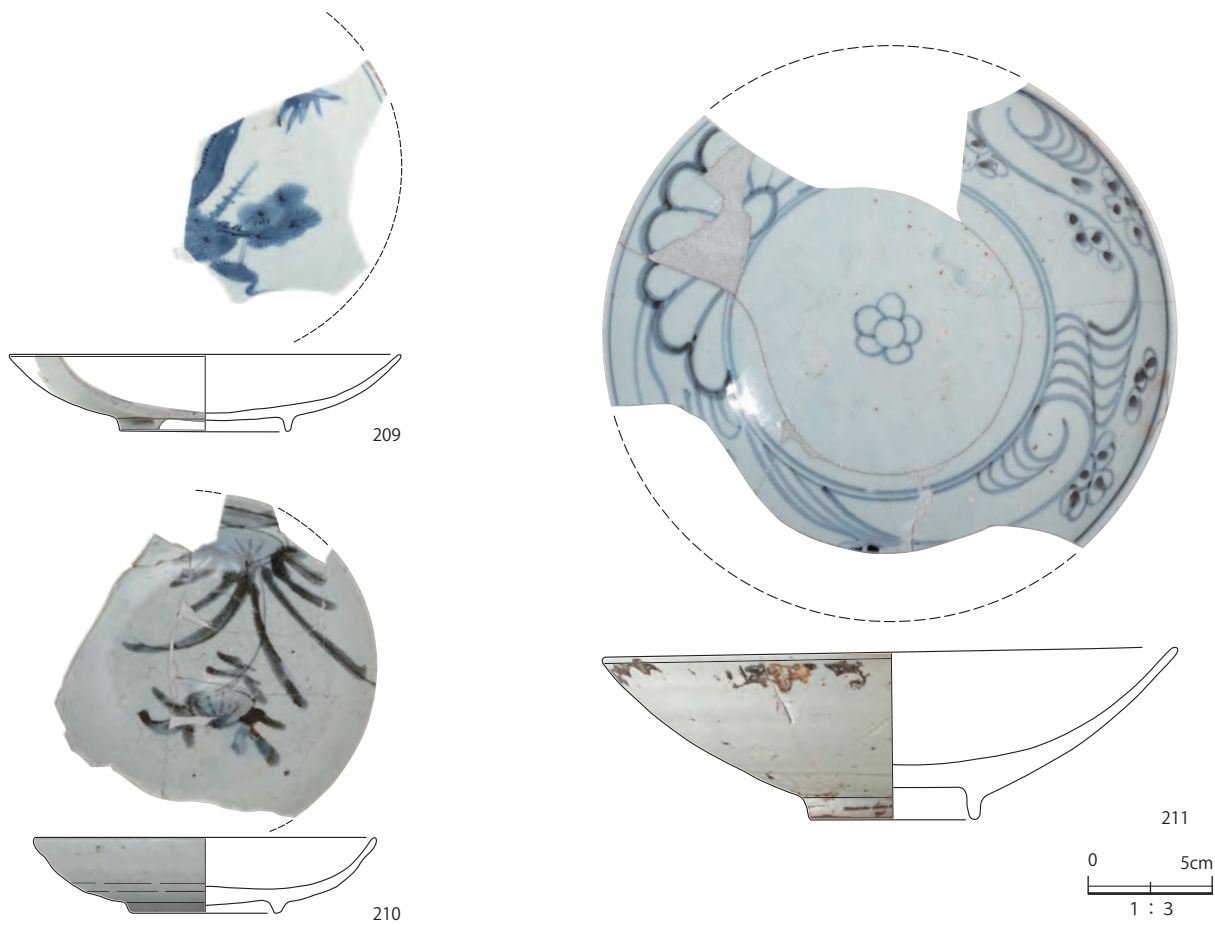


第59図 S D 1 出土遺物実測図 磁器皿類 3

小皿

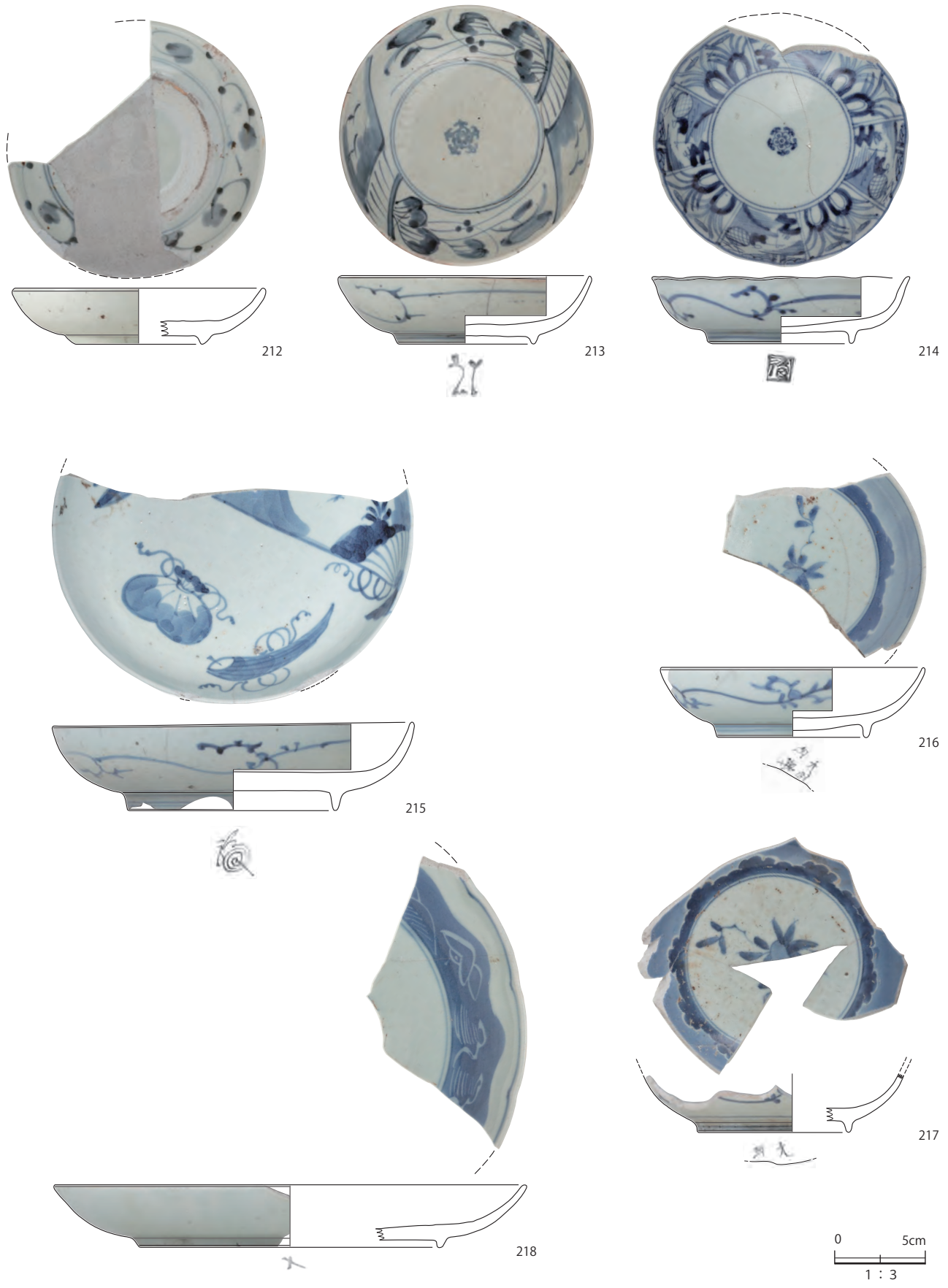


中皿



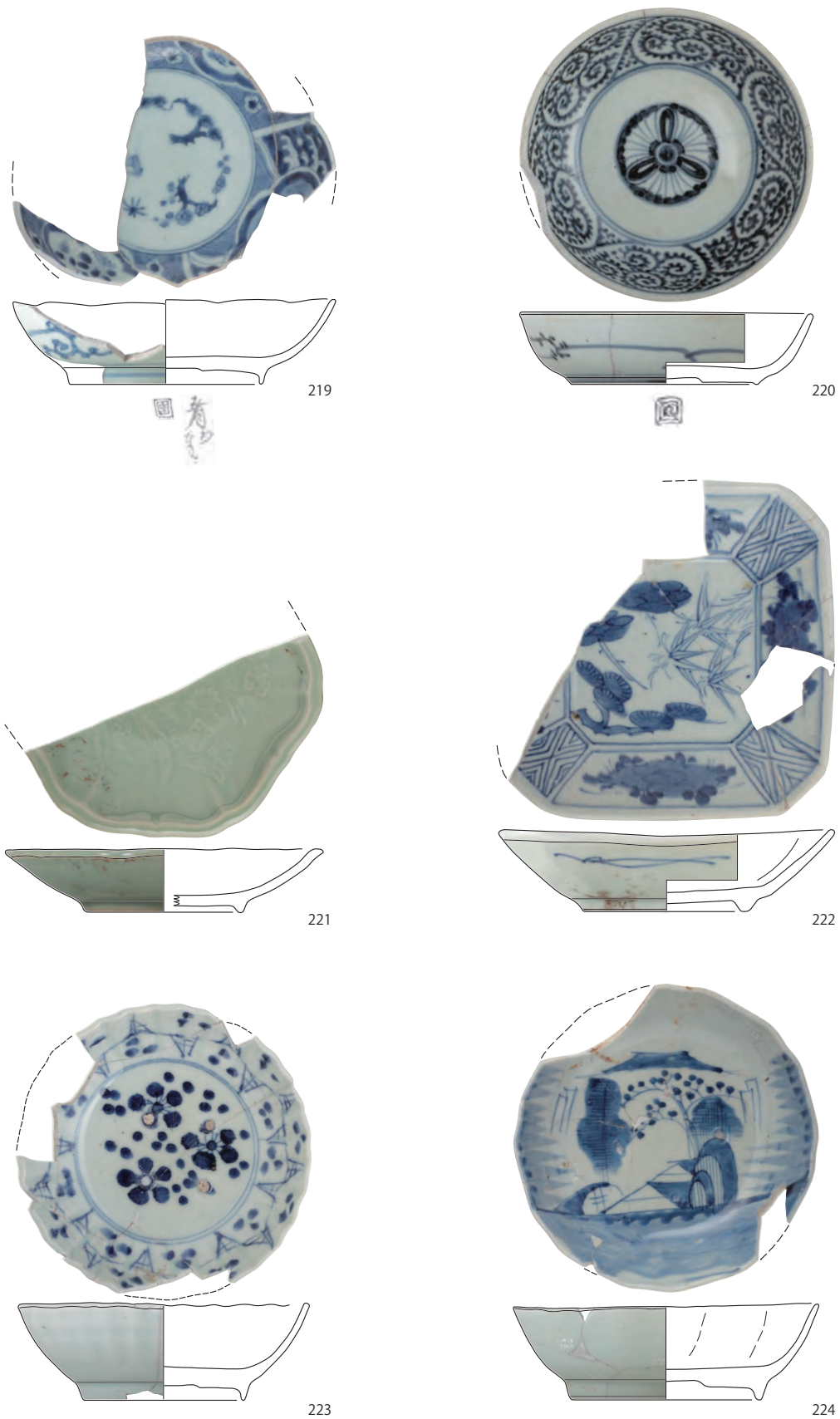
第60図 SD 1 出土遺物実測図 磁器皿類 4

中皿



第61図 SD 1 出土遺物実測図 磁器皿類 5

中皿

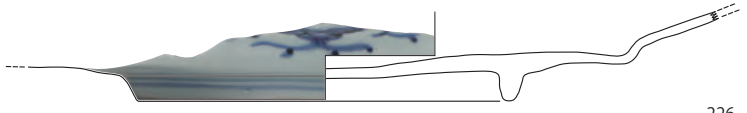


第62図 SD 1 出土遺物実測図 磁器皿類 6

大皿



225



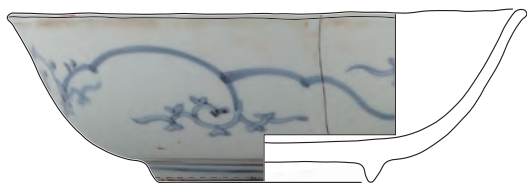
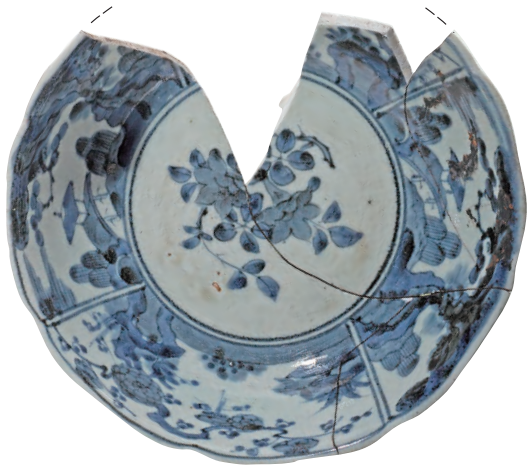
226

小鉢

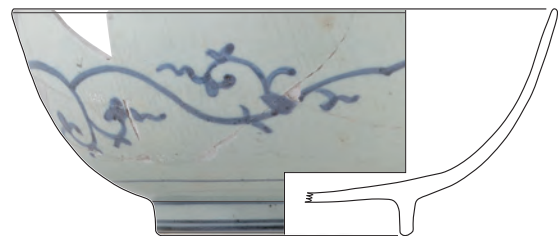


227

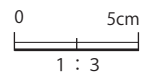
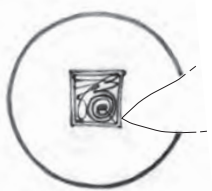
中鉢



228

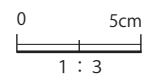
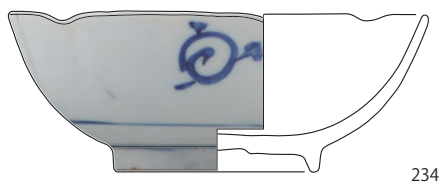
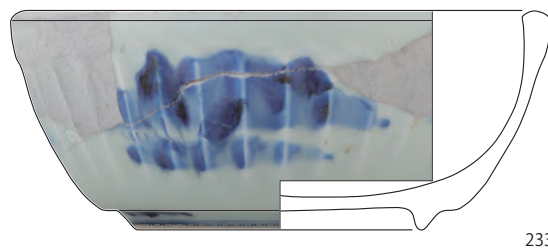
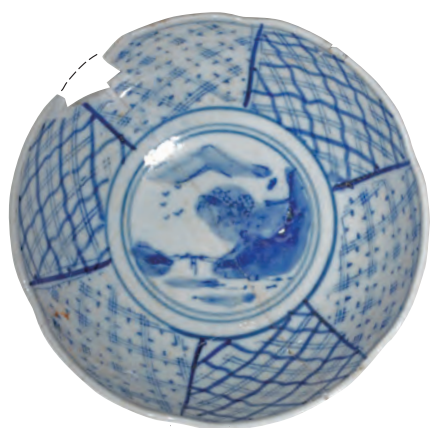
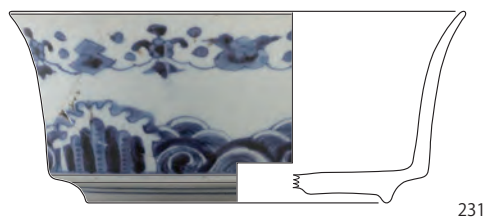
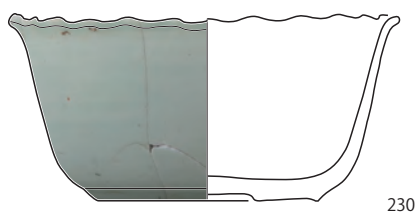


229



第63図 SD 1 出土遺物実測図 磁器皿類7、磁器鉢類1

中鉢



第64図 SD 1 出土遺物実測図 磁器鉢類 2

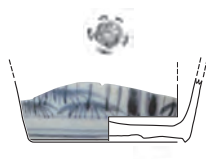
猪口



235

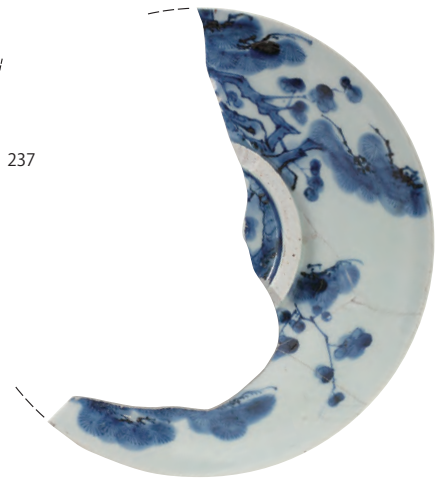


236



237

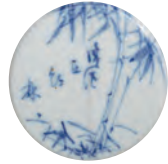
蓋物



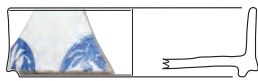
合子



238



240

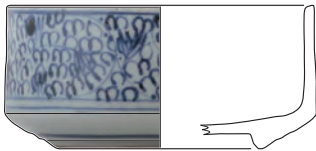


239

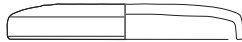


242

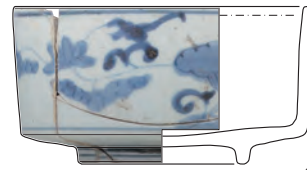
段重



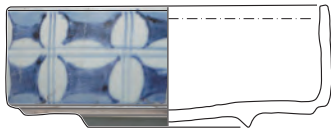
244



241

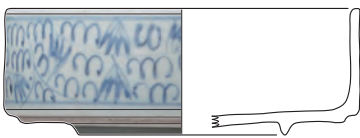


243

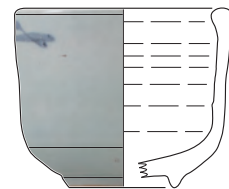
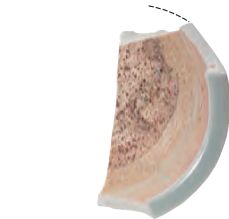


245

火鉢



246



248

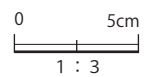


249

餌入

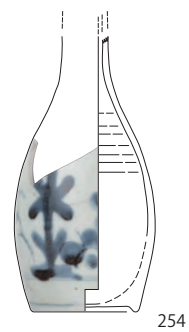
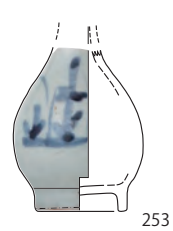
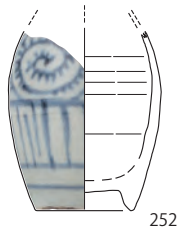


247

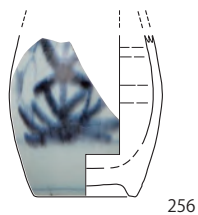
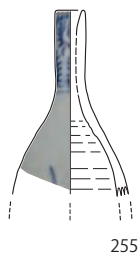


第65図 S D 1 出土遺物実測図 磁器鉢類 3

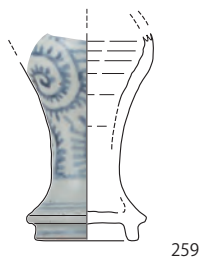
小瓶



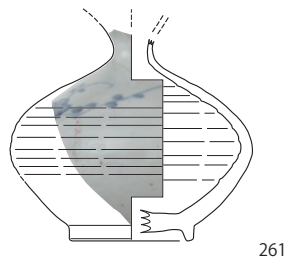
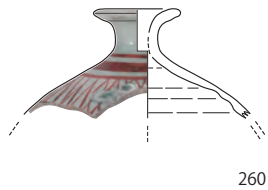
中瓶



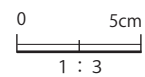
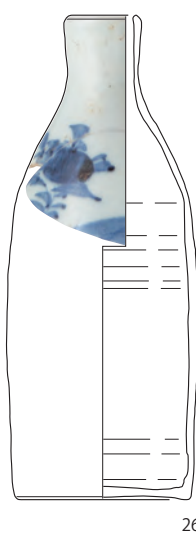
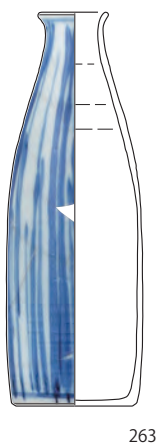
神酒徳利



髪油壺



燗徳利



第66図 SD 1 出土遺物実測図 磁器瓶類 1

爛徳利

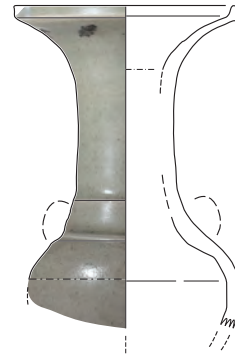


267



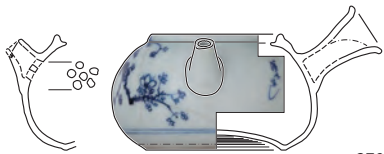
268

仏花瓶



269

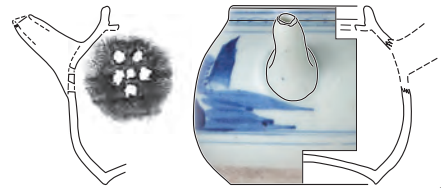
急須



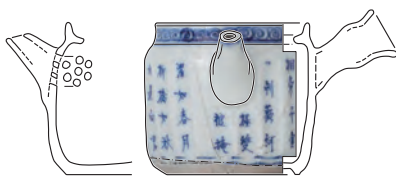
270



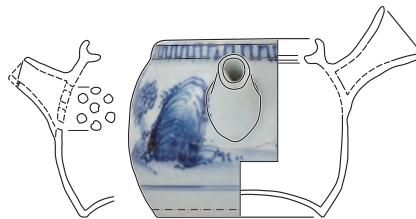
271



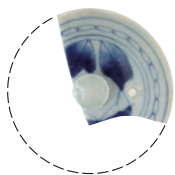
272



273



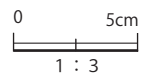
274



275

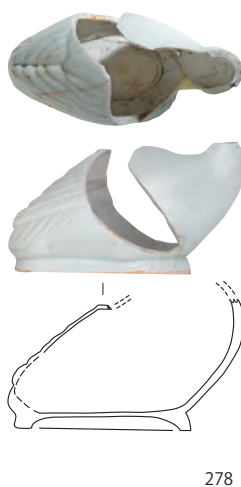
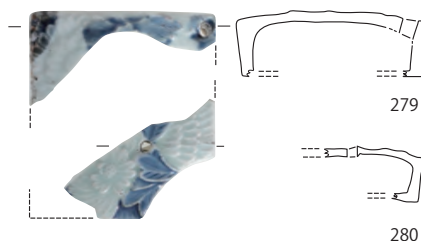
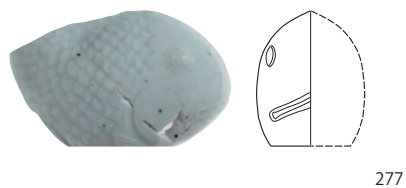


276

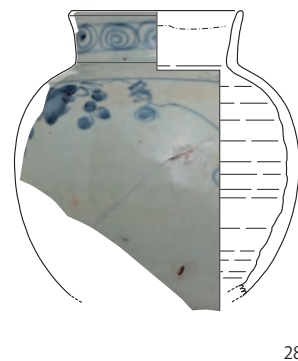


第67図 SD 1 出土遺物実測図 磁器瓶類 2、磁器水注類 1

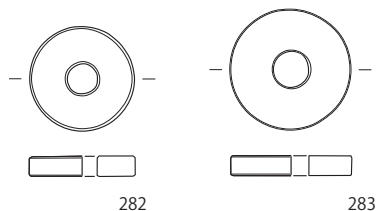
水滴



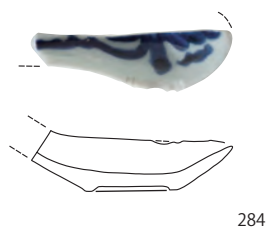
中壺



戸車



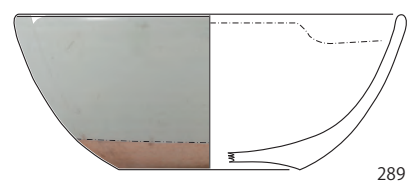
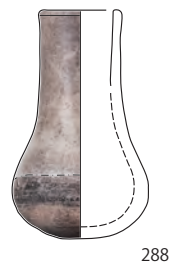
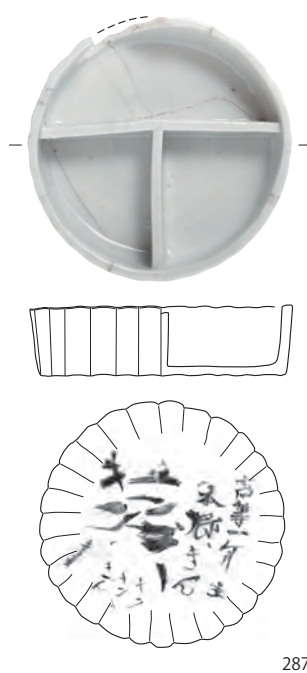
散蓮華



ミニチュア



近代磁器製品



0 5 cm
1 : 3
(277 ~ 289)

0 10 cm
5 cm
1 : 4 (281)
1 : 2 (285)

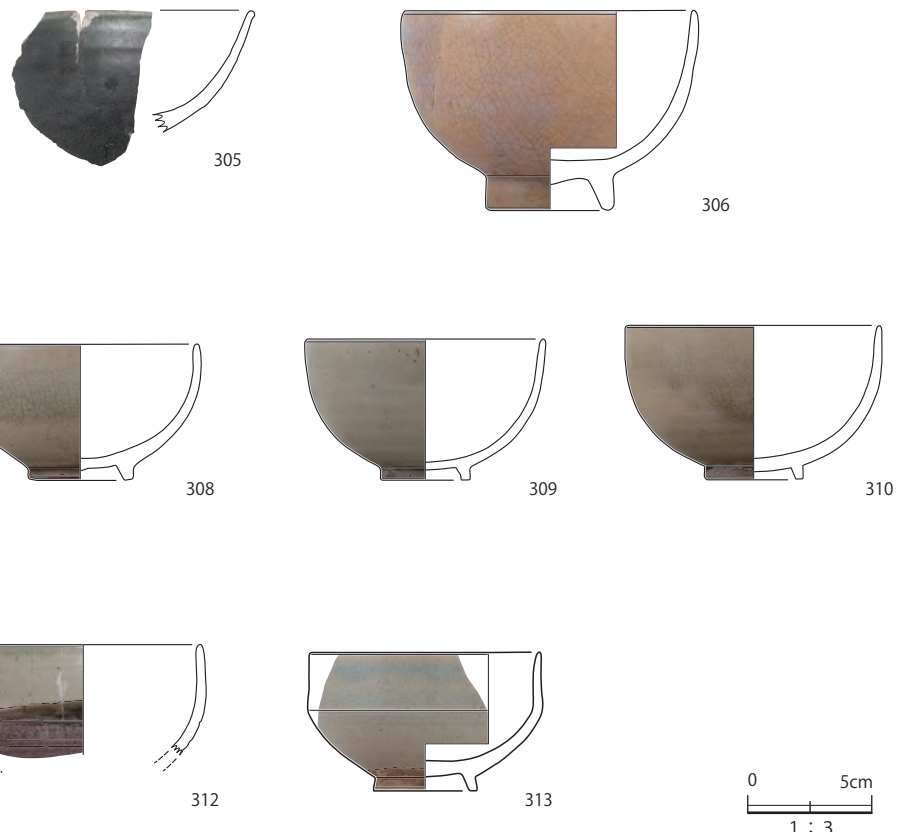
第68図 SD 1 出土遺物実測図 磁器水注類2、磁器壺・甕類、磁器土製品、近代磁器製品

Ⅲ 調査の成果

小碗

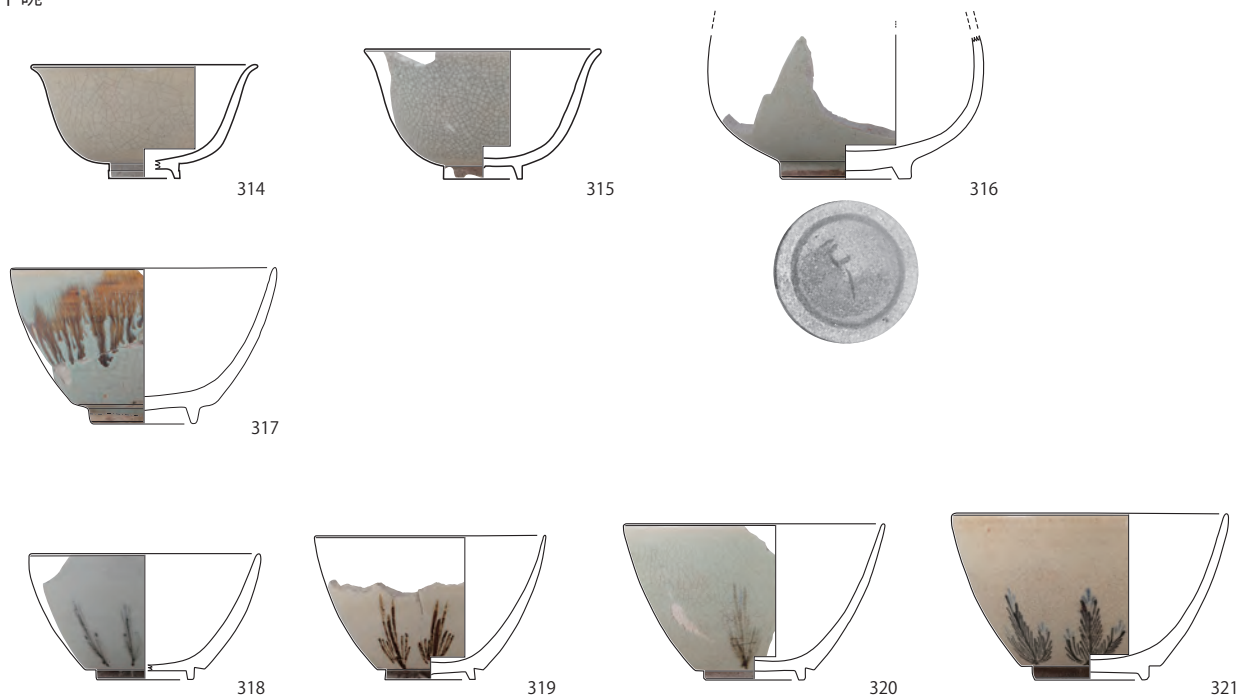


中碗



第69図 S D 1 出土遺物実測図 陶器碗類 1

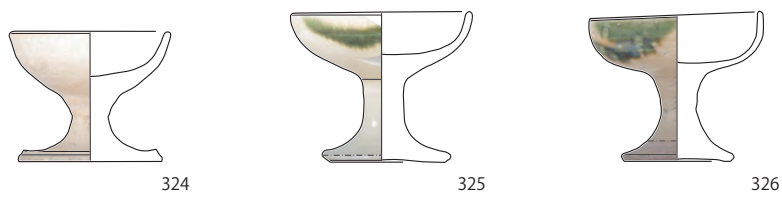
中碗



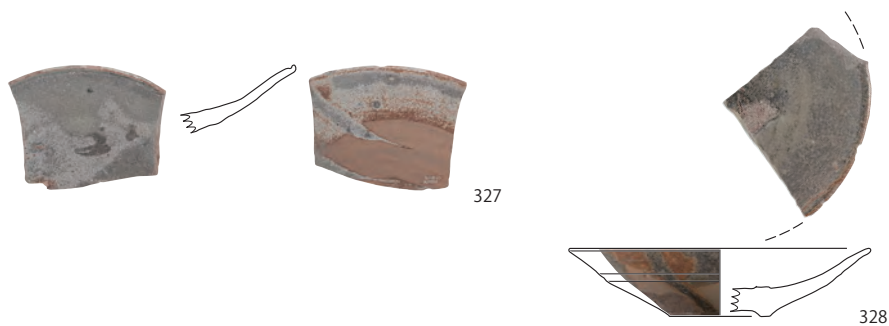
大碗



仏飯器

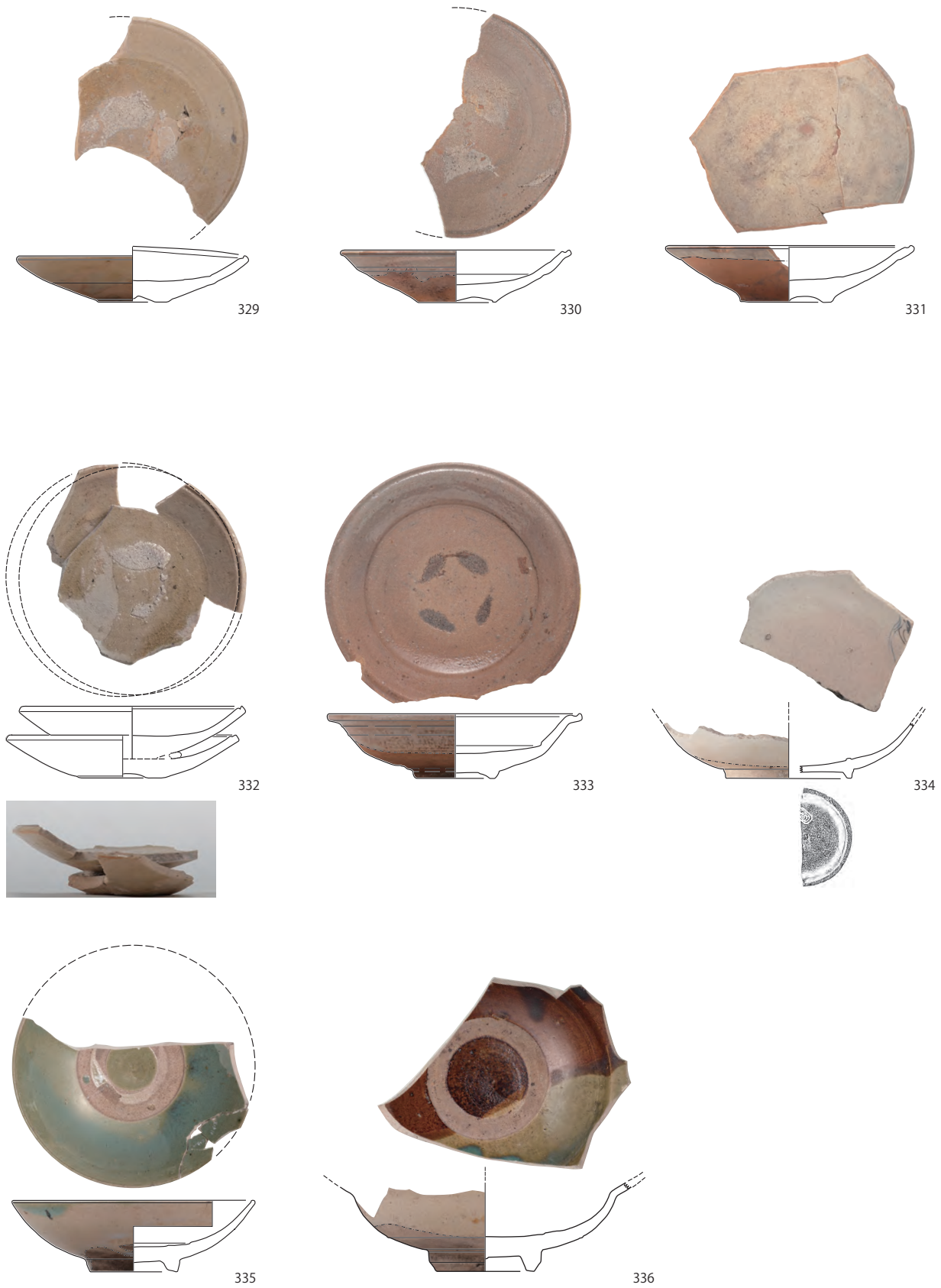


小皿



第70図 SD 1 出土遺物実測図 陶器碗類2、陶器皿類1

小皿



第71図 SD 1 出土遺物実測図 陶器皿類 2

小皿



337

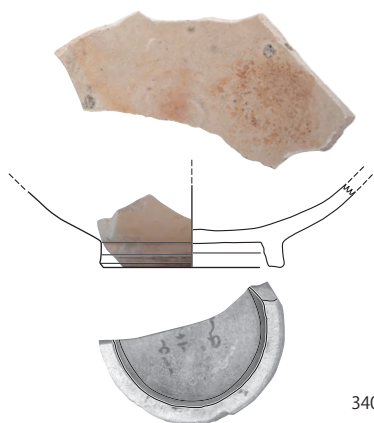


338



339

中皿

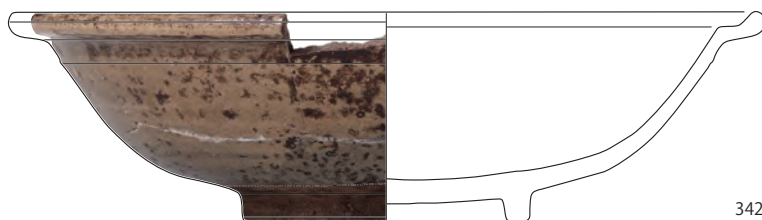


340

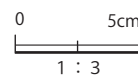


341

大皿



342

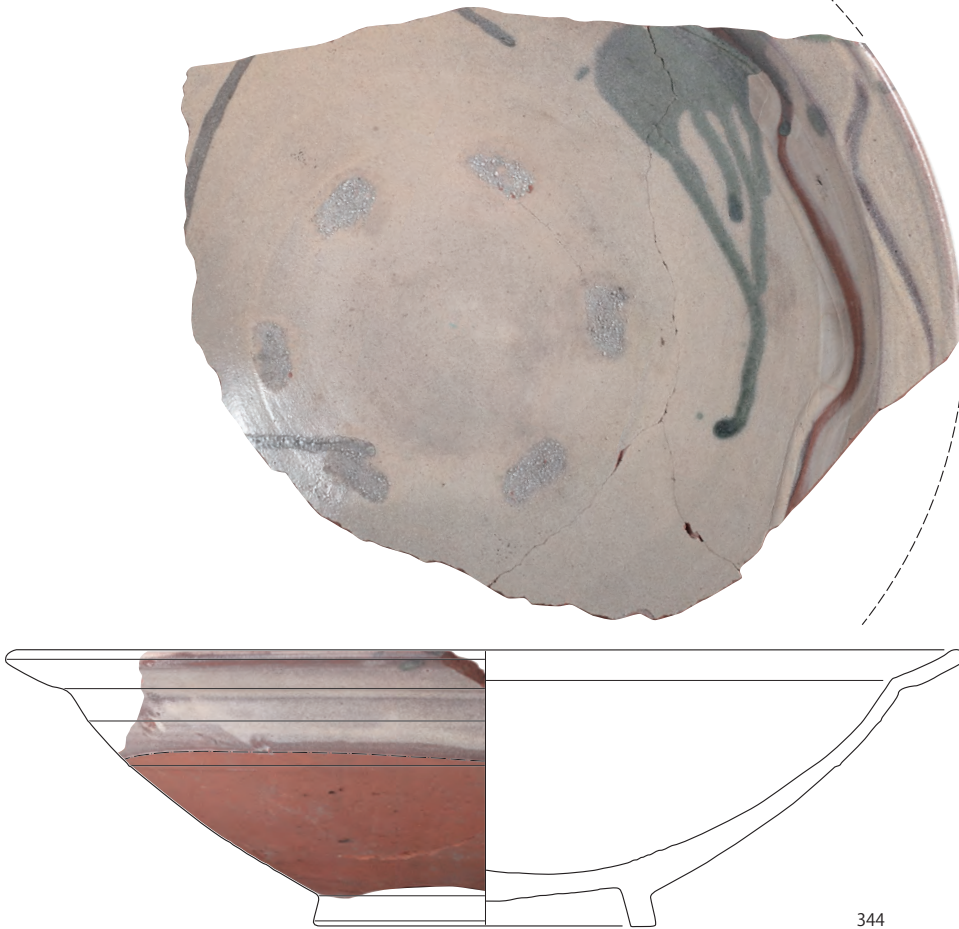


第72図 SD 1 出土遺物実測図 陶器皿類 3

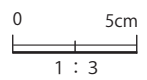
大皿



343



344

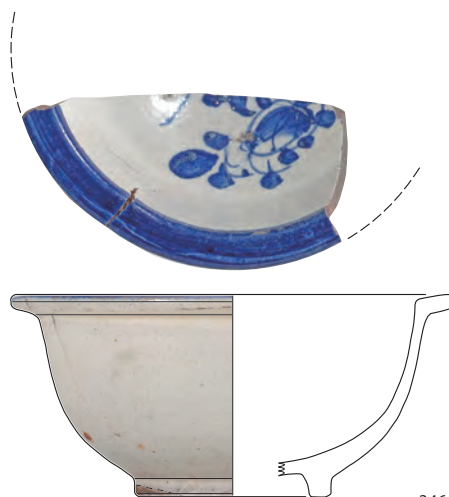


第73図 SD 1 出土遺物実測図 陶器皿類 4

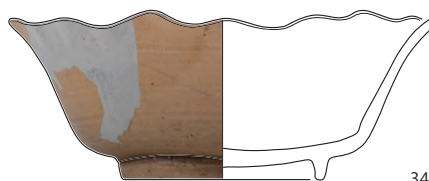
中鉢



345



346



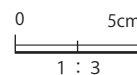
347



348

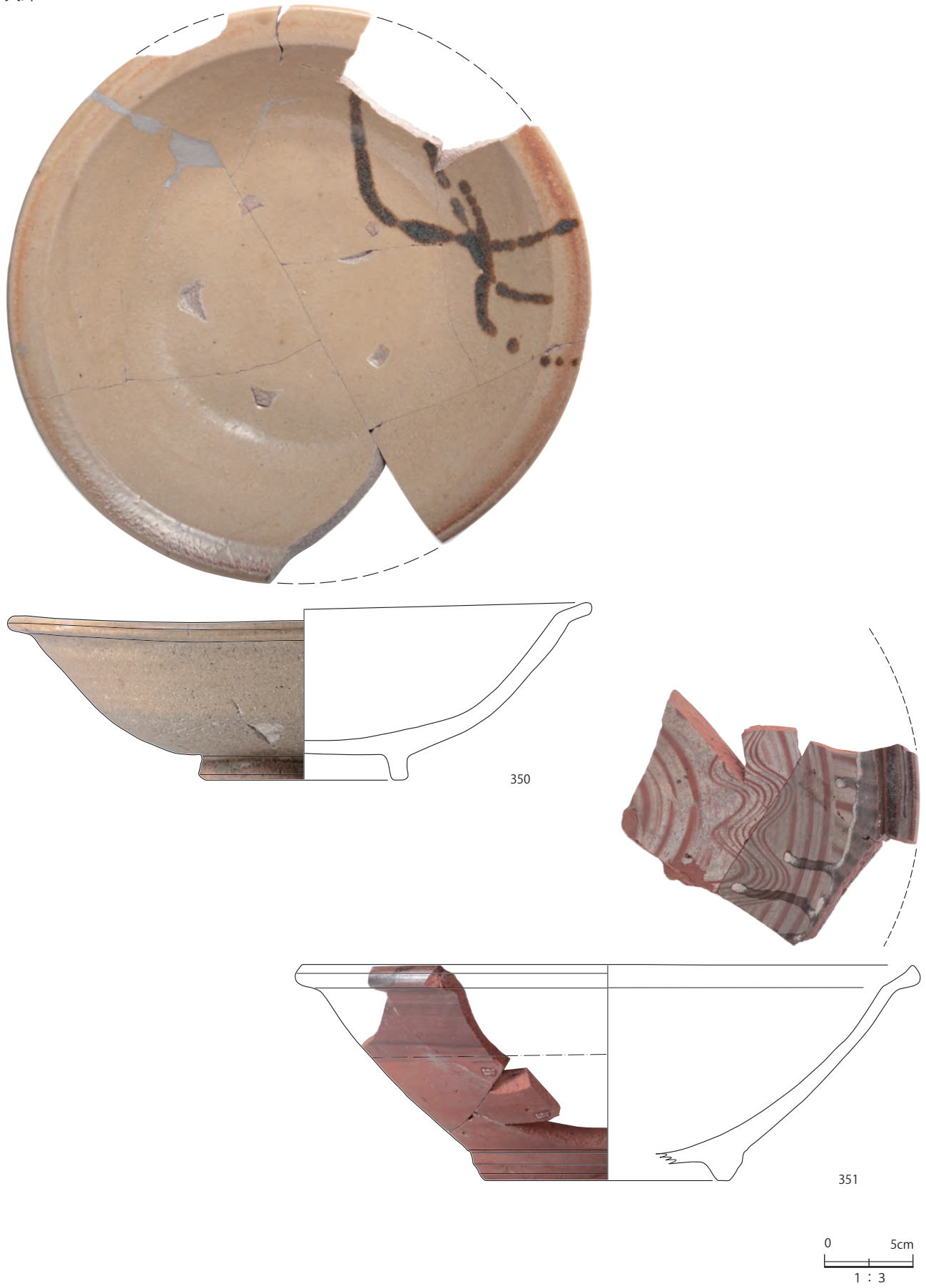


349



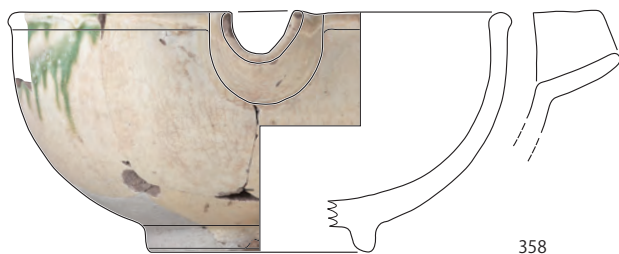
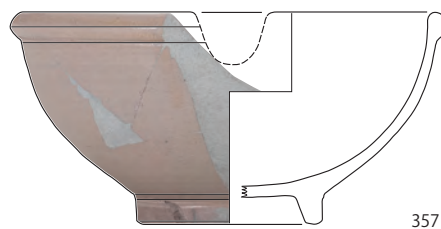
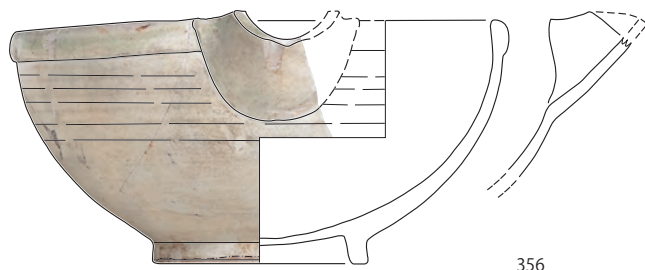
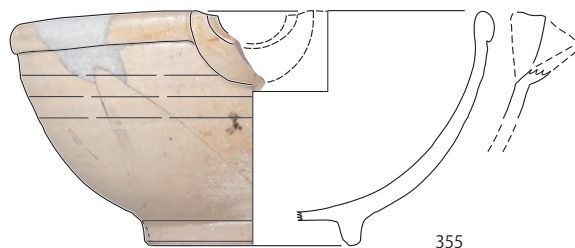
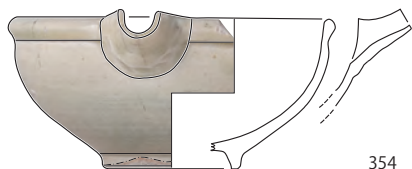
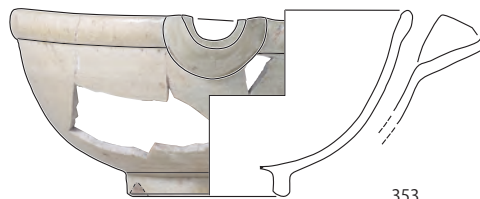
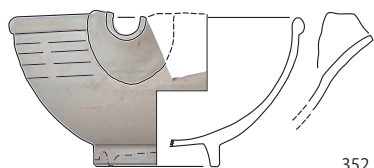
第74図 SD 1 出土遺物実測図 陶器鉢類 1

大鉢

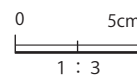


第75図 SD 1 出土遺物実測図 陶器鉢類 2

片口



捏鉢

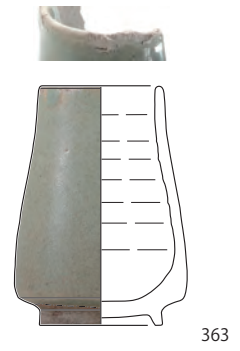
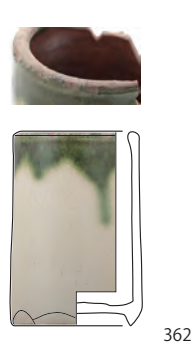


第76図 SD 1 出土遺物実測図 陶器鉢類 3

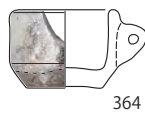
合子



灰吹



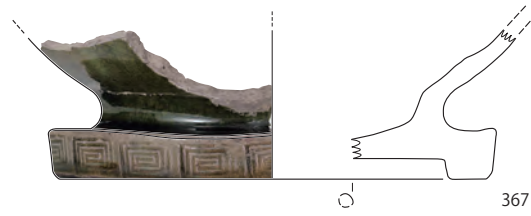
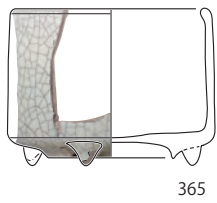
餌猪口



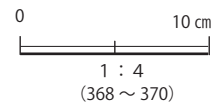
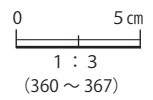
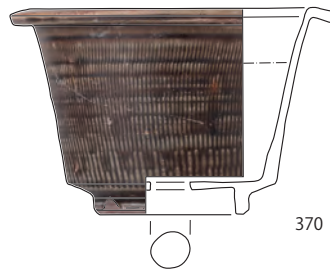
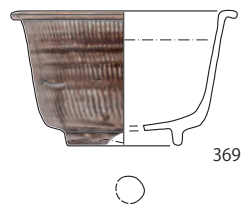
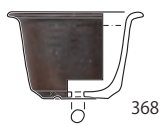
火鉢



香炉



植木鉢

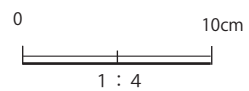
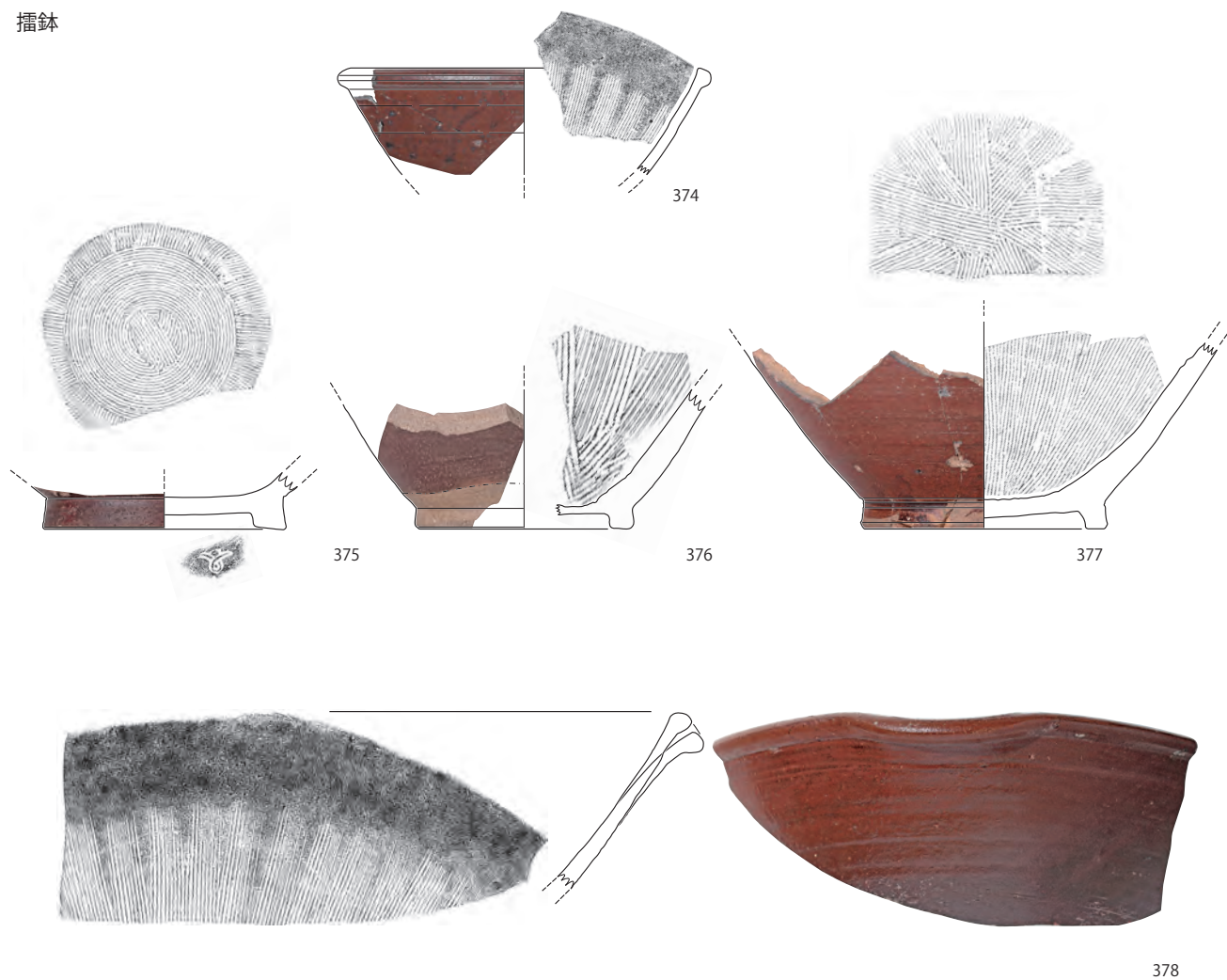


第77図 SD 1 出土遺物実測図 陶器鉢類 4

植木鉢

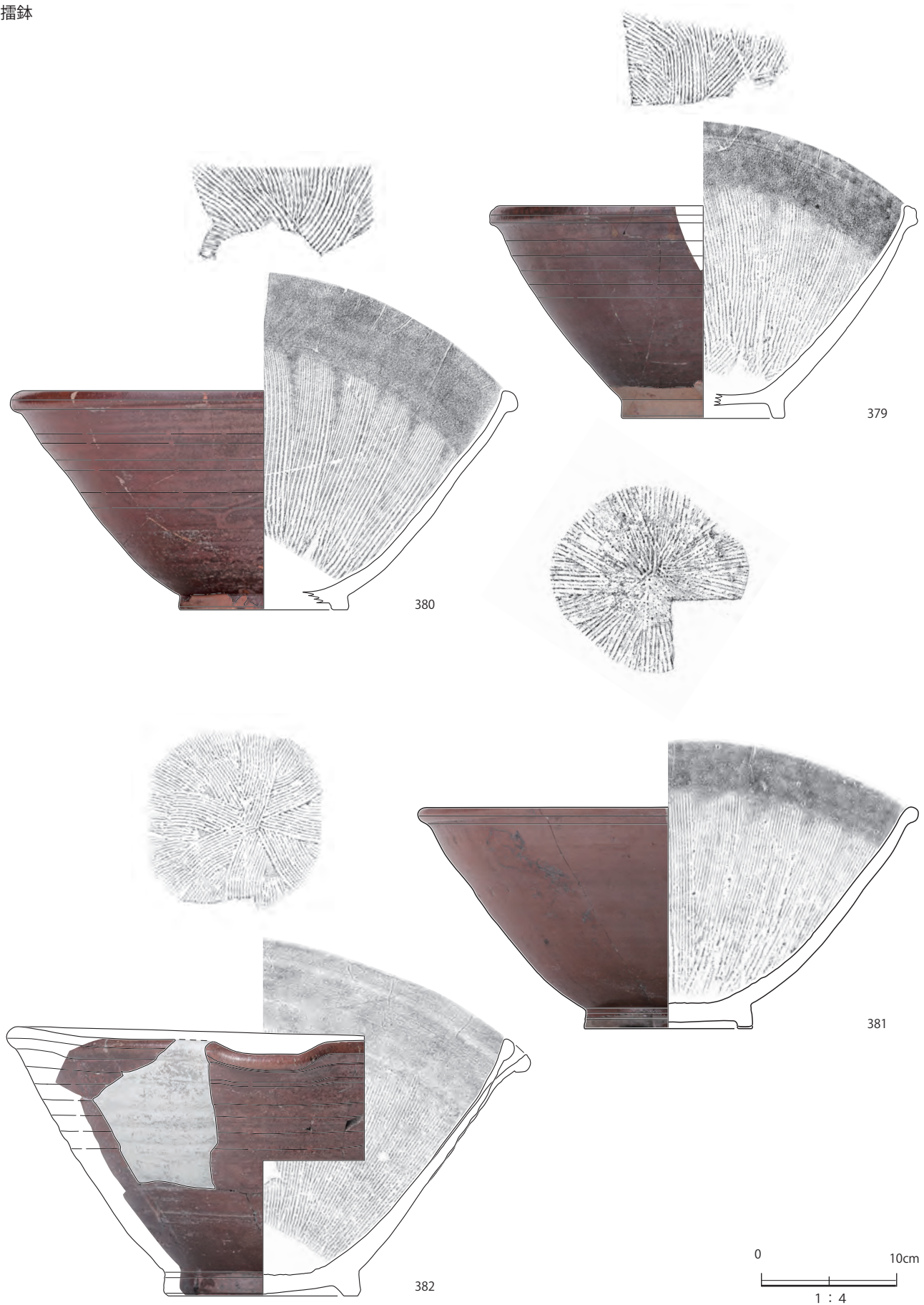


播鉢



第78図 SD 1 出土遺物実測図 陶器鉢類 5

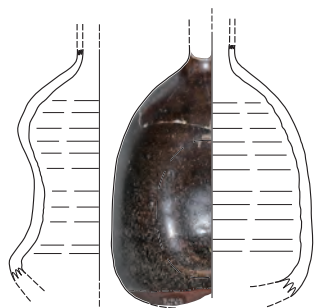
挿鉢



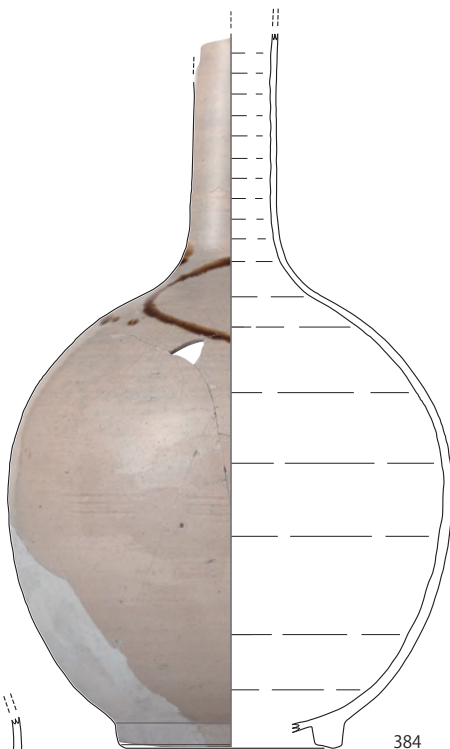
第79図 SD 1 出土遺物実測図 陶器鉢類 6

中瓶

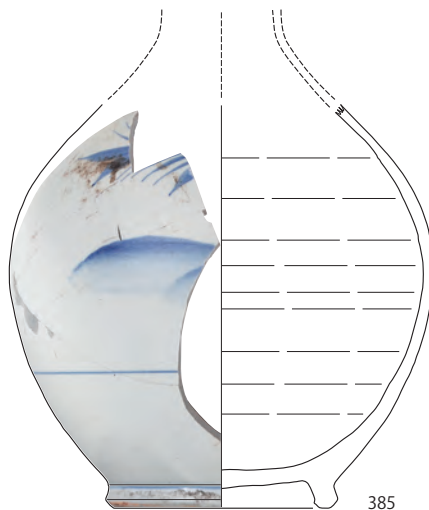
大瓶



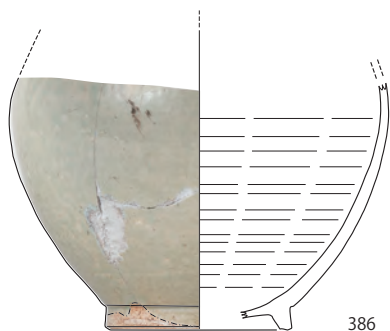
383



384



385



386



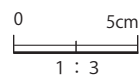
387



388



389

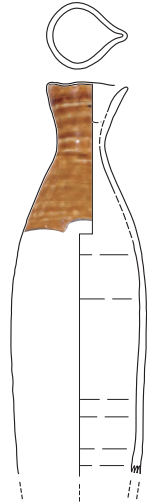


第80図 SD 1 出土遺物実測図 陶器瓶類 1

爛徳利



390



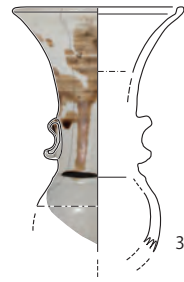
391

髪油壺



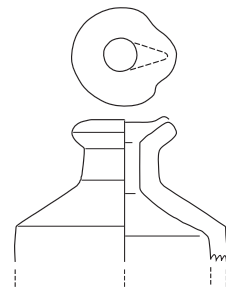
392

仏花瓶

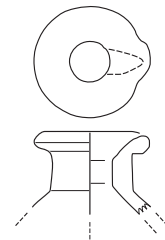


393

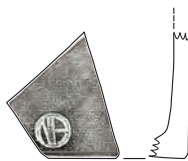
インク瓶



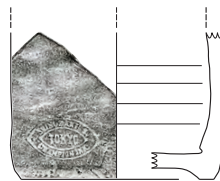
394



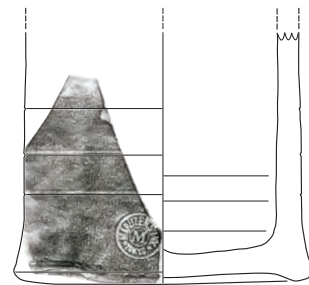
395



396



397

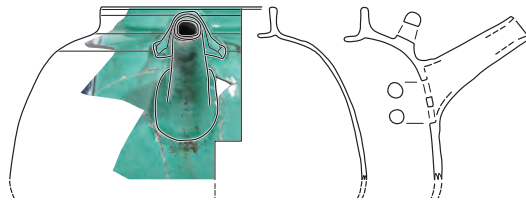
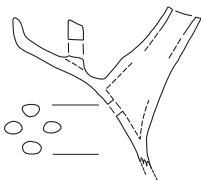


398

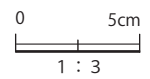
土瓶



399

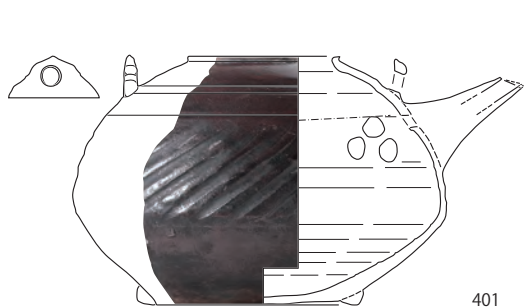


400

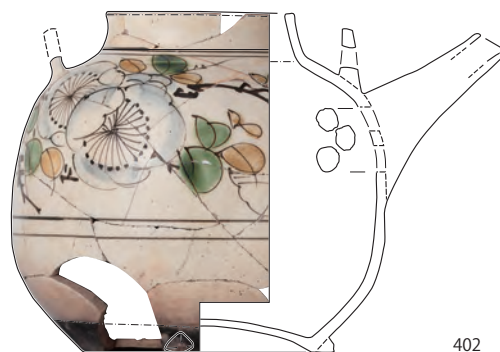


第81図 SD 1 出土遺物実測図 陶器瓶類 2、陶器水注類 1

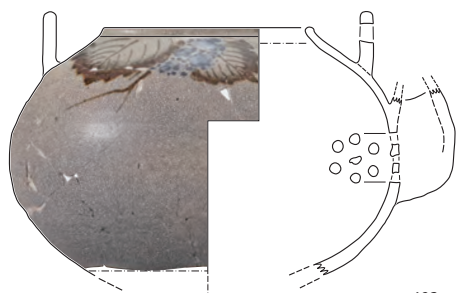
土瓶



401



402

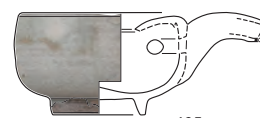


403

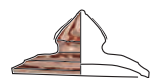
小水注



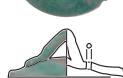
404



405



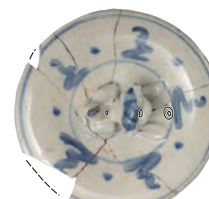
406



407



408



409

湯通し

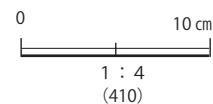
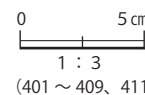


410

小壺



411



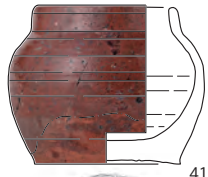
第82図 SD 1 出土遺物実測図 陶器水注類2、陶器壺・甕類 1

Ⅲ 調査の成果

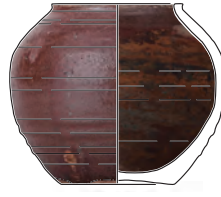
小壺



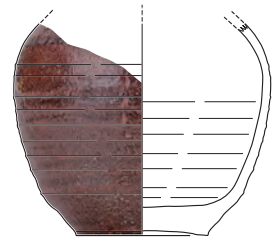
412



413



414

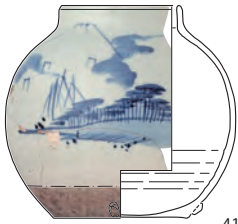


415

中壺



417



416



418

小甕



419



420



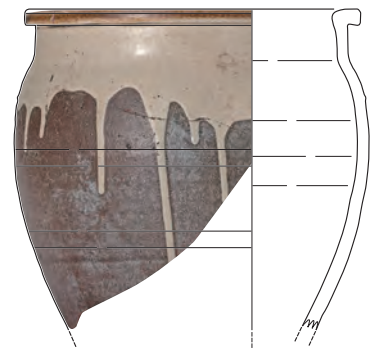
421



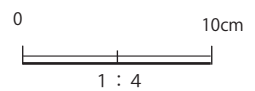
422



423



424

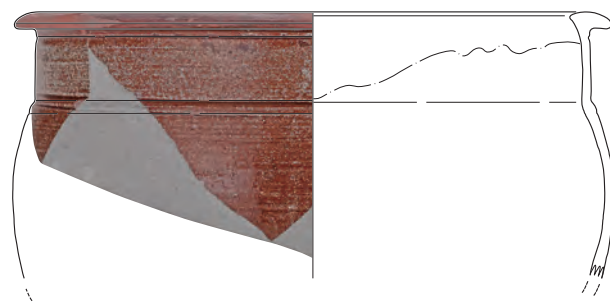


第83図 SD 1 出土遺物実測図 陶器壺・甕類 2

中甕



425



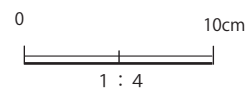
426



427



428

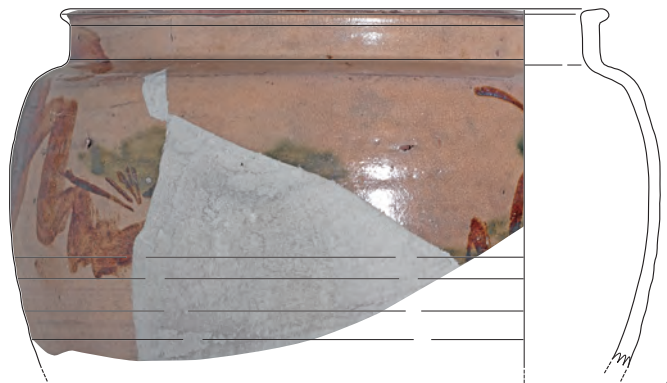


第84図 SD1出土遺物実測図 陶器壺・甕類3

中甕



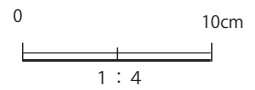
429



430

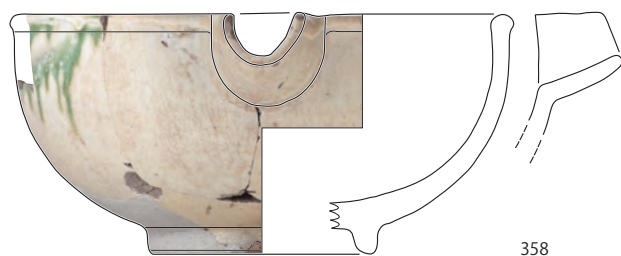
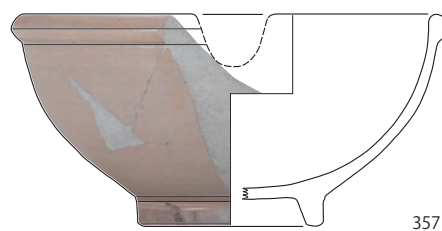
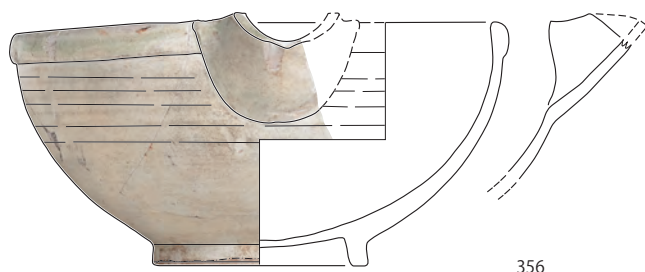
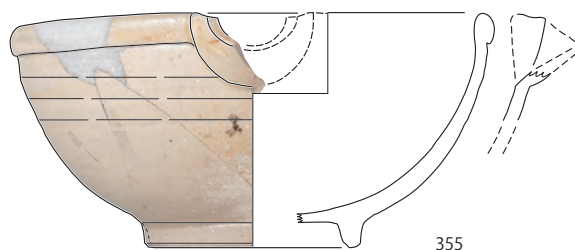
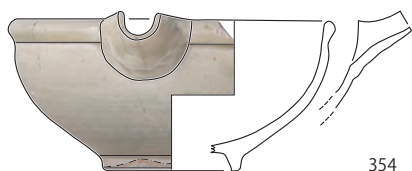
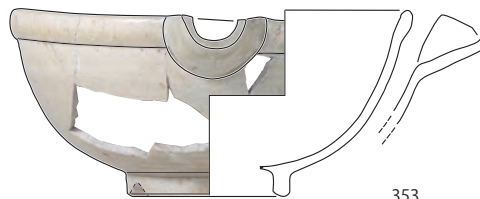
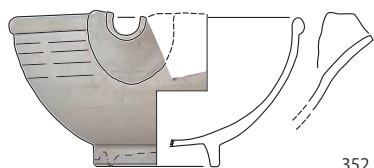


431

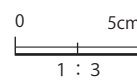


第85図 SD 1 出土遺物実測図 陶器壺・甕類 4

片口



捏鉢

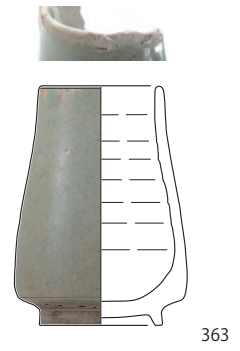
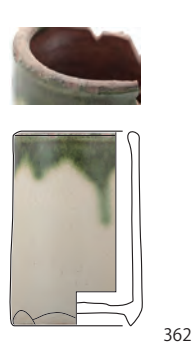


第76図 SD 1 出土遺物実測図 陶器鉢類 3

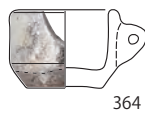
合子



灰吹



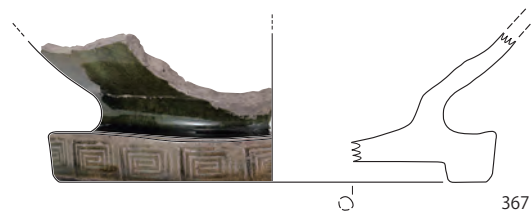
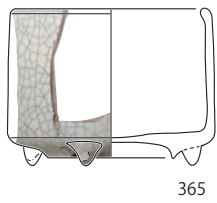
餌猪口



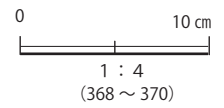
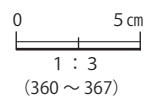
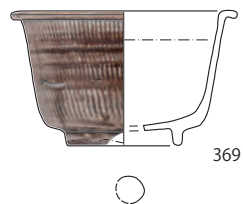
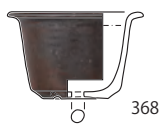
火鉢



香炉



植木鉢

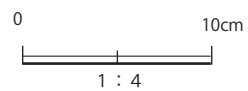
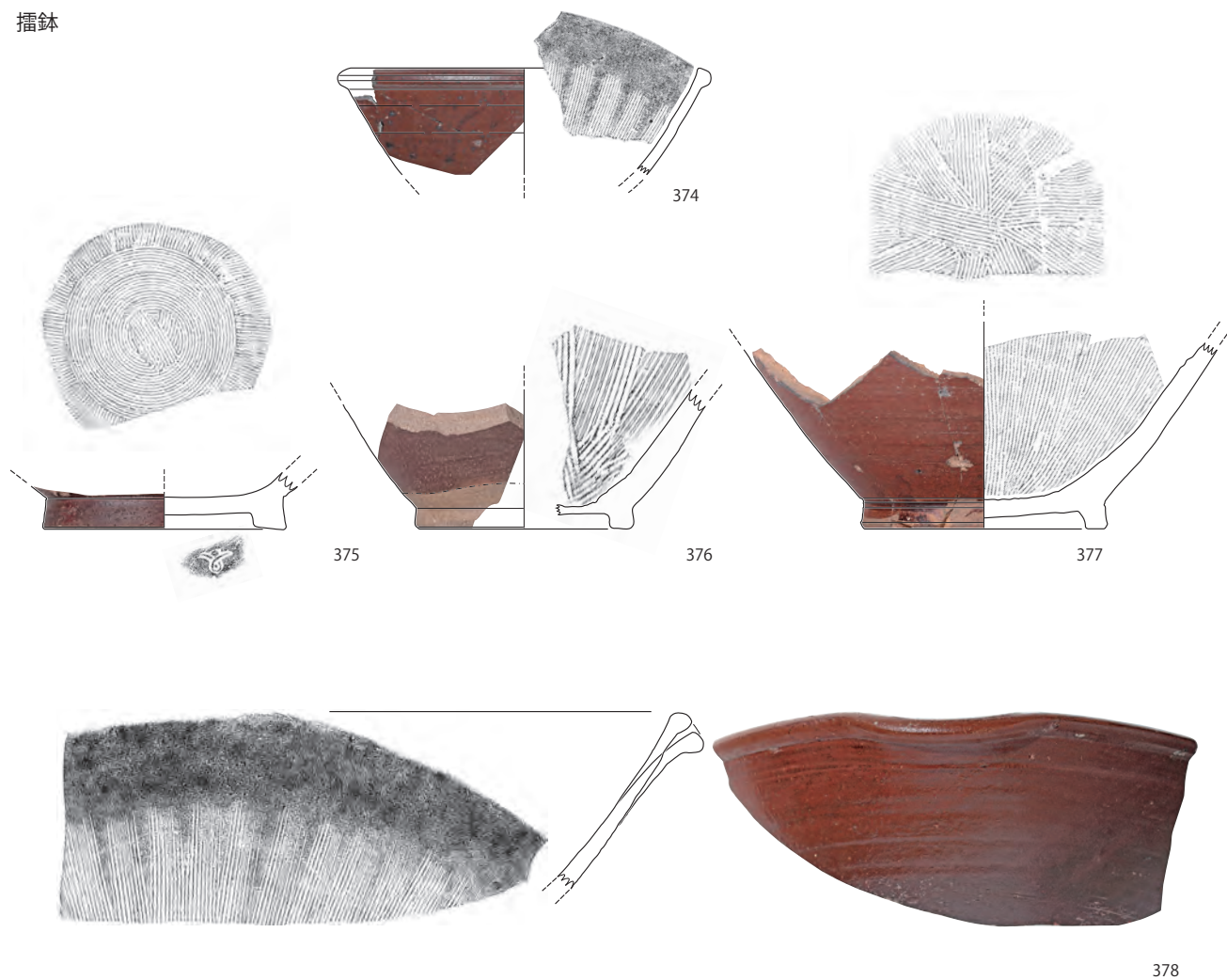


第77図 SD 1 出土遺物実測図 陶器鉢類 4

植木鉢

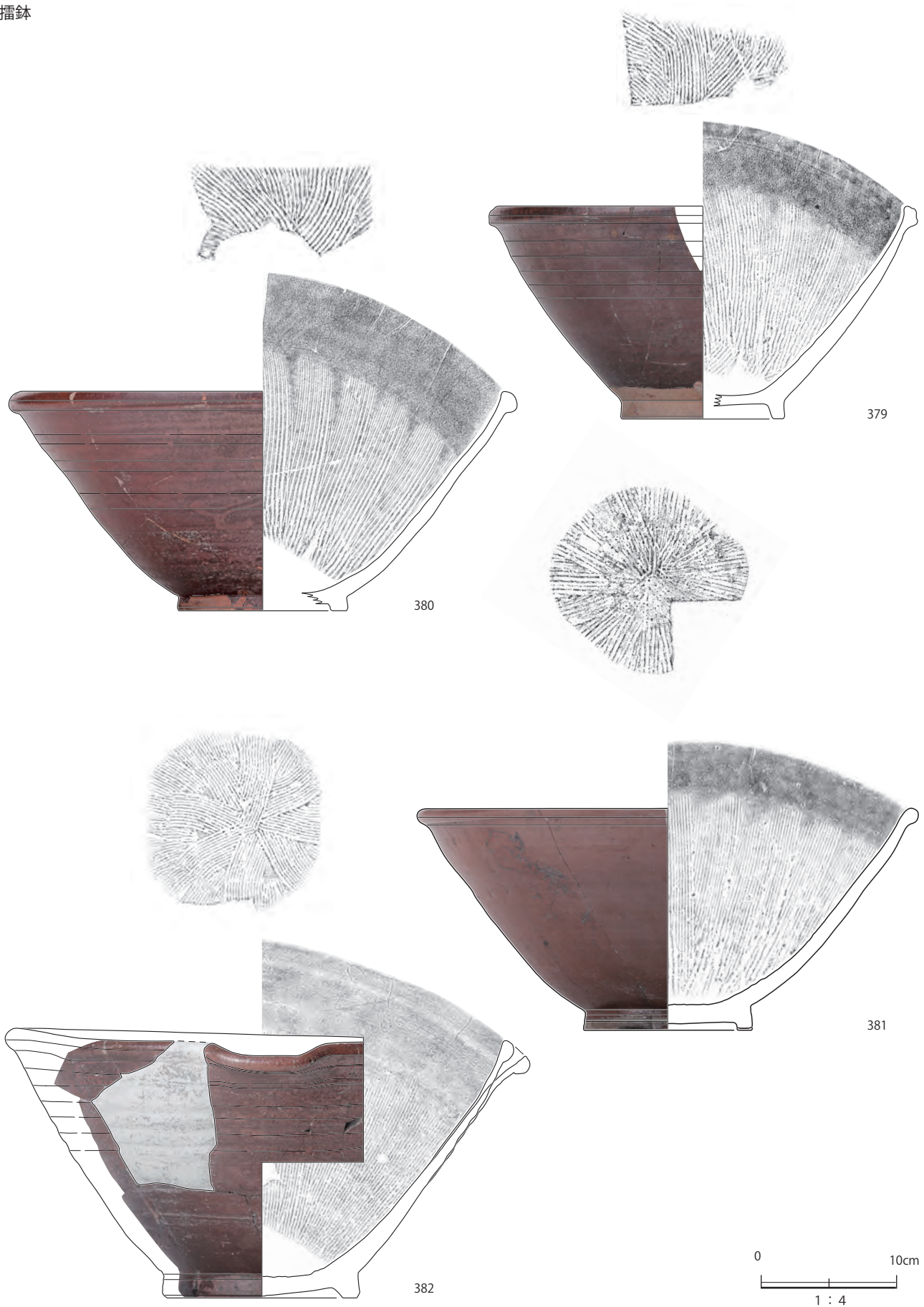


播鉢



第78図 SD 1 出土遺物実測図 陶器鉢類 5

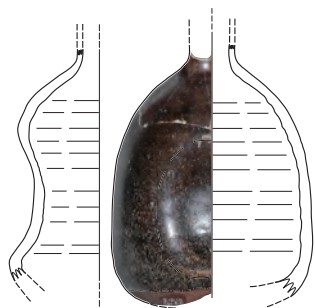
挿鉢



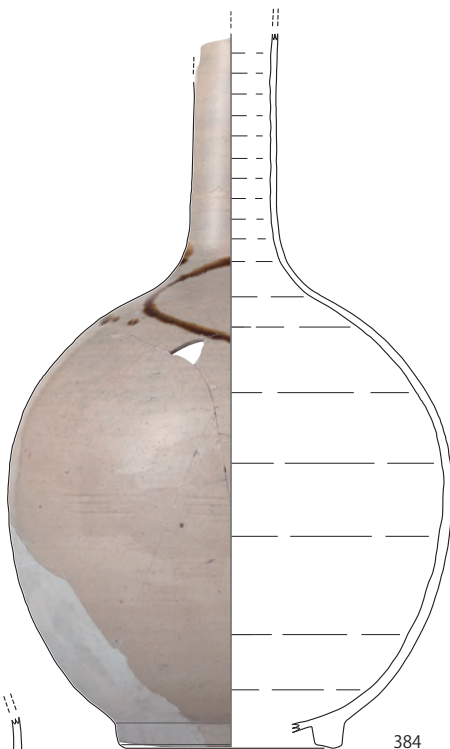
第79図 SD 1 出土遺物実測図 陶器鉢類 6

中瓶

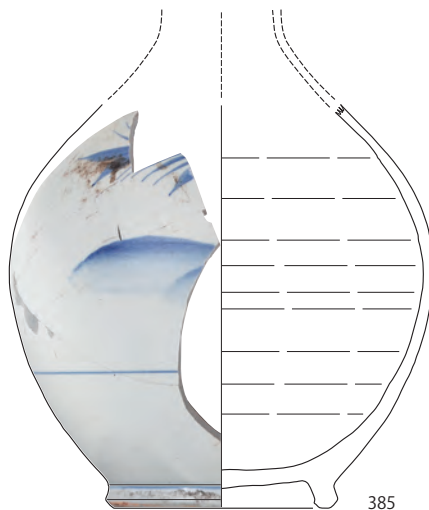
大瓶



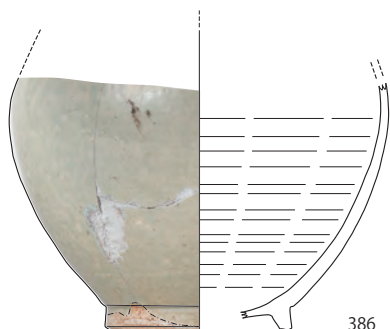
383



384



385



386



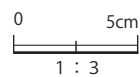
387



388



389

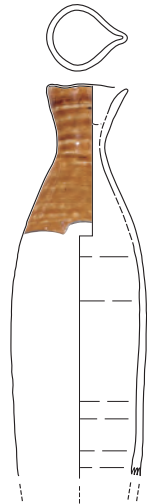


第80図 SD 1 出土遺物実測図 陶器瓶類 1

爛徳利

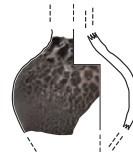


390

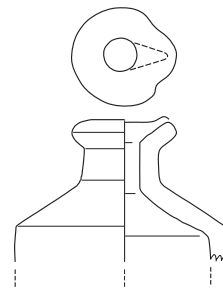


391

髪油壺

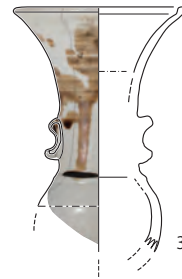


392

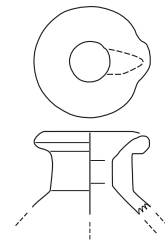


394

仏花瓶

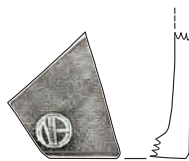


393

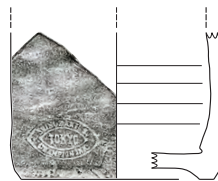


395

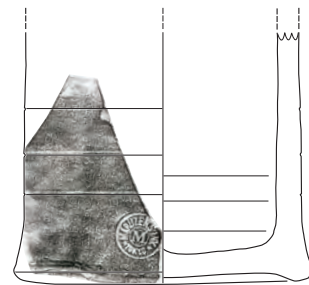
インク瓶



396



397

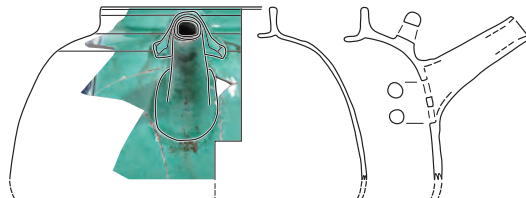
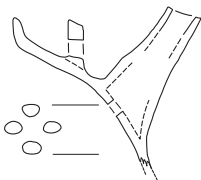


398

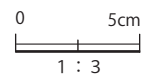
土瓶



399

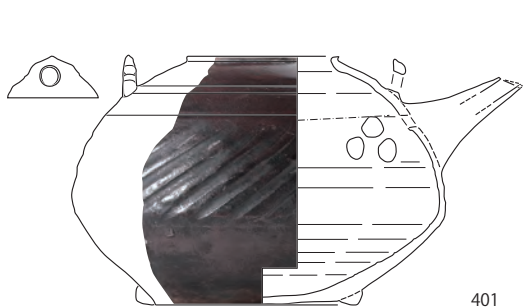


400

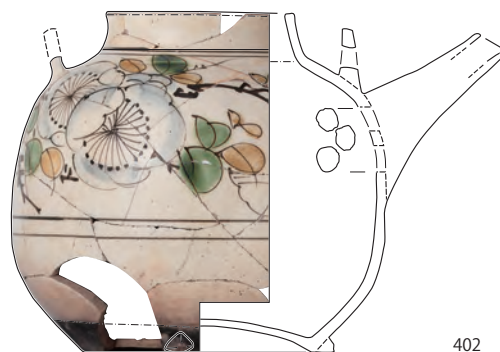


第81図 SD 1 出土遺物実測図 陶器瓶類 2、陶器水注類 1

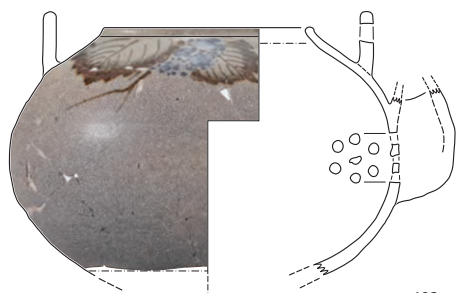
土瓶



401



402

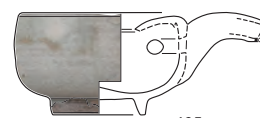


403

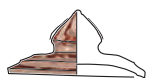
小水注



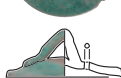
404



405



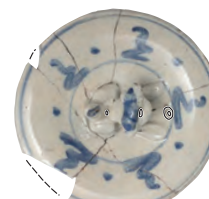
406



407



408



409

湯通し

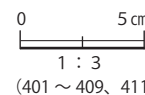


410

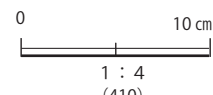
小壺



411



1 : 3
(401 ~ 409、411)

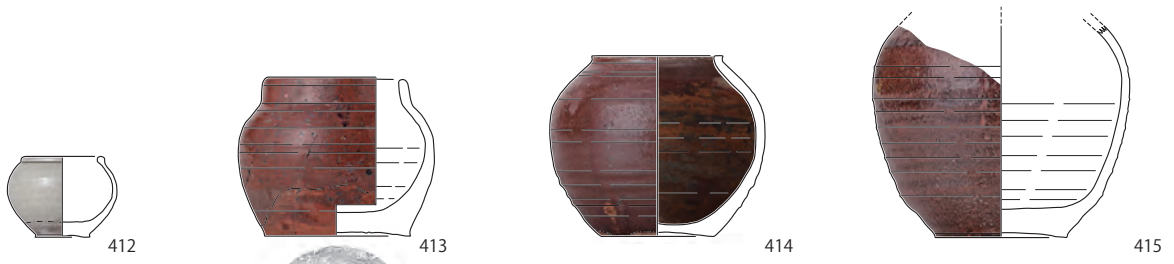


1 : 4
(410)

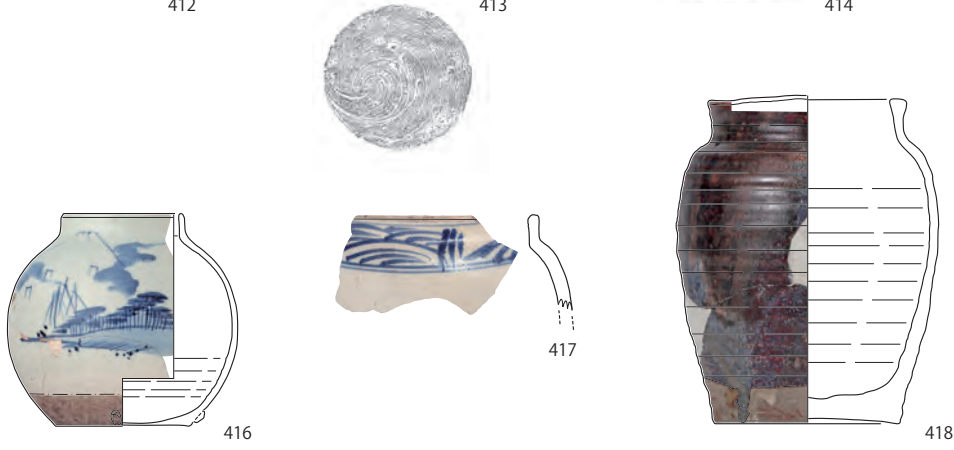
第82図 SD 1 出土遺物実測図 陶器水注類2、陶器壺・甕類 1

Ⅲ 調査の成果

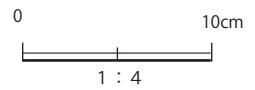
小壺



中壺



小甕

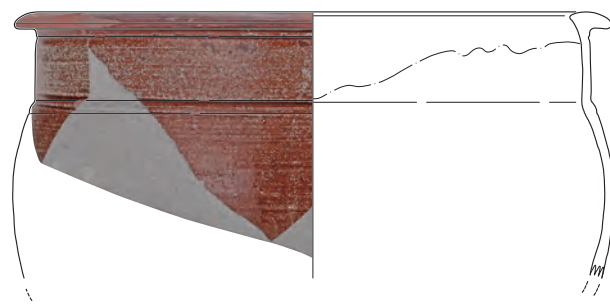


第83図 SD 1 出土遺物実測図 陶器壺・甕類 2

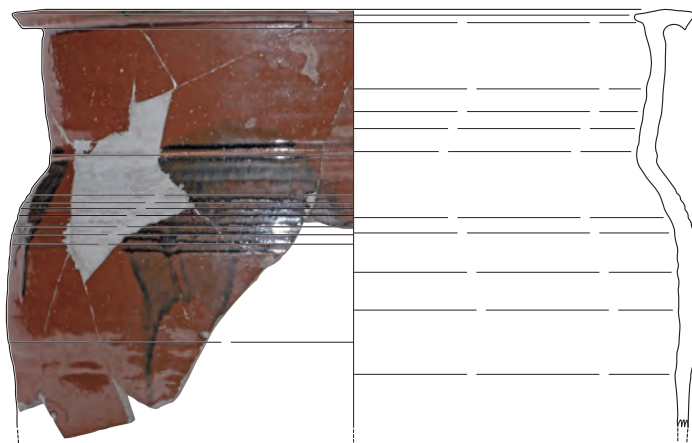
中甕



425



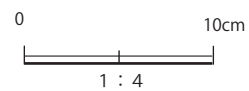
426



427



428

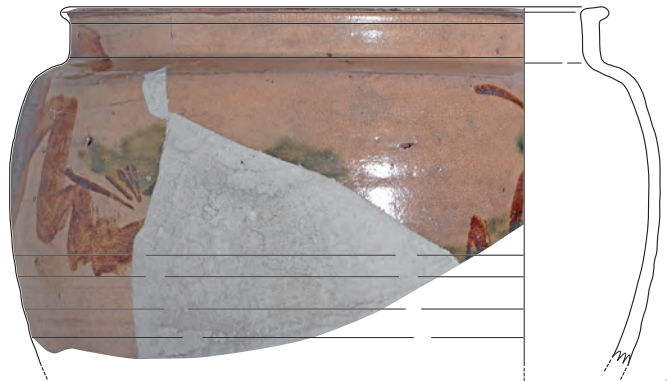


第84図 SD1出土遺物実測図 陶器壺・甕類3

中甕



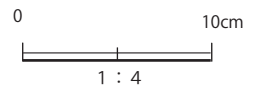
429



430

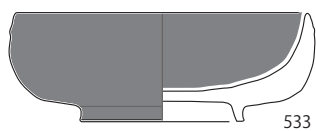
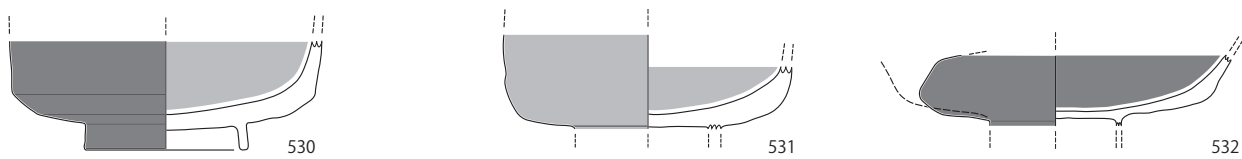
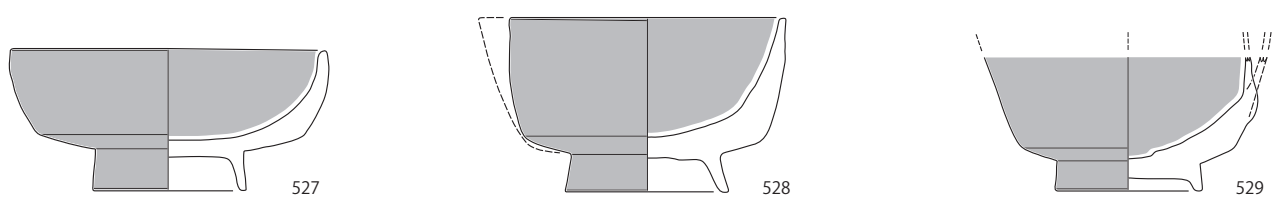
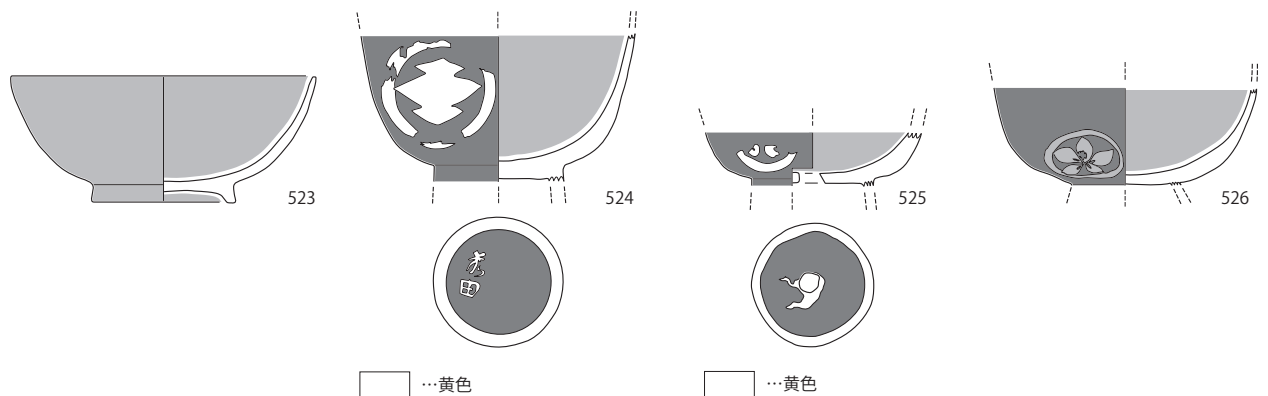


431

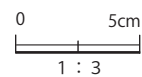
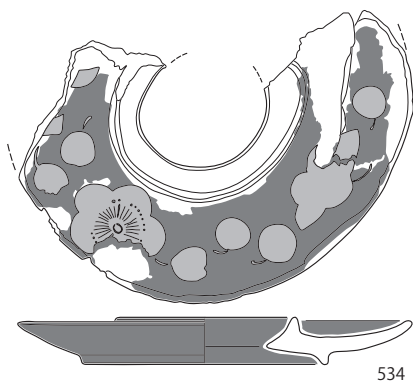


第85図 SD 1 出土遺物実測図 陶器壺・甕類 4

漆器椀

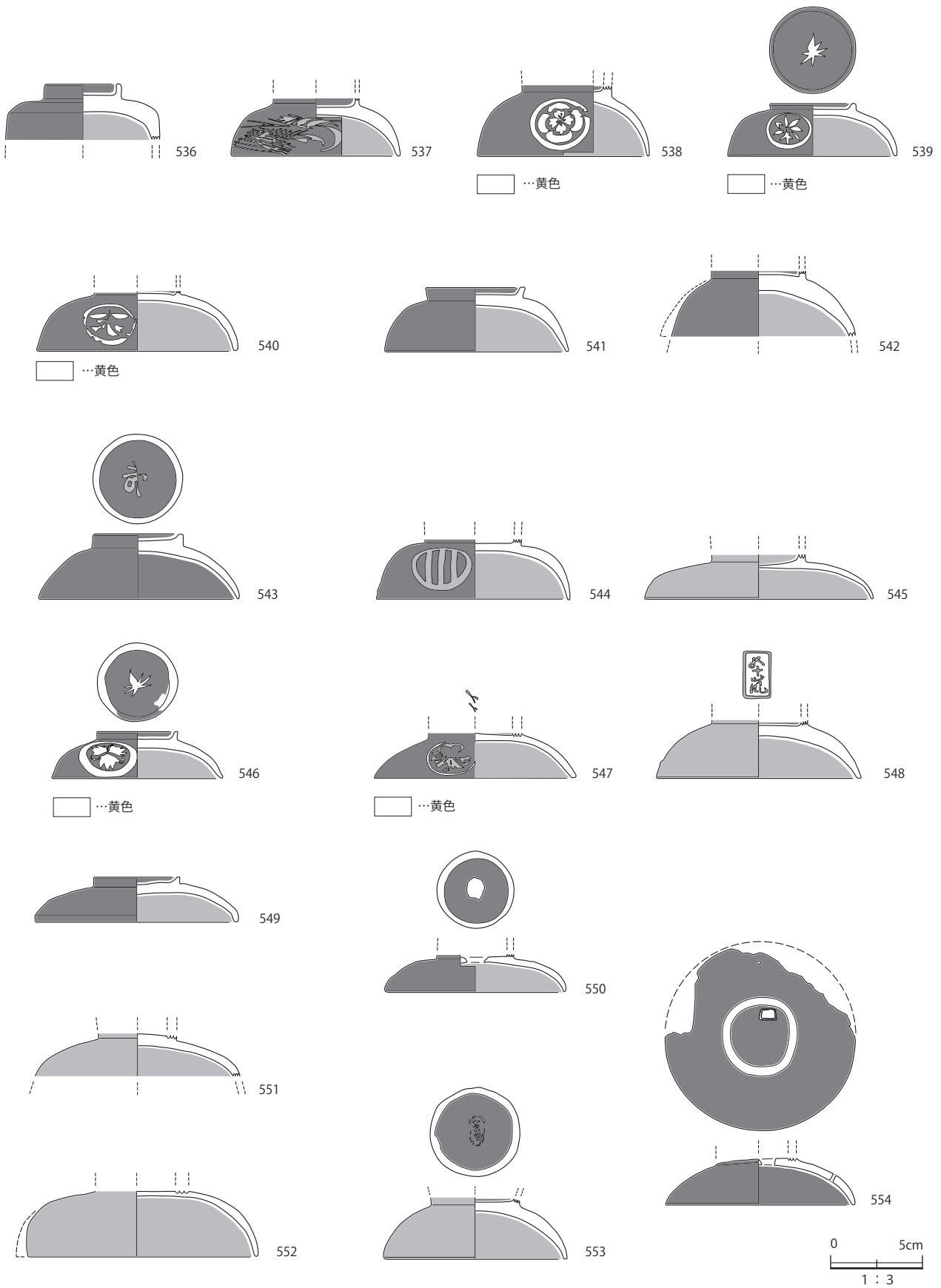


天目台

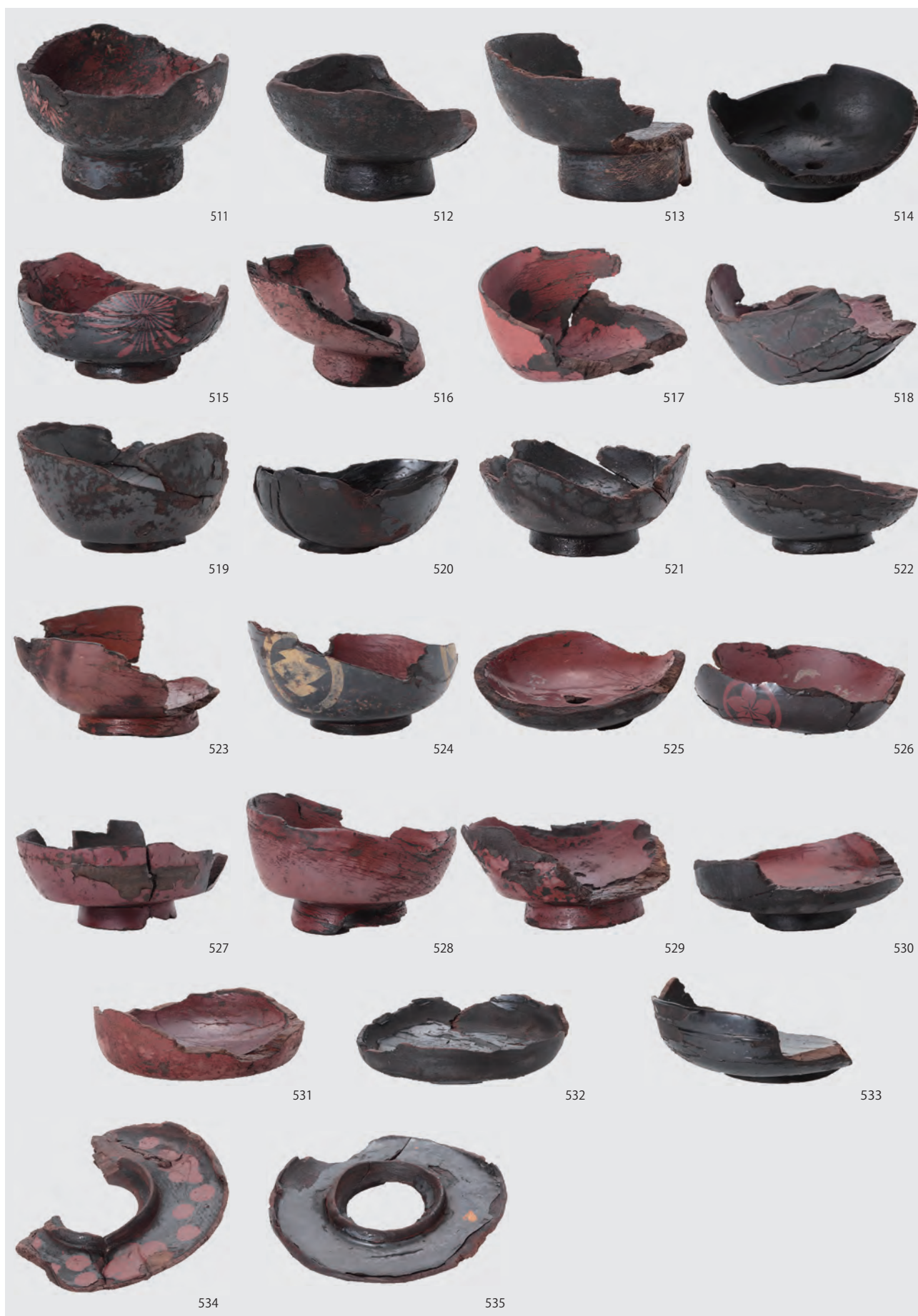


第96図 SD1 出土遺物実測図 木製品（漆器2）

漆器蓋



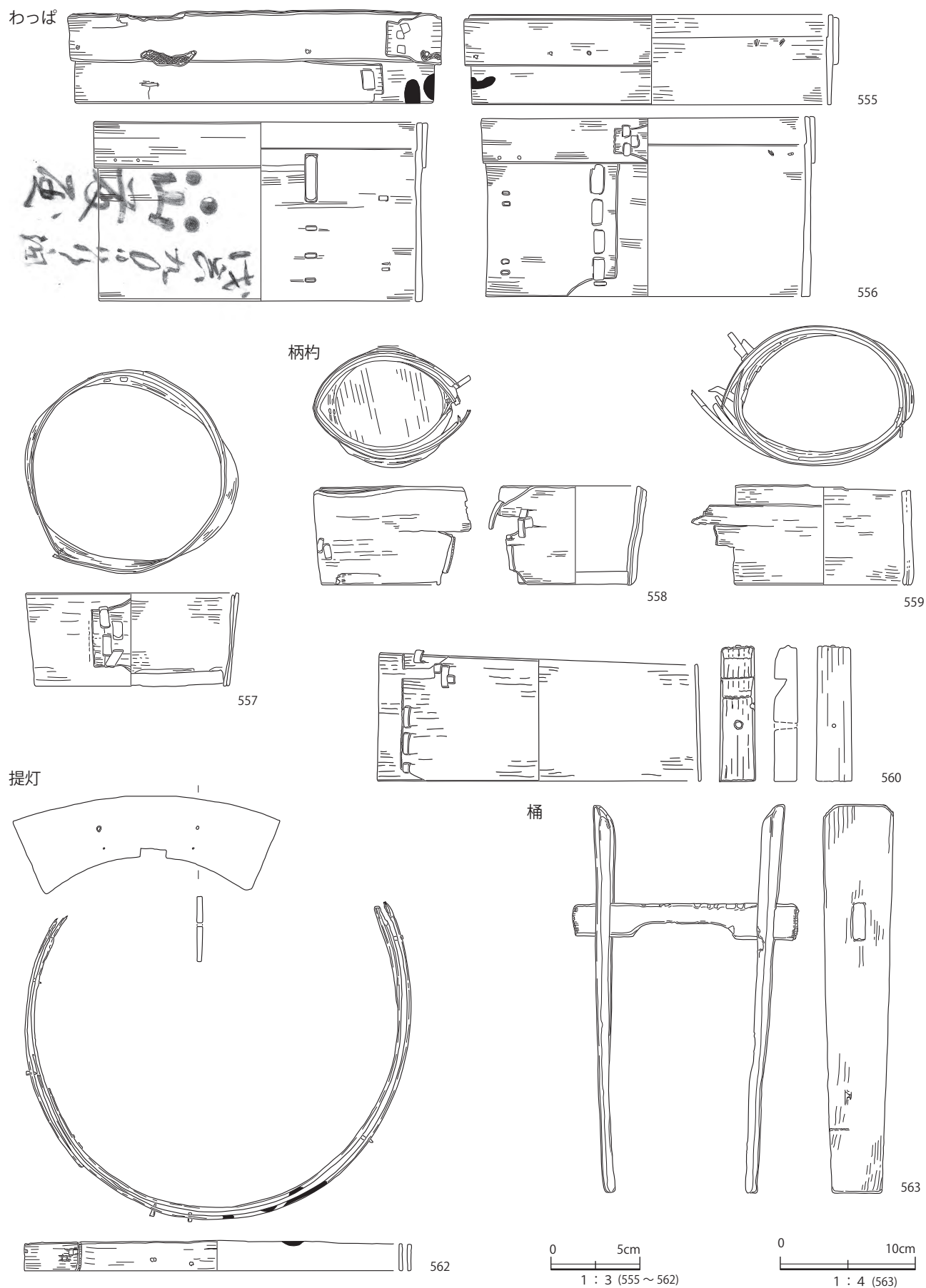
第97図 SD1出土遺物実測図 木製品（漆器3）



第98図 SD 1 出土遺物 木製品(漆器1)

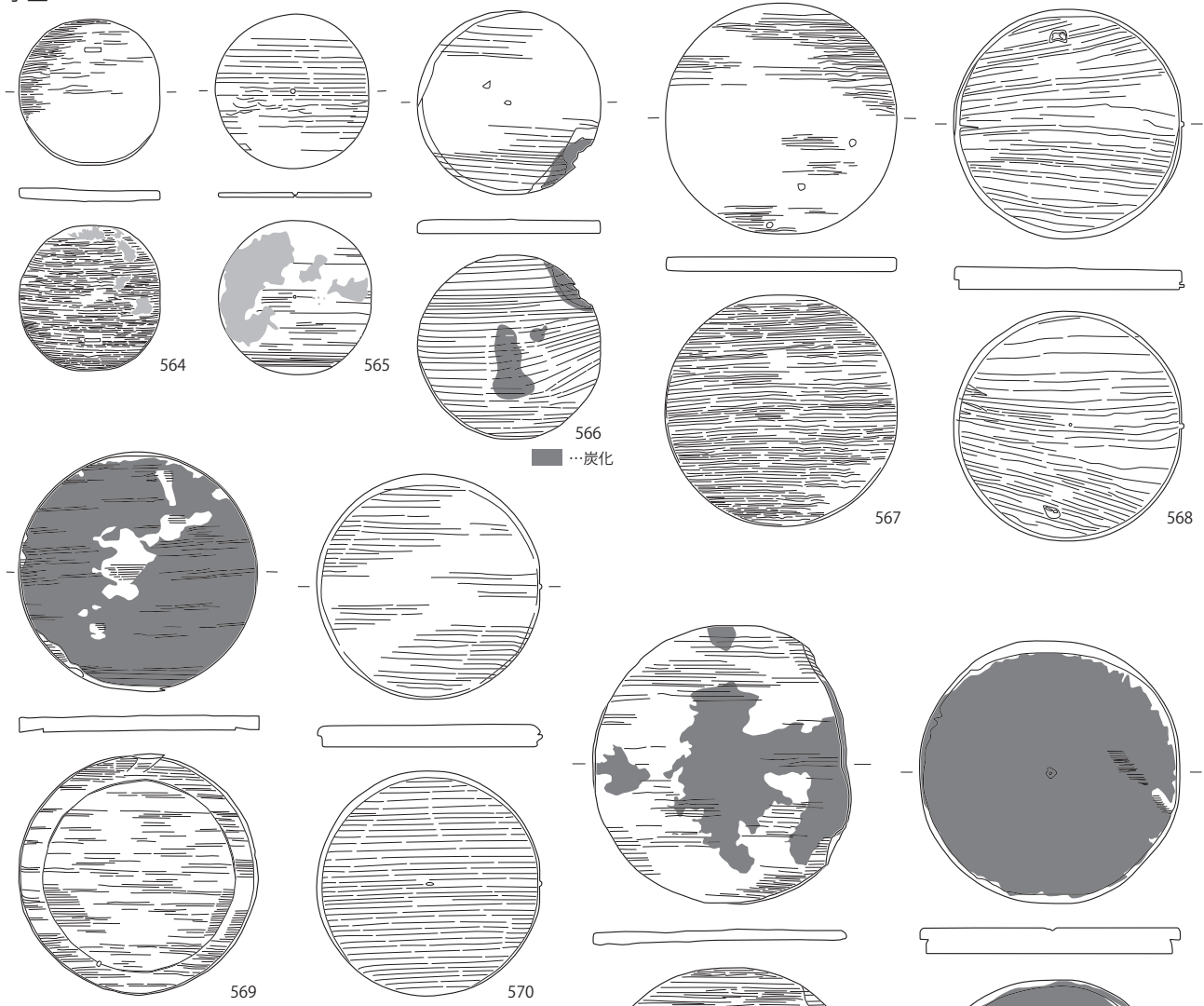


第99図 SD1出土遺物 木製品(漆器2)

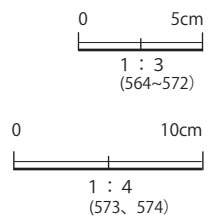
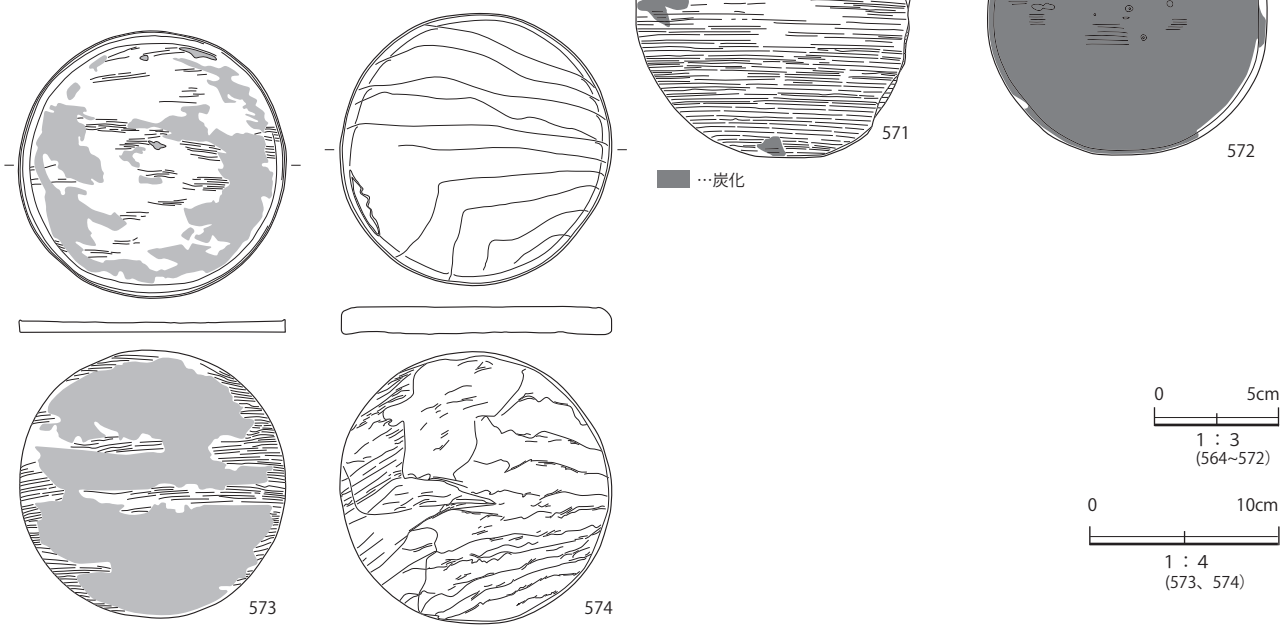


第100図 S D 1 出土遺物実測図 木製品 (曲物類)

小型

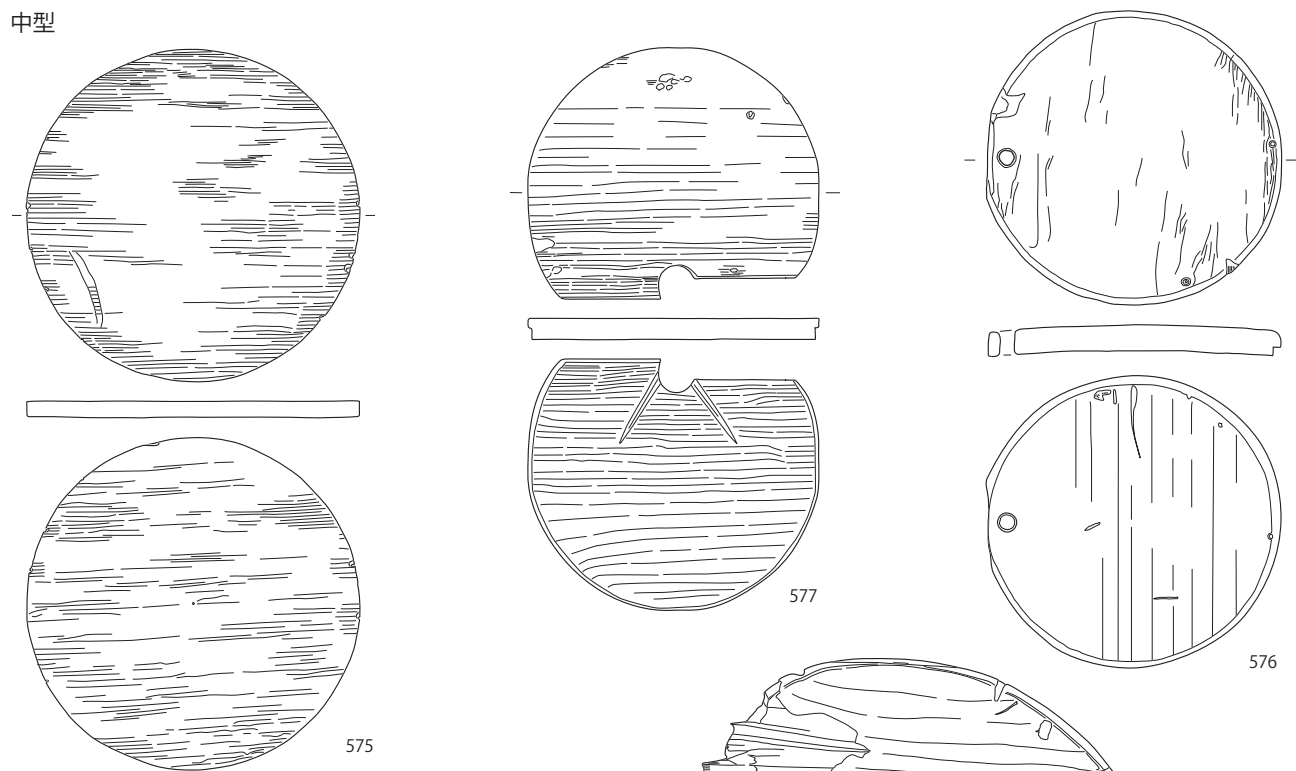


中型

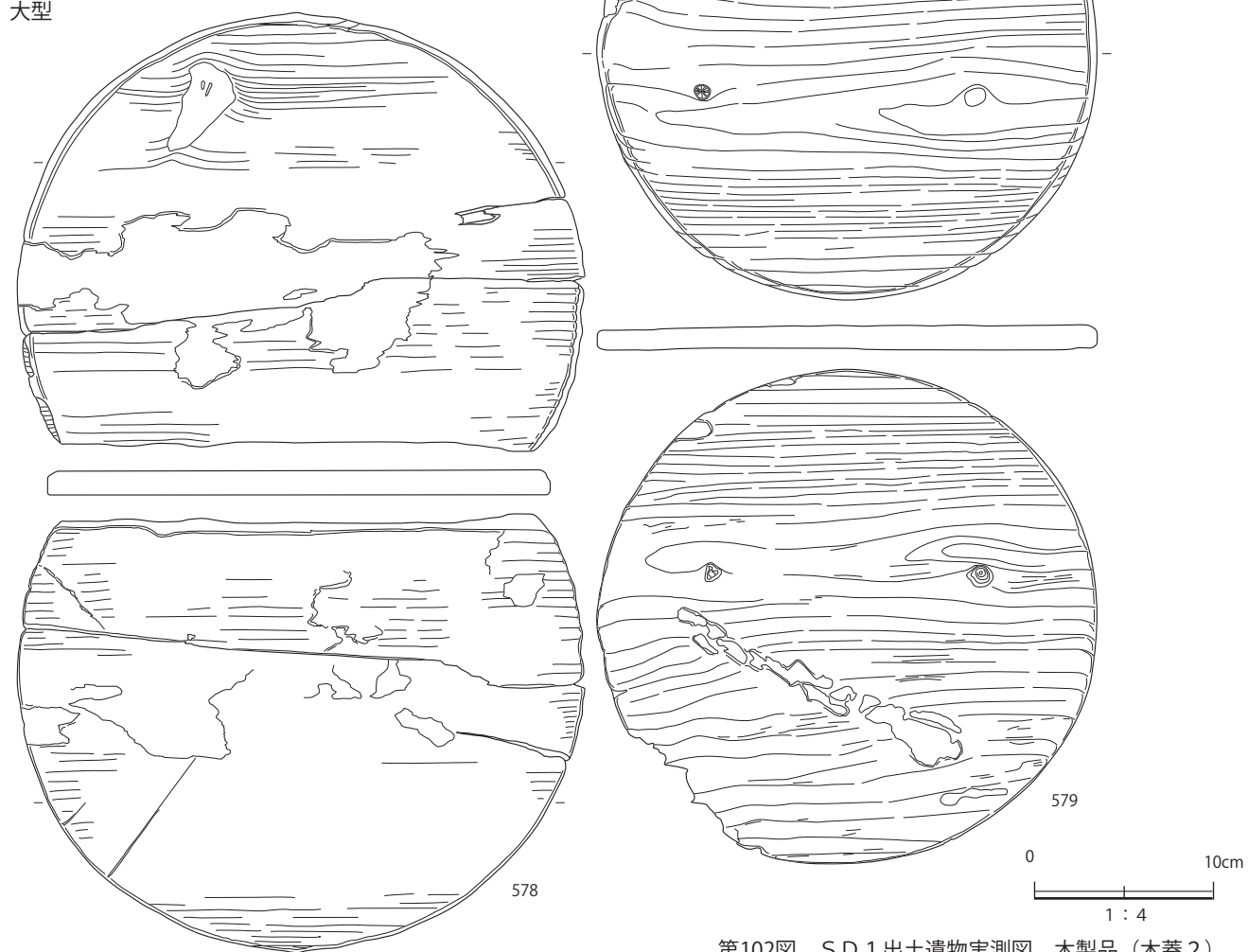


第101図 SD 1 出土遺物実測図 木製品 (木蓋 1)

中型

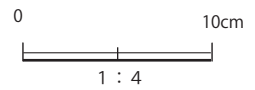
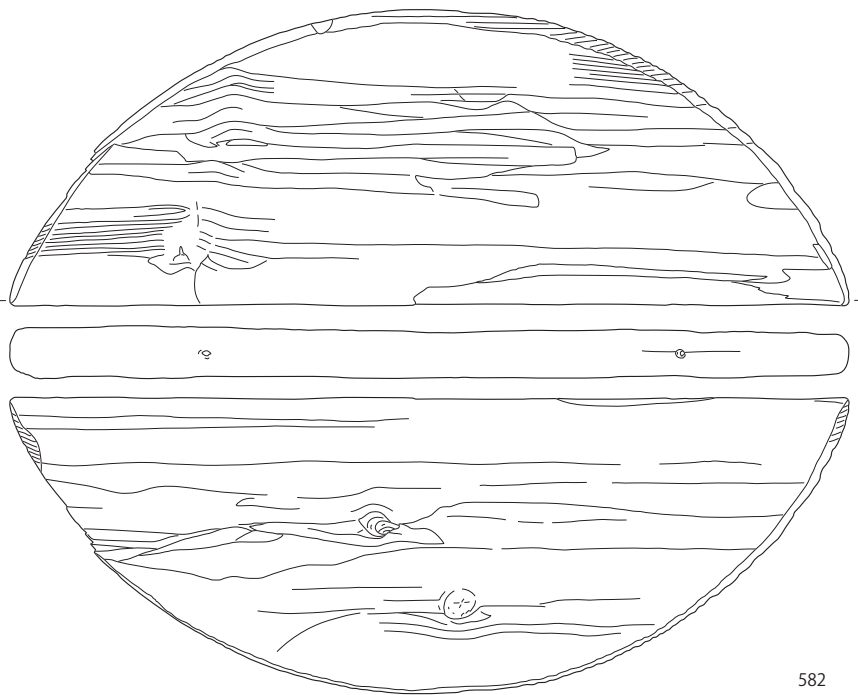
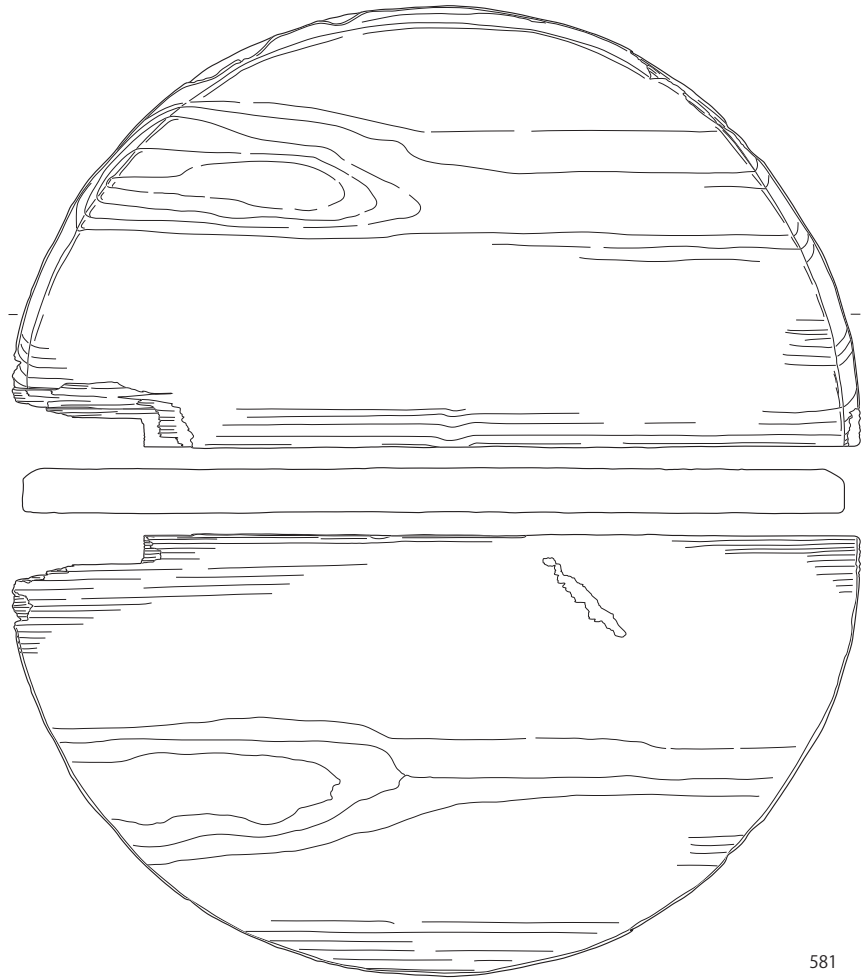


大型



第102図 SD 1 出土遺物実測図 木製品 (木蓋 2)

大型

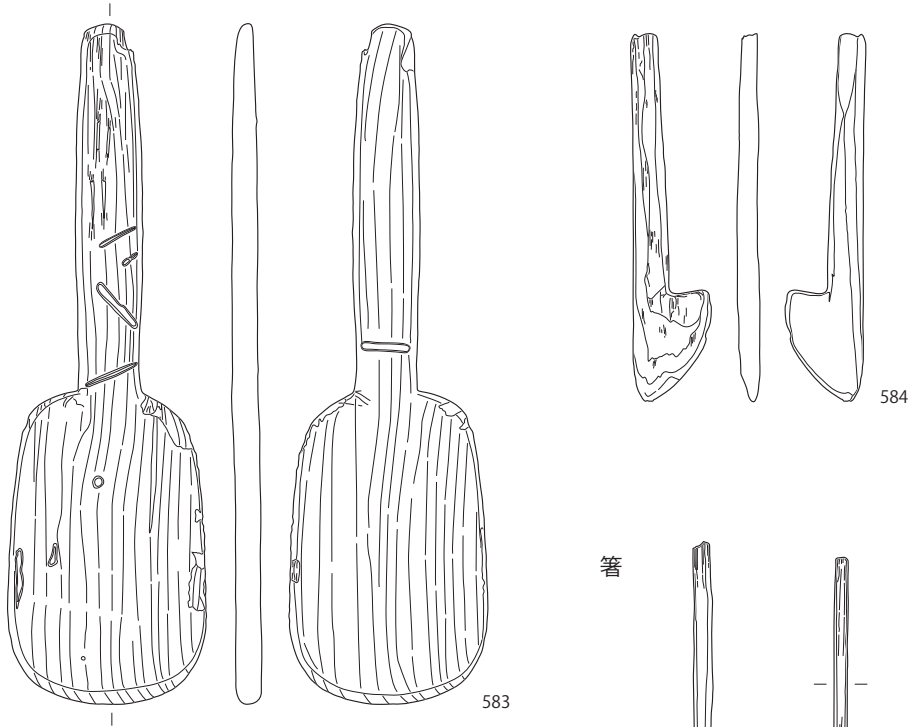


第103図 SD 1 出土遺物実測図 木製品 (木蓋 3)

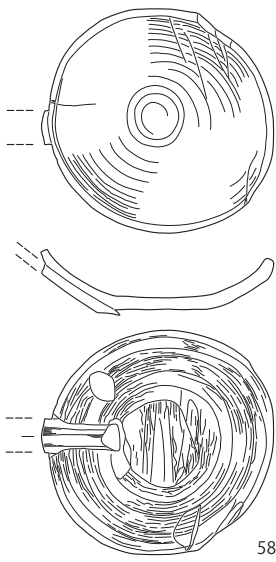


第104図 SD 1 出土遺物 木製品（曲物類・木蓋）

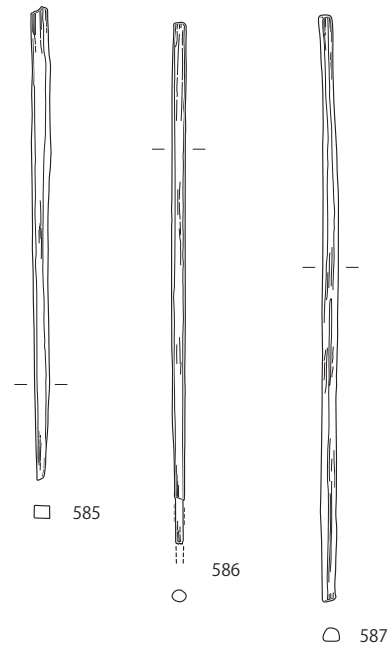
篋



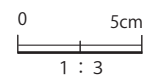
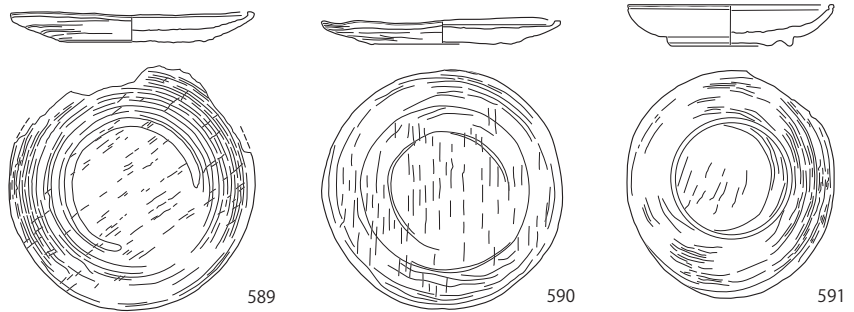
杓子



箸

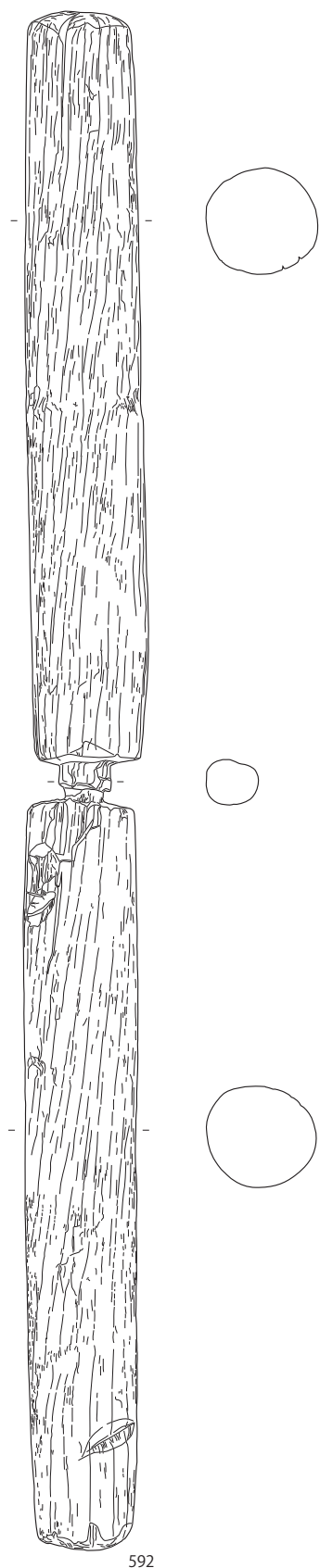


木皿



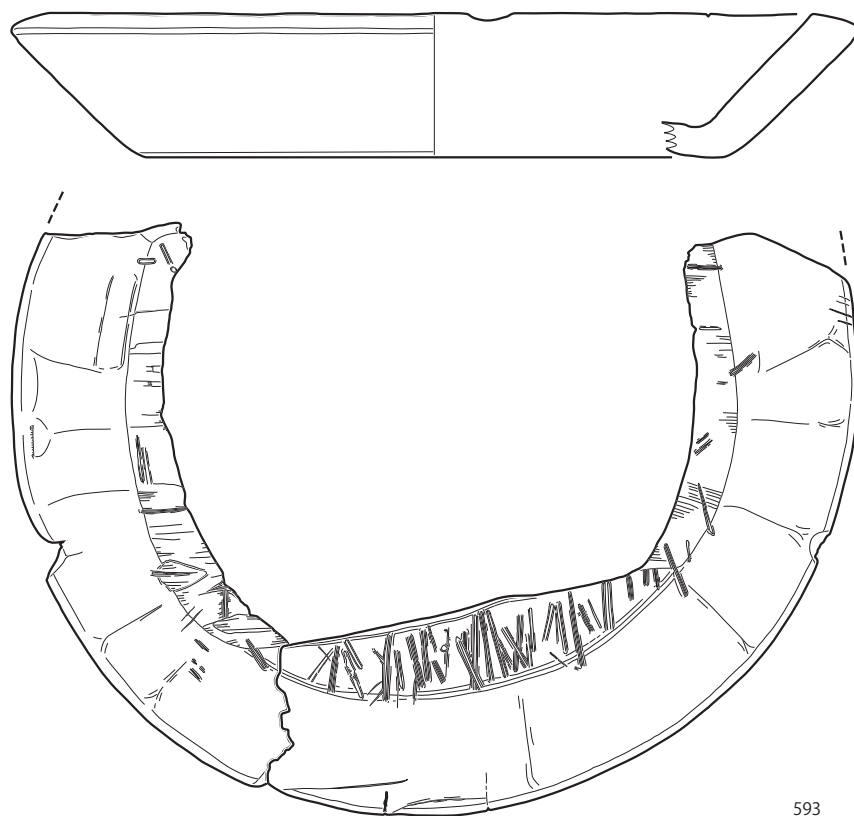
第105図 SD 1 出土遺物実測図 木製品 (台所用具類 1)

杵

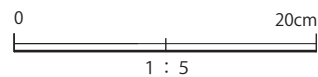


592

大鉢

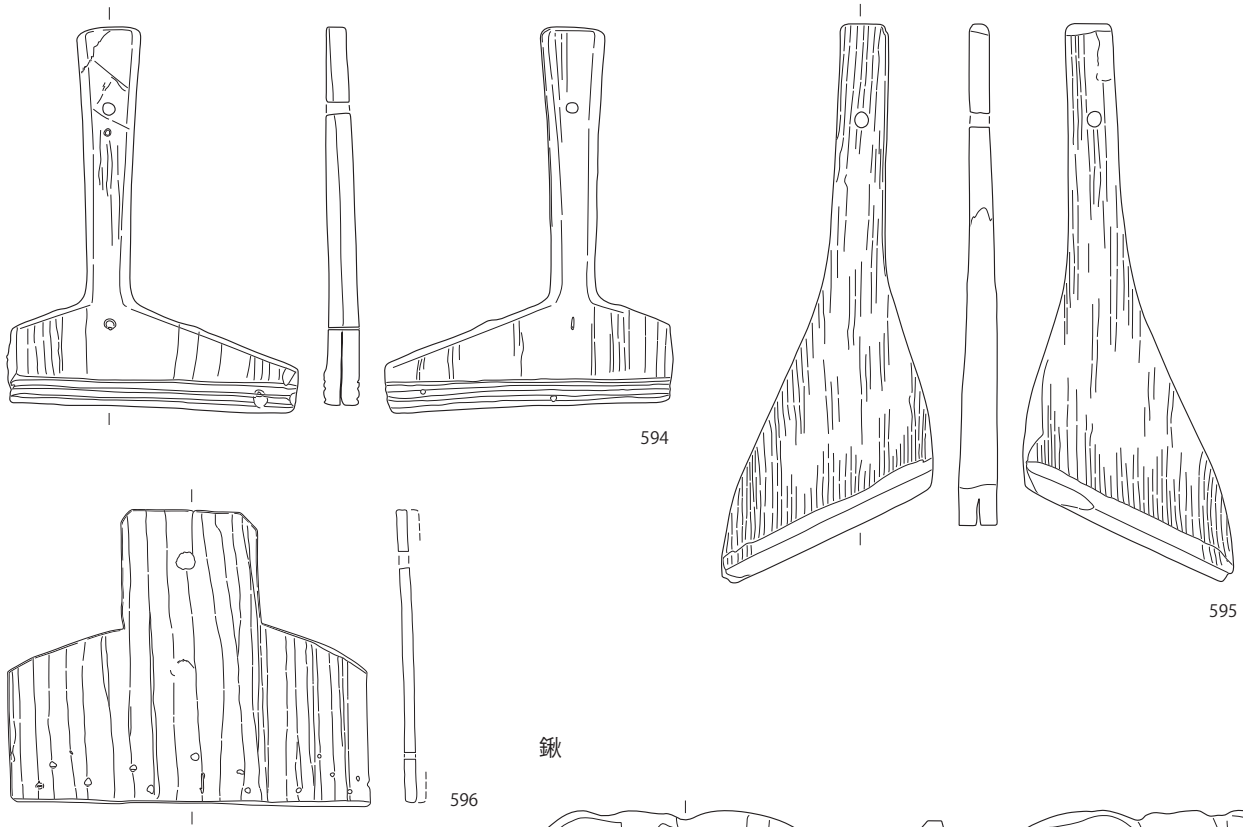


593



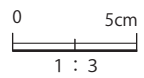
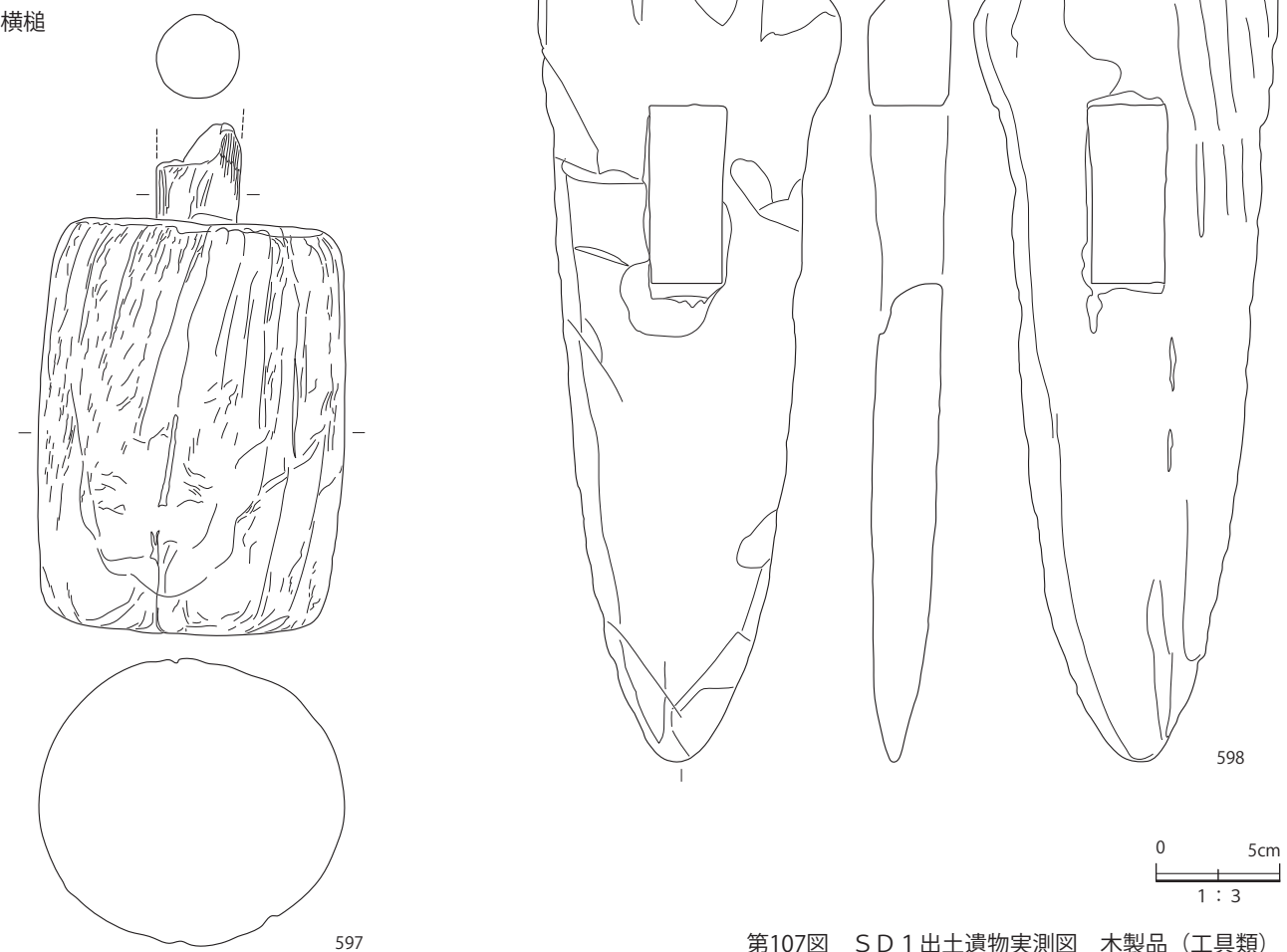
第106図 SD 1 出土遺物実測図 木製品（台所用具類2）

刷毛



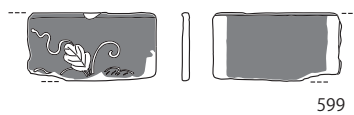
鋏

横槌



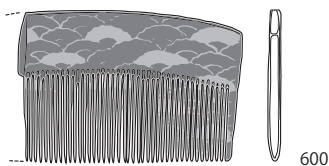
第107図 SD 1 出土遺物実測図 木製品 (工具類)

箱

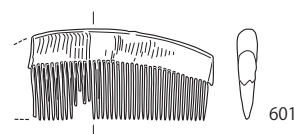


599

櫛

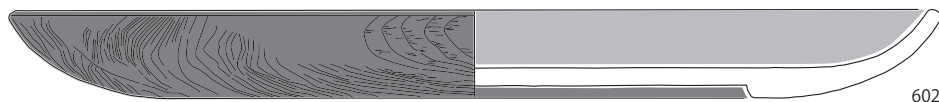


600



601

盆

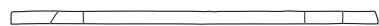


602

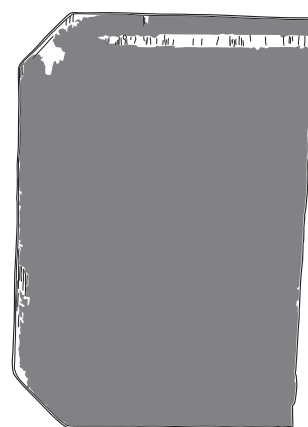
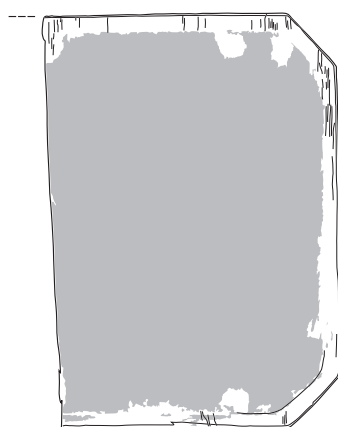
折敷



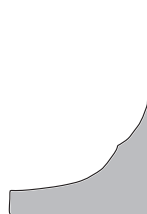
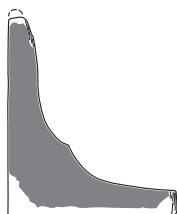
603



604

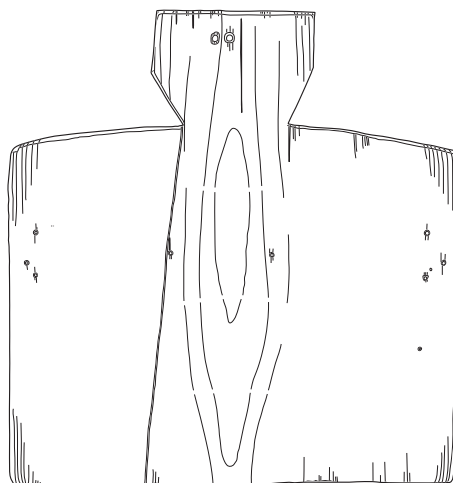
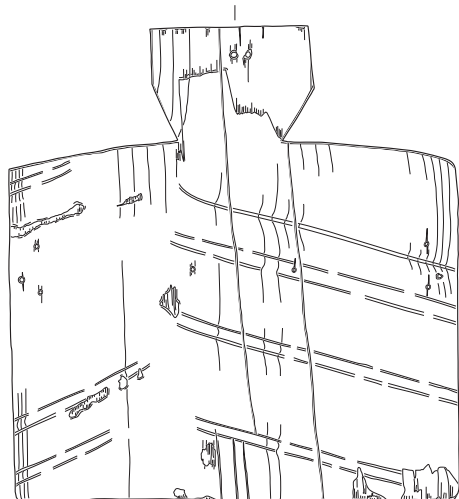


606



605

不明木製品



607



1 : 3
(599~606)



1 : 5
(607)

第108図 SD 1 出土遺物実測図 木製品 (調度類)

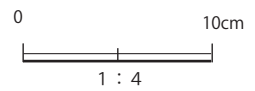
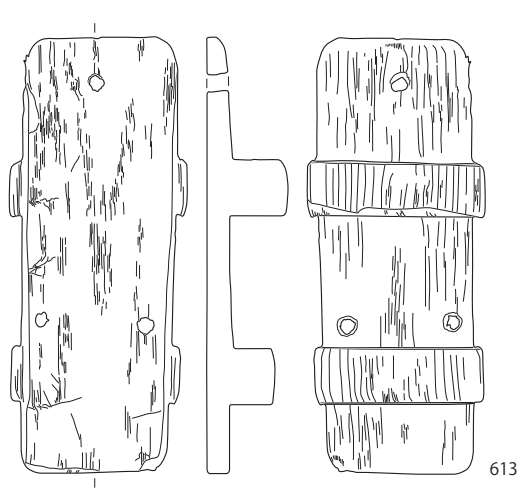
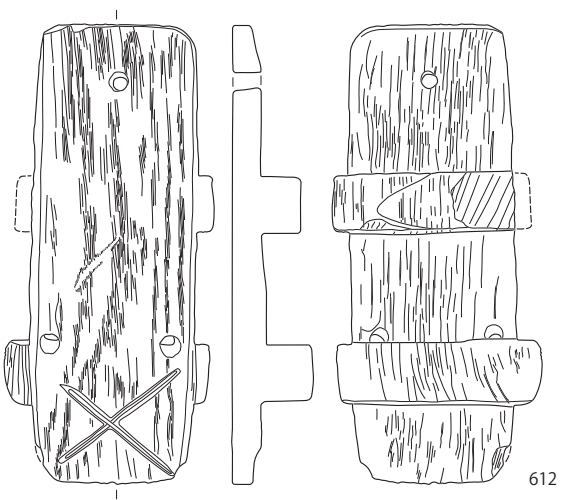
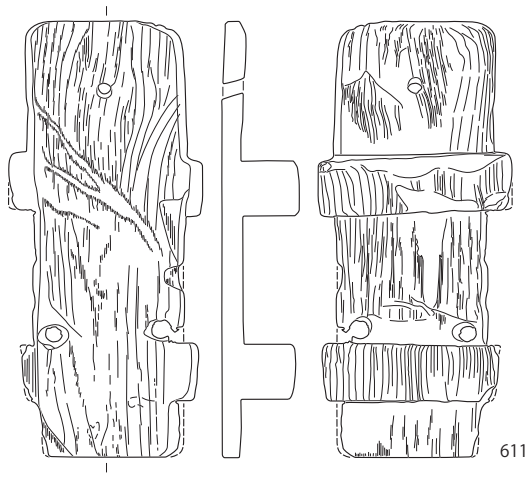
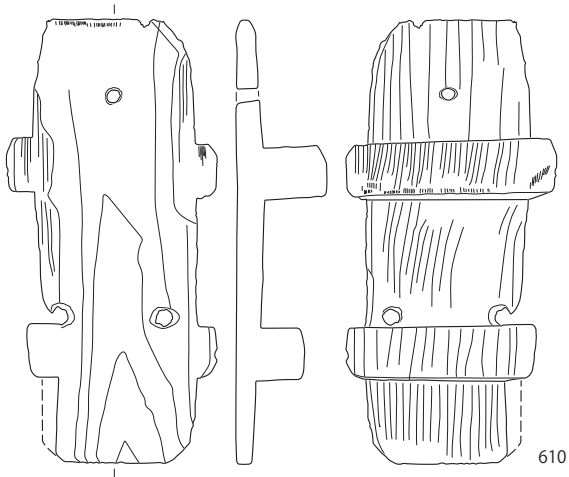
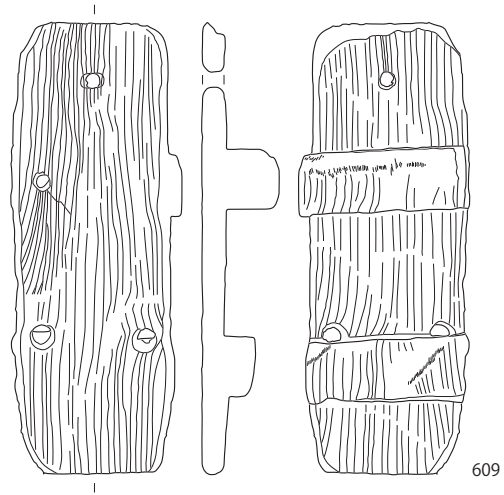
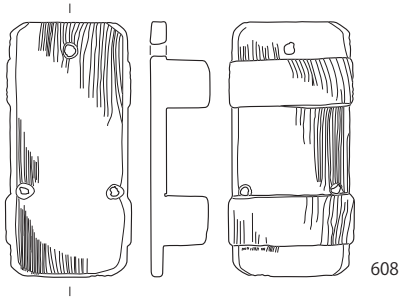


第109図 SD 1 出土遺物 木製品（調度・台所・工具 1）



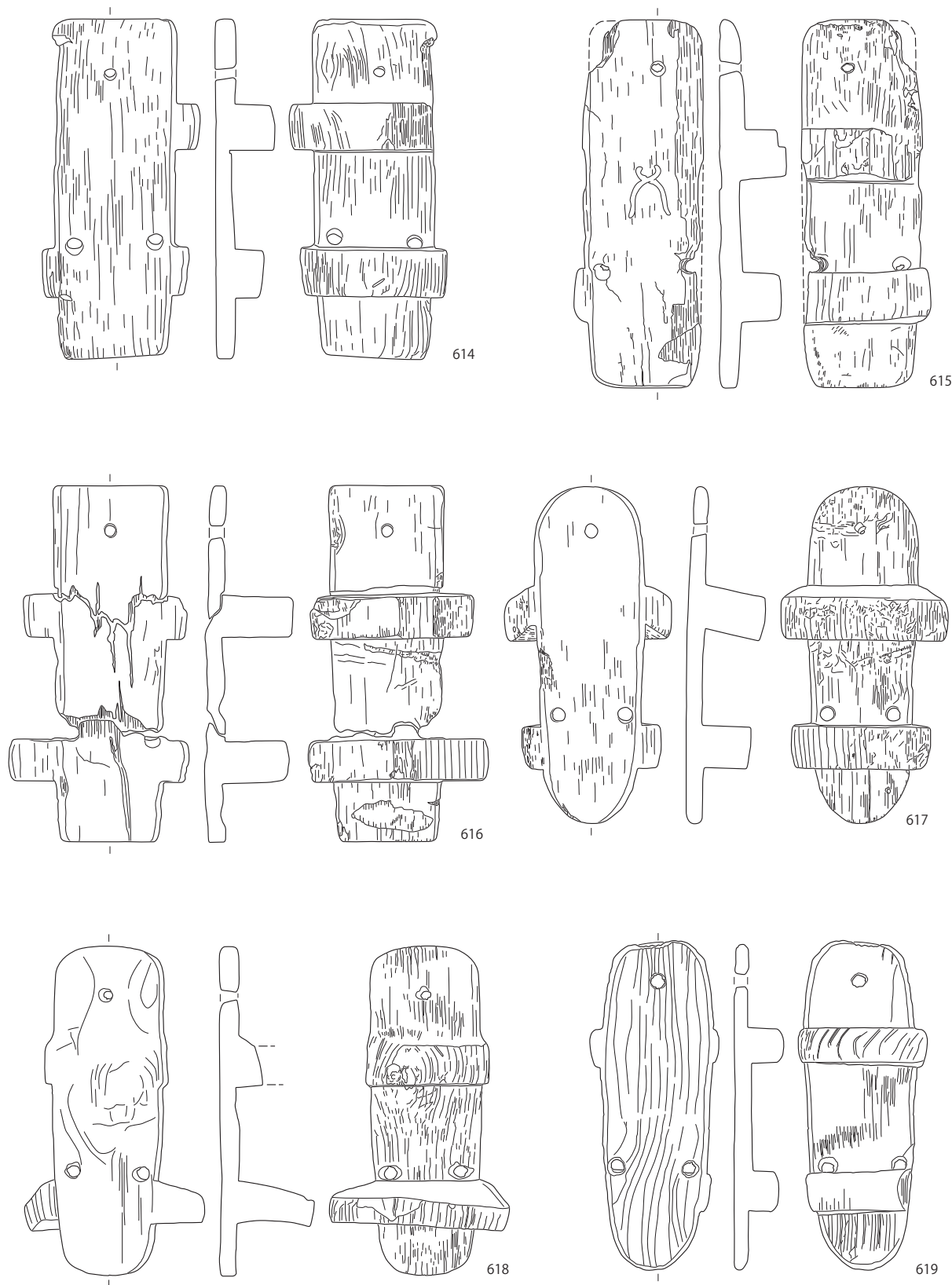
第110図 SD 1 出土遺物 木製品（調度・台所・工具2）

連歯下駄



第111図 SD 1 出土遺物実測図 木製品（下駄1）

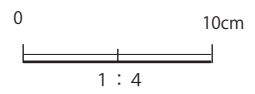
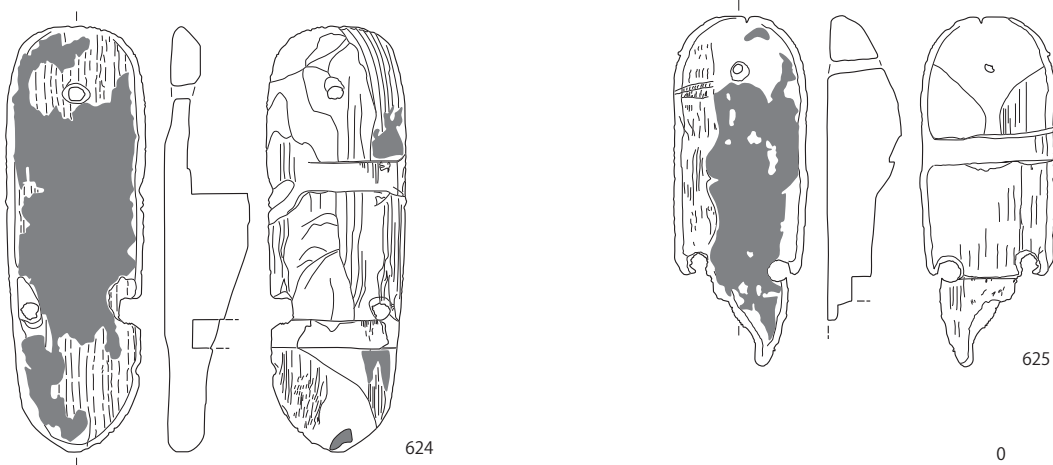
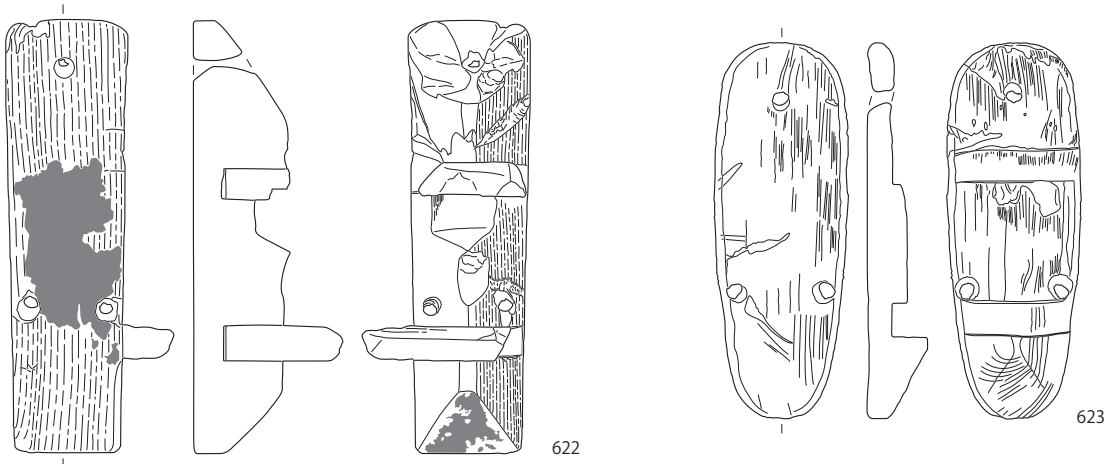
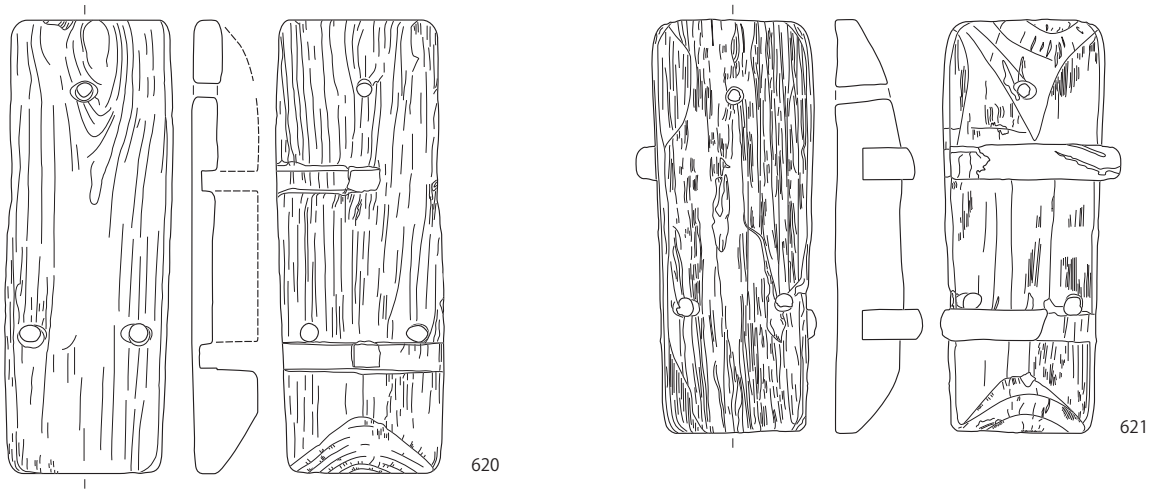
連齒下駄



0 10cm
1 : 4

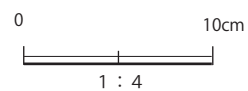
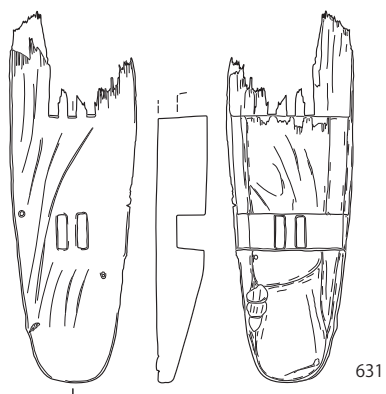
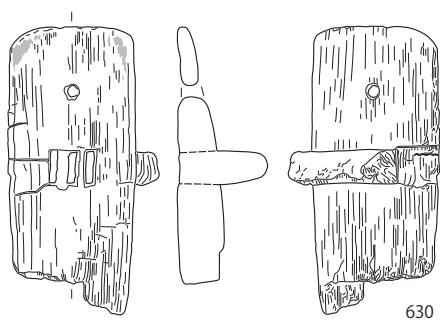
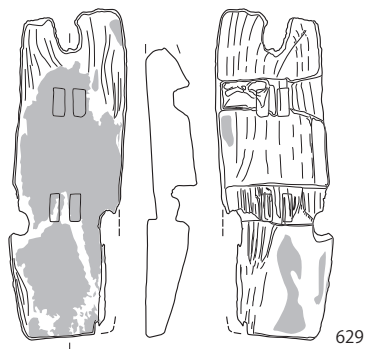
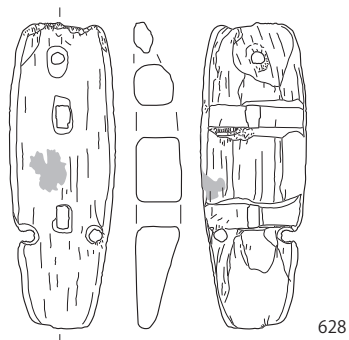
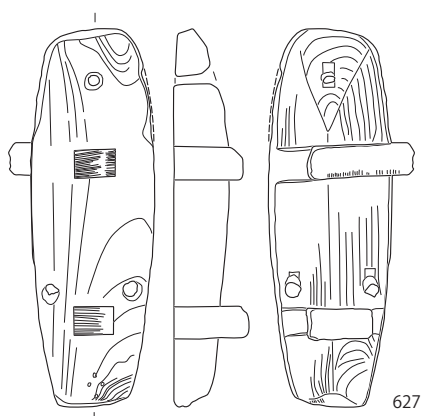
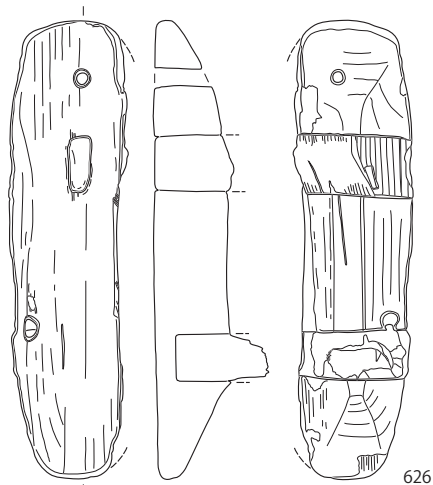
第112図 SD1出土遺物実測図 木製品(下駄2)

差歯下駄



第113図 SD1出土遺物実測図 木製品(下駄3)

差歯下駄



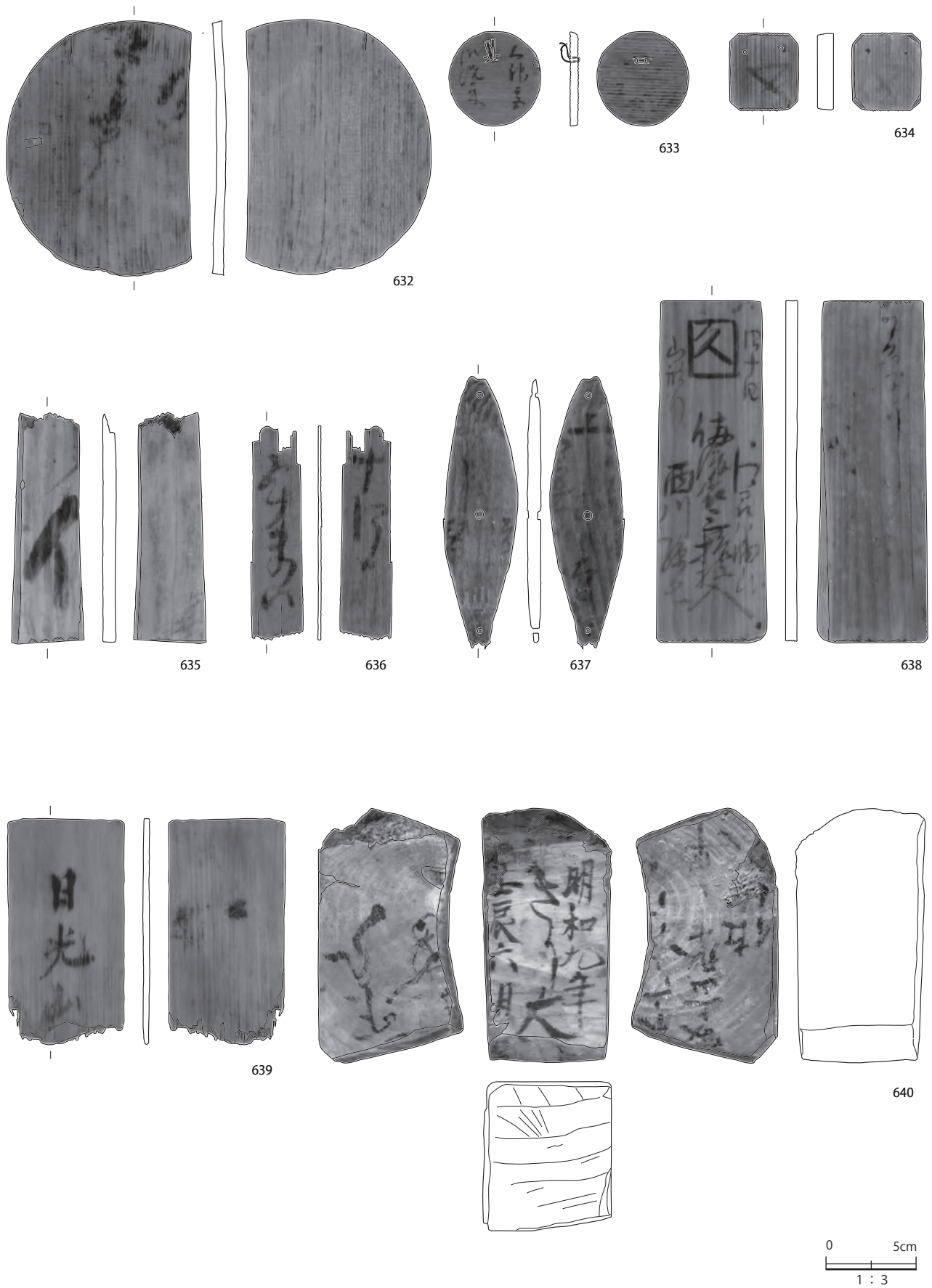
第114図 SD1出土遺物実測図 木製品(下駄4)



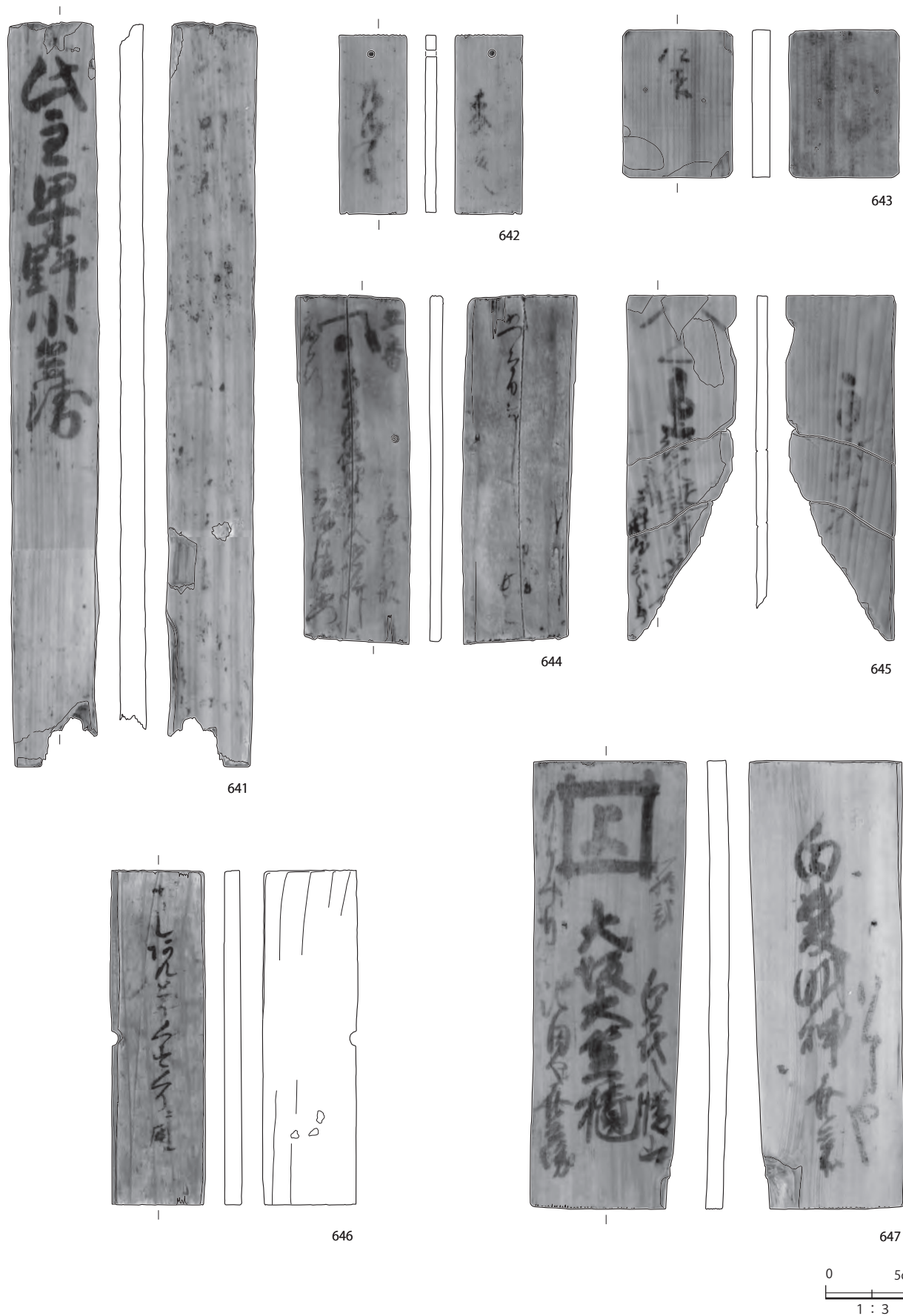
第115図 SD1出土遺物 木製品(下駄1)



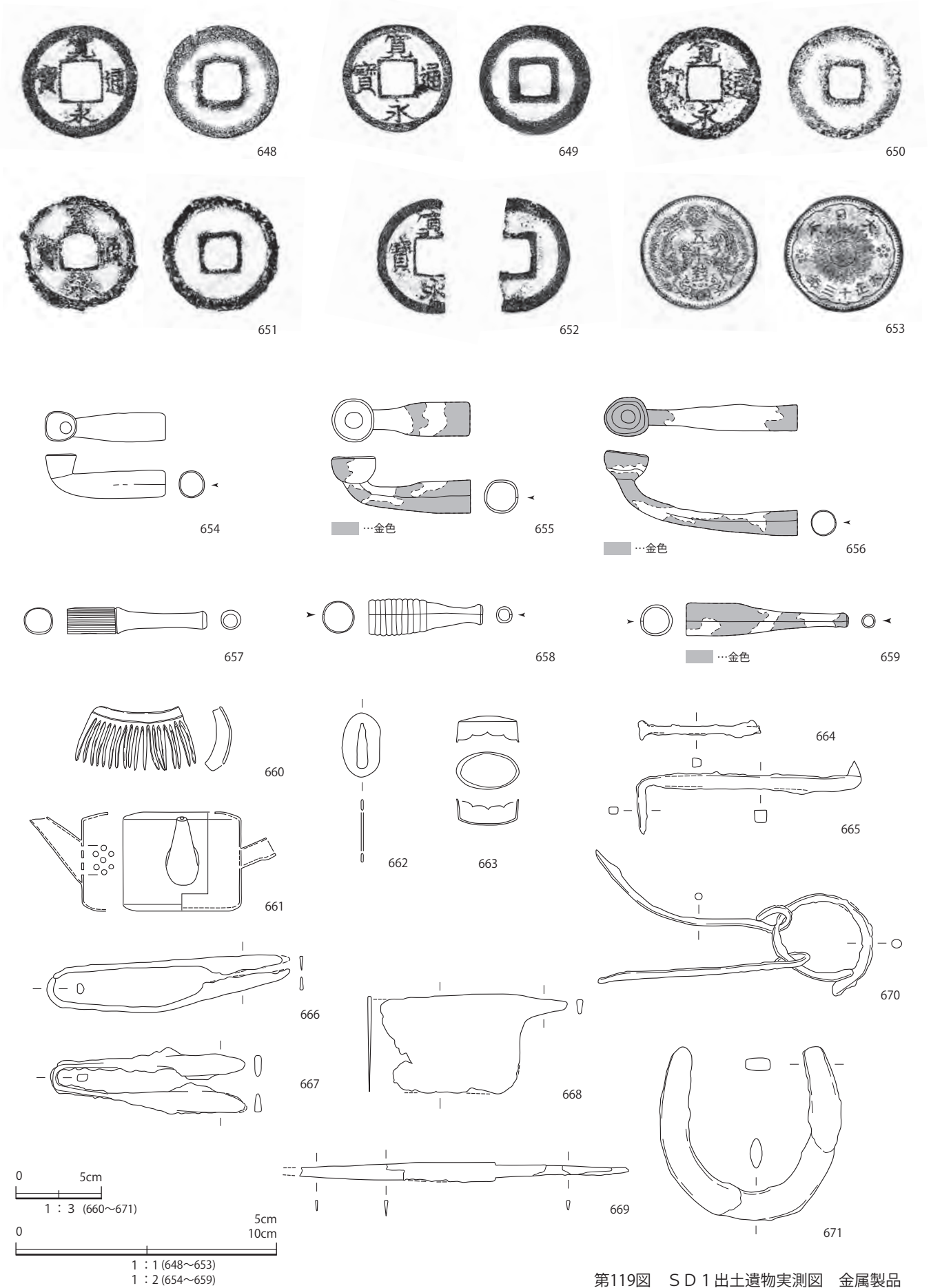
第116図 SD 1 出土遺物 木製品（下駄2）



第117図 SD 1 出土遺物実測図 木製品 (墨書木製品 1)



第118図 SD 1 出土遺物実測図 木製品（墨書木製品2）

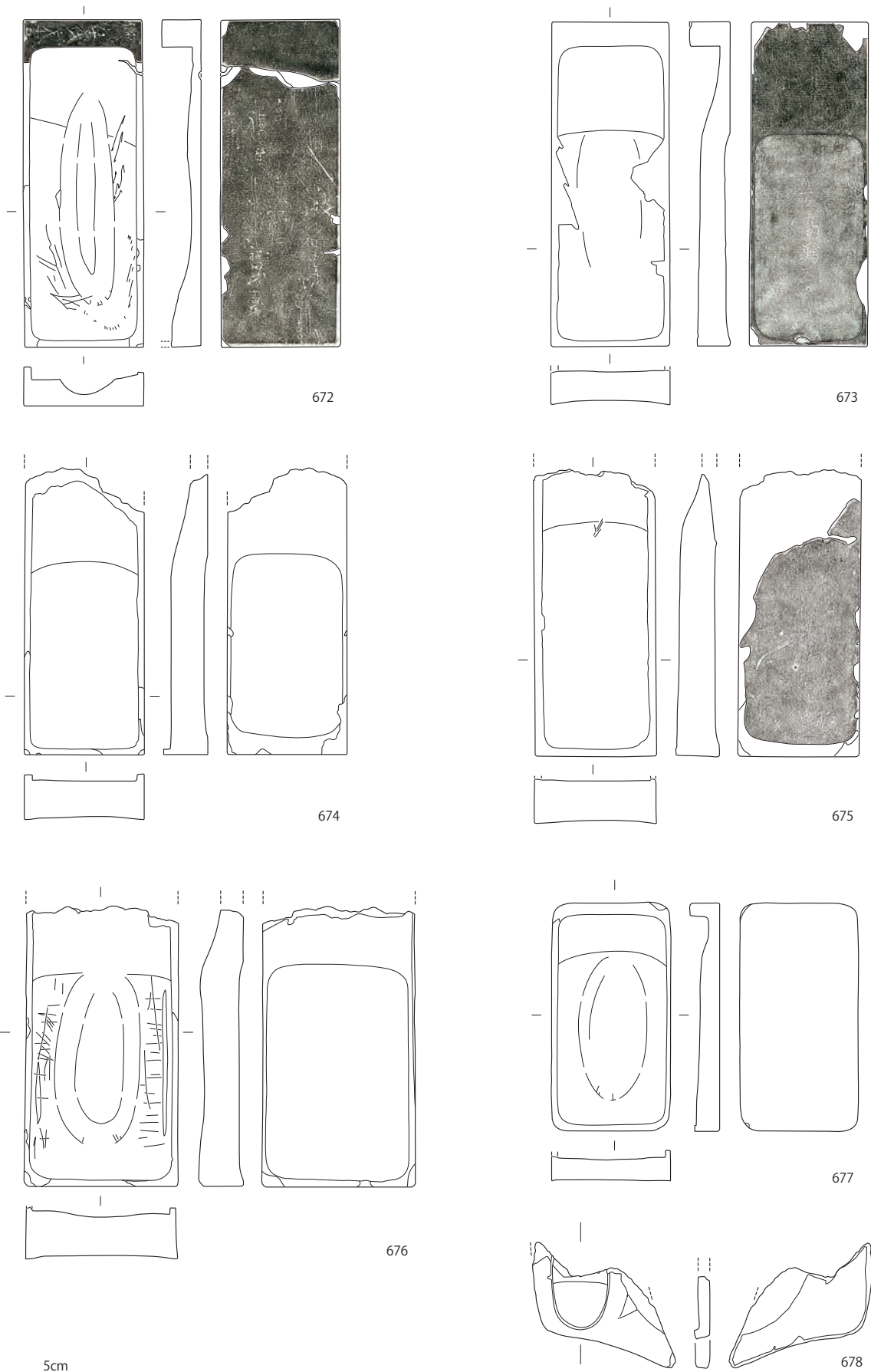


第119図 SD 1 出土遺物実測図 金属製品



第120図 S D 1 出土遺物 金属製品

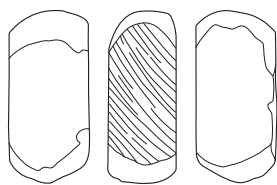
硯



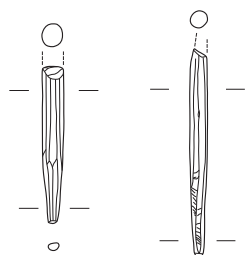
0 5cm
1 : 3

第121図 SD 1 出土遺物実測図 石製品 1

石筆



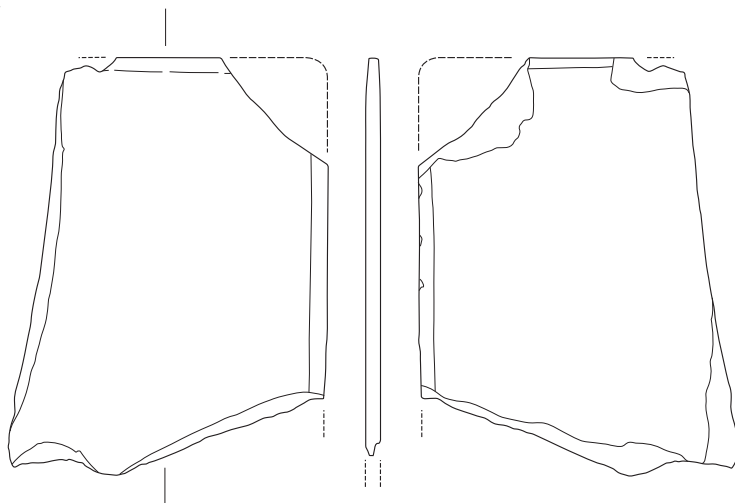
679



680

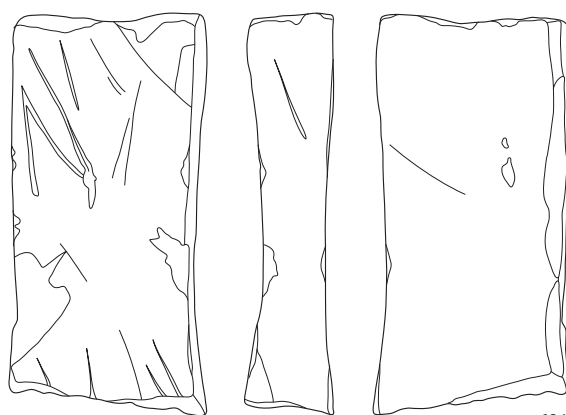
681

石板



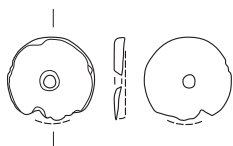
682

砥石



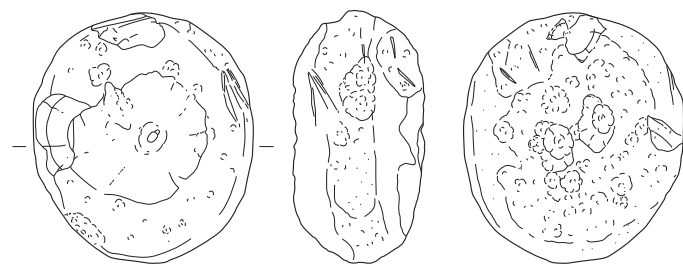
684

円盤状石製品

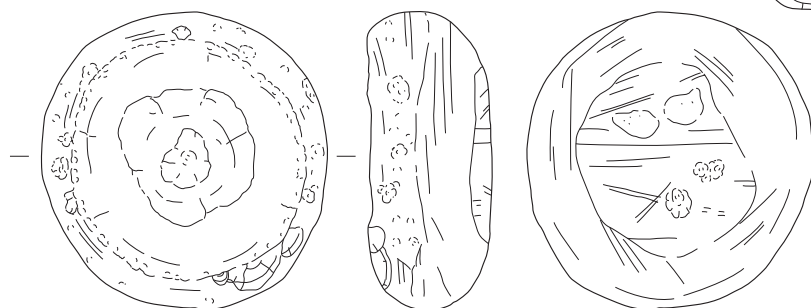


683

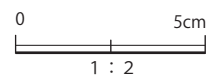
凹石



686



687

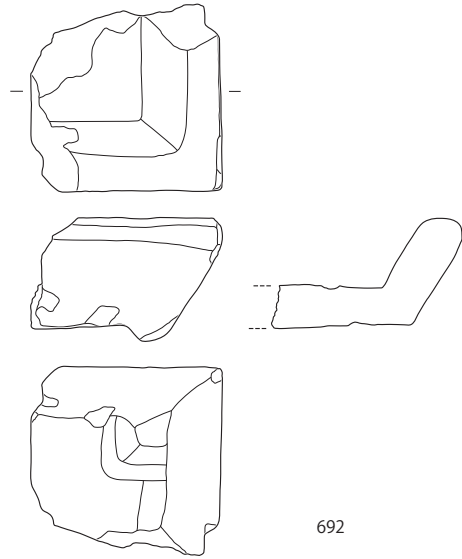


第122図 SD 1 出土遺物実測図 石製品 2

経石



石鉢



688

692

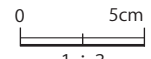
数珠



689

690

691



1 : 3
(692)

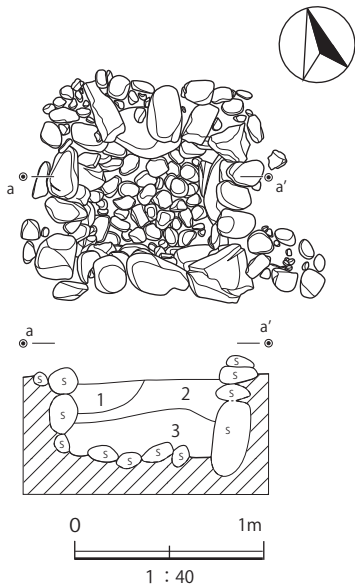


1 : 1
(689 ~ 691)

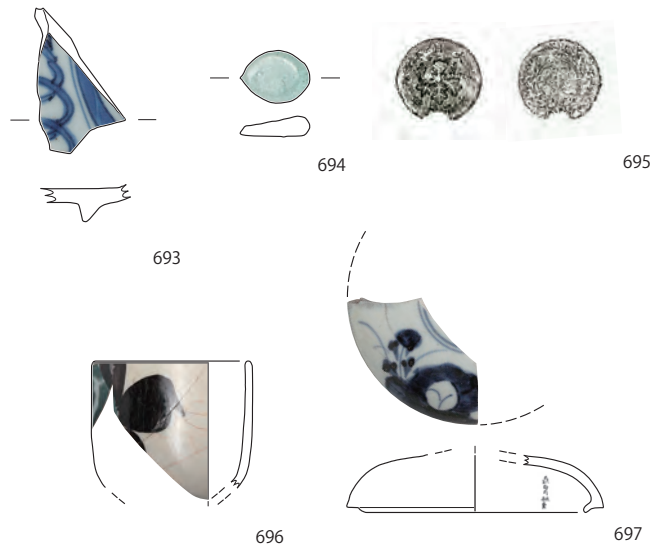
(688、689 ~ 691 の写真は縮尺任意)

第123図 SD 1 出土遺物実測図 石製品 3

SE 2



1 : 40



694

695

693

696

697



1 : 2
(693 ~ 695)



1 : 3
(696 ~ 697)

1. 7.5YR 3/2 黒褐色 しまりあり シルト質粘土
(全体に7.5YR8/2灰白色シルトを斑状に含む)
2. 7.5YR 3/2 黒褐色 しまりあり シルト質粘土
(全体に炭化物を含む)
3. 10YR 1.7/1 黒色 しまりややありシルト質粘土

第124図 SE 2 遺構・遺物実測図



第125図 SD1出土遺物 石製品

III 調査の成果

表1 SD1出土磁器製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			成形	形状	胎土色	釉薬・ 装飾	文様	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高 最大幅								
50	1	小碗	RP107	(68)	(30)	36	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	染付		肥前		猪口、高台畳付砂付着
50	2	小碗	c上層	66	25	36	ロクロ 削り高台	平形	灰白色	染付		肥前系		猪口、高台畳付砂付着
50	3	小碗	上層一括	(53)	(22)	34	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：唐子文	肥前系		猪口
50	4	小碗	d上層	59	25	41	ロクロ 削り高台	呉器形	白色	染付		肥前系		猪口、高台畳付砂付着
50	5	小碗	c中層	79	33	41	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：山水文 内：見込岩波文	肥前系		焼継ぎ、高台裏朱書き
50	6	小碗	c中層	89	29	43	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	内外：雨降り文 内：見込寿文	肥前系		
50	7	小碗	d上層	64	25	29	ロクロ 削り高台	平形	白色	染付	内外：竹文	瀬戸美濃系		猪口
50	8	小碗	a上層	56	34	31	ロクロ、 底部回転 糸切	端反形	白色	染付	外：草花文	瀬戸美濃系		猪口、無高台
50	9	小碗	d上層	60	30	38	ロクロ 削り高台	腰折形	白色	透明釉		瀬戸美濃系		底部朱書き
50	10	小碗	b下層	62	30	28	ロクロ 削り高台	平碗形	白色	染付	内：草花文	瀬戸美濃系		
50	11	薄手酒杯	a上層	(60)	(26)	31	ロクロ 削り高台	平碗形	白色	透明釉	内：「千歳山公園」	瀬戸美濃系	19c後～	内面上絵付、明治6年～千歳山公園称使用
50	12	小碗	c上層	(64)	(28)	46	ロクロ 削り高台	丸形	白色	瑠璃釉	外：瑠璃釉 内：雷文	瀬戸美濃系		猪口、高台裏銘あり
50	13	小碗	d上層	68	30	47	ロクロ 削り高台	呉器形	白色	染付	外：草花文	瀬戸美濃系		猪口、高台裏「玩品」銘
50	14	小碗	c下層	66	31	43	ロクロ 削り高台	呉器形	白色	染付	外：富士山文	瀬戸美濃系		猪口
50	15	小碗	d上層	65	30	44	ロクロ 削り高台	呉器形	白色	染付	外：松竹梅文			猪口、焼継痕あり
50	16	小碗	b上層	64	28	46	ロクロ 削り高台	呉器形	白色	染付	外：花鳥文	瀬戸美濃系		猪口、高台裏銘あり
50	17	小碗	d上層	68	33	45	ロクロ 削り高台	呉器形	白色	染付	外：花鳥文	瀬戸美濃系		猪口、高台裏「玩玉」銘
50	18	小碗	b上層	66	27	32	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外：梅竹文 内：見込寿文	瀬戸美濃系		猪口
50	19	小碗	c上層、d 中層	(62)	(30)	42	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付		瀬戸美濃系		猪口
50	20	小碗	c上・中 層	60	32	45	ロクロ 削り高台	腰張形	灰白色	染付	外：草花文			猪口
50	21	小碗	c上・中 層	(61)	(26)	47	ロクロ 削り高台	腰張形	白色	染付		瀬戸美濃系		猪口
50	22	小碗	d上・下 層	68	31	42	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外：松文	瀬戸美濃系		猪口
50	23	小碗	d上層	(65)	(24)	46	ロクロ 削り高台	腰張形	白色	染付	外：獅子雲文 内：見込「天啓年 製」	瀬戸美濃系		猪口、※中国天啓年間1621 - 1627年
50	24	小碗	c上層	(66)	(31)	45	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外：草花文	瀬戸美濃系		猪口、高台裏銘あり
50	25	小碗	表土、c 中層	69	31	43	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外：草花文	瀬戸美濃系		猪口
50	26	小碗	b上層	70	35	44	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外：松文	瀬戸美濃系		猪口、高台裏銘：二重方形枠に「壽」
50	27	小碗	d上層	(67)	(34)	44	ロクロ 削り高台	端反形	白色	青磁染付	外：青磁 内：見込宝文	瀬戸美濃系		猪口、高台裏「永年口壽」銘
50	28	小碗	b上層	68	28	38	ロクロ、 型打、削 り高台	端反形	白色	染付	外：草花文	瀬戸美濃系		猪口
50	29	小碗	表土、d 上層	67	30	40	ロクロ、 型打、削 り高台	端反形	白色	染付	外：山水文	瀬戸美濃系		猪口、高台裏彫り込み銘あり
51	30	小碗	c上・中 層	62	26	41	ロクロ、 型打、削 り高台	端反形	白色	染付	外：漢詩文	瀬戸美濃系	19c中～	猪口、東大編年Ⅷd～Ⅸ期
51	31	小碗	c上層	(58)	(32)	46	ロクロ、 型打、削 り高台	端反形	白色	染付	外：竹文			猪口
51	32	小碗	a上層	67	31	43	ロクロ 削り高台	端反形	灰白色	染付	外：草花文			猪口

表1 SD1出土磁器製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			成形	形状	胎土色	釉薬・ 装飾	文様	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高								
51	33	小碗	c上層	67	25	46	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外：草花文			猪口
51	34	小碗	c中層	56	30	55	ロクロ 削り高台	端反形	灰白色	染付	外：草花文			猪口
51	35	小碗	d上層	70	36	57	ロクロ、 型打、削 り高台	腰反形	白色	染付	外：みじん唐草 文 内：四方禪文・ 見込松竹梅円形 文	肥前	19c中～	口縁：輪花、高台裏「成」化(年)製銘、東大 編年VIb～VIII d 期相当
51	36	小碗	d上層	49	29	65	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外：草花・渦巻 文	瀬戸美濃系		台付猪口
51	37	蓋	RP38	(32)	(84)	19	ロクロ		白色	染付		瀬戸美濃	19c～	
51	38	小碗	RP54	86	34	44	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外：唐花文	瀬戸美濃	19c～	
51	39	小碗	b上層	(86)	(30)	43	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	内：見込松竹梅 円形文	瀬戸美濃系		口縁部：口銹
51	40	小碗	b上層、 上層一括	(86)	(29)	46	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外：隸字体文	瀬戸美濃	1850～ 1875	口縁部：口銹、瀬戸窯編年第3段階第11小期 (かみた窯VI期)、東大編年VIII d 期
51	41	小碗	b上・下 層	86	32	41	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外：区画梅に寿 文	瀬戸美濃	19c初～	東大編年VIII c 期相当
51	42	小碗	上層一括	(78)	(30)	40	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外：渦文 内：見込寿字文	瀬戸美濃	1850～ 1875	瀬戸村編年第3段階第11小期
51	43	小碗	a下層	80	31	42	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	内外：仙芝祝寿 文	瀬戸美濃	19c～	口縁部：口銹
51	44	小碗	a上層	88	32	40	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	内外：仙芝祝寿 文 内：見込渦巻文	瀬戸美濃	19c中～	
51	45	小碗	c中層	(90)	(32)	48	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外：区画草花文	瀬戸美濃	19c中～	東大編年VIII c 期相当
51	46	小碗	b上層、 上層一括	(90)	(36)	46	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付		瀬戸美濃	19c～	東大編年VIII c 期相当
51	47	小碗	b下層	(84)	(30)	36	ロクロ 削り高台	浅半球形	白色	染付	外：菊散し文	肥前	1810年 前後	九州(肥前)編年V期相当 (小樽2号窯類型品か)
51	48	小碗	a下層	(88)	(37)	49	ロクロ 削り高台	浅半球形	白色	染付	外：桐葉文	肥前	1690～ 18c末	外面文様：コンニャク印判
51	49	小碗	d中層	88	36	49	ロクロ 削り高台	半球形	白色	染付	外：山水文 内：見込草花文?	肥前系		
51	50	小碗	d下層	83	38	53	86 ロクロ 削り高台	半球形	白色	染付	外：花唐草文 内：見込波千鳥 文	肥前	1780～	
51	51	小碗	b下層	88	34	53	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：寿字雲雲文 内：四方禪・火 炎宝珠文	肥前		
51	52	小碗	c中・下 層	86	30	54	ロクロ 削り高台	半球形	灰白色	染付	外：雪輪文 内：四方禪文	肥前	1750～ 1720	
51	53	小碗	d中層	82	36	55	ロクロ 削り高台	半球形	白色	染付	外：石畳地文 内：昆虫文	肥前	1780～ 1810	九州(肥前)編年V期相当 (広瀬向2号窯類型品)
52	54	小碗	d中層	(71)	(38)	56	73 ロクロ 削り高台	半筒形	白色	染付	外：山水文 内：四方禪文・ 見込五弁花	肥前		見込：コンニャク印判
52	55	小碗	d下層	72	37	56	73 ロクロ 削り高台	半筒形	白色	染付	外：菊散し文 内：見込五弁花	肥前	1780～ 1810	九州(肥前)編年V期相当
52	56	小碗	d中層	69	37	58	73 ロクロ 削り高台	半筒形	白色	染付	外：松文 内：見込五弁花	肥前	1690～ 18c末	見込：コンニャク印判
52	57	小碗	RP106	78	40	60	80 ロクロ 削り高台	半筒形	灰白色	染付	外：格子梵字文 内：見込五弁花	肥前	1780～ 1810	九州(肥前)編年V期相当
52	58	小碗	b上層	78	40	68	86 ロクロ 削り高台	半筒形	灰色	染付	外：菊散し文 内：四方禪文・ 五弁花	肥前	1780～ 1810	高台裏：二重圏線「渦福」、九州(肥前)編年V 期相当
52	59	小碗	a下層	(87)	58	62	ロクロ 削り高台	広東形	灰白色	染付	外：草花文 内：見込岩波文	肥前	1780～ 1840	九州(肥前)編年V期
52	60	小碗	a上層	(76)	(40)	43	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外：区画松竹梅 文	瀬戸美濃系	19c末～	外面：銅板転写
52	61	小碗	a上層	(85)	(44)	43	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外：鳳凰・唐草 文	瀬戸美濃系	19c末～	外面：銅板転写
52	62	小碗	a上層	(78)	(30)	43	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：牡丹唐草文	瀬戸美濃系	19c末～	外面：銅板転写
52	63	小碗	a上層	(79)	(35)	46	ロクロ 削り高台	呉器形	白色	染付	外：薔薇文	瀬戸美濃系	19c末～	猪口、外面：銅板転写(二色刷り)

III 調査の成果

表1 SD1出土磁器製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			成形	形状	胎土色	釉薬・ 装飾	文様	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高 最大幅								
52	64	中碗	RP133	(103)	(41)	63	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	染付		肥前	1640～ 1650	初期伊万里、高台畳付砂付着、九州(肥前)編 年II-2期相当
52	65	中碗	a下層	(100)	(38)	70	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	外：二重圏線鋸 歯に竹文	肥前	1640～ 1650	初期伊万里、九州(肥前)編年II-2期相当(山辺 田1号窯類型品)
52	66	中碗	d下層	104	38	70	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	外：唐草文	肥前	1630～ 1650	初期伊万里、高台畳付砂付着、漆継痕、九州(肥 前)編年II-2期相当
52	67	中碗	a下層	104	42	77	ロクロ 削り高台	丸形	灰色	染付	外：唐草文	肥前	1630～ 1650	初期伊万里、高台畳付砂付着、九州(肥前)編 年II-2期相当
52	68	中碗	RP126	-	40	<29> <89>	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	外：唐草文	肥前	1630～ 1650	初期伊万里、高台畳付砂付着、九州(肥前)編 年II-2期相当
52	69	中碗	d中層	-	42	<39> <95>	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	染付		肥前	1630～ 1650	初期伊万里、高台畳付砂付着、九州(肥前)編 年II-2期相当
52	70	中碗	RP127	-	40	<41> <94>	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	外：唐草文	肥前	1630～ 1650	初期伊万里、高台畳付砂付着、九州(肥前)編 年II-2期相当
52	71	中碗	b下層	-	40	<39> <100>	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	外：唐草文	肥前	1630～ 1650	初期伊万里、高台畳付砂付着、九州(肥前)編 年II-2期相当
52	72	中碗	RP131	-	40	<54> <101>	ロクロ 削り高台	丸形	灰色	染付		肥前	1630～ 1650	初期伊万里、高台畳付砂付着、九州(肥前)編 年II-2期相当
52	73	中碗	b中・下 層	(104)	(41)	51	ロクロ 削り高台	浅半球形	白色	染付	外：花唐草文	肥前	1710～ 1750	九州(肥前)編年IV期相当
52	74	中碗	c下層	(103)	(41)	50	ロクロ 削り高台	浅半球形	白色	染付	外：花唐草文	肥前	1710～ 1750	九州(肥前)編年IV期相当
52	75	中碗	c上・中・ 下層、d 下層	98	38	47	ロクロ 削り高台	浅半球形	灰白色	染付	外：菊散し文	肥前	1710～ 1750	九州(肥前)編年IV期相当 (志田西山1号窯類型品)
52	76	中碗	c下層	(99)	(38)	49	ロクロ 削り高台	浅半球形	灰白色	染付	内外：菊散し文	肥前	1810年 前後	九州(肥前)編年V期相当
52	77	中碗	c中層、b・ d下層	(105)	(36)	50	ロクロ 削り高台	浅半球形	白色	染付	外：菊散し文	肥前系		
53	78	中碗	b中層	(100)	(37)	50	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	外：梅樹文	肥前	1680～ 1740	波佐見系、くらわんか手、九州(波佐見)編年 V-1期相当
53	79	中碗	b中層	(114)	(45)	60	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	外：丸文 内：見込五弁花	肥前	1820～ 1860	波佐見系、くらわんか手、見込：コンニャク 印判、九州(波佐見)編年V-4期相当
53	80	蓋	d上層	104	-	-	ロクロ		灰白色	染付	外：矢羽根文 内：四方禪文	肥前	18c中～	全体に被熱痕
53	81	中碗	b上層	(108)	(44)	63	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	外：矢羽根文 内：四方禪文・ 見込五弁花	肥前	18c中～	
53	82	蓋	RP84	92	42	29	ロクロ		灰白色	青磁染付	外：青磁 内：四方禪文・ 見込五弁花	肥前	1750～ 1780	見込：コンニャク印判、九州(肥前)編年IV期 相当(広瀬向2号窯類型品)
53	83	中碗	b下層	(109)	(44)	61	ロクロ 削り高台	丸形	灰色	青磁染付	外：青磁 内：四方禪文・ 見込五弁花	肥前	1750～ 1780	見込：コンニャク印判、高台裏「満福」?、九 州(肥前)編年IV期相当、(広瀬向2号窯類型品)
53	84	中碗	RP87	(100)	(38)	59	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：雨降り文	肥前	1690～ 18c初	外面：筆描に型紙摺で雨滴、 東大編年IVb-Va期相当
53	85	中碗	b下層	102	38	59	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：梅樹文	肥前		高台裏「大明年製」
53	86	中碗	b上層	-	42	<28> <86>	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付		肥前系		高台裏朱書き「土屋源助」
53	87	中碗	d中層	105	47	63	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：梅に亀甲文 内：四方禪文・ 見込梅枝	肥前系		高台裏：二重圏線に「満福」
53	88	中碗	c上・下 層	(106)	(37)	56	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	外：草花文? 内：見込寿文	瀬戸美濃系		
53	89	中碗	d中層	(106)	(36)	57	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：花唐草文 内：見込火炎宝 珠文	瀬戸美濃	19c～	
53	90	中碗	a上層	98	50	49	ロクロ 削り高台	広東形	灰白色	染付	外：「いけ」 内：見込「い」			体部染付文字右読み
53	91	中碗	c中層	98	47	50	ロクロ 削り高台	広東形	灰白色	染付	外：「いけたや」 内：見込「い」			体部染付文字左読み
53	92	蓋	c上・下 層	99	54	28	ロクロ		白色	染付	外：草花文 内：見込岩波文	肥前系		
53	93	中碗	上層一 括、c下 層	(110)	(60)	64	ロクロ 削り高台	広東形	白色	染付	外：草花文 内：見込岩波文	肥前系		
53	94	中碗	b下層	-	60	<42> <90>	ロクロ 削り高台	広東形	白色	染付		肥前	18c末～	外面：吹墨技法か、漆継、高台裏朱書き
53	95	中碗	c下層	(108)	(56)	60	ロクロ 削り高台	広東形	灰白色	染付	外：山水文 内：見込岩波文	肥前	1780～	

表1 SD1出土磁器製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			成形	形状	胎土色	釉薬・ 装飾	文様	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高								
53	96	中碗	d上層	(102)	(38)	55	ロクロ 削り高台	広東形	灰白色	染付	外:草花文	在地		目跡2個(推定4個)
53	97	中碗	d中層	(115)	(56)	69	ロクロ 削り高台	広東形	灰白色	染付	外:草花文 内:見込岩波文	肥前	1780~	
53	98	中碗	RP55	-	51	<57> <106>	ロクロ 削り高台	広東形	白色	染付	外:仙芝祝寿文	瀬戸美濃	1800~ 1825	瀬戸窯編年第3段階第9小期(経塚山西窯跡II期)
53	99	中碗	d上層	(112)	(59)	69	ロクロ 削り高台	広東形	白色	染付	外:仙芝祝寿文	瀬戸美濃	1800~ 1825	瀬戸窯編年第3段階第9小期(経塚山西窯跡II期)
54	100	中碗	d中層	(91)	32	46	ロクロ 削り高台	平形	灰白色	染付	外:梵字文 内:見込岩波文	肥前	1740~ 1770	
54	101	中碗	c下層	(104)	36	52	ロクロ 削り高台	平形	灰白色	染付	外:渦文 内:見込渦文	肥前	1780~	東大編年VII期相当
54	102	中碗	d下層、 上層一括	105	34	50	ロクロ 削り高台	平形	白色	染付	内:瓔珞文・見 込宝文	瀬戸美濃系		
54	103	中碗	b上層	108	42	57	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外:よろけ縞文 見込格子文	肥前系		
54	104	中碗	RP56、 上層一括	106	42	60	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外:草花文 内:見込蝶文	肥前系		
54	105	中碗	a上層	(108)	(42)	60	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外:鹿ノ子文 内:四方禪文・ 見込松竹梅円形 文	肥前	1820~ 1860	九州(肥前)編年V期相当
54	106	中碗	RP69	(105)	39	61	ロクロ 削り高台	端反形	灰白色	染付	外:笹文	肥前	1850~ 1860	目跡3個、九州(肥前)編年V期相当
54	107	中碗	d上層	93	37	47	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外:花唐草文 内:連鎖文・見 込「壽」文	瀬戸美濃系		
54	108	中碗	RP50	99	35	48	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外:菊に福寿文 内:見込寿文	瀬戸美濃	19c~	
54	109	中碗	c中層	98	38	51	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外:花唐草文 内:連鎖文	瀬戸美濃	1800~ 1825	高台裏「成化年制」、経塚山西窯E類、瀬戸窯 編年第3段階第9小期
54	110	中碗	d上層	96	36	57	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外:亀甲松竹梅 文 内:雷文・見込 松竹梅円形文	瀬戸美濃系		
54	111	蓋	c下層	85	33	23	ロクロ		白色	染付	内:口縁菱繋ぎ 文	瀬戸美濃系		
54	112	中碗	d上層	97	35	46	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	内:口縁菱繋ぎ 文	瀬戸美濃系		
54	113	蓋	c中層	96	35	27	ロクロ		白色	染付	外:唐草文? 内:口縁菱繋ぎ 文	瀬戸美濃系		
54	114	中碗	c中層	110	40	59	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	内:見込丸に梅 松文	瀬戸美濃系		
54	115	中碗	RP71	102	35	53	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付		瀬戸美濃系		
54	116	中碗	b上・下 層	(100)	37	55	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付		瀬戸美濃系		
54	117	中碗	d下層	111	36	54	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外:山水文 内:見込寿文	瀬戸美濃系		
54	118	中碗	b上層	103	36	59	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外:よろけ縞文 内:見込昆虫文?	瀬戸美濃系	19c後~	
54	119	中碗	d上層	102	38	55	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外:花唐草文 内:見込寿文	瀬戸美濃	19c~	東大編年VIII期相当
54	120	中碗	d上層	103	37	57	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外:牡丹文 内:雷文・見込 壽文	瀬戸美濃	19c~	
54	121	中碗	表土一括	(102)	(34)	58	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外:区画山水文	瀬戸美濃系		
54	122	中碗	b上層、c 上層	108	42	58	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外:笹文 内:見込昆虫文?	瀬戸美濃系		
55	123	中碗	d上層	106	38	54	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	内:見込寿文	瀬戸美濃系		
55	124	中碗	c上層	112	37	56	ロクロ 削り高台	端反形	灰白色	染付	外:区画文・松 に流水文 内:見込寿文	瀬戸美濃系		
55	125	中碗	d上層	(110)	(39)	56	ロクロ 削り高台	端反形	灰白色	染付	外:松葉にみじ ん唐草文 内:四方禪文	瀬戸美濃系		
55	126	蓋	c中層	89	37	28	ロクロ		白色	染付	外:草花文 内:見込壽文	瀬戸美濃系		

III 調査の成果

表1 SD1出土磁器製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			成形	形状	胎土色	釉薬・ 装飾	文様	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高 最大幅								
55	127	中碗	RP49	106	41	56	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外：草花文 内：見込壽文	瀬戸美濃系		
55	128	蓋	d上層	75	38	33	ロクロ		白色	染付	外：蝙蝠文 内：連鎖文・見 込寿文	瀬戸美濃系		高台裏「壽」銘
55	129	中碗	d上層	111	42	60	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外：蝙蝠文 内：連鎖文・見 込寿文	瀬戸美濃系		
55	130	中碗	c下層	(104)	(39)	57	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	見込岩波文	在地系		
55	131	中碗	c中層	(104)	(40)	54	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外：草花文 内：見込寿字文	在地		口縁一部無釉
55	132	中碗	d上層	108	40	58	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付		在地系	19c～	
55	133	中碗	d上層	(104)	34	56	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外：草花文 内：見込蝶文	在地		目跡4個
55	134	中碗	d上層	(108)	(44)	56	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外：草花文 内：見込蝶文	在地		目跡2個(推定4個)
55	135	中碗	c中層	(112)	(42)	56	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外：区画蝙蝠文 内：見込蝙蝠文	在地		目跡4個
55	136	中碗	d上層	112	42	59	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	外：蝶に源氏香 文 内：見込蝶文	在地		目跡4個
55	137	中碗	a上層	102	37	45	ロクロ 削り高台	浅半球形	白色	染付	外：花唐草鳥文 内：瓔珞文	瀬戸美濃系	19c末～	外面：銅板転写
55	138	中碗	表土	(102)	(37)	55	ロクロ 削り高台	端反形	灰白色	染付	外：梅に松葉丸 文、蓮弁文 内：瓔珞文、 見込松竹梅円形 文	肥前系	19c後～ 19c末	型紙摺絵
55	139	蓋	表土一括	86	38	22	ロクロ		灰白色	青磁染付	外：青磁 内：四方禪文・ 見込五弁花	肥前	1750～ 1780	二重圏線「渦福」、九州(肥前)編年IV期相当
55	140	蓋	b中層	(98)	(46)	30	ロクロ		灰白色	青磁染付	外：青磁 内：四方禪文・ 見込五弁花	肥前	1760～ 1780	見込：コンニャク印判、九州(肥前)編年IV期相当
55	141	蓋	c中層	(100)	(32)	28	ロクロ		白色	染付	外：格子に柏葉 文	肥前	18c前～ 18c中	外面：コンニャク印判
55	142	蓋	d中層	92	74	27	ロクロ		灰白色	染付	外：梵字文 内：見込寿字文	肥前	1780～ 1810	九州(肥前)編年V期相当
55	143	蓋	b中・下 層	96	40	30	ロクロ		白色	染付	外：花唐草文 内：四方禪文・ 見込桐葉文?	肥前	1740～ 1780	九州(肥前)編年IV期(窯の谷窯類型品)
56	144	蓋	b下層	(100)	(34)	25	ロクロ		白色	染付	外：草花文 内：四方禪文・ 見込松竹梅円形 文	肥前	18c中～	「大明成」化(年)製」銘、漆継痕あり
56	145	蓋	d上層	98	32	26	ロクロ		白色	染付	内：四方禪文・ 見込松竹梅円形 文	瀬戸美濃系		
56	146	蓋	c上層	(88)	34	26	ロクロ		白色	染付		瀬戸美濃系		
56	147	蓋	d上・中 層	92	36	18	ロクロ		白色	染付		瀬戸美濃系		焼成不良による歪み、外面に溶着痕
56	148	蓋	d上層、c 中層	90	32	26	ロクロ		白色	染付	内：見込寿文	瀬戸美濃系		
56	149	蓋	c中層	92	-	22	ロクロ		白色	染付	外：区画山水文 内：見込寿字文	瀬戸美濃	19c～	
56	150	蓋	上層一括	98	38	25	ロクロ		白色	染付	内：雷文	瀬戸美濃系		
56	151	蓋	表土一括	(108)	(44)	20	ロクロ		白色	染付	内：瓔珞文	瀬戸美濃系	19c後～ 19c末	型紙摺絵
56	152	大碗	c上・下 層	(146)	(62)	70	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：松・鳥文 内：四方禪文・ 見込銀杏文	肥前		
56	153	大碗	a下層	(148)	(68)	77	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付		肥前系		高台裏「富(貴)長(春)」銘
56	154	薄手酒杯	d上層	(52)	(22)	30	ロクロ 鉤高台	丸形	白色	透明釉	外：高台櫛歯文 内：柳文	瀬戸美濃系		内面上絵付、外面染付
56	155	薄手酒杯	d上層	(59)	(24)	28	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：高台櫛歯文 内：波・鳥文	瀬戸美濃系		内面上絵付、外面染付
56	156	薄手酒杯	c上層	(59)	(24)	28	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：高台櫛歯文	瀬戸美濃系		内側：「瀬ノ上、真誠講松川屋」上絵付、外面染付

表1 SD1出土磁器製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			成形	形状	胎土色	釉薬・ 装飾	文様	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高								
56	157	薄手酒杯	上層一括	(60)	(24)	27	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：高台櫛歯文 内：「和口」	瀬戸美濃系		内面上絵付、外面染付
56	158	薄手酒杯	c中層、 上層一括	(62)	(25)	27	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：高台櫛歯文	瀬戸美濃系		内面：「開店 □□」上絵付、外面染付
57	159	薄手酒杯	d上層	(62)	(25)	27	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：高台櫛歯文	瀬戸美濃系		内面上絵付、外面染付
57	160	薄手酒杯	b下層	(66)	(27)	29	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：高台櫛歯文	瀬戸美濃系		内側：「明神ハ 三嶋の ふし」上絵付、外面染付
57	161	薄手酒杯	c上層、d 上層	(58)	(26)	30	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付		瀬戸美濃系		内面上絵付、外面染付
57	162	薄手酒杯	c上層	(62)	(25)	29	ロクロ 削り高台	端反形	白色	透明釉				内面上絵付
57	163	仏飯器	b下層	-	40	<36>	<55>ロクロ 削り高台		灰白色 淡赤褐色	染付		肥前	17c末～	焼成不良により底部淡赤褐色
57	164	仏飯器	a上層	-	41	<56>	<65>ロクロ、 底部回転 系切		灰白色	染付		肥前		
57	165	仏飯器	d上層	-	-	<43>	<56>ロクロ	台底扶り 込み	白色	瑠璃釉	外：瑠璃釉	瀬戸美濃系		東大編年Ⅷc～Ⅸ期
57	166	紅猪口	c上層	49	28	18	型打	菊花形	白色	透明釉		瀬戸美濃系		被熱痕
57	167	紅猪口	d下層	51	16	18	型打	菊花形	白色	透明釉		肥前系		
57	168	小皿	RP118	124	47	31	ロクロ 削り高台	丸形	灰色	鉄絵	外：草花文	肥前	1620～ 1640	初期伊万里、高台砂目、九州(肥前)編年Ⅱ-1 期相当
57	169	小皿	b下層	126	45	22	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：草花文	肥前	1620～ 1640	初期伊万里、高台砂目、九州(肥前)編年Ⅱ-1 期相当
57	170	小皿	b中層	120	48	35	ロクロ 削り高台	丸形	灰色	染付	内：格子文	肥前	1740～ 1780	波佐見系、見込蛇の目軸剥ぎ、九州(波佐見) 編年Ⅳ期、東大編年Ⅵa期～相当、被熱痕
57	171	小皿	a上層	(132)	(80)	33	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	外：唐草文 内：見込五弁花	肥前	1690～ 1780	波佐見系、見込：コンニャク印判、内面：墨 弾き技法、高台裏「満福」、漆継ぎ、九州(波佐 見)編年Ⅳ期相当
57	172	小皿	a上層	(134)	(72)	41	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	外：唐草文 内：見込五弁花	肥前	1690～ 1780	
57	173	小皿	a下層	(130)	(56)	30	ロクロ、 クリ底高 台	丸形	灰色	鉄絵	内：唐草文	肥前	18c中～ 18c後	波佐見系、見込蛇の目軸剥ぎ、くらわんか手、 高台砂目、東大編年Ⅴa-Ⅷc期相当
58	174	小皿	d下層	120	72	27	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：唐草文 内：四方櫛文、 松竹梅文・見込 五弁花	肥前		輪花皿、高台裏：二重方形枠「満福」
58	175	小皿	b上層	(114)	(72)	29	ロクロ、 蛇の目凹 形高台	丸形	白色	染付	内：笹文	在地		目跡1個(推定4個)、胎土：鉄分を全体に含 む、ガラス質・光沢あり
58	176	小皿	b中層	(124)	77	31	ロクロ、 蛇の目凹 形高台	端反形	白色	染付	内：笹文	在地		目跡4個、胎土：鉄分を含むガラス質・光沢 少ない
58	177	小皿	d上・中 層	122	47	39	ロクロ 削り高台	平形	白色	青磁染付	外：青磁 内：花唐草文？ 見込蝶文	在地		目跡4個
58	178	小皿	d上層	(128)	70	36	ロクロ、 蛇の目凹 形高台	端反形	灰白色	染付	内：山水文			
58	179	小皿	c中層	(92)	(41)	29	ロクロ 削り高台	端反形	白色	染付	内：楼閣山水文	瀬戸美濃	19c～	高台裏銘・朱書き
58	180	小皿	表土、 上層一括	118	64	26	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：唐草文 内：蔓草文	瀬戸美濃系		高台裏銘あり
58	181	小皿	d上層	120	59	29	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	内：草花文	瀬戸美濃系		焼継痕、高台裏朱書き
58	182	小皿	上層一括	(118)	(60)	22	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	内外：仙芝祝寿 文	瀬戸美濃	19c後	
58	183	小皿	RP51	(104)	(70)	28	ロクロ、 型打、蛇 の目凹形 高台	菊花形	灰白色	染付		肥前系		輪花皿
58	184	小皿	d上層	95	45	22	ロクロ、 型打、削 り高台	平形	白色	染付	内：蝶文	瀬戸美濃系		
58	185	小皿	b中層	98	58	26	ロクロ、 型打、削 り高台	菊花形	白色	染付	内：蛸唐草文・ 見込松竹梅円形 文	瀬戸美濃	19c中	内面：型押文様(陰刻)
59	186	小皿	c上層	(92)	48	21	ロクロ、 型打、削 り高台	菊花形	白色	染付	内：蛸唐草文・ 見込菊花文	瀬戸美濃系		輪花形手塩皿、内面：型押文様(陽刻)

III 調査の成果

表1 SD1出土磁器製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)				成形	形状	胎土色	釉薬・ 装飾	文様	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高	最大幅								
59	187	小皿	RP64	92	50	26	ロクロ、 型打、削 り高台	菊花形	白色	染付	内：蛸唐草文・ 見込梅花文	瀬戸美濃系		手塩皿、内面：型押文様(陰刻)	
59	188	小皿	c上・中 層	95	46	22	ロクロ、 型打、削 り高台	菊花形	白色	染付	内：蛸唐草文・ 見込松竹梅円形 文	瀬戸美濃系		輪花形手塩皿、内面：型押文様(陽刻)	
59	189	小皿	d上層、 c上・中 層	94	46	22	ロクロ、 型打、削 り高台	菊花形	白色	染付	内：蛸唐草文・ 見込松竹梅円形 文			手塩皿、内面：型押文様(陽刻)	
59	190	小皿	d中層	75	34	23	ロクロ、 型打、削 り高台	方形	白色	染付	内：見込雀文	瀬戸美濃系		手塩皿	
59	191	小皿	c上・下 層	85	38	23	ロクロ、 型打、削 り高台	方形	白色	透明釉		瀬戸美濃	1800～ 1875	手塩皿、瀬戸窯編年第3段階第9～11小期、東大編年Ⅷc期	
59	192	小皿	d上層	83	36	24	ロクロ、 型打、削 り高台	方形	明赤灰 色	染付	内：雷文・見込 菊花文			手塩皿	
59	193	小皿	b上層	(100)	50	23	ロクロ、 型打、削 り高台	六角形	白色	染付		瀬戸美濃系		手塩皿、内面：型押文様(陰刻)	
59	194	小皿	d上層	86	44	23	ロクロ、 型打、削 り高台	菊花形	白色	染付	内：山水文?	肥前系		輪花皿	
59	195	小皿	c上層	100	56	24	ロクロ、 型打、削 り高台	菊花形	白色	染付	内：舟文	肥前系		輪花皿	
59	196	小皿	d上層	96	50	31	ロクロ、 型打、削 り高台	菊花形	白色	染付	内：風景文			輪花皿	
59	197	小皿	c中・下 層	107	62	24	ロクロ、 型打、削 り高台	菊花形	白色	染付	内：山水文			輪花皿	
59	198	小皿	c下層	94	52	24	ロクロ、 型打、削 り高台	菊花形	白色	染付	内：山水文	肥前	1810～ 1860	輪花皿、口縁口錆、九州(肥前)編年Ⅴ期相当	
59	199	小皿	c上層	102	58	24	ロクロ、 型打、削 り高台	菊花形	灰白色	染付	内：山水文	肥前系	19c～	輪花皿、口縁口錆	
59	200	小皿	c中・下 層	102	61	25	ロクロ、 型打、削 り高台	菊花形	白色	染付	内：山水文	肥前系	19c～	輪花皿、口縁口錆	
59	201	小皿	d上・中 層	130	79	29	ロクロ、 型打、蛇 の目凹形 高台	菊花形	白色	染付	内：山水文	肥前	1810～ 1860	輪花皿、口縁口錆、九州(肥前)編年Ⅴ期相当	
60	202	小皿	d上層	96	52	25	ロクロ 削り高台	丸形	白色	鉄釉	内：鉄釉・帆掛 舟文			内面：上絵付	
60	203	小皿	a下層	98	48	19	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	内：獅子文	瀬戸美濃	19c中	内面：型押文様、口縁口錆	
60	204	小皿	d上・中 層、b下 層、c下 層	124	72	25	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	内：波・鷺文	瀬戸美濃	19c中	内面：型押文様、口縁口錆	
60	205	小皿	a上層	131	60	23	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	内：桔梗文	瀬戸美濃系	19c末～	銅版転写、口縁口錆	
60	206	小皿	a上層	112	60	25	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	内：蕉文・見込 松竹梅円形 文	瀬戸美濃系	19c末～	銅版転写、口縁口錆	
60	207	小皿	表土	(102)	(54)	24	ロクロ 削り高台	丸形	黄灰色	染付	内：唐子文・見 込蝶文		19c後～ 19c末	型紙摺絵	
60	208	小皿	a上層	(116)	(69)	35	ロクロ、 型打、蛇 の目凹形 高台	菊花形	灰白色	染付	外：唐草文 内：区画草花文・ 見込松竹梅円形 文	肥前系?	19c後～ 19c末	輪花皿、型紙摺絵	
60	209	中皿	b下層	(155)	68	31	ロクロ 削り高台	丸形	白色	青花	内：山水文	景德鎮		高台置付砂付着	
60	210	中皿	a下層	(136)	60	30	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	内：草花文	肥前	17c前～ 17c中	初期伊万里、高台砂目	
60	211	中皿	d中層、 b下層	(228)	68	67	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	内：菊水文・見 込五弁花	肥前	1620～ 1640	初期伊万里、高台砂目、九州(肥前)編年Ⅱ-1 ～2期相当	
61	212	中皿	c下層	(138)	(68)	30	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	内：唐草文	肥前	1740～ 1800	見込：蛇の目釉剥ぎ、九州(肥前)編年Ⅳ期、 東大編年Ⅴa-Ⅶ期相当	
61	213	中皿	d中層	138	74	37	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	外：唐草文 内：見込五弁花	肥前	1690～ 1780	見込：コンニャク印判、高台裏銘あり、九州(肥 前)編年Ⅳ期・東大編年Ⅵb期相当	
61	214	中皿	d上・中 層	140	80	36	ロクロ、 型打、削 り高台	丸形	白色	染付	外：唐草文 内：区画風景草 花文・見込五弁 花	肥前		輪花皿、高台裏二重方形枠「満福」	
61	215	中皿	b下層	196	113	48	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	外：唐草文 内：宝文	肥前	1680～ 1720	高台裏「満福」、漆継、九州(肥前)編年Ⅳ期相 当	

表1 SD1出土磁器製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			成形	形状	胎土色	釉薬・ 装飾	文様	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高								
61	216	中皿	c中層	(144)	(82)	38	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	外:唐草文 内:雲文	肥前		内面:墨弾き、高台裏「大明年製」、漆継
61	217	中皿	c中・下 層	-	83	<32>	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	外:唐草文 内:雲文	肥前		内面:墨弾き、高台裏「大明年製」
61	218	中皿	c下層	(128)	(164)	34	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	内:波文	肥前		輪花皿、内面:墨弾き技法、高台畳付砂付着
62	219	中皿	c中層、 d下層	(154)	(92)	40	ロクロ、 蛇の目凹 形高台	菊花形	白色	染付	外:唐草文 内:区画波文・ 松竹梅円形文	肥前	18c後~	高台裏:二重方形枠「朱?」、焼継痕、朱書き
62	220	中皿	d中層	139	90	34	ロクロ、 蛇の目凹 形高台	丸形	灰白色	染付	外:唐草文 内:蛸唐草文・ 見込三方割銀杏 文	肥前	19c中	高台裏:二重方形枠「渦福」
62	221	中皿	c中層	(152)	(76)	30	ロクロ、 型打、削 り高台	五角形	灰白色	青磁	内:草花文			
62	222	中皿	d上層	160	80	39	型打、貼 り高台	方形	白色	染付	内:区画草花文・ 見込松竹梅文	瀬戸美濃系		
62	223	中皿	c上・中 層	140	76	46	ロクロ、 型打、削 り高台	菊花形	白色	染付			在地	輪花皿、目跡4個
62	224	中皿	c上層	146	91	46	ロクロ、 型打、蛇 の目凹形 高台	菊花形	灰白色	染付	内:山水文		在地	輪花皿、目跡4個
63	225	大皿	d上層	-	-	<53>		稜皿形	白色	白地藍彩		イギリス	19c初~	イギリス軟質磁器、ウィロー・パターン(柳文様)、銅板転写
63	226	大皿	RP44、 c上層	-	150	(35) <280>	ロクロ 削り高台	稜皿形	白色	染付	外:唐草文 内:山水文	肥前系	19c~	高台裏銘あり
63	227	小鉢	b上層	118	58	58	ロクロ、 型打	端反形	白色	染付	外:武田菱紐文 内:見込・白鷺 文	肥前	1820~ 1860	外面:素書き技法、底部朱書き有、九州(肥前)編年V期以降
63	228	中鉢	a下層、 b下層	202	85	68	ロクロ 削り高台	丸形	白色	染付	外:唐草文 内:区画草花文・ 山水文	肥前	18c後~	輪花鉢、高台裏:二重方形枠「渦福」、漆継
63	229	中鉢	d下層、 c上・下 層	(216)	(97)	90	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	外:唐草文 内:扇に草花文	肥前		口縁:口錆、高台裏銘「元□□化□□」
64	230	中鉢	d上層、 c上・中 層	150	87	74	ロクロ、 蛇の目凹 形高台	端反形	白色	青磁		肥前系		輪花鉢
64	231	中鉢	c下層	(181)	(119)	76	ロクロ、 型打、蛇 の目凹形 高台	端反形	灰白色	色絵染付	外:波濤文 内:口縁牡丹唐 草文	肥前	19c?	口縁部輪花・金彩、染錦、九州(肥前)編年V期か
64	232	中鉢	d上・中 層	(206)	98	81	ロクロ、 型打、蛇 の目凹形 高台	端反形	白色	染付	外:区画草花文? 内:区画草花文・ 見込獅子文	肥前	1820~	型打輪花鉢、焼継ぎ、外:素書き、九州(肥前)編年V期以降
64	233	中鉢	d上・中 層、b下 層、c上 層	(200)	114	87	ロクロ、 型打、削 り高台	丸形	白色	染付	外:山水文 内:山水文・笹 文	肥前系		外面:縞文
64	234	中鉢	a上層	160	80	63	ロクロ、 蛇の目凹 形高台	丸形	白色	染付	内:区画四方禪 文、見込山水文	瀬戸美濃系		輪花鉢、高台畳付施釉
65	235	蕎麦 猪口	c上層	(78)	(47)	57	ロクロ 腰輪高台	桶形	白色	染付	外:草花文	肥前	1700~ 1780	九州(肥前)編年IV期相当
65	236	蕎麦 猪口	c下層	(78)	(54)	54	ロクロ、 蛇の目凹 形高台	桶形	灰白色	染付	外:漢詩文 内:四方禪文、 見込火炎宝珠文			
65	237	蕎麦 猪口	RP80	-	(60)	<25>	ロクロ 蛇の目凹 形高台	桶形	白色	染付	外:笹文 内:見込五弁花	肥前	18c末か	見込:コンニャク印判、高台裏朱書き、焼継ぎ
65	238	合子	a上層、 上層一括	(上) 47 (下)46	(上) 56 (下)46	(上) 11 (下)15	ロクロ		白色	透明釉		瀬戸美濃系		合子蓋
65	239	合子	a上層	96	89	27	ロクロ 削り高台		白色	透明釉		瀬戸美濃	19c末~	銅板転写
65	240	合子	a上層	61	60	11	ロクロ		白色	染付	外:竹文			
65	241	合子	b下層、c 下層、表 土	92	91	14	ロクロ		白色	染付	外:草花文	在地?		合子蓋
65	242	蓋物	c上層	(79)	(184)	39	ロクロ		白色	染付	外:櫛歯文・松 梅文	肥前系		蓋物蓋
65	243	蓋物	b上・下 層	118	65	62	ロクロ 削り高台	半筒形	白色	染付		肥前	1790~ 1860	九州(肥前)編年IV~V期相当
65	244	段重	d下層	(120)	(80)	57	124 ロクロ 削り高台	腰部無加 工	白色	染付	外:みじん唐草 文	肥前	1790~ 1860	九州(肥前)編年V期、東大編年Ⅷ期相当

III 調査の成果

表1 SD1出土磁器製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)				成形	形状	胎土色	釉薬・ 装飾	文様	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高	最大幅								
65	245	段重	c下層	(126)	(64)	48	130	ロクロ 削り高台	腰部括れ 有	白色	染付	外：七宝繫ぎ文	肥前	1790～ 1860	九州(肥前)編年IV～V期相当
65	246	段重	c上層	(140)	(82)	50	142	ロクロ 削り高台	腰部括れ 有	白色	染付	外：みじん唐草 文	肥前	1790～ 1860	九州(肥前)編年V期相当
65	247	餌入	a下層	124	33	43				白色	染付	外：鳥に波文	瀬戸美濃系		
65	248	火入	d上層	(78)	(42)	71		ロクロ 削り高台	半筒形	灰白色	染付	外：不明	肥前系		高台畳付砂付着
65	249	火鉢	c上層、 d上層	152	154	163		ロクロ 削り高台	筒形	白色	染付	外：蛸唐草文・ 口縁雷文	肥前系		高台裏ハリ支え(6個)
66	250	小瓶	a上層、 b中層	18	28	79	40	ロクロ、 輪高台	端反辣蕪 形	白色	染付	草花文	肥前	1800～	鶴首形、九州(肥前)編年V期相当
66	251	小瓶	b下層	19	25	79	38	ロクロ	端反辣蕪 形	灰白色	染付	松葉文	在地?		鶴首形、13の同型品、外面化粧土
66	252	小瓶	c上層	-	40	<72>	61	ロクロ	端反辣蕪 形	灰白色	染付	蛸唐草文	肥前	1800～	鶴首形、畳付部剥落、九州(肥前)編年V期相当
66	253	小瓶	c上層	-	37	<64>	52	ロクロ、 輪高台	端反辣蕪 形	灰白色	染付	草花文	肥前	1800～	鶴首形、高台畳付砂付着、九州(肥前)編年V期相当
66	254	小瓶	b上層	-	42	<119>	56	ロクロ	端反辣蕪 形	白色	染付	松竹梅文	肥前	1800～	鶴首形、九州(肥前)編年V期相当
66	255	小瓶	d上層	12	-	<72>	<46>	ロクロ	端反辣蕪 形	白色	染付	蛸唐草文	肥前系		鶴首形
66	256	小瓶	d上層	-	41	<64>	61	ロクロ	端反辣蕪 形	白色	染付	松竹梅文	瀬戸美濃	19c～	鶴首形
66	257	小瓶	d上・中 層	(17)	37	114	52	ククリ底 高台	端反辣蕪 形	白色	染付	草花文	瀬戸美濃系		鶴首形
66	258	中瓶	SD1一括	-	-	<112>	-	ロクロ	端反辣蕪 形	灰白色	染付	染付文字(志やと う油入)	肥前		鶴首形
66	259	神酒徳利	d上層	-	42	<82>	<53>	ロクロ、 輪高台	瓶子形	灰白色	染付	蛸唐草文	肥前	1780～ 1860	九州(肥前)編年V期相当
66	260	髪油壺	b下層	34	-	<43>	<89>	ロクロ	扁平形	白色	色絵	外：網目に梅花 文	肥前	1660～ 1670	九州(肥前)編年Ⅲ期相当
66	261	髪油壺	b下層	-	48	<86>	96	ロクロ 削り高台	胴丸形	灰白色	染付	梅花文	肥前	18c後～ 19c前	波佐見系、九州(波佐見)編年V-2～3期
66	262	燗徳利	a上層	-	45	<139>		ロクロ、 60型打、割 高台		白色	染付		瀬戸美濃系		
66	263	燗徳利	d上層	32	48	156	54	ロクロ	端反形	白色	染付	放射状文	瀬戸美濃	19c～	
66	264	燗徳利	d上・中 層	29	54	158	61	ロクロ	端反形	白色	染付	瑠璃釉	瀬戸美濃系	19c～	
66	265	燗徳利	c下層	30	(68)	192	(76)	ロクロ		白色	染付		瀬戸美濃系	19c～	
66	266	燗徳利	c上・中 層	31	(60)	194	68	ロクロ		白色	染付	山水文	在地	19c～	
67	267	燗徳利	b下層	23	55	196	70	ロクロ	筒口形	白色	染付	山水文	肥前系	19c～	
67	268	燗徳利	c上・中 層	40	78	240	95	ロクロ	鷺口形	白色	染付	山水文	瀬戸美濃系	19c～	
67	269	仏花瓶	c中・下 層	88	-	<128>		ロクロ、 貼付け	瓶子丸耳 形	灰色	青磁				
67	270	急須	d上層	53	56	57	107	ロクロ、 ククリ底	横手形	白色	染付	草花文	瀬戸美濃系		
67	271	急須	d上層	56	50	61	111	ロクロ、 ククリ底	横手形	白色	染付色絵	草花文	瀬戸美濃系		外面：上絵付・染付
67	272	急須	d上層	54	58	71		ロクロ、 ククリ底	横手形	白色	染付	山水文	瀬戸美濃系		
67	273	急須	d上層、 b中層	60	52	65	100	ロクロ、 高台ククリ 底、外面 鎊文	横手形	白色	染付	漢詩文	瀬戸美濃系		
67	274	急須	d上層	66	66	71	116	ロクロ、 ククリ底	横手形	白色	染付	櫛歯文・山水文	瀬戸美濃系		
67	275	蓋	c下層	-	66	25		ロクロ		白色	染付	外：草花文	瀬戸美濃系		取手径：15mm、急須蓋
67	276	蓋	b中層	-	65	29		ロクロ		白色	染付	外：草花文			取手径：14mm、急須蓋

表1 SD1出土磁器製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)				成形	形状	胎土色	釉薬・ 装飾	文様	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高	最大幅								
68	277	水滴	d上層、 上層一括	(長軸) 82	(最大幅) <21>	54	型打	魚形	白色	透明釉		瀬戸美濃系			
68	278	水滴	b上層	(長軸) 94	-	52	型打	鳥形	白色	透明釉		瀬戸美濃系			
68	279	水滴	c中層	(長軸) 74	(短軸) <38>	26	型打	豆腐形	白色	染付	上部：型打菊花 文	瀬戸美濃系			
68	280	水滴	c中層	(長軸) 60	(短軸) <48>	22	型打	豆腐形	白色	染付	上部：型打菊花 文	瀬戸美濃系	279と同一個体か？		
68	281	中壺	b下層	(90)	-	<150>	(151)ロクロ	胴丸形	灰白色	染付	外：頸部渦巻文・ 体部蔓草文	肥前	17c前	初期伊万里	
68	282	戸車	c下層	(最大 径) 42	(穿径) 12	8	ロクロ	車形	白色	透明釉		瀬戸美濃系	19c～	中央穿孔	
68	283	戸車	b上層	(最大 径) 48	(穿径) 14	8	ロクロ	車形	白色	透明釉		瀬戸美濃系	19c～	中央穿孔	
68	284	散蓮華	a上層	(長軸) 80	(短軸) 27	25	型打		白色	染付	寿字文？	瀬戸美濃	19c～	把手部欠損、東大編年Ⅷa～Ⅸ期	
68	285	ミニチュ ア壺	d上層	(口径) 10	(底径) 22	37	ロクロ、 35底部回転 系切		白色	染付	笹文？	産地不明			
68	286	梅皿	a上層	(最大 径) 128	-	11	型打		白色	透明釉		瀬戸美濃	20c初	西茨1号窯(瀬戸市)出土品同型品	
68	287	筆洗	a上層	(最大 径) 97	-	28	型打		白色	透明釉		瀬戸美濃系	20c初	底部墨書「高等一年 本郷さん ホンゴーキン キンキンさん」	
68	288	乳棒	d中層	(口径) 30	(底径) 14	91	ロクロ		白色	透明釉				全体に被熱痕	
68	289	乳鉢	d上層	(152)	(72)	61	ロクロ、 クリ底高 台		灰白色	透明釉					

表2 SD1出土陶器製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)				成形	形状	胎土色	装飾・釉薬	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高	最大幅							
69	290	小碗	b上層	(53)	28	27	55 ロクロ 削り高台	丸形	灰色	灰釉(淡緑)		大堀相馬系		小坏、高台裏無釉
69	291	小碗	a上層	(56)	28	27	ロクロ 削り高台	丸形	灰色	灰釉(灰)		大堀相馬系		小坏、高台裏無釉
69	292	小碗	b下層	(62)	28	36	ロクロ 削り高台	丸形	灰色	灰釉(淡緑)		大堀相馬系		高台裏無釉
69	293	小碗	RP108	60	21	38	ロクロ 削り高台	半球形	灰色	外：灰釉(透明)、貫入、 草花文				小坏、外面草花文：鉄、呉須絵、漆継ぎ、高 台裏無釉
69	294	小碗	c下層	75	28	43	ロクロ 削り高台	丸形	浅黄色	灰釉(黄橙)、貫入		京・信楽系？		高台裏無釉
69	295	小碗	b上層	(47)	29	36	ロクロ 型打	腰張形	灰色	灰釉(淡緑)				猪口、高台裏無釉
69	296	小碗	c上層、 d上層	61	27	34	手握ね 渦巻高台	腰張形	褐色	外：無釉、上絵花草 内：長石釉				猪口
69	297	小碗	b上層	62	32	38	ロクロ 削り高台	腰張形	灰白色	灰釉(淡緑)				猪口、高台裏無釉
69	298	小碗	上層一括	(64)	29	45	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	灰釉(透明) 外：唐子文				外面唐子文：上絵付け
69	299	小碗	a上層	(72)	39	53	ロクロ	筒形	浅黄色	灰釉(黄橙)、緑釉流し				碁筒底
69	300	小碗	c上層	68	-	45	ロクロ	端反形	灰白色	灰釉				るつぼ、全体に被熱痕
69	301	小碗	c中層	(82)	(34)	53	ロクロ 削り高台	端反形	茶褐色	外：白化粧土、透明釉、 鉄絵 内：白化粧土		在地系？		
69	302	小碗	b下層	(68)	-	49	ロクロ	杉形	灰白色	灰釉(灰)、鉄釉				内外面：掛け分け
69	303	小碗	b下層	(84)	36	59	ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	灰釉、鉄絵		瀬戸美濃 系？		高台裏無釉
69	304	中碗	d上層	(86)	(35)	65	ロクロ 削り高台	丸形	白色	灰釉(灰)		大堀相馬	18c末～ 19c初	高台裏無釉

III 調査の成果

表2 SD1出土陶器製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			成形	形状	胎土色	装飾・釉薬	推定産地	年代	備考	
				口径	底径	器高 最大幅								
69	305	中碗	d下層、 d最下層	-	-	<48>	(器厚) 8	ロクロ	端反形	白色	外：緑釉？		被熱	
69	306	中碗	b下層	(116)	48	79		ロクロ 削り高台	呉器形	黄白色	灰釉(黄)	肥前	1650～ 1690	呉器手碗、高台砂目、九州(肥前)編年Ⅲ期、 東大編年Ⅲa～Ⅳa期
69	307	中碗	a下層	(98)	39	50		ロクロ 削り高台	丸形	灰色	灰釉(緑)	大堀相馬	17c末～ 19c初	高台裏無釉
69	308	中碗	b下層	(96)	42	54		ロクロ 削り高台	丸形	灰色	灰釉(緑)	大堀相馬	17c末～ 19c初	高台裏無釉
69	309	中碗	a下層	(94)	35	56		ロクロ 削り高台	丸形	灰色	灰釉(緑)	大堀相馬	17c末～ 19c初	高台裏無釉
69	310	中碗	d下層	(102)	39	61		ロクロ 削り高台	丸形	灰色	灰釉(緑)	大堀相馬	17c末～ 19c初	高台裏無釉
69	311	中碗	RP82	(103)	39	53		ロクロ 削り高台	丸形	黄白色	灰釉(白)	大堀相馬	18c後～ 18c末	高台裏無釉
69	312	中碗	a下層	(94)	-	<44>	(98)	ロクロ	丸形	灰白色	刻線文上部灰釉(淡緑灰 色)、腰部鉄釉	大堀相馬	18c後～	腰鎗碗、外面：掛け分け
69	313	中碗	c下層	(92)	41	55	93	ロクロ 削り高台	腰折形	黄白色	灰釉(緑)	大堀相馬	18c後～ 18c末	
70	314	中碗	d上・下 層	(90)	(28)	45		ロクロ 削り高台	端反形	灰色	灰釉(緑)、貫入	京・信楽系	1750～ 1860	高台裏無釉、大堀相馬での模倣の可能性有、 東大編年Ⅵb～Ⅸ期
70	315	中碗	d下層	(94)	(31)	51		ロクロ 削り高台	端反形	白色	灰釉(緑)、貫入	京・信楽系	1750～ 1860	高台裏無釉、大堀相馬での模倣の可能性有、 東大編年Ⅵb～Ⅸ期
70	316	中碗	RP45	-	50	<57>	(109)	ロクロ 削り高台	半球形	灰色	灰釉(灰)	瀬戸美濃系		目跡3個、高台裏墨書「モノ」、高台裏無釉
70	317	中碗	b下層	(106)	41	62		ロクロ 削り高台	杉形	灰色	灰釉(淡青)、鉄釉流掛け、 貫入			高台裏無釉
70	318	中碗	c中層	(92)	(40)	50		ロクロ	杉形	灰白色	外：灰釉(乳白)、若松文	京・信楽系	18c中～	高台部内外無釉、外面若松文：呉須・鉄絵
70	319	中碗	c中層	(92)	36	57		ロクロ 削り高台	杉形	白色	灰釉(白)、若松文	京・信楽	18c中～	小杉碗、高台部内外無釉、外面若松文：鉄絵、 東大編年Ⅶ期以降
70	320	中碗	b下層	(104)	40	62		ロクロ 削り高台	杉形	白色	灰釉(淡緑)、若松文	京・信楽系	18c中～	小杉碗、高台部内外無釉、外面若松文：呉須・ 鉄絵、大堀相馬での模倣の可能性有
70	321	中碗	RP90、 RP91、b 下層	(110)	44	66		ロクロ 削り高台	杉形	白色	灰釉(白)、若松文	京・信楽	18c中～	小杉碗、高台部内外無釉、外面若松文：呉須・ 鉄絵、東大編年Ⅴ～Ⅵ期
70	322	大碗	RP121	(150)	57	67		ロクロ 削り高台	天目形	褐色	内外：口縁部白化粧土	肥前(唐津)	17c前	口縁部刷毛目技法、高台露胎、九州編年Ⅱ期 相当
70	323	大碗	c上・中・ 下層	(170)	(91)	69		ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	外：銅緑釉			被熱痕
70	324	仏飯器	b上層	64	56	51		ロクロ、 底部回転 糸切		白色	灰釉(白)			被熱痕、底部墨書「太□」
70	325	仏飯器	b上層	70	47	60		ロクロ、 底部回転 糸切		灰白色	灰釉(透明)・緑釉流掛け	会津本郷？		碎石手？
70	326	仏飯器	b上層	68	42	59		ロクロ、 底部回転 糸切		灰色	灰釉(透明)・緑釉流掛け	会津本郷？		碎石手？
70	327	小皿	RP134	-	-	<27>	(器厚) 4	ロクロ水 引き	平形	灰褐色	灰釉(暗灰)	肥前(唐津)	17c初	灰釉溝緑皿、砂目積み、高台露胎、九州編年 Ⅱ期相当
70	328	小皿	b下・最 下層	(120)	(40)	27		ロクロ水 引き	平形	暗灰色	灰釉(暗灰)	肥前(唐津)	17c初	灰釉溝緑皿、砂目積み、高台露胎、九州編年 Ⅱ期相当
71	329	小皿	b下層	(120)	(36)	29		ロクロ水 引き	平形	灰白色	灰釉(淡緑)	肥前(唐津)	17c初	灰釉溝緑皿、砂目積み、高台露胎、兜巾削り 取り、九州編年Ⅱ期相当
71	330	小皿	b下層	(120)	(42)	27		ロクロ水 引き	平形	赤褐色	灰釉(灰)	肥前(唐津)	17c初	灰釉溝緑皿、砂目積み、高台露胎、九州編年 Ⅱ期相当
71	331	小皿	c下層	129	47	29		ロクロ 削り高台	平形	赤褐色	灰釉(灰)	肥前(唐津)	17c初	被熱、灰釉溝緑皿、砂目積み、高台露胎、九 州編年Ⅱ期相当
71	332	小皿	b最下層	上 (118) 下 (121)	下44	上(24) 下22		ロクロ水 引き	平形	灰白色	灰釉(淡緑)	肥前(唐津)	17c初	灰釉溝緑皿、砂目積み、2枚溶着、九州編年Ⅱ 期相当
71	333	小皿	b中層	(132)	42	33		ロクロ 削り高台	稜皿形	灰褐色	灰釉(灰)	肥前(唐津)	17c前	灰釉溝緑皿、九州編年Ⅱ～Ⅲ期、東大編年Ⅰb ～Ⅲa期相当
71	334	小皿	c上層	-	(46)	<29>		ロクロ 削り高台	丸形	黄白色	内外：灰釉(白) 内鉄・呉須絵	大堀相馬系		内面：目跡2個(推定5個)、漆継
71	335	小皿	d最下層	(126)	(45)	37		ロクロ 削り高台	丸形	白色	外：透明釉 内：銅緑釉	肥前(唐津)	1650～ 1690	内外面：釉薬掛け分け、見込：蛇の目刺ぎ・ 砂目、九州編年Ⅲ期、東大編年Ⅲa～Ⅳa期相 当

表2 SD1出土陶器製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)				成形	形状	胎土色	装飾・釉薬	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高	最大幅							
71	336	小皿	c下層	-	51	<46>	ロク口 削り高台	折縁形	白色	外：透明釉 内：鉄釉・銅緑釉	肥前(唐津)	1690~ 1780	内面：釉薬掛け分け、見込：蛇の目釉剥ぎ、九州編年IV期相	
67	337	小皿	c上層	(115)	(50)	32	ロク口 削り高台	丸形	灰色	内外：透明釉 内：鉄絵	在地		被熱痕	
72	338	小皿	a上・下 層	(128)	(58)	31	ロク口 削り高台	丸形	灰白色	内外：透明釉	在地		内面：目跡4個(推定5個)	
72	339	小皿	a上層	(129)	(60)	37	ロク口 削り高台	丸形	灰白色	灰釉(白)	大堀相馬	18c末~ 19c初	内面：目跡2個(推定5個)	
72	340	中皿	d下層	-	71	<33> <130>	ロク口 削り高台	丸形	白色	灰釉(白)	大堀相馬系		高台裏墨書	
72	341	中皿	d上層	137	69	26	ロク口 削り高台	稜皿形	暗灰色	内外：長石釉・色絵(草花 文)			焼継ぎ、高台削りがかなり雑	
72	342	大皿	a下層	(300)	112	83	ロク口 削り高台	浅丸形	灰色	内外：灰釉に鉄釉流し掛 け			胎土目積み(目跡5個)	
73	343	大皿	c中層、 b上層	266	92	72	ロク口 削り高台	丸形	赤褐色	外：透明釉 内：白化粧土	在地		目跡4個(推定5個)、胎土に長石微細砂を含む	
73	344	大皿	RP119	(374)	(138)	109	ロク口 削り高台	浅丸形	赤褐色	内：白化粧土・鉄・銅緑 釉	肥前(唐津)	1650~ 1690	唐津二彩手、砂目積み、九州編年III期相当、肥前内野山窯	
74	345	中鉢	RP120	-	79	86 <190>	ロク口 削り高台	丸形	赤褐色	灰釉(暗灰)	肥前(唐津)	1594~ 1610	胎土目積み(目跡4個)、九州編年I-2期相当	
74	346	中鉢	上層一括	(176)	(74)	80	ロク口 削り高台	折縁形	赤褐色	陶胎染付	在地 (平清水)	19c後~ 20c初?	陶胎染付鉢	
74	347	中鉢	d下層、 b中・下 層	170	79	67	ロク口 削り高台	端反形	黄白色	灰釉(茶緑) 内：見込山水文			輪花鉢、見込：鉄・呉須絵、相馬系か	
74	348	中鉢	d上・中 層	(187)	(70)	79	ロク口、 口縁貼 付、削り 高台	折縁形	白色	灰釉(黄白)口縁緑釉			目跡5個	
74	349	中鉢	b上・中 層	(186)	(74)	91	ロク口 削り高台	折縁形	赤褐色	外：鉄絵(縞文) 内：灰釉(乳白)			輪花鉢、目跡2個(推定5個)	
75	350	大鉢	a下層、c 上層、d 上・中層	325	110	98	ロク口 削り高台	浅丸形	淡橙色	灰釉(黄白)・鉄絵			胎土：長石微細砂を全体に含む、目跡5個、内面：鉄絵掛け流し	
75	351	大鉢	a下層	(340)	(136)	120	ロク口 削り高台	浅丸形	赤褐色	内：刷毛目波状文	肥前(唐津)	1690~ 1750	九州(肥前)編年IV期、東大編年III期相当	
76	352	片口鉢	上層一括	(112)	(44)	62 (136)	ロク口 削り高台	口縁切 込注 口、丸 形	灰白色	透明釉	在地		高台裏施釉、	
76	353	片口鉢	d上層	160	60	74 (179)	ロク口 削り高台	口縁切 込注 口、丸 形	灰白色	灰釉(明緑灰色)	在地		高台裏施釉、目跡2個(推定5個)	
76	354	片口鉢	c上・中 層	126	52	61 147	ロク口 削り高台	口縁切 込注 口、丸 形	灰白色	灰釉(明緑灰色)	在地		高台裏施釉、目跡4個(推定5個)	
76	355	片口鉢	d上・中 層	(183)	(82)	93 (199)	ロク口 削り高台	口縁切 込注 口、丸 形	灰白色	透明釉	在地		高台裏施釉、目跡2個(推定5個)	
76	356	片口鉢	b中層、 c中層	198	87	100 214	ロク口 削り高台	口縁切 込注 口、丸 形	灰白色	灰釉(明緑灰色)	在地		高台裏施釉、目跡4個(推定5個)	
76	357	片口鉢	c上層	(164)	(68)	84	ロク口 削り高台		明褐色	透明釉	在地		高台裏施釉、目跡4個(推定5個)、焼成不良か	
76	358	片口鉢	a上・中・ 下層、 b上・中・ 下層	(200)	(92)	95 (227)	ロク口 削り高台	口縁切 込注 口、丸 形	灰色	灰釉(浅黄色)緑釉流し	在地		目跡2個(推定5個)	
76	359	捏鉢	d上層	226	97	125	ロク口 削り高台		白色	灰釉(薄紫)	大堀相馬系			
77	360	蓋	RP67	90	-	14	111	ロク口	白色	灰釉(黄白色)				
77	361	灰吹	d中・下 層	50	48	63	63	ロク口 削り高台	閉口形	灰色	青緑釉	大堀相馬系		
77	362	灰吹	c下層	(41)	46	77 (52)	ロク口 削り高台	筒形	赤褐色	外：白化粧土・緑釉流掛 け 内：鉄釉			口縁部敲打痕	
77	363	灰吹	b下層	(43)	49	95 69	ロク口 削り高台	閉口形	白色	灰釉(淡緑)	大堀相馬系		口縁部敲打痕	
77	364	餌猪口	b下層	40	30	31 54	ロク口、 底部回転 系切		灰色	長石釉			被熱痕、底部墨書「南」	

III 調査の成果

表2 SD1出土陶器製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)				成形	形状	胎土色	装飾・釉薬	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高	最大幅							
77	365	香炉	b中層	(76)	49	(82)	ロクロ 輪高台	有三足 半筒形	黄白色	灰釉(白)、内外:貫入(水 裂文)	京・信楽系			
77	366	火鉢	b上層	-	-	<76>	(器厚) ロクロ、 17貼付		灰色	鉄釉、 外:獅子文			体部貼付文のみ残存、器厚は最大厚	
77	367	瓶掛	c中層、 b下層	-	(170)	<59>	<193> ロクロ 削り高台	瓶掛形	灰色	外:緑釉・雷文 内:鉄釉	瀬戸美濃	1800~ 1825	底部:雷文印花技法、底部穿孔、瀬戸窯編年 第三段階第9小期・登窯Ⅷ期、口縁部別個体(水 澱)の可能性有	
77	368	植木鉢	d上層	72	34	46	ロクロ 底部回転 糸切	端反桶 形	褐灰色	外:鉄釉			底部有孔(径7mm)	
77	369	植木鉢	a上層	(120)	(60)	71	ロクロ	鏝緑桶 形	暗灰色	外:線刻鉄釉			底部有孔	
77	370	植木鉢	d上・下 層	(172)	76	108	ロクロ	鏝緑桶 形	暗灰色	外:線刻鉄釉			底部有孔(径20mm)	
78	371	植木鉢	b上層	-	120	<79>	<144> ロクロ 底部回転 糸切		灰黄色	外:緑釉			底部有孔(径16mm)、底部墨書	
78	372	植木鉢	a上層	-	160	<109>	<191> ロクロ		灰黄色	外:白化粧土に緑釉掛け 流し			底部有孔(径16mm)	
78	373	植木鉢	RP68、d 上・中・ 下層	(275)	(154)	170	ロクロ 削り高台	鏝緑桶 形	灰色	外:白化粧土に緑釉掛け 流し・龍文			外面:龍文陰刻、底部有孔	
78	374	搦鉢	a下層、 b下層	(206)	-	<60>	ロクロ	口縁玉 緑形	暗灰色	内外:鉄釉 卸目7本/条	在地系			
78	375	搦鉢	d下層	-	136	<24>	<150> ロクロ 削り高台		褐色	内外:鉄釉	在地系		高台量付砂付着、高台裏銘有	
78	376	搦鉢	RP33	-	(119)	<78>	<204> ロクロ 削り高台		黄灰色	内外:鉄釉	在地系		内面鉄釘付着	
78	377	搦鉢	c中層	-	136	<101>	<261> ロクロ 削り高台		褐色	内外:鉄釉 卸目12本/条	在地系			
78	378	搦鉢	b中層	(379)	-	<99>	<396> ロクロ	口縁玉 緑・ 烏口形	赤褐色	内外:鉄釉 卸目11本/条	在地系		胎土:石英質微細砂を含む	
79	379	搦鉢	RP47、 b上層	(302)	(118)	157	ロクロ 削り高台	口縁外 帯形	暗灰色	内外:鉄釉 卸目12本/条	在地系		胎土:長石質微細砂を含む	
79	380	搦鉢	d上・下 層	(355)	(124)	162	ロクロ 削り高台	口縁玉 緑形	赤褐色	内外:鉄釉 卸目10本/条	在地系		胎土:長石質微細砂を含む	
79	381	搦鉢	RP79、 RP81、d 上・中・ 下層	(370)	124	163	ロクロ 削り高台	口縁玉 緑形	灰色	内外:鉄釉	在地系			
79	382	搦鉢	c中・下 層	367	140	199	389 ロクロ 削り高台	口縁玉 緑・ 烏口形	赤褐色	内外:鉄釉	在地系			
80	383	中瓶	b上層	-	-	<80>	<107> ロクロ 削り高台	肩張形	灰色	鉄釉	瀬戸美濃	1780~	べこかん徳利	
80	384	大瓶	c下層、 d下層	-	(88)	<284>	176 ロクロ 削り高台	鶴首逆 熊形	灰色	灰釉、 鉄絵			長頸球胴形	
80	385	大瓶	表土	-	86	<160>	(168) ロクロ 削り高台	鶴首逆 熊形	にぶい 褐色	陶胎染付(笹文)	在地系 (平清水?)	19c中~ 20c初	長頸球胴形、笹絵徳利、波佐見製品模倣、高 台裏鉄釉	
80	386	大瓶	d上・下 層	-	71	<119>	151 ロクロ 削り高台	鶴首逆 熊形	灰色	灰釉(薄緑)			長頸球胴形	
80	387	大瓶	RP77	-	-	<194>	(154) ロクロ	鶴首逆 熊形	にぶい 褐色	陶胎染付(笹文)		19c中~ 20c初	長頸球胴形、笹絵徳利、波佐見製品模倣	
80	388	大瓶	RP77	-	-	<198>	(198) ロクロ	鶴首逆 熊形	にぶい 褐色	陶胎染付(笹文)		19c中~ 20c初	長頸球胴形、笹絵徳利、波佐見製品模倣	
80	389	大瓶	RP77、 上層一括	41	75	262	157 ロクロ 削り高台	鶴首逆 熊形	にぶい 褐色	陶胎染付(笹文)		19c中~ 20c初	長頸球胴形、笹絵徳利、波佐見製品模倣	
81	390	燗徳利	a上層、 b上層	25	-	<130>	<74> ロクロ	口縁無 装飾形	暗灰色	鉄釉、白泥流し掛け				
81	391	燗徳利	c上・下 層	32	(54)	<155>	(52) ロクロ	烏口形	灰色					
81	392	髪油壺	b上層	-	-	<40>	(52) ロクロ		白色	鮫肌釉	大堀相馬系	19c後~	勿来手、亀裂釉・梅花皮技法	
81	393	仏花瓶	c中層	67	-	<97>	ロクロ、 貼付	瓶子丸 耳形	白色	透明釉・鉄釉掛け	会津本郷		碎石手	
81	394	インク瓶	b上層	41	-	<57>	<84> ロクロ		暗灰色	内外:鉄釉	平清水	20c初~ 中		
81	395	インク瓶	b上層	46	-	<33>	<47> ロクロ		暗灰色	内外:鉄釉	平清水	20c初~ 中		

表2 SD1出土陶器製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)				成形	形状	胎土色	装飾・釉薬	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高	最大幅							
81	396	インク瓶	c上層	-	-	<50>		ロク口	暗灰色	内外：鉄釉	平清水	20c初- 中	体部銘「○にNE」	
81	397	インク瓶	表土	-	(84)	<58>		ロク口	暗灰色	内外：鉄釉	平清水	20c初- 中	体部銘「SHINOZAKI'S CHAMPION INK TOKYO」、篠崎インキ製造株式会社インキ瓶(筆 記用)、24oz (約4合)瓶か	
81	398	インク瓶	c中層	-	(118)	<100>		ロク口	暗灰色	内外：鉄釉	平清水	20c初- 中	体部銘「MARUZENS INK☆TOKYO☆」、丸善株 式会社インク瓶、24oz (約4合)瓶か	
81	399	土瓶	d上層、 c下層	(86)	-	<64>		ロク口	丸形、 鉄砲口	灰色	青緑釉	大堀相馬系	19c中～	穴4個、東大編年Ⅷa～IX期
81	400	土瓶	d上層、 c中層	(66)	-	<65>	(120)	ロク口	茶釜形 鉄砲口	暗灰色	青緑釉			穴2個
82	401	土瓶	b上層	(60)	60	98	(178)	ロク口 、貼付 、鎚文	算盤玉 形、 鉄砲口	灰色	鉄釉	瀬戸美濃系	18c後～	底部被熱痕、穴3個、碁筒底、三足
82	402	土瓶	RP17、 a上層	74	92	135	197	ロク口、 貼付	球形	褐色	三彩(白化粧土、鉄釉)、 梅花文	大堀相馬系	19c～	三彩土瓶、碁筒底、三足
82	403	土瓶	c下層	84	-	<95>	177	ロク口、 貼付	丸形、 溜口	灰白色	灰釉(灰)、鉄・呉須絵(葡 萄文)			穴7個
82	404	蓋	b上層	8	24	19	30	ロク口	山蓋	灰黄褐 色	外：鉄釉流し掛け			水注類蓋
82	405	小水注	a上層	(63)	(37)	40	90	ロク口、 貼付	半月口 形	灰色	灰釉	瀬戸美濃系		
82	406	蓋	RP63	54	-	26		型打		灰黄色	外：鉄釉・白泥			水注類(四角土瓶)蓋、外面：象嵌技法
82	407	蓋	d中層	24	46	19		ロク口、 貼付		灰色	外：青緑釉			水注類蓋、有孔
82	408	蓋	b下層	8	62	15		ロク口	落とし 蓋	白色	外：鉄釉?			水注類蓋、有孔(未成)、全体に被熱痕
82	409	蓋	a上層、 b上層	42	30	22		ロク口 貼付	落とし 蓋	暗褐色	外：白化粧土、呉須絵			水注類蓋、有孔、犬型把手
82	410	甕	d上・中・ 下層	300	106	156		ロク口	灰色	灰釉に 口縁白 泥		在地		湯通し、底部有孔(13個確認)
82	411	甕	RP135	-	-	<44>	(器厚) 7	ロク口		灰色	内外：鉄釉	瀬戸美濃系		
83	412	壺	c上層	44	29	42	58	ロク口	胴丸形	灰色	灰釉(淡緑)	瀬戸美濃系		
83	413	小甕	b中層、 c下層	72	77	84	104	ロク口 底部回転 系切		暗灰色	鉄釉			
83	414	小甕	d上・中 層	(70)	(60)	95	(114)	ロク口 底部回転 系切		暗灰色	鉄釉			底部墨書
83	415	小甕	b下層	-	70	<112>	(136)	ロク口 底部回転 系切		暗灰色	外：鉄釉に白泥流し掛け			
83	416	壺	b中層	(63)	(70)	112	122	ロク口	胴丸形	黄灰色	外：山水文			陶胎染付
83	417	壺	上層一括	-	-	<51>	(器厚) 7	ロク口	胴丸形	赤褐色	白化粧土、呉須絵	平清水	19c末～ 20c初	陶胎染付
83	418	小甕	c下層	102	96	174	138	ロク口 底部回転 系切		暗灰色	海鼠釉			
83	419	小甕	d上・中 層	(119)	62	125	(120)	ロク口 底部回転 系切		淡橙色	外：灰釉(黄) 内：鉄釉			体部有孔
83	420	小甕	d下層	119	96	167	150	ロク口 底部回転 系切		黒褐色	鉄釉			
83	421	小甕	d上層	(156)	101	166	(160)	ロク口 底部回転 系切		橙色	鉄釉			
83	422	小甕	上層一括	-	(92)	<172>	(194)	ロク口 削り高台		暗灰色	鉄釉			内面：炭化物付着
83	423	小甕	b下層	-	116	<115>	(192)	ロク口 底部回転 系切		暗灰色	外：灰釉(緑)に白泥流し 掛け	肥前(唐津) 系		
83	424	小甕	b上層、 c上層	176	-	<170>	188	ロク口		暗赤褐 色	灰釉に口縁白泥			
84	425	中甕	a上層、 d上・中 層	(237)	(91)	(289)	(256)	ロク口		赤褐色	内外：鉄釉			
84	426	中甕	d上・下 層	(316)	-	<141>	320	ロク口		赤褐色	内外：鉄釉			

表2 SD1出土陶器製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)				成形	形状	胎土色	装飾・釉薬	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高	最大幅							
84	427	中甕	d上層、 c下層	(362)	-	<221>	(366)	ロク口	灰白色	内外：鉄釉			口縁Γ字形	
84	428	中甕	RP60	309	160	378	330	ロク口	灰色	鉄釉			内面見込・高台裏：砂利付着	
85	429	中甕	a下層、 b下層	330	149	347	370	ロク口	灰白色	内外：鉄釉				
85	430	中甕	a下層、 b下層	(290)	-	<190>	(344)	ロク口	赤褐色	外：白化粧土・松葉文 内：鉄釉	肥前(唐津)	17c~ 18c	唐津二彩手、外面松葉文：鉄・銅緑釉	
85	431	中甕	d上・中 層	278	128	288	323	ロク口 削り高台	赤褐色	外：白化粧土・松葉文・ 刷毛目	肥前(唐津)	17c~ 18c	唐津二彩手、外面松葉文：鉄・銅緑釉	
86	432	蓋	d上層	154	45	43		ロク口	端反形 灰色	外：鉄釉・笹絵(白泥) 内：鉄釉			土鍋類蓋	
86	433	蓋	RP62、 上層一括	(210)	(82)	32		ロク口	灰色	外：線刻鉄釉 内：灰釉(灰)			土鍋類蓋、目跡3個(推定5個)	
86	434	土鍋	d上層	150	57	69	165	ロク口 貼付	丸形三 足、 環状双 耳形 褐色	鉄釉?			在地系	
86	435	土鍋	c上層、 d上層	(204)	54	67	(210)	ロク口 貼付	丸形無 足、 環状双 耳形 灰色	鉄釉?			在地系	
86	436	土鍋	b上層	(207)	63	64	(215)	ロク口 貼付	丸形無 足、 紐状双 耳形 灰色	鉄釉?			在地系	
86	437	土鍋	b上層、 c中層	(236)	(98)	119		ロク口	丸形無 足、 紐状双 耳形 褐色	灰釉(淡緑)			在地系 内外煤痕、把手残存せず	
86	438	土鍋	d上層	(185)	-	98	(210)	ロク口 貼付	紐状双 耳形 灰色	灰釉(淡緑)				
86	439	土鍋	d下層	(188)	83	(95)	(207)	ロク口 貼付	丸形三 足、 紐状双 耳形 灰白色	鉄釉			内外煤痕、脚欠損	
87	440	土鍋	c中層	(150)	(60)	72	(164)	ロク口 貼付	紐状双 耳形 暗灰色	鉄釉			底部煤痕	
87	441	土鍋	b上・下 層	(246)	(88)	129	<272>	ロク口 貼付	丸形三 足、 紐状双 耳形 暗灰色	灰釉(緑)				
87	442	土鍋	RP73、 c上層	(148)	76	45		ロク口、 削り	暗灰色	外：鉄釉・飛鉋技法				
87	443	土鍋	c上層、 b上・中 層	209	90	103	220	ロク口 貼付	丸形三 足、 板状双 耳形 灰赤色	鉄釉			内外煤痕	
87	444	行平鍋	b上層	148	60	67		ロク口	丸形無 足 暗灰色	外：飛鉋技法 無釉		1780~	把手・注口部欠損	
87	445	行平鍋	b上層	-	-	(長軸) 72	(把手 幅)手 握ね 29		明褐色	鉄釉・人物文(印花)			行平鍋把手部分のみ残存	
87	446	行平鍋	b下層	-	-	(長軸) 73	(把手 幅)手 握ね 33		灰色	鉄釉・草花文(印花)			行平鍋把手部分のみ残存	

表3 SD1出土陶器乗燭 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)				成形	胎土色	成形	装飾 釉薬	推定 産地	備考
				口径	底径	器高	最大幅						
87	447	乗燭	c上・中層	42	29	31	47	10たんころ形	灰色	ロクロ、底部回転糸切、軸貼付	鉄釉	在地	
87	448	乗燭	上層一括	51	29	27	54	15たんころ形	灰色	ロクロ、底部回転糸切、軸貼付	鉄釉	在地	
87	449	乗燭	c上層	45	29	34	49	13たんころ形	暗灰色	ロクロ、底部回転糸切、軸貼付	鉄釉	在地	
87	450	乗燭	d上層	60	37	35	65	23たんころ形	暗灰色	ロクロ、底部回転糸切、軸貼付	鉄釉(全面)	在地	底部回転糸切無調整
87	451	乗燭	d上層	43	37	43	45	台付た17んころ形	暗灰色	ロクロ、底部回転糸切、軸貼付	鉄釉	在地	底部軸孔(径6mm)
87	452	乗燭	c下層	(45)	(40)	48	48	台付た17んころ形	灰黄色	ロクロ、底部回転糸切、軸貼付	鉄釉	在地	底部軸孔(径4mm)
87	453	乗燭	RP58	(66)	47	59	(70)	台付た15んころ形	灰色	ロクロ、底部回転糸切、軸貼付	鉄釉	在地	底部軸孔(径5mm)
87	454	乗燭	c中層	80	62	64	82	台付た28んころ形	褐色	ロクロ、底部回転糸切、軸貼付	鉄釉	在地	底部軸孔(径6mm)
87	455	乗燭	c下層	(39)	37	56	53	台付た12んころ形	灰白色	ロクロ、底部回転糸切、軸貼付	鉄釉	在地	底部軸孔(径10mm)
87	456	乗燭	c下層	46	42	56	55	台付た15んころ形	灰白色	ロクロ、底部回転糸切、軸貼付	鉄釉	在地	底部軸孔(径17mm)
87	457	乗燭	a下層	(49)	40	58	58	台付た8んころ形	灰色	ロクロ、底部回転糸切、軸貼付	鉄釉	在地	底部軸孔(径4mm)
87	458	乗燭	RP85	(49)	49	63	63	台付た18んころ形	灰色	ロクロ、底部回転糸切、軸貼付	鉄釉	在地	底部軸孔(径6mm)

表4 SD1出土土器・炆器製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)				成形	形状	胎土色	装飾・釉薬	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高	最大幅							
88	459	小碗	d上層	(60)	-	<26>		ロクロ	端反形	灰色	外：印花技法 内：透明釉			炆器質
88	460	小皿	c上・下層	87	52	13		ロクロ、型打、無高台		赤褐色	内：格子・木の葉文			炆器質、輪花皿
88	461	土師質カワラケ	d中層	55	20	13		手捏ね		褐色	素焼き	在地系		
88	462	土師質火鉢?	c中・下層	(228)	-	<80>		ロクロ		褐色	素焼き 外：印花文	在地系		
88	463	瓦質火鉢	d下層	-	(182)	<76>	<201>	ロクロ叩き	底部有脚	黒色	外：叩き痕	在地系		
88	464	土師質風軒	d上層	-	86	41	<108>	ロクロ貼付	底部有脚	白色	素焼き			体部「乾」銘(押印)、底部墨書
88	465	土師質五徳	a上層	(300)	(270)	63		ロクロ		灰色	素焼き	在地系		
88	466	播鉢	d下層	-	-	<50>	(器厚)9	ロクロ	口縁外帯三段・口縁内凸帯小形	赤褐色	内外：無釉 卸目10本/条	備前		炆器
88	467	播鉢	a上層	-	(82)	<54>	<171>	ロクロ、底部回転糸切、無高台		暗灰色	口縁：鉄釉 卸目7本/条	肥前	1630~1690	炆器、卸目：放射状、九州編年II~III期
89	468	急須	b上層、RP66	(68)	52	69	(92)	ロクロ、クリ底	横手形	暗灰色	無釉、長石釉流し掛け			炆器質、注口部欠損
89	469	急須	c中・下層	60	-	<30>	95	ロクロ	横手形	灰褐色	無釉			炆器質、注口部欠損
89	470	急須	b上層	(長軸)74	(短軸)31	(取手幅)24		手捏ね		褐色				取手のみ残存、「山」銘押印
89	471	蓋	a上層	13	44	19		ロクロ		暗灰色				炆器質、急須蓋、有孔
89	472	蓋	d上層	10	58	15		ロクロ		暗灰色				炆器質、急須蓋、有孔

III 調査の成果

表4 SD1出土土器・炆器製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)				成形	形状	胎土色	装飾・釉薬	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高	最大幅							
89	473	蓋	b上層	(10)	64	15		ロクロ	暗灰色				炆器質、急須蓋、有孔	
89	474	秉燭?	上層一括	49	32	19		手捏ね	灰黄褐色	無釉	在地系		芯立て幅5mm、内面煤痕	
89	475	土人形	b上層	(長軸) 43	-	(短軸) 20	(器厚) 9	手捏ね	褐色	無釉	在地系		首部のみ	
89	476	不明土製品	c中層	55	43	(器厚) 9		手捏ね	褐色	無釉	在地系		外面：墨書	
89	477	ミニチュア土器	上層一括	24	-	10		手捏ね	茶釜蓋形 褐色	透明釉	在地系		施釉土器	
89	478	ミニチュア土器	c上層	(50)	(30)	18		ロクロ、 底部回転 糸切	鉢形 褐色	透明釉	在地系		最大径(65)mm	
89	479	ミニチュア土器	a上層	(58)	(36)	45		ロクロ、 底部糸切	茶釜形 褐色	鉄釉	在地系		最大径(78)mm	
89	480	土錘	c下層	45	14	(孔径) 3		手捏ね	褐色	無釉	在地系			
89	481	不明土製品	上層一括	59	43	54		手捏ね	暗灰色	自然釉	在地系			
89	482	瓦質焙烙	a上・中・ 下層	(296)	(220)	48		ロクロ	底平形 褐色	素焼き	在地系		体部有孔	
90	483	土師質 火消壺	a下層、 b下層	(236)	-	<207>	(288)	ロクロ ナデ	褐色	素焼き	在地系			
90	484	壺	a下層	-	-	-		ロクロ	褐色	内外：鉄釉 外：印花文			陶器	
90	485	甕	b上・下 層、c上 層、d上 層	(656)	(296)	(口縁) <113> (底) <472>	<654>	ロクロ	白色	外：鉄釉			陶器	

表5 SD1出土土器焼台 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)				成形	形状	胎土色	装飾・釉薬	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高	最大幅							
91	486	桔梗台	c上層	11	46			ロクロ、 削り、回 転糸切	5足	灰色	素焼き	在地		脚間1回切り(時計周り)
91	487	桔梗台	c下層	13	46			ロクロ、 削り、回 転糸切	5足	白色	素焼き	在地		脚間2回切り、台上下部墨書記号あり
91	488	桔梗台	d上層	14	51			ロクロ、 削り、回 転糸切	5足	灰白色	素焼き	在地		脚間1回切り(時計周り)、刻書
91	489	桔梗台	b中層	15	63			ロクロ、 削り、回 転糸切	5足	暗灰色	素焼き	在地		脚間1回切り(時計周り)
91	490	桔梗台	b中層	11	68			ロクロ、 削り、回 転糸切	5足(1 足欠損)	灰色	素焼き	在地		脚間1回切り(時計周り)
91	491	桔梗台	上層一括	17	73			ロクロ、 削り、回 転糸切	5足	暗褐色	素焼き	在地		脚間1回切り(時計周り)、刻書
91	492	桔梗台	b下層	18	78			ロクロ、 削り、回 転糸切	5足	褐色	素焼き	在地		脚間1回切り(時計周り)、刻書
91	493	桔梗台	c上層	17	82			ロクロ、 削り、回 転糸切	5足(1 足欠損)	白色	素焼き	在地		脚間1回切り(時計周り)
91	494	桔梗台	a下層	23	90			ロクロ、 削り、回 転糸切	5足	褐色	素焼き	在地		脚間1回切り(時計周り)
91	495	桔梗台	a下層、 c中層	20	113			ロクロ、 削り、回 転糸切	5足(2 足欠損)	褐色	素焼き	在地		脚間1回切り(時計周り)、刻書
91	496	桔梗台	上層一括	30	117			ロクロ、 削り、回 転糸切	5足	褐灰色	素焼き	在地		脚間1回切り(時計周り)、中央穿孔、脚部先端に磁器滓着
92	497	焼台	c上層	8	45			型打 貼付	方形、 4足	灰色	素焼き	在地		台部布目圧痕、脚部先端に磁器滓着
92	498	焼台	上層一括	15	57			型打 貼付	丸形、 4足	台部灰 色、脚 部白色	素焼き	在地		台部布目圧痕、脚部先端に磁器滓着

表5 SD1出土土器焼台 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)				成形	形状	胎土色	装飾・釉薬	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高	最大幅							
92	499	焼台	c中層	13	57		型打 貼付	丸形、 4足	台部褐色、 脚部灰白色	素焼き	在地		台部布目圧痕、脚部先端に磁器滓附着	
92	500	焼台	c上層	13	56		型打 貼付	丸形、 4足	台部褐色、 脚部白色	素焼き	在地		台部布目圧痕、脚部先端に磁器滓附着	
92	501	焼台	b中層	12	63		型打 貼付	丸形、 4足	台部暗 褐色、 脚部白 色	素焼き	在地		台部布目圧痕、脚部先端に磁器滓附着	
92	502	焼台	c下層	14	66		型打 貼付	丸形、 4足	台部褐色、 脚部白色	素焼き	在地		台部布目圧痕、脚部先端に磁器滓附着	
92	503	焼台	a上層	15	68		型打 貼付	丸形、 4足	台部褐色、 脚部黄白 色	素焼き	在地		台部布目圧痕、胎土：長石含む	

表6 SD1出土瓦 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)				成形	形状	胎土色	装飾・釉薬	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高	最大幅							
92	504	瓦	a上層	<49>	-	49	204	軒平瓦	橙色	鉄釉・唐草文	在地系		施釉瓦	
92	505	瓦	c中層	<95>	-	38	341	軒平瓦	暗灰色	唐草文	在地系		黒瓦	
92	506	瓦	RP104	<59>	75	-	280	軒棧瓦	暗灰色 黒褐色	連珠三巴文	在地系		施釉瓦	
92	507	瓦	RP105	<25>	135	-	287	軒丸瓦	灰白色	連珠三巴文	在地系		黒瓦	
92	508	瓦	上層一括	<147>	142	-	1344	軒丸瓦	明褐色	連珠三巴文	在地系	18c前~	赤瓦	

表7 SD1出土陶器・土器・炆器製品（その他） 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)				成形	形状	胎土色	装飾・釉薬	推定産地	年代	備考
				長軸	短軸	厚高	重量 (g)							
93	509	窯壁?	RP113	125	86	78	720						写真のみ	スサ入りの土に溶けた釉薬
93	510	スラグ	b下層、 d上・下層	106	84	40	420			碗型滓			写真のみ	3点。大きさは一番大きいもの。 重量は合計。

表8 SD1出土瓦 集計表

分類	破片点数			重量 (g)
	黒瓦	赤瓦	施釉瓦	
軒丸瓦	1			287
軒棧瓦		1		1,344
軒平瓦			1	204
丸瓦		63		13,852
		12		3,711
		209		25,009
平瓦 (棧瓦)		58		5,516
			237	10,453
総計	274	71	239	60,997

※ 墨書遺物 釈文の凡例

□□□ 欠損文字のうち、字数が確定できるもの。
 [] 欠損文字のうち、字数が確定できないもの。
 ××× 前後に文字の続くことから内容上推定されるが、折損などで文字が失われているもの。
 「 」 木簡の上端・下端が原形を留めていることを示す。

※ 墨書の判読は、山形大学人文学部准教授 三上喜孝氏にご教示いただいた。

III 調査の成果

表9 SD1出土木製品 漆器椀 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			装飾技法			体部文様	備考
				口径	底径	器高	最大幅	外面塗り	内面塗り		
95	511	漆器椀	d最下層	<128>	64	<73>	黒	赤	赤	草花文	腰丸椀(三重椀)、高台裏銘:二重格子
95	512	漆器椀	a下層	<112>	62	<68>	黒	黒			腰丸椀(三重椀)
95	513	漆器椀	RW130	<132>	64	<72>	黒	黒			腰丸椀(三重椀)
95	514	漆器椀	a下層	114	51	52	黒	黒			腰丸椀(三重椀)、底部有孔(径8mm)
95	515	漆器椀	c下層	-	56	<59>	<123>黒	赤	赤	草花文	腰丸椀(三重椀)
95	516	漆器椀	d下層	<118>	61	<63>	赤	赤			腰丸椀(三重椀)、底部有孔(径31×24mm)
95	517	漆器椀	d最下層	<118>	<54>	<62>	赤	赤			腰丸椀(四重椀)、高台裏銘有
95	518	漆器椀	b下層	(111)	55	73	(115)黒	赤	赤	丸に宝文?	腰丸椀(四重椀)
95	519	漆器椀	d中層	(118)	58	70	黒	黒			腰丸椀(四重椀)
95	520	漆器椀	RW86	(124)	55	56	黒	黒			腰丸椀(四重椀)
95	521	漆器椀	a下層	-	53	<51>	<112>黒	黒			腰丸椀(四重椀)、高台裏銘「か」
95	522	漆器椀	RW111	-	56	<43>	<126>黒	黒			腰丸椀(四重椀)、高台裏銘有
96	523	漆器椀	b下層	(120)	57	50	赤・黒	赤			高台裏黒漆
96	524	漆器椀	b下層	-	<52>	<58>	<108>黒	赤	黄	丸に松皮菱	腰丸椀(四重椀)、高台裏「花田?」
96	525	漆器椀	b下層	-	<48>	<21>	<86>黒	赤	黄	?	腰丸椀(四重椀)、底部有孔(径8mm)
96	526	漆器椀	d下層	-	<43>	<38>	<104>黒	赤	赤	丸に桔梗文	腰丸椀(四重椀)
96	527	漆器椀	a下層	(125)	(61)	56	赤	赤			一文字腰椀、内面漆膜殆ど剥落
96	528	漆器椀	a下層	(109)	64	69	赤	赤			一文字腰椀
96	529	漆器椀	a下層	-	57	<53>	<112>赤	赤			一文字腰椀、高台裏銘「□に原」?
96	530	漆器椀	d下層	-	63	<43>	<124>黒	赤			平椀か壺椀
96	531	漆器椀	d中層	-	<52>	<25>	<104>赤	赤			平椀か壺椀
96	532	漆器椀	RW116	-	<52>	<22>	<140>黒	黒			平椀か壺椀
96	533	漆器椀	b下層	<116>	<65>	43	121黒	黒			平椀か壺椀
96	534	漆器 天目台	c下層	70	98	19	158黒	黒	赤	梅花、丸文	(孔径50mm)
96	535	漆器 天目台	RW112	51	98	27	155黒	黒			(孔径51mm)
97	536	漆器蓋	d下層	-	39	<30>	<82>黒	赤			
97	537	漆器蓋	b中層	90	<41>	<33>	黒	赤	赤		
97	538	漆器蓋	c中層	(91)	<48>	<38>	黒	赤	黄	丸に木瓜	
97	539	漆器蓋	a下層	90	46	28	黒	赤	黄	?	
97	540	漆器蓋	d下層	106	<46>	<32>	黒	赤	黄	丸に草花文	
97	541	漆器蓋	d中層	98	52	34	黒	赤			
97	542	漆器蓋	a下層	-	<50>	35	<105>黒	赤			被熱痕

表9 SD1出土木製品 漆器椀 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)				装飾技法			体部文様	備考
				口径	底径	器高	最大幅	外面塗り	内面塗り	文様塗り		
97	543	漆器蓋	b中層	107	47	35		黒	黒		高台裏銘有	
97	544	漆器蓋	d下層	(52)	<104>	<32>		黒	赤	赤	三引両文	高台裏銘有
97	545	漆器蓋	b下層	122	50	<24>		赤	赤			
97	546	漆器蓋	a下層	91	43	25		黒	赤	黄	丸に植物文	高台裏文様有
97	547	漆器蓋	d下層	107	<50>	<24>		黒	赤	赤・黄		
97	548	漆器蓋	b下層	(109)	<51>	<31>		赤	赤			高台裏銘「五十嵐」
97	549	漆器蓋	b中層	(107)	46	24		黒	赤			
97	550	漆器蓋	c下層	96	<41>	<20>		黒	赤			底部有孔(径11mm)
97	551	漆器蓋	b下層	-	<42>	<23>	<110>	赤	赤			
97	552	漆器蓋	a下層	(128)	50	<35>		赤	赤			
97	553	漆器蓋	d中層	92	<48>	33		赤	赤			高台裏銘有
97	554	漆器蓋	b下層	<102>	<44>	<25>		黒	黒			底部方形孔(7×5mm)

表10 SD1出土木製品 曲物 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)				形状	備考
				口径	底径	器高	最大幅		
100	555	曲物	c中層	200	208	52			わっぱ蓋
100	556	曲物	c中層	186	180	100			わっぱ、外側墨書「戌寅九月廿八日□(潤カ) 山藤屋」
100	557	曲物	d中層	108	118	52			底板分離(法量:最大径108mm・器厚7mm)
100	558	曲物	d下層	66	80	55			
100	559	曲物	SD1一括	100	100	56			
100	560	曲物	RW89	(176)	(180)	72			付属品あり(法量:長軸76mm・短軸20mm・器厚12mm)
104	561	柄杓	a下層	(長軸) 76	(短軸) 70	(器厚) 22			写真のみ、柄の当て具
100	562	曲物	a下層	-	215	17			提灯底部
100	563	桶	c中層	(長軸) 288	(短軸) 52	-			桶の手持ち部のみ残存

表11 SD1出土木製品 木蓋 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)		形状	区分	備考
				直径	器厚			
101	564	木蓋	a下層	62	5	丸形	小型	
101	565	木蓋	下層一括	65	2	丸形	小型	黒色付着物、両面中央部にくぼみ
101	566	木蓋	a中層	78	6	丸形	小型	被熱、一部燃焼による欠損と炭化
101	567	木蓋	b下層	98	6	丸形	小型	
101	568	木蓋	a下層	98	9	丸形	小型	

III 調査の成果

表 11 SD1 出土木製品 木蓋 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)		形状	区分	備考
				直径	器厚			
101	569	木蓋	d 下層	102	6	丸形	小型	表面黒漆塗り
101	570	木蓋	c 下層	96	5	丸形	小型	
101	571	木蓋	c 下層	118	6	丸形	中型	一部炭化および炭化物付着
101	572	木蓋	a 中層	112	11	丸形	中型	表裏黒漆塗り
101	573	木蓋	RW95	141	6	丸形	中型	表裏赤漆塗り
101	574	木蓋	b 下層	144	14	丸形	中型	
102	575	木蓋	b 下層	176	9	丸形	中型	
102	576	木蓋	b 中層	155	13	丸形	中型	右側穿孔有 (径 8 mm)
102	577	木蓋	d 中層	154	11	丸形	中型	穿孔有 (径 18 mm)
102	578	木蓋	RW117	317	14	丸形	中型	
102	579	木蓋	RW94	280	14	丸形	大型	
104	580	木蓋	d 中層	271	10	丸形	大型	写真のみ、割れたものを目釘で補修
103	581	木蓋	b 中層	448	24	丸形	大型	
103	582	木蓋	RP92	(472)	28	丸形	大型	

表 12 SD1 出土木製品 台所用品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			断面形状	備考
				長軸	短軸	高 / 厚		
105	583	杓文字	b 下層	270	79	10		
105	584	篋	b 下層	146	32	9		
105	585	箸	b 下層	188	-	7	角形	片口型
105	586	箸	a 下層	(207)	-	6	丸形	塗箸、表面赤漆塗り
105	587	箸	b 下層	232	-	6	丸形	寸胴型
105	588	杓子	d 中層	92	89	26		挽物、柄が欠損
105	589	木皿	c 下層	(口径) 94	(底径) 58	(器高) 12		
105	590	木皿	c 下層	(口径) 95	(底径) 56	(器高) 11		
105	591	木皿	a 下層	(口径) 82	(底径) 48	(器高) 17		
106	592	杵?	b 下層	1095	87	-		
106	593	大鉢	RW125	(口径) 500	(底径) 384	562		

表 13 SD1 出土木製品 工具 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			形状	備考
				長軸 (主軸)	短軸	高/厚		
107	594	刷毛	d 中層	153	116	14	柄上部有孔 (径 5 mm)	
107	595	刷毛	a 上層	222	84	15	柄上部有孔 (径 6 mm)	
107	596	刷毛	a 下層	118	144	5	柄中央部有孔 (径 7 mm)	
107	567	横槌	b 下層	(最大 長) <204>	(最大 径) 122	(取手 径) 32		
107	598	鍬	d 下層	326	121	33	上部に方孔 (71×31 mm)	

表 14 SD1 出土木製品 調度品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			形状	備考
				長軸	短軸	高/厚		
108	599	箱?	d 中層	51	<27>	3	蒔絵	
108	600	櫛	c 下層	<89>	60	5	漆工品、黒漆に赤漆扇文様	
108	601	櫛	c 下層	<73>	36	8		
108	602	盆	a 下層	(口径) (370)	(底径) (248)	35	漆工品、内面赤漆・外面黒漆	
108	603	膳?	c 下層	(上部 径) 16	(底部 径) 72	(器高) <36>	脚部：赤漆、裏：黒漆	
108	604	膳	RW99	146	38	5	折敷脚部、表裏：赤黒漆	
108	605	膳	a 中層	79	62	5	折敷脚部、表裏：赤黒漆	
108	606	膳	b 下層	165<119>		5	折敷台部、表：赤漆、裏：黒漆	
108	607	不明木製 品	SD1 一括	(主軸) 297	314	11		

表 15 SD1 出土木製品 下駄 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			形状			備考
				長軸	短軸	高さ	台形状	歯形態	目の位置	
111	608	連歯 下駄	d 下層	135	66	31	角形	後歯前方	子供用	
111	609	連歯 下駄	RW101	239	91	41	角形	後歯前方		
111	610	連歯 下駄	a 下層	235	111	48	角形	後歯前方		
111	611	連歯 下駄	a 下層	231	104	41	角形	後歯前方		
111	612	連歯 下駄	RW102	234	109	43	角形	後歯前方	台表面に十字削り痕	
111	613	連歯 下駄	c 中層	231	94	43	角形	後歯前方		
112	614	連歯 下駄	RW114	228	107	40	角形	後歯前方		
112	615	連歯 下駄	b 下層	248	84	45	角形	後歯前方	台表面に鉄形刻印	
112	616	連歯 下駄	RW115	240	121	60	角形	後歯前方		
112	617	連歯 下駄	c 中層	227	113	53	丸形	後歯前方		
112	618	連歯 下駄	RW103	222	122	64	丸形	後歯前方		

表 15 SD1 出土木製品 下駄 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			形状			備考
				長軸	短軸	高さ	台形状	歯形態	目の位置	
112	619	連歯 下駄	d 中層	222	87	33	丸形		後歯前方	
113	620	差歯 下駄	d 中層	240	87	<35>	角形	陰卵型	後歯前方	
113	621	差歯 下駄	b 下層	219	84	<46>	角形	陰卵型	後歯前方	
113	622	差歯 下駄	b 下層	229	90	79	角形	陰卵型	後歯前方	表面黒漆塗り
113	623	差歯 下駄	a 下層	198	71	<32>	丸形	陰卵型	後歯前方	
113	624	差歯 下駄	a 中層	225	74	<45>	丸形	陰卵型	後歯前方	表面黒漆塗り
113	625	差歯 下駄	a 下層	<185>	71	39	丸形	陰卵型	後歯前方	表面黒漆塗り
114	626	差歯 下駄	b 下層	243	59	<60>	丸形	露卵型	後歯前方	
114	627	差歯 下駄	c 最下層	200	78	40	丸形	露卵型	後歯前方	
114	628	差歯 下駄	d 下層	162	56	<24>	丸形	露卵型	後歯後方	表面赤漆塗り
114	629	差歯 下駄	a 下層	<172>	58	<23>	角形	露卵型	後歯後方	表面赤漆塗り
114	630	差歯 下駄	b 下層	<152>	80	<48>	角形	露卵型		表面赤漆塗り
114	631	差歯 下駄	a 下層	<193>	68	<26>	丸形	露卵型	鼻緒孔無し	

表 16 SD1 出土木製品 墨書木製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			形状	備考
				長軸	短軸	厚さ		
117	632	木蓋	SD1 一括	139	-	6	丸形	表:「□□ 上々黒□」
117	633	木蓋	c 下層	52	-	4	丸形	上部墨書「大神宮 御洗米」
117	634	札?	b 中層	42	38	9	角形	表裏:墨書記号
117	635	加工木片	SD1 一括	126	39	7	角形	下部墨書「イ」
117	636	加工木片	d 下層	117	28	2		表:「× 五十まい」 裏:「× 十四日」
117	637	加工木片	d 下層	148	40	7		表:「□□ □□」 裏:「上 □□□□ □□□□ □□□□」
117	638	札	c 下層	187	60	6	角形	表:「□に久(屋号) 四十四 宮八幡山 備後表三拾枚入 山形□ 西川孫七」裏:「□□□□」
117	639	札	d 中層	123	64	3	角形	表:「日光山(後欠)」 裏:墨付
117	640	部材	b 下層	139	75	81		左側面:絵カ、表:「明和九年 きり大 壬辰六月」、右側面:「□上 □□□ 最上山形十 [] 早 佐□□」
118	641	加工木片	b 下層	399	48	14	角形	表:「此主早野小兵衛」
118	642	札	b 下層	96	36	5	角形	上部穿孔、表:「□□□」 裏:「麦□□」
118	643	札	c 中層	79	61	9	角形	表裏・側面漆付着、表:「仁吉」
118	644	札	b 下層	185	61	7	角形	表:右「五番 □□□船」、中「□ □□□□□人御□□」、左「□ □□ □□□左衛門」、裏:「□□□□ []」
118	645	札	a 下層	185	58	5	角形	表:「□(屋号) 最上紅花□□□□ × 高□屋三郎兵衛」、裏:「□ □□ ×」
118	646	札	c 中層	179	51	9	角形	表:「□しあんとうくすくり二用ル」
118	647	札	SD1 一括	240	83	11	角形	表:「井に上(屋号) 七拾式 宮代八幡山 大坂大笠櫃 □□み行 池田や齊兵衛」 裏:「□□や 白髪明神 齊兵衛」

表 17 SD1 金属製品 銭貨 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			材質	初鑄年	備考
				直径	穿径	重量 (g)			
119	648	銭	RM57	23	8	2.33	青銅	1697	寛永通宝 (新寛永)
119	649	銭	RM53	22	6	2.06	青銅	1697	寛永通宝 (新寛永)
119	650	銭	c 下層	23	6	1.88	青銅	1697	寛永通宝 (新寛永)
119	651	銭	c 下層	23	7	2.37	青銅	1697	寛永通宝 (新寛永)
119	652	銭	上層一括	23	-	1.65	青銅	1697	寛永通宝 (新寛永)
119	653	硬貨	b 上層	24	-	4.69	銀	1922	大日本帝国五十銭硬貨 (大正 11 年改正補助銀貨)、大正 13 年 (製造期間 1922 ~ 1938)

表 18 SD1 出土金属製品 煙管 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)				形状		材質	備考
				火皿径	長軸	器高	小口径	口付径	脂反し		
119	654	煙管 (雁首)	c 上層	12	41	17	9	-猪首形	石州形	鉄	
119	655	煙管 (雁首)	b 中層	16	53	22	13	-河骨形	如信形	真鍮	表面金色
119	656	煙管 (雁首)	b 下層	16	74	33	10	-河骨形	如信形	真鍮	表面金色
119	657	煙管 (吹口)	b 下層	-	54	-	10	5	如信形	真鍮	
119	658	煙管 (吹口)	上層一括	-	43	-	13	6	石州形?	真鍮	
119	659	煙管 (吹口)	RM61	-	62	-	11	4	如信形	真鍮	表面金色

表 19 SD1 出土金属製品 その他 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			材質	備考
				長軸	短軸	高/厚		
119	660	櫛	SD1 一括	69	<37>	-	鉄	
119	661	急須	c 中層	(口径) 38	(底径) 54	83 (器高) 57	鉄	
119	662	刀装具 (切羽)	c 上層	37	22	1	鉄	
119	663	刀装具 (石突)	b 中層	36	22	15	銅	
119	664	和釘	b 上層	<71>	11	-	鉄	
119	665	手違籠	b 上層	130	34	11	鉄	
119	666	鉄	b 最下層	140	33	4	鉄	
119	667	鉄	SD1 一括	112	38	4	鉄	
119	668	包丁	SD1 一括	<108>	58	4	鉄	先端部欠損により形態不明
119	669	刀子	b 下層	<190>	11	2	鉄	先端部欠損
119	670	馬具 (轡)	SD1 一括	159	-	5	鉄	
119	671	馬具 (蹄鉄)	上層一括	104	100	7	鉄	

III 調査の成果

表 20 S D 1 出土石製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)				石質	色調	推定産地	備考
				長軸	短軸	高/厚	重量 (g)				
121	672	碗	c 下層	169	62	21	282.1	粘板岩	黒色		裏面刻印「明和五年 十日町 福田○○…」
121	673	碗	d 中層	168	61	21	362.5	粘板岩	黒色	高嶋?	裏面刻印「上々高嶋石」
121	674	碗	RP59	<147>	62	23	352	粘板岩	黒色		
121	675	碗	a 下層	<148>	63	23	435.3	粘板岩	黒色		裏面刻印・判読不能
121	676	碗	d 上層	<145>	79	24	491	凝灰岩	明褐色		
121	677	碗	c 下層	119	62	16	203.3	粘板岩	黒色		
121	678	碗?	b 上層	<74>	<65>	6	38.2	粘板岩	黒色		
122	679	石筆	上層一括	41	21	18	40	滑石	灰色		
122	680	石筆	a 上層	<41>	-	5	2.3		灰色		
122	681	石筆	a 上層	<55>	-	4	2.1		灰色		
122	682	石板	上層一括<110>	<84>		4	64.1	粘板岩	黒色		
122	683	円盤状 石製品	c 最下層	23	(穿径) 3	<3>	1.5	安山岩	灰色		
122	684	砥石	b 下層	<107>	52	24	179.9	凝灰岩	白色		
122	685	砥石	b 上層	91	47	29	229.5	緑色凝灰岩	淡緑色		
122	686	凹み石	b 下層	63	53	35	117.4	軟質凝灰岩	白色		
122	687	凹み石	c 最下層	79	76	33	213.4	軟質凝灰岩	白色		
123	688	経石	c 下層	45	-	30	36.7		灰白色		写真のみ、石表面に感無量寿経の一節：「八万四千 画猶如 印文一一 画有八 万四千一一色」
123	689	珠子	a 上層	(長径) 10	(短径) 9	(穿径) 3	1.6	石英質	透明色		
123	690	珠子	c 上層	(長径) 13	(短径) 9	(穿径) 4	0.9	琥珀	褐色		
123	691	珠子	c 上層	(長径) 14	(短径) 9	(穿径) 5	2.9	青ガラス	青色		
123	692	石鉢	c 下層	75	75	49	182.2	安山岩	暗灰色		

表 21 S E 2 出土遺物 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)				成形	形状	胎土色	釉薬・ 装飾	文様	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高	最大幅								
124	693	小皿		39	20	10	ロクロ、 削り高台	丸形	白色	青花	内：宝文	景德鎮		高台畳付砂付着	
124	694	ガラス玉		(長径) 18	(短径) 14	(最大厚) 5			水色						
124	695	古銭		21	-	-	鑄造						1916 ~	大日本帝国発行一銭青銅貨、大正5年(1916年)制定	
124	696	碗		62	-	<52>	ロクロ	筒丸形	褐色	白化粧土	外：草花文	産地不明			
124	697	蓋		-	(87)	-	(102)ロクロ		灰白色	染付	外：草花文	肥前系		裏面朱書き	

IV 調査のまとめ

今回の調査によって、三の丸堀跡のSD1を長さ30m、幅12mにわたって検出した。壁面立ち上がりは西側のみの検出となるものの、調査区全面にわたって堀底面まで調査が達しており、市街地に立地する山形城の調査で、これだけの規模を調査できたことは、大きな成果といえるだろう。出土遺物は17世紀前半から近現代まで大量に出土している。まとまりを見せるのは、17世紀前半の肥前陶磁器、18世紀中～19世紀中頃の一群、19世紀中・後半の陶磁器であり、当該期の物流を解明する上で、重要な資料となろう。

1 出土磁器碗の法量分布

磁器碗指数グラフは観察表記載の磁器小・中碗の法量から器高と口径の計測値を使用して生産地別、時期別に作成した(第126・127図)。グラフには観察表記載の磁器小・中碗で、生産地が明確に判別でき、欠損していないものを落としてある。なお、時期別のグラフでは、年代の判別できないものは除外した。

当調査区出土磁器碗の傾向として、形状によらず器高が高くなるにつれ口径が大きくなる特徴がある。よって生産地別・時期別の法量傾向をつかむために器高と口径の計測値を選択して使用した。グラフは両軸から離れた点であるほど大ぶりの碗となる。

A 生産地別傾向

肥前産磁器 グラフ全体に分布する傾向にあるが、これは出土した肥前産磁器碗の多様な形状によるものである。形状別でみると、54～58の筒形碗と、64～67の肥前産丸碗(初期伊万里)は比較的集合している。グラフ上に数字をふっていない点は、浅半球形を含む丸碗である。95の肥前産広東碗も丸碗の集中するところにある。78・79の波佐見産丸碗(くらわんか手)も肥前産と同じ集合に入る。

瀬戸美濃産磁器 出土した瀬戸美濃産磁器碗は、肥前産磁器碗に比べて、やや小ぶりのものが多い。99の広東形碗は、肥前産の模倣製品であるため、法量としては大

ぶりの肥前産磁器碗に近い。

在地産磁器碗 在地磁器碗は、特に見込みに4つの目跡のある端反碗が比定される。釉薬色はやや水色を呈し、胎土は光沢のあるガラス質である。106も見込みに目跡を持つ端反碗であるが、胎土および、目跡が3つであることから、V期の肥前産磁器碗として扱った。これら在地産磁器碗は、肥前産磁器碗の丸碗とほぼ同じ位置に集合している。瀬戸美濃産磁器碗よりやや大ぶりである。

B 時期別傾向

17世紀中～末葉 いわゆる初期伊万里の出現期であるが、本調査区出土の肥前磁器は全体のなかで口径が大きめのものが多い。特に65～67は口径・器高ともに大ぶりである。78の波佐見産丸碗は出現期が17世紀末以降で前者よりやや遅く産地も異なる。

18世紀中葉 肥前産丸碗と浅半球碗が主体である。口径の広さに対して、器高が低い傾向がある。17世紀中葉に出現する初期伊万里と比べ、小ぶりになっている。

18世紀末葉 本調査区においては、18世紀末葉の磁器碗では筒形碗の出土が多い。体部から口縁部まで円筒形に立ち上がるため、器高に対して口径は小さい。これは形状特有の傾向でもあるため、18世紀末葉前後の本調査区における時期別の傾向としては言いづらい。

19世紀以降 19世紀には、瀬戸・美濃地方で磁器生産が開始されている。瀬戸美濃産の小ぶりの端反碗が本調査区にも出現しているが、肥前産の広東碗、瀬戸美濃産の広東碗等大ぶりの碗も本調査区から依然として出土しており、法量分布でみると、多様な大きさの碗があったことがわかる。

調査区出土磁器碗全体の時期別傾向として、17世紀中様では大ぶりの碗が主体を占めたのに対し、19世紀以降では瀬戸美濃産の小ぶりの碗が出現し、肥前産の瀬戸美濃産と比べて大ぶりの磁器碗と併せて多様な磁器碗が存在していたことがわかる。

C 在地産磁器碗

本調査区出土の在地産磁器碗は、現在その具体的な出現期が不詳である。しかし、この法量分布から見ると、生産地別グラフでは肥前産磁器碗の集合の中に存在し、瀬戸美濃産磁器碗よりやや大ぶりである。また、時期別グラフより、18世紀中葉以降の集合域にその点が集中していることがわかる。

2 三の丸堀の発掘調査事例の比較

今回の調査によって、山形城三の丸堀について多くの知見を得ることができたが、山形市の中心市街地に位置する三の丸は、これまでも複数回の発掘調査が実施されている。ここでは、これまでの調査で得られている堀跡の情報と、今回検出した堀跡SD1は、どのように整合するのかを検討したい。

三の丸堀跡の調査事例をみると、第10次を含めて6カ所で調査が実施されている。三の丸南側では双葉町遺跡で堀と土塁のトレンチ調査を実施し、西側では三の丸第5次調査で堀をSD601、土塁をSF613として調査している。北側では城北遺跡でSD28として調査した。本調査区と同じ城東では、第6次調査でSD202、本調査区に最も近い第一小学校敷地内の調査では、SD1として調査されている。なお、これまでの調査範囲は第4図にまとめているので参照されたい。

調査範囲内では、堀の底面は、すべて平坦で箱堀形。今回の調査でみられた底面に川原石が転がるような状況は、他の調査区では見られない。堀の深さを比較すると、堀底の標高は第10次の東堀底面で138m、第5次の西堀のもので121mと17mの標高差がある。山形城の立地は東から西へと下る扇状地に立地しており、地表面の標高差を見るとほぼ同等のものとなるため、巨視的には自然地形と同等の勾配で掘られているといえよう。ただし、確認面からの深さは、2m程度のものから4mを超えるものまであり、総じて東側が深くなる傾向があることをつけ加えておく。

壁面の傾斜角は、全体でみると30～40°に収まる。壁面に石組などが見られる事例もあるが、石垣のように全面に施工されるものではなく、護岸のため部分的に補強、修繕したものと考えられる。今回の調査では、壁面

上部に木杭列が見られたが、これも部分的な護岸と思われる。他の調査区では確認されていない。また、ほとんどの調査区で両壁面を検出できていないため、堀幅の推定は困難である。今回の調査区では、西壁のみの検出となったが、上端で12m、下端までの検出幅で8mに及ぶものの、東壁の立ち上がりは確認できない。周辺の地割やそこに残る段差を堀の痕跡と考えるなら、堀幅は15mを超えるものと推測される。対して、第6次調査は堀の両壁面を調査した唯一の事例であるが、ここでの堀幅8.5mほどである。三の丸堀は場所によってこの程度の幅の差をもって構築されているといえよう。

土層をみると、上から黒褐色のシルト層、続いて砂層、底面に粘土層という堆積状況は、各調査事例で共通する事が多いものの、各層の混入物や層厚の事例は異なる。例えば、本調査区で中層とした2～4層の砂層は、最大80cm程度の層厚で、底面から2m以上の高さに堆積している。一方、城北遺跡や6次調査では、最大1.5mほどの層厚があり、底面から数十cmの高さに堆積している。馬見ヶ崎川の氾濫に由来すると考えられるこの砂層は、河川に近い城の北域ほど厚く堆積したと判断できよう。三の丸の規模を考えれば当然のことだが、堀跡の埋没過程は、城内各地域によって大きく異なることがうかがえる。本調査区に近い第一小学校敷地内の調査区をみると、いくつか近似した土層を確認できる。14層とされた褐色灰色砂を帯状に含む粘土層は、本調査区における9層に、その上の砂層の13層は、堆積している標高が141m付近と本調査区における2～4層のものに近く、それぞれ同定できるかもしれない。

出土遺物は調査した面積や掘削土量も考慮せねばならないが、調査区ごとに出土量の差が激しい。同じ東側堀の調査で比較しても、本調査区や第6次調査区では何十箱もの出土遺物を得ているのに対し、第一小学校敷地内の調査区では、出土遺物は1箱に留まる。

3 SD1の埋没過程について

今回の調査で検出した山形城三の丸東堀であるSD1に関して、堆積状況と出土遺物から、この堀が、いつ、どのように埋没していったかを検討しよう。

堀の底面について、今回の調査では最下層下部に面的に広がる川原石の上面をもって底面とした。この川原石

を含む10層が三の丸堀構築時のものと考えられる。しかし、この層からの出土遺物は411の陶器胴部片一点のみの出土にとどまり、他には出土しなかったため、遺物から構築年代を限定することはできない。

最下層とした9層は、黒色粘土層に灰褐色の粘土が水平に重なり、縞模様を呈するもので、調査区全体に1m強の層厚をもって堆積している。これは滞水と枯渇が繰り返されたことによりつくられたものと考えられよう。この縞模様が崩れずに調査区全面に確認できることから、自然堆積によりゆっくりと埋没して行き、途中で溝浚えなどの修繕はなされていないことがわかる。この層から出土した遺物は多くはないが、初期伊万里の磁器の丸碗や皿、唐津の溝縁皿などがまとまっており、ほぼ同一の標高から、磁器中碗64、小皿168、陶器大碗321、小皿326、大皿343、中鉢344、漆器碗513、鉢666、刀子669などが出土している。これらの出土品の時期は16世紀末～17世紀後半のものである。

下層とした5～8層は、炭化材や日用什器の大量出土から、火事による一括廃棄層と考えられる。出土遺物をみると、磁器製品は肥前産のものが大勢を占め、客体的に瀬戸美濃系のものが含まれる。碗の器形は丸形碗や半筒碗、半球碗、広東碗などと様々である。陶器は大堀相馬の丸碗や京・信楽の杉形碗、唐津の皿などが出土しており、木製品は漆器碗や下駄など、大半がこの層からのものである。遺物の時期は18世紀後半から19世紀前半のものが多く出土している。

その上に堆積する2～4層までの中層は、馬見ヶ崎川の氾濫によるものと考えられ、粘土層や砂層が互層状に堆積する。出土遺物量は下層に比べて多くはないが、陶磁器の内容は、下層に比べ、瀬戸美濃産が増え、在地産のものも含まれるようになる。遺物の時期は18世紀後半から19世紀中頃のものが多くある。

下層と中層は、それぞれ火事と洪水に起因し、短期的に堆積した層といえる。これらの時期を特定するため、市内を襲った災害として、火事後、洪水が起きた事例を探る必要がある。より時代を限定するため、出土遺物を見ると、下層出土の硯672に「明和五年戊子四月」と刻まれ、同じく下層出土の建築部材と思われる640には「明和九年壬辰6月」とあることから、明和年間(1764～72年)が下層の火事の上限を示す紀年銘資料

である。ただし、下層の出土品には瀬戸美濃系の磁器が含まれることから、瀬戸での磁器製産の開始にあたる19世紀まで上限を下げられる。

19世紀以降の火事や水害の文献記録は、『古今夢物語』、『事林日記』などに多数残されている。大きな火事としては、1819(文政2)年に起きた「和右衛門火事」で、七日町から出火し、市内北部を中心に1000軒余を焼く大火になったと記される。調査区周辺の横町でも30軒の被害が出たという。この火事による瓦礫を堀に廃棄し下層が形成され、これに続く中層の形成要因たる洪水として、5年後の1824(文政7)年の「申洪水」と呼ばれる大洪水がある。8月の大風雨で馬見ヶ崎川が氾濫し、現山形市内北部を中心に多数の家屋が流失したと伝えられる。調査区周辺は浸水区域より20m以上高い標高にあるが、堀を伝って調査区周辺まで土砂が流れ込んだことは、十分に想定されるだろう。

これらの火事と洪水は、ともに山形城史上、最大規模の災害である。ただし、この火事によるものとするならば、権威の象徴たる城の堀に瓦礫を廃棄したということになる。当時、秋元久朝の藩政において、山形城は象徴としての機能を失っていたためか、あるいは前代未聞の大火事のためか、といった条件を考えなければならない。

城が機能を停止した明治以降の火災記録を探すと、調査区付近では1894(明治27)年の「市南の大火」の他には残されていない。洪水の記録としては、1890(明治23)年の大洪水で、堤防流失1660間、浸水戸数1200を超えたとされる。しかし、これでは洪水が先で火事が後であり、調査区の層序とは逆になってしまう。

更に時間を下らせると、1911(明治44)年に十日町から出火し、89軒を焼失した火事があり、翌1912(大正2)年に大洪水が起き、三の丸北東で水深8尺に達したという記録が残る。ただし、これだとするなら地表から下層まで3mを超える堀が明治末まで残っていたという前提が必要となる。また、下層からの出土遺物に型紙摺絵や銅版転写の磁器製品が多数含まれていてしかるべきであろうが、それらはいずれも上層からの出土である。

火事による廃棄層は、他の調査区では確認されていないため、記録には残されていない小規模な火災によるものという可能性もあるだろう。馬見ヶ崎川氾濫の記録は、毎年のように残されているものの、標高140mを超え

る調査区周辺まで及ぶ大洪水を想定すると、そう多くはない。あるいは河川に近い堀の北側が埋まったことで南側まで土砂が流れこむようになったのだろうか。

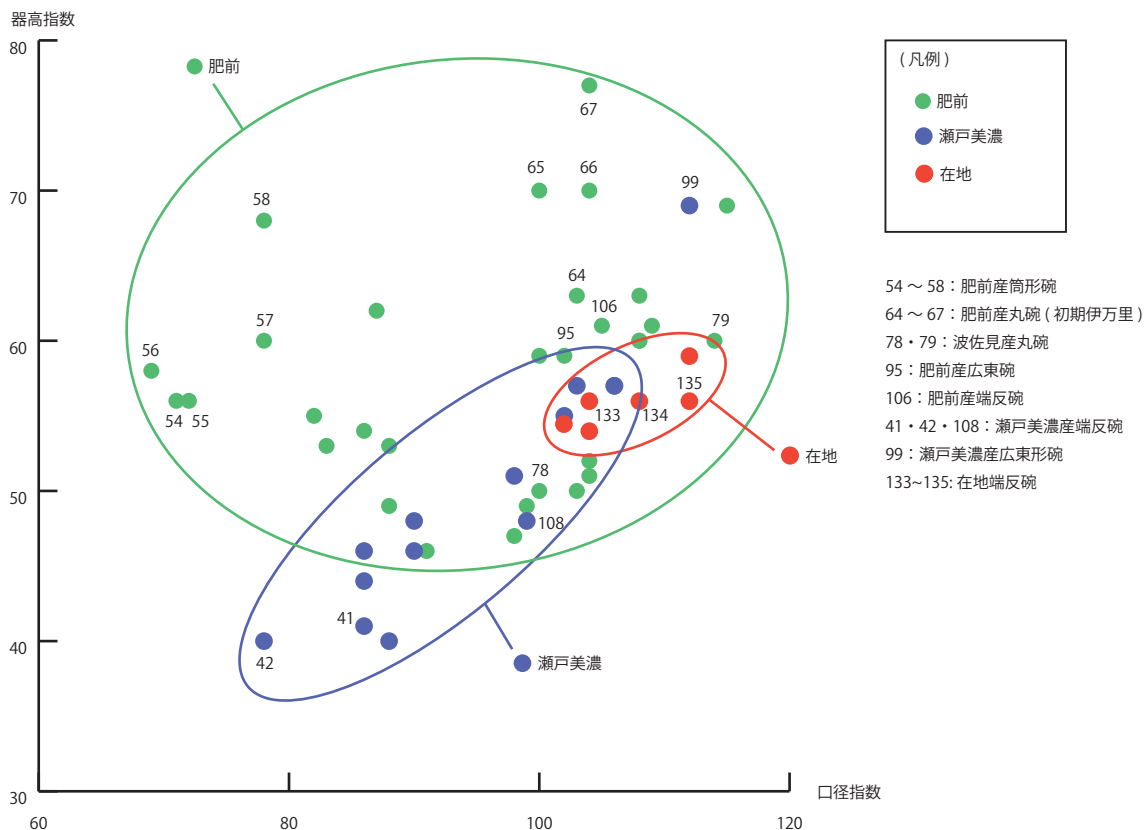
上層からは大量の遺物が出土している。出土遺物の時期は、18世紀後半～19世紀後半のものが多い。磁器碗は瀬戸美濃系の端反碗が大部分を占めるようになり、同型品も多い。他にも薄手酒盃や爛徳利、急須などが多く出土する。陶器は大堀相馬の三彩土瓶や断面T字形になる中甕、387～389の笹絵徳利は同じ場所から同型品が3個体まとまって出土している。大量の遺物は、不要品の意識的な廃棄によるものと考えられ、三の丸堀の埋戻しに伴うものと判断できよう。遺物にはインク瓶など20世紀以降の遺物も少なからず出土している。埋立て造成後の土地利用により紛れ込んだものとも解釈できようが、相当量混在していることから、地表面まで一気に埋め戻されたものではないのかもしれない。

最後に各層位の年代をまとめると、最下層は三の丸の構築期から火事による廃棄層が形成される19世紀まで長い年月をかけてゆっくり埋まっていったことがわかる。下層と中層は19世紀以降の火事と洪水によって短期間に形成されたものであるが、その火事と洪水の特定は、今後の調査事例の増加に委ねよう。今回の調査結果からは、19世紀前～後半のものと同時間幅を持たせておく。それに後続する上層は、三の丸堀の埋戻しによる堆積であり、19世紀後半～20世紀前半にかけて、不用品を廃棄しながら埋め立てられたと判断する。

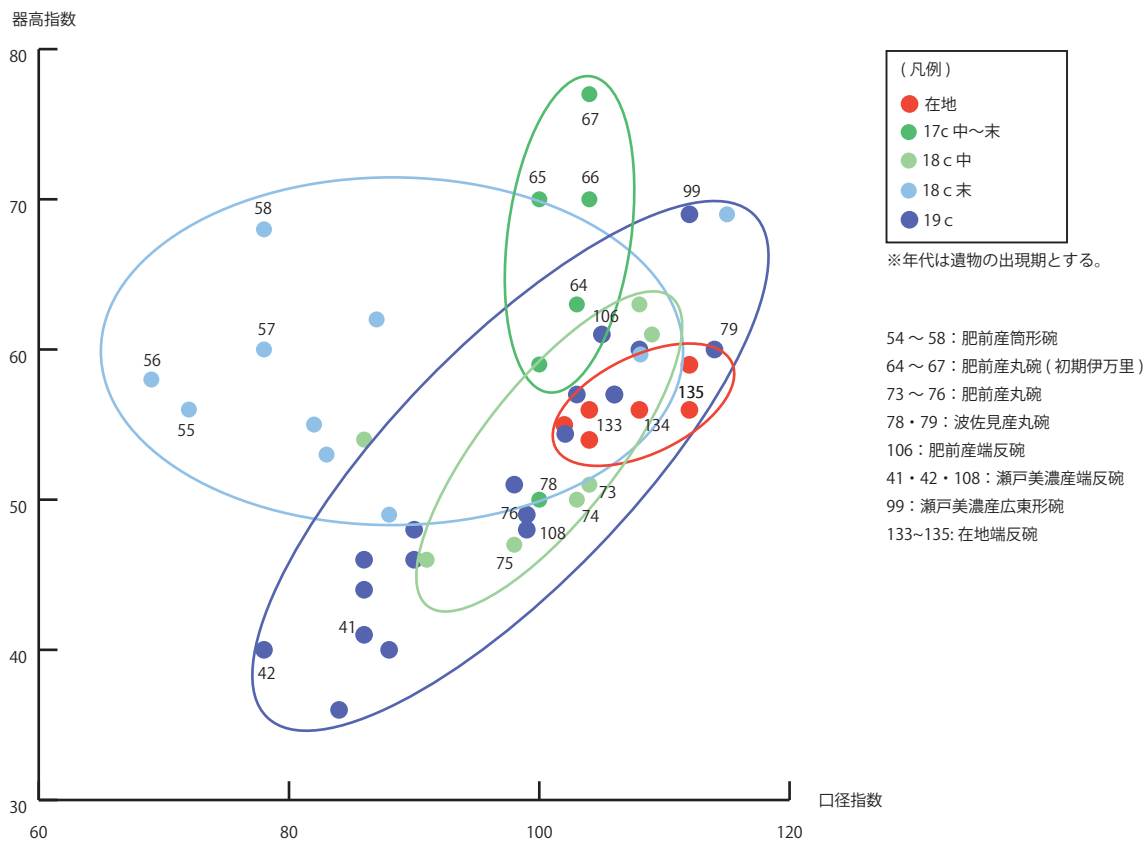
近・現代遺跡は、各地で調査事例が増し、蓄積が進むにつれ、歴史資料としての価値が高まっている。山形城三の丸跡は、近世城郭としてだけでなく、山形の近代化を語る上で欠かすことのできない重要な資料である。今後の調査成果に期待したい。

参考文献

- 大橋康二 1993『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
 大橋康二 1994『古伊万里の文様』理工学社
 大橋康二・西田宏子 1995『別冊太陽 古伊万里』平凡社
 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』
 愛知県瀬戸市 1998『瀬戸市史 陶磁史編 六』
 瀬戸市歴史民俗資料館 2002『大正二年のせともの屋』
 財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2008『東京・小田原出土の“近代陶磁”―瀬戸・美濃窯の近代2―』
 財団法人瀬戸市文化振興財団 2011『瀬戸・美濃窯の近代2―生産と流通―』
 江戸遺跡研究会 2001『図説 江戸考古学事典』柏書房
 江戸遺跡研究会 1990『江戸の陶磁器（発表要旨）』江戸遺跡研究会第3回大会
 江戸遺跡研究会 1993『遺跡にみる幕末から明治（発表要旨）』江戸遺跡研究会第6回大会
 江戸遺跡研究会 1999『江戸の物流―陶磁器・漆器・瓦から―（発表要旨）』江戸遺跡研究会第12回大会
 江戸遺跡研究会 2001『食器にみる江戸の食生活（発表要旨）』江戸遺跡研究会第14回大会
 東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査会 1992『東京都新宿区 内藤町遺跡-放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書-』
 警視庁・新宿区南山伏町遺跡調査団 1997『東京都新宿区 南山伏町遺跡―警視庁牛込警察署改築に伴う緊急発掘調査報告書-』
 東京都埋蔵文化財センター 2004『千代田区 外神田四丁目遺跡-秋葉原駅付近土地区画整備事業に伴う埋蔵文化財調査』東京都埋蔵文化財センター調査報告第147集
 東京都埋蔵文化財センター 2006『汐留遺跡IV―旧汐留貨物駅跡地内の調査―』東京都埋蔵文化財センター調査報告第189集
 豊島区遺跡調査会 2010『雑司ヶ谷V』
 大日本印刷株式会社・新宿区大日本印刷遺跡調査団 1998『東京都新宿区 市ヶ谷左内町遺跡I』
 東京大学埋蔵文化財調査室 1996『東京大学構内遺跡調査研究年報1 1996年度』
 東京大学埋蔵文化財調査室 1997『東京大学構内遺跡調査研究年報2 別冊 東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）1997年度』
 東京大学埋蔵文化財調査室 2011『東京大学構内遺跡調査研究年報7 2007・2008年度』
 東京大学埋蔵文化財調査室 2006『東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号地点』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書7
 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1997『東北大学埋蔵文化財調査年報8 仙台城二の丸第9地点の調査』
 市立山形商業学校産業調査部 1939『山形商店史』
 山形市市史編さん委員会 1971『事林日記 下』『山形市史 史料編3』山形市
 山形市市史編さん委員会 1989『山形 古今夢物語』『山形市史資料』第70号
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2005『山形城三の丸跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター報告書第69集
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2009『中山城跡 第1・2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第178集
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2010『山形城三の丸跡 第4・6次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター報告書第190集
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2012『山形城三の丸跡 第5・7・8次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター報告書第202集
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2012『堤屋敷遺跡第2次 下屋敷遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター報告書第203集
 山形市教育委員会 2003『山形城三の丸跡（山形市立第一小学校敷地内）発掘調査報告書』山形市埋蔵文化財調査報告書第15集
 山形市教育委員会 2006『双葉町遺跡 城南町遺跡（山形城三の丸跡）発掘調査報告書』山形市埋蔵文化財調査報告書第25集
 山形市教育委員会 2009『山形城三の丸跡（城北遺跡）発掘調査報告書』山形市埋蔵文化財調査報告書第30集



第126図 磁器碗指数グラフ（生産地別）



第127図 磁器碗指数グラフ（時期別）



上層出土陶磁器集合



下層出土陶磁器集合



最下層出土陶磁器集合

第128図 SD 1 出土遺物 各層出土陶磁器集合



85、49 87 同型品



93 同型品



132 同型品



43 同型品



136 同型品



88、129、114 同型品



10、23、123、9 同型品

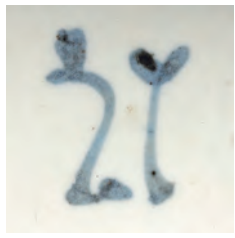


191、184、183 同型品



199、203、204 同型品

第129図 S D 1 出土遺物 同型品集成



213



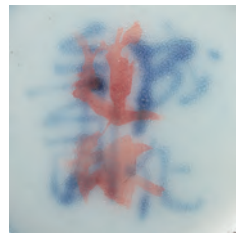
216



217



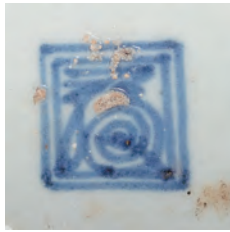
35



109



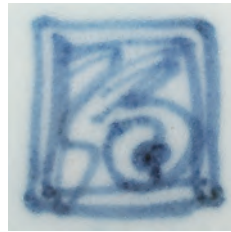
171



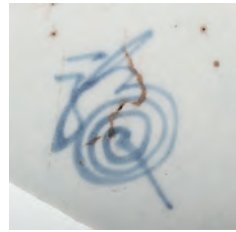
174



220



87



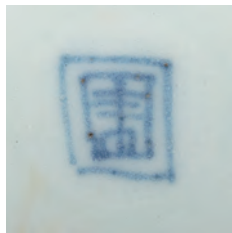
215



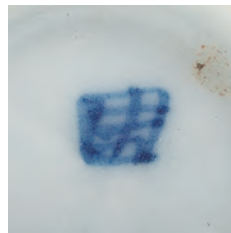
27



153



219



157



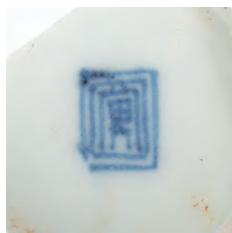
79



155



26



14



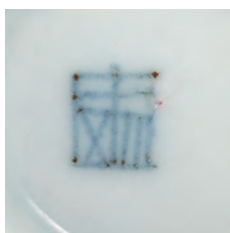
12



158



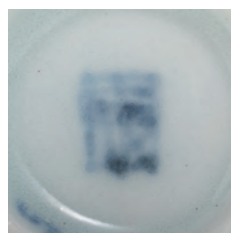
16



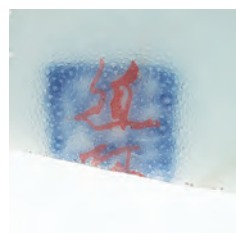
15



156



159



179



226



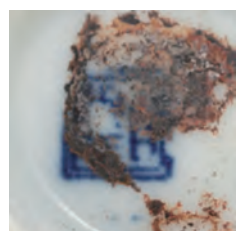
227



13

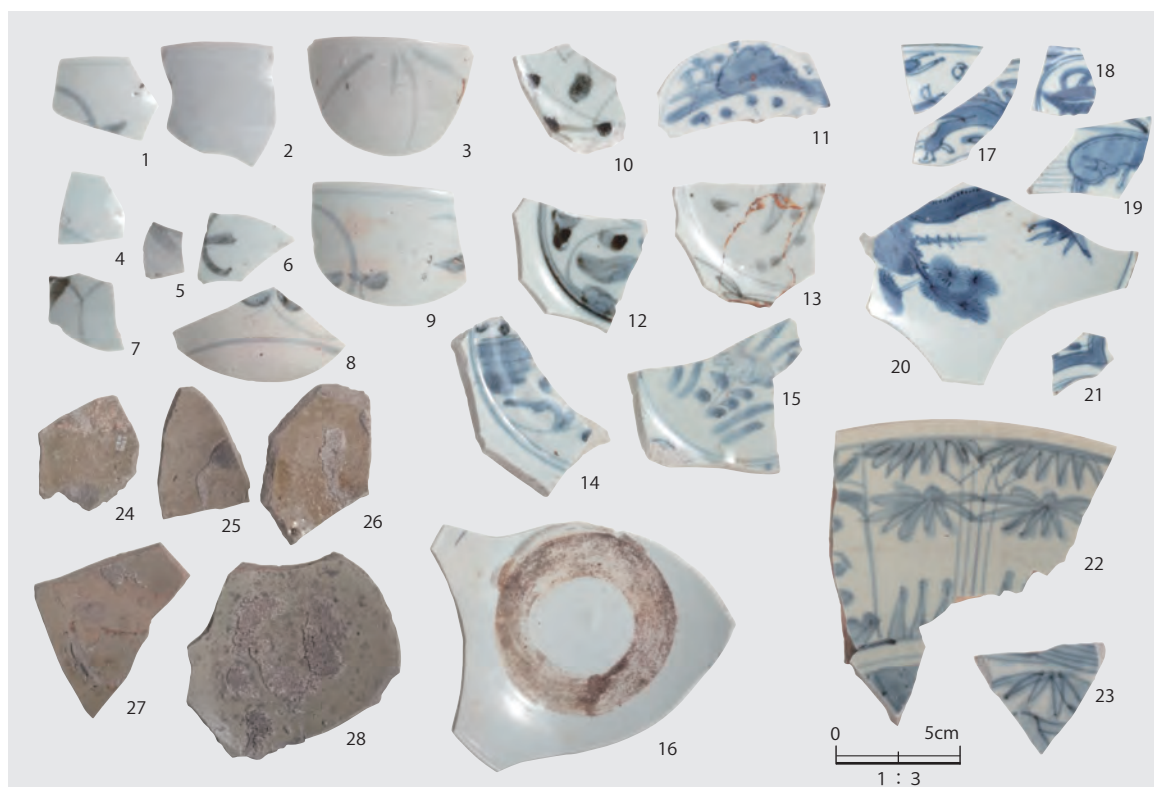


17



63

第130図 SD 1 出土遺物 高台裏銘款



第131図 S D 1実測外遺物

表22 実測外遺物観察表

No.	種別	器種	装飾・釉薬	部位	出土層位	産地	年代	備考
1	磁器	碗	染付	口縁	b下層	肥前	1630～1650	唐草文、九州(肥前)編年Ⅱ-2期
2	磁器	碗	染付	口縁	d下層	肥前		
3	磁器	碗	染付	口縁	a下層	肥前	1630～1650	笹文、九州(肥前)編年Ⅱ-2期
4	磁器	碗	染付	体	b下層	肥前		
5	磁器	碗	染付	体	a下層	肥前		
6	磁器	碗	染付	体	b下層	肥前		
7	磁器	碗	染付	体	b上層	肥前		
8	磁器	碗	染付	体	c下層	肥前	1630～1650	唐草文、九州(肥前)編年Ⅱ-2期
9	磁器	碗	染付	口縁	d最下層	肥前	1630～1650	九州(肥前)編年Ⅱ-2期
10	磁器	皿	染付	底	c下層	肥前	1620～1640	見込：草花文、高台砂目、九州(肥前)編年Ⅱ-1・2期
11	磁器	皿	染付	底	b上層	肥前	1620～1640	高台砂目、九州(肥前)編年Ⅱ-1・2期
12	磁器	皿	染付	底	a下層	肥前	1620～1640	見込：草花文、高台砂目、九州(肥前)編年Ⅱ-1・2期
13	磁器	皿	染付	底	d下層	肥前	1620～1640	見込：草花文、高台砂目、九州(肥前)編年Ⅱ-1・2期
14	磁器	皿	染付	底	d下層	肥前	1620～1640	見込：草花文、高台砂目、九州(肥前)編年Ⅱ-1・2期
15	磁器	皿	染付	底	表土一括	肥前	1620～1640	見込：草花文、高台砂目、九州(肥前)編年Ⅱ-1・2期
16	磁器	皿	白磁(透明釉)	底	d下層	肥前	1610～1630	見込：蛇の目釉剥ぎ、九州(肥前)編年Ⅱ-1期
17	磁器	皿	青花	口縁	b中・下層	中国(景德镇)		内：龍文
18	磁器	皿	青花	口縁	d下層	中国(景德镇)		輪花皿、宝文、芙蓉手?
19	磁器	皿	青花	底	b下層	中国(景德镇)		内：鹿文
20	磁器	皿	青花			中国(景德镇)		磁器皿60に記載
21	磁器	皿	青花	底	上層一括	中国(景德镇)		内：宝文、高台砂目
22	磁器	鉢	青花	口縁	a下層、b中・下層	中国(漳州窯系)		区画草花文
23	磁器	皿	青花	底	b中層	中国(漳州窯系)		区画草花文、高台砂目
24	陶器	皿	灰釉(緑)	底	a上層	肥前(唐津)	17c初	灰釉溝緑皿、砂目積み、高台露胎、九州編年Ⅱ期相当
25	陶器	皿	灰釉(緑)	底	b下層	肥前(唐津)	17c初	灰釉溝緑皿、砂目積み、高台露胎、九州編年Ⅱ期相当
26	陶器	皿	灰釉(緑)	底	d上層	肥前(唐津)	17c初	灰釉溝緑皿、砂目積み、高台露胎、九州編年Ⅱ期相当
27	陶器	皿	灰釉(緑)	底	c下層	肥前(唐津)	17c初	灰釉溝緑皿、砂目積み、高台露胎、九州編年Ⅱ期相当
28	陶器	皿	灰釉(緑)	底	a上層	肥前(唐津)	17c初	灰釉溝緑皿、砂目積み、高台露胎、九州編年Ⅱ期相当

報告書抄録

ふりがな	やまがたじょうさんのまるあとだい 10 じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	山形城三の丸跡第 10 次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 206 集
編著者名	天本昌希 齋藤和機
編集機関	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒 999-3246 山形県上山市中山字壁屋敷 5608 番地 TEL 023-672-5301
発行年月日	2013 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やまがたじょう 山形城 さんのまるあと 三の丸跡 だい 第 10 次	やまがたけん 山形県 やまがたし 山形市 とおかまち 十日町 いつちようめ 一丁目	6201	中世城館 遺跡番号 201 - 002	38° 14' 54"	140° 20' 6"	20120514 } 20120727	816	山形県保健福 祉センター東 棟（仮称）新 築工事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山形城 三の丸跡 (第10次)	城館跡	近世 近代	堀跡 1 井戸跡 1	近世陶磁器 木製品 金属製品 石製品	(文化財認定箱数：70)

要 約	<p>今回の調査区は、山形城三の丸東堀と土塁の所在地にあたる。土塁はすでに整地されており、その下から遺構は検出されず、堀跡と、それに重複する井戸跡の 2 遺構のみを検出した。堀跡は調査区 30 m を縦断し、東側の壁面は確認できなかったものの、検出幅は 12 m にわたる。堀の深さは地表面から 5 m を超え、19 世紀代の火事による火災廃棄層や、それに続く洪水による堆積層を検出した。</p> <p>多くの遺物が出土しており、17 世紀代の肥前陶磁器や、18 世紀後半以降の陶磁器、漆器椀や下駄などの木製品が充実している。墨書木材も多く、荷札に城下商人の屋号や人名などが記されている。</p>
--------	--

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 206 集

山形城三の丸跡第 10 次発掘調査報告書

2013 年 3 月 31 日発行

発行 公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒 999 - 3246 山形県上市市中山字壁屋敷 5608 番地
電話 023-672-5301

印刷 中央印刷株式会社
〒 990 - 0051 山形県山形市銅町 1 - 1 - 5
電話 023 - 631 - 5533